

---

行 田 市

---

# 北大竹遺跡

---

行田富士見工業団地拡張地区産業団地整備事業

埋蔵文化財発掘調査報告

(第1分冊)

2022

埼 玉 県

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 子持勾玉・勾玉形集合



1 金属製品集合



1 第1号遺物集中 須恵器甕出土状況



2 第1号遺物集中 須恵器甕集合

卷頭図版 4



1 第2号遺物集中 須恵器甕等出土状況



2 第2号遺物集中 須恵器甕集合



1 第2号遺物集中 須恵器脚付長頸壺出土状況



2 第2号遺物集中 須恵器脚付長頸壺集合

卷頭図版 6



1 第2号遺物集中遺物出土状況



2 第2号遺物集中 須恵器集合



1 第2号遺物集中 土器集合



2 第2号遺物集中 土師器高环集合

卷頭図版 8



1 第3号遺物集中遺物出土状況



2 第3号遺物集中 須恵器甕集合

## 序

首都圏中央連絡自動車道の埼玉県・茨城県区間の全線開通により、県内を走る関越自動車道や東北自動車道を含め、東京から放射状に延びる東名高速道路から東関東自動車道までの区間が結ばれました。この開通効果により、各高速道路インターチェンジ周辺への企業立地のニーズが高まっています。そのため、埼玉県では、平成29年から「埼玉県5か年計画」に基づき「第3次田園都市産業ゾーン基本方針」を定め、圏央道以北地域においても、産業基盤づくりを積極的に進めています。東北自動車道羽生インターチェンジから約9kmに位置する行田富士見工業団地拡張地区産業団地整備事業もその一環です。

本事業地のある行田市内には、東日本有数の大規模古墳群として有名な特別史跡埼玉古墳群をはじめ、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在しています。今回、発掘調査を行った北大竹遺跡もそのひとつです。発掘調査は同事業に伴う事前調査であり、埼玉県企業局の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

北大竹遺跡は、これまでにも行田富士見工業団地の開発に伴う事前調査で多くの成果が挙がっていた遺跡です。今回の調査では、古墳時代後期に執り行われた祭祀に関わる遺物が大量に出土し、埼玉古墳群との関わりなど、この地域の歴史を紐解くための大きな成果を得ることができました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・活用の資料として、また、学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の調整に御尽力いただきました埼玉県企業局をはじめ、埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、行田市教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

令和4年3月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
理 事 長 依 田 英 樹

## 例 言

- 1 本書は行田市若小玉に所在する、北大竹遺跡第18次調査の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。  
北大竹遺跡 (No.68-048) 第18次調査  
行田市大字若小玉字枳1900-1他  
令和元年10月14日付け 教文資第2-31号
- 3 発掘調査は、行田富士見工業団地拡張地区産業団地整備事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部文化資源課が調整し、埼玉県企業局地域整備課の委託を受け、公益財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 4 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。  
発掘調査事業（令和元年度・令和2年度）  
「元行田-5号北大竹遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託」  
整理・報告書作成事業（令和2年度・令和3年度）  
「2行田-8号北大竹遺跡報告書作成業務委託」  
「3行田-11号北大竹遺跡報告書作成その2業務委託」
- 5 発掘調査・整理報告書作成事業は、I-3に示した組織により実施した。発掘調査期間と担当者は以下のとおりである。  
発掘調査は、令和元年10月15日から令和2年10月31日まで実施し、令和元年10月15日から12月31日まで大谷徹、令和元年10月15日から令和2年9月30日まで渡邊理伊知と赤熊浩一、令和元年10月15日から令和2年8月31日まで砂生智江、令和2年1月1日から3月31日まで鈴木知恵、令和2年4月1日から8月31日まで桑原安須美、令和2年10月1日から10月31日を栗岡潤が担当した。  
整理報告書作成事業は、令和2年10月1日から令和4年3月29日まで実施し、令和2年10月1日から令和4年3月29日まで渡邊が、令和2年10月1日から令和3年9月30日まで赤熊が担当した。
- 6 報告書は、令和4年3月23日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第477集として印刷・刊行した。
- 7 発掘調査における基準点測量は、令和元年度は株式会社ソレイユ、令和2年度は中央航業株式会社に委託した。
- 8 空中写真撮影は、令和元年度は中央航業株式会社、令和2年度はシン技術コンサルに委託した。
- 9 自然科学分析は、令和2年度にパリノ・サー・ヴェイ株式会社に委託した。
- 10 口絵の遺物写真の撮影は令和3年度に小川忠博氏に委託した。
- 11 環頭大刀柄頭のX線3D測定は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究助成Bにより、東京都埋蔵文化財センターの長佐古慎也氏、佐藤悠登氏の協力を得て実施した。
- 12 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は渡邊が行った。
- 13 出土品の整理・図版作成は渡邊、赤熊が行つた。  
土器については福田聖、大谷徹、砂生智江、滝澤誠、金属製品については瀧瀬芳之、堀内紀明、井上真帆、古間果那子の協力を得た。
- 14 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、VIを赤熊、その他を渡邊が行つた。
- 15 本書の編集は渡邊が行つた。
- 16 本書にかかる諸資料は令和4年4月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
- 17 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の方々、関係機関から御教示・御協力を賜りました。記して感謝いたします。（敬称略五十音順）  
池上 悟 井上尚明 卜部行弘 酒井清治  
坂本和俊 佐藤悠登 篠原祐一 菅谷浩之  
相山林継 瀧音 大 瀧音能之 橋 泉  
續伸一郎 長佐古慎也 西井幸雄 久永雅弘  
藤野一之

## 凡 例

- 北大竹遺跡第18次調査におけるX・Yの数値は、世界測地系国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯 $36^{\circ} 00' 00''$ 、東経 $139^{\circ} 50' 00''$ ）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

A区のAU-24グリッド北西杭の座標は、X=16330.000m、Y=-30560.000m。北緯 $36^{\circ} 08' 48.1304''$ 、東経 $139^{\circ} 29' 37.4310''$ 、標高は遺構の検出面で15.325m、B区のS-23グリッド北西より西へ1m地点の杭の座標は、X=16610.000m、Y=-30571.000m。北緯 $36^{\circ} 08' 57.2141''$ 、東経 $139^{\circ} 29' 36.9518''$ 、標高は現地表面で17.688m、C区のP-7グリッド北西杭の座標は、X=16640.000m、Y=-30730.000m。北緯 $36^{\circ} 08' 58.1694''$ 、東経 $139^{\circ} 29' 30.5866''$ 、標高は現地表面で17.428mである。
- 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づき、 $10 \times 10$ mの範囲を基本（1グリッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。
- グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C～Z・AA・AB…）、西から東方向に数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばA-1グリッドと呼称した。
- 遺物集中の3地点及びL-16グリッドについては、1m四方の小グリッドを設定し、分割図に掲載遺物の出土小グリッドを記した。小グリッド名称は（a-1）のようにアルファベットを小文字表記とした。
- 本書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は、以下のとおりである。

- SB…掘立柱建物跡 SD…溝跡  
SE…戸井跡 SJ…竪穴住居跡  
SK…土壙 SH…遺物集中（祭祀遺構）  
SX…性格不明遺構・鍛冶関連遺構  
P…ピット・柱穴
- 遺構断面図に表記した水準数値は、全て海拔標高（単位m）を表す。
  - 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。但し、一部例外もあり、それについては図中に縮尺とスケールを示した。

調査区全体図	1 : 400	1 : 800	
遺構区割図	1 : 100	1 : 200	
遺構図	1 : 60	1 : 30	
微細図	1 : 30		
土器類実測図・拓影図	1 : 4	1 : 6	
土製品	1 : 1	1 : 2	
金属製品	1 : 3	石製品	1 : 3
子持勾玉・石製模造品	1 : 2	1 : 1	
白玉	2 : 3	ガラス玉	1 : 1
  - 遺構図の表記方法は、別図1のとおりである。
  - 遺物実測図のトーン表記方法は、別図2のとおりである。
  - 完形で口径が小さく、内面を測定出来なかつた遺物は厚さを測り、破線で推定線を記した。
  - 遺構一覧表の表記は、以下のとおりである。
    - ・長さ・幅・深さ・短径・長径はm単位である。
  - 遺物観察表の表記方法は、以下のとおりである。
    - ・大きさはcm・重さはg単位である。
    - ・（ ）内の数値は推定値を示す。
    - ・〔 〕内の数値は残存値を示す。
    - ・胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。

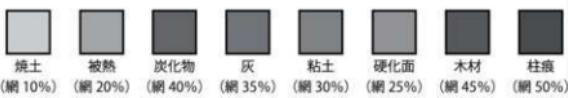
A：雲母 B：片岩 C：角閃石 D：長石

- E : 石英 F : 軽石 G : 砂粒子 H : 赤色  
粒子 I : 白色粒子 J : 針状物質 K : 黒  
色粒子 L : その他
- ・残存率は、器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。
  - ・焼成は、良好・普通・不良の3段階に分けて示した。
  - ・色調は『新版標準土色帖』に従った。
  - ・備考には、注記No・生産地・年代・所見等を示した。備考にあるNoは出土地点の記録Noである。
  - ・土器・陶磁器の生産地については、器形、技法、胎土によって判断した。
  - ・竪穴住居跡から出土した遺物の出土地点は別図3の通りに4分割で記載した。
  - ・遺物集中より出土した遺物の観察表には出土地点の小グリッド、標高値を記した。
  - ・白玉の観察表には別図4の分類を記した。
- 13 断面図と俯瞰図及び拓本の配置関係は、縄文土器の俯瞰図及び拓本は、断面図に対して向かって左側に俯瞰図及び拓本を配置した。それ以外の土器は、断面図に対して向かって右側に外面の俯瞰図及び拓本、左側に内面の俯瞰図及び拓本を配置した。
- 14 遺物の分類及び編年は以下のとおりである。
- ・須恵器の編年は田辺昭三による編年を用いた

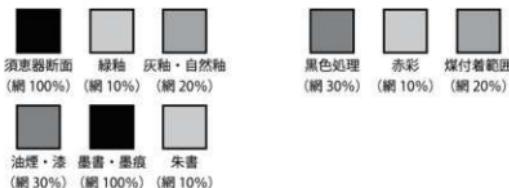
(田辺1966・1981、近つ飛鳥博物館2006)。

- ・器種分類の一部は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所(以下、奈文研)による分類を用いた(奈文研2017)。
  - ・土師器の編年は、行田市内の遺跡で同時期の土器編年を設定している『築道下遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団第245集(埼玉県埋蔵文化財調査事業団2000)を参考とした。
  - ・子持勾玉の分類は、腹部子勾玉の形状から大別3形式小別15形式に分類した。詳細は「IX調査のまとめ」を参照。
  - ・石製模造品の分類は大別して勾玉形・剣形・斧形・有孔円板・不明・未製品に分類した。
  - ・白玉の分類は篠原祐一の分類(篠原1995)及び『金井東裏遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第652集(群馬県埋蔵文化財調査事業団2019)の分類を元に北大竹遺跡での実態に即して分類を行った(別図4)。
- 15 本書に使用した地形図は、国土地理院発行1/25,000地形図(行田・鴻巣・羽生)、行田市1/2,500都市計画図を編集・使用した。
- 16 本書に掲載した遺構番号は、A区、B区、C区ごとにそれぞれ1から付した。また、発掘調査時に付した番号を一部振り替えた。対応関係は別表1に示した。

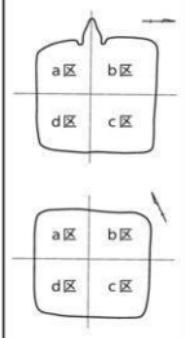
別図1 遺構

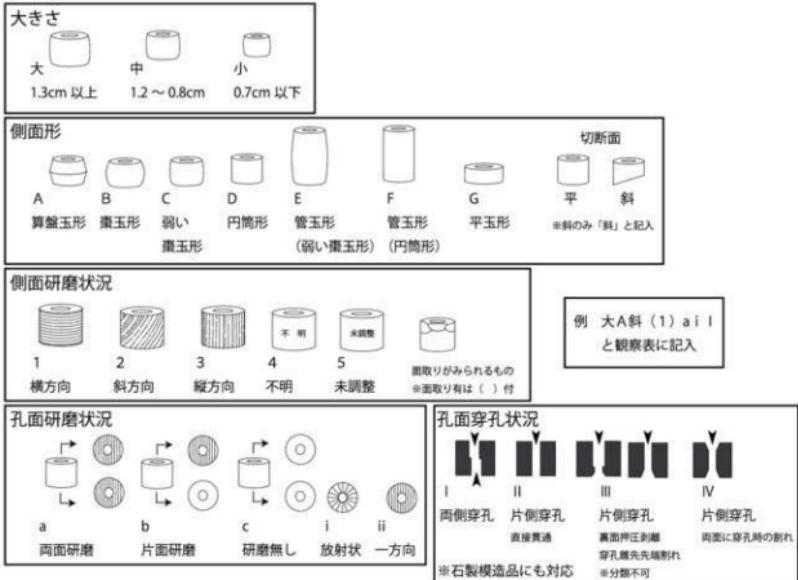


別図2 遺物



別図3





別図4 白玉分類図

別表1 北大竹遺跡第18次遺構名変更一覧表

旧	新	旧	新	旧	新
AIKSJ20P3	AIKAR-22P3	AIKAS-23P9	AIKAS-23P11	C IKSJ19	C IKSD6
AIKSE12	AIKSK20	AIKAS-23P12	AIKAS-22P1	C IKK-10P2	C IKK-11P8
AIKSE18	AIKSE18	AIKAU-24P18	AIKAU-24P18	C IKK-10P5	C IKSE8
AIKSE18	AIKSE19	AIKAU-24P18	AIKAU-24P19	C IKK-10P13	C 区柱穴列2P1
AIKSD4	AIKSD4	AIKAU-25P11	AIKAU-25P11	C IKK-11P7	C IKJ-11P6
AIKSD4	AIKSD7	AIKAU-25P11	AIKAU-25P12	C IKL-9P1	C 区柱穴列2P5
AIKSD6P3	AIKAS-23P12	B IKSJ10P1	B IKSJ2P3	C IKL-9P3	C 区柱穴列1P5
AIKS1	AIKS5	B IKSJ14P3	B IKQ-20P7	C IKL-9P4	C 区柱穴列2P6
AIKS3	AIKS7	B IKSJ14P5	B IKQ-21P1	C IKL-9P15	C IKL-10P10
AIKS4	AIKS2	B IKSB1P5	B IKSP8P3	C IKL-10P1	C 区柱穴列1P1
AIKS10	AIKSJ13P2	B IKSE2	B IKR-21P1	C IKL-10P2	C 区柱穴列1P2
AIKS11	AIKS11	B IKSK7	B IKSJ18貯藏穴	C IKL-10P3	C 区柱穴列1P3
AIKS11	AIKS19	B IKSX1-第4号遺物集中	B IKL-16グリッド	C IKL-10P4	C 区柱穴列1P4
AIKS14	AIKSJ16貯藏穴	B IKSX2	B IKSJ30・B IKSD7	C IKL-10P5	C 区柱穴列2P4
AIKS15	AIKSX1SK2	B IK第2号遺物集中P1	B IKK-15P1	C IKL-10P6	C 区柱穴列2P3
AIKAR-23P5	AIKAR-22P1	B IKM-17P1	B IKM-17P1	C IKL-10P7	C 区柱穴列2P2
AIKAR-23P8	AIKAR-22P2	B IKM-17P1	B IKM-17P2	C IKO-6P1	C IKO-6P1
AIKAS-23P7	AIKAT-23P12	B IKR-21P1	B IKR-21P1	C IKSJ10P1	
AIKAS-23P8	AIKAS-23P10	B IKR-21P1	B IKR-21P2		
AIKAS-23P9	AIKAS-23P9	C IKSJ11P1	C IKSJ11P6		

# 目 次

## (第1分冊)

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I	発掘調査の概要	1
1	発掘調査に至る経過	1
2	発掘調査・報告書作成の経過	2
(1)	発掘調査	2
(2)	整理・報告書の作成	2
3	発掘調査・報告書作成の組織	3
II	遺跡の立地と環境	4
1	地理的環境	4
2	歴史的環境	5
III	遺跡の概要	10
1	これまでの調査概要	10
2	第18次調査の概要	12
IV	A区の調査	14
1	A区の概要	14
2	古墳時代・飛鳥時代の遺構と遺物	19
(1)	豎穴住居跡	19
(2)	井戸跡	53
(3)	溝跡	56
(4)	土壙	61
3	奈良時代・平安時代の遺構と遺物	68
(1)	豎穴住居跡	68
(2)	井戸跡	80
(3)	溝跡	83
(4)	土壙	88
(5)	鍛冶関連遺構群	88
(6)	旧河川跡	91
(7)	ピット・グリッド検出面出土遺物	94
V	B区の調査	99
1	B区の概要	99
2	古墳時代・飛鳥時代の遺構と遺物	104
(1)	豎穴住居跡	104
(2)	井戸跡	135
(3)	溝跡	140
3	奈良時代・平安時代の遺構と遺物	145
(1)	豎穴住居跡	145
(2)	掘立柱建物跡	152
(3)	井戸跡	152
(4)	溝跡	152
(5)	土壙	157
(6)	ピット・グリッド検出面出土遺物	159
VI	C区の調査	161
1	C区の概要	161
2	古墳時代・飛鳥時代の遺構と遺物	165
(1)	豎穴住居跡	165
(2)	井戸跡	184
(3)	溝跡	188
(4)	土壙	189
3	奈良時代・平安時代の遺構と遺物	191
(1)	豎穴住居跡	191
(2)	掘立柱建物跡	193
(3)	柱穴列	193
(4)	溝跡	195
(5)	ピット・グリッド検出面出土遺物	195
(第2分冊)		
VII	遺物集中の調査	199
1	遺物集中の概要	199
2	遺物集中の遺構と遺物	212
(1)	第1号遺物集中	212

(2) 第2号遺物集中	266	4 テフラ分析	463
(3) 第3号遺物集中	395	IX 調査のまとめ	468
3 その他	427	1 発掘調査の成果	468
(1) L-16グリッド	427	2 須恵器について	468
(2) 遺物集中関連遺構	445	3 子持勾玉について	473
(3) 非掲載遺物・土器内容物	454	4 金属製品について	477
VII 自然科学分析	458	5 北大竹遺跡の性格	478
1 蛍光X線分析	458	6 北大竹遺跡の周辺	483
2 須恵器壺の内容物	460	写真図版	
3 放射性炭素年代測定	463	付図 北大竹遺跡第18次 遺物集中分布図	

## 挿図目次

### (第1分冊)

第1図 埼玉県の地形	4
第2図 周辺の遺跡分布図	8
第3図 遺跡調査地点位置図	11
第4図 A・B・C区位置図	13
第5図 A区基本土層土層説明	14
第6図 A区基本土層東壁・南壁断面図	15
第7図 北大竹遺跡第18次A区全体図	16
第8図 北大竹遺跡第18次A区区割図(1)	17
第9図 北大竹遺跡第18次A区区割図(2)	18
第10図 A区第1号竪穴住居跡	20
第11図 A区第1号竪穴住居跡出土遺物	21
第12図 A区第4号竪穴住居跡	22
第13図 A区第4号竪穴住居跡カマド・ 出土遺物	23
第14図 A区第5号竪穴住居跡	25
第15図 A区第5号竪穴住居跡遺物出土状況	26
第16図 A区第5号竪穴住居跡出土遺物	26
第17図 A区第6・9号竪穴住居跡	28
第18図 A区第6号竪穴住居跡出土遺物	29
第19図 A区第7号竪穴住居跡	31
第20図 A区第7号竪穴住居跡出土遺物	32
第21図 A区第8号竪穴住居跡	33
第22図 A区第8号竪穴住居跡遺物出土状況	34

第23図 A区第8号竪穴住居跡出土遺物	34
第24図 A区第10号竪穴住居跡・出土遺物	35
第25図 A区第11号竪穴住居跡	37
第26図 A区第11号竪穴住居跡出土遺物	38
第27図 A区第13号竪穴住居跡	39
第28図 A区第13号竪穴住居跡出土遺物	40
第29図 A区第15号竪穴住居跡・出土遺物	41
第30図 A区第16号竪穴住居跡	42
第31図 A区第16号竪穴住居跡出土遺物	43
第32図 A区第17号竪穴住居跡	44
第33図 A区第17号竪穴住居跡出土遺物	44
第34図 A区第18号竪穴住居跡	45
第35図 A区第18号竪穴住居跡出土遺物	45
第36図 A区第19号竪穴住居跡	47
第37図 A区第19号竪穴住居跡遺物出土状況	48
第38図 A区第19号竪穴住居跡出土遺物(1)	48
第39図 A区第19号竪穴住居跡出土遺物(2)	49
第40図 A区第20号竪穴住居跡	50
第41図 A区第20号竪穴住居跡出土遺物	50
第42図 A区第21・22号竪穴住居跡	51
第43図 A区第22号竪穴住居跡出土遺物	52
第44図 A区井戸跡(1)	54
第45図 A区井戸跡(2)	55
第46図 A区井戸跡出土遺物	56

第47図	A区第3a・b号溝跡	57	第80図	A区第1~4号河川トレンチ・ 出土遺物(2)	93
第48図	A区第3a・b号溝跡出土遺物	58	第81図	A区グリッド・調査区一括・ 表探出土遺物(1)	96
第49図	A区第4号溝跡	59	第82図	A区グリッド・調査区一括・ 表探出土遺物(2)	97
第50図	A区第4号溝跡出土遺物	59	第83図	B区基本土層	99
第51図	A区第6・7号溝跡	60	第84図	北大竹遺跡第18次B区全体図	100
第52図	A区土壤(1)	62	第85図	北大竹遺跡第18次B区区割図(1)	101
第53図	A区土壤(2)	63	第86図	北大竹遺跡第18次B区区割図(2)	102
第54図	A区土壤(3)	64	第87図	北大竹遺跡第18次B区区割図(3)	103
第55図	A区土壤出土遺物(1)	65	第88図	B区第1・24号竪穴住居跡	104
第56図	A区土壤出土遺物(2)	66	第89図	B区第1号竪穴住居跡・ カマド遺物出土状況	105
第57図	A区第2号竪穴住居跡	69	第90図	B区第1号竪穴住居跡出土遺物	106
第58図	A区第2号竪穴住居跡カマド	70	第91図	B区第2号竪穴住居跡	108
第59図	A区第2号竪穴住居跡・ カマド遺物出土状況	71	第92図	B区第2号竪穴住居跡出土遺物	109
第60図	A区第2号竪穴住居跡出土遺物(1)	72	第93図	B区第5号竪穴住居跡	111
第61図	A区第2号竪穴住居跡出土遺物(2)	73	第94図	B区第5号竪穴住居跡出土遺物	112
第62図	A区第2号竪穴住居跡出土遺物(3)	74	第95図	B区第6号竪穴住居跡	113
第63図	A区第3号竪穴住居跡	77	第96図	B区第6号竪穴住居跡出土遺物	113
第64図	A区第3号竪穴住居跡・ カマド遺物出土状況	78	第97図	B区第8・9号竪穴住居跡	114
第65図	A区第3号竪穴住居跡出土遺物	79	第98図	B区第8号竪穴住居跡カマド	115
第66図	A区第12号竪穴住居跡	80	第99図	B区第8号竪穴住居跡出土遺物	116
第67図	A区第12号竪穴住居跡カマド・ 出土遺物	81	第100図	B区第9号竪穴住居跡出土遺物	117
第68図	A区井戸跡	82	第101図	B区第11号竪穴住居跡・出土遺物	118
第69図	A区第3号井戸跡出土遺物	82	第102図	B区第12号竪穴住居跡	119
第70図	A区第1・2号溝跡(1)	84	第103図	B区第12号竪穴住居跡出土遺物	120
第71図	A区第1・2号溝跡(2)	85	第104図	B区第13号竪穴住居跡・出土遺物	120
第72図	A区第1・2号溝跡出土遺物	85	第105図	B区第14号竪穴住居跡	121
第73図	A区第5号溝跡・出土遺物	86	第106図	B区第14号竪穴住居跡出土遺物	122
第74図	A区第11号土壤	88	第107図	B区第15・16号竪穴住居跡	123
第75図	A区第11号土壤出土遺物	88	第108図	B区第15号竪穴住居跡出土遺物	124
第76図	A区第1号鍛冶関連遺構	89	第109図	B区第16号竪穴住居跡出土遺物	124
第77図	A区第1号鍛冶関連遺構遺物 出土状況	90	第110図	B区第17号竪穴住居跡	126
第78図	A区第1号鍛冶関連遺構出土遺物	90	第111図	B区第17号竪穴住居跡出土遺物	128
第79図	A区第1~4号河川トレンチ(1)	92	第112図	B区第18号竪穴住居跡	129

第113図	B区第18号竪穴住居跡出土遺物（1）	130	第150図	B区グリッド・一括出土遺物	160
第114図	B区第18号竪穴住居跡出土遺物（2）	131	第151図	北大竹遺跡第18次C区基本土層・ 全体図	162
第115図	B区第19号竪穴住居跡	132	第152図	北大竹遺跡第18次C区区割図（1）	163
第116図	B区第22・23号竪穴住居跡	133	第153図	北大竹遺跡第18次C区区割図（2）	164
第117図	B区第22・23号竪穴住居跡出土遺物	133	第154図	C区第2号竪穴住居跡・出土遺物	165
第118図	B区第25・28号竪穴住居跡・出土遺物	135	第155図	C区第3号竪穴住居跡	166
第119図	B区第26号竪穴住居跡	136	第156図	C区第4号竪穴住居跡・出土遺物	166
第120図	B区第26号竪穴住居跡出土遺物	137	第157図	C区第5・6号竪穴住居跡	168
第121図	B区井戸跡（1）	138	第158図	C区第5号竪穴住居跡出土遺物	169
第122図	B区井戸跡（2）	139	第159図	C区第6号竪穴住居跡出土遺物	170
第123図	B区井戸跡出土遺物	139	第160図	C区第7・23号竪穴住居跡	171
第124図	B区第2号溝跡	140	第161図	C区第7号竪穴住居跡出土遺物	172
第125図	B区第3号溝跡	141	第162図	C区第8・9号竪穴住居跡	173
第126図	B区第3号溝跡出土遺物（1）	141	第163図	C区第8・9号竪穴住居跡出土遺物	174
第127図	B区第3号溝跡出土遺物（2）	142	第164図	C区第10号竪穴住居跡・出土遺物	176
第128図	B区第3号溝跡出土遺物（3）	143	第165図	C区第11・12号竪穴住居跡・ 出土遺物	177
第129図	B区第3号竪穴住居跡	146	第166図	C区第13号竪穴住居跡	178
第130図	B区第3号竪穴住居跡出土遺物	147	第167図	C区第14・17号竪穴住居跡	179
第131図	B区第4号竪穴住居跡・出土遺物	147	第168図	C区第14・17号竪穴住居跡出土遺物	180
第132図	B区第7号竪穴住居跡・出土遺物	148	第169図	C区第18号竪穴住居跡	181
第133図	B区第10号竪穴住居跡	149	第170図	C区第20号竪穴住居跡	182
第134図	B区第10号竪穴住居跡出土遺物	149	第171図	C区第20号竪穴住居跡出土遺物	182
第135図	B区第20号竪穴住居跡・出土遺物	150	第172図	C区第21号竪穴住居跡	183
第136図	B区第21号竪穴住居跡	151	第173図	C区第21号竪穴住居跡出土遺物	183
第137図	B区第21号竪穴住居跡出土遺物	151	第174図	C区井戸跡	184
第138図	B区第27号竪穴住居跡・出土遺物	152	第175図	C区井戸跡出土遺物（1）	185
第139図	B区第29・30号竪穴住居跡	153	第176図	C区井戸跡出土遺物（2）	186
第140図	B区第30号竪穴住居跡出土遺物	153	第177図	C区溝跡・出土遺物	188
第141図	B区第1号掘立柱建物跡	154	第178図	C区土壤	190
第142図	B区第4号井戸跡・出土遺物	154	第179図	C区第6・8号土壤出土遺物	190
第143図	B区第4号溝跡	155	第180図	C区第15号竪穴住居跡	191
第144図	B区第4号溝跡出土遺物	156	第181図	C区第15号竪穴住居跡出土遺物	191
第145図	B区第5号溝跡・出土遺物	157	第182図	C区第16号竪穴住居跡	192
第146図	B区第7号溝跡・出土遺物	158	第183図	C区第16号竪穴住居跡出土遺物	192
第147図	B区土壤	158	第184図	C区第1号掘立柱建物跡	194
第148図	B区土壤出土遺物	159			
第149図	B区第1号土壤	159			

第185図	C区第1号掘立柱建物跡出土遺物	194	第187図	C区第1・4・7号溝跡	196
第186図	C区第1・2号柱穴列	195	第188図	C区グリッド・調査区一括出土遺物	197

## 表目次

### (第1分冊)

第1表	周辺の遺跡一覧表	9
第2表	A区第1号竪穴住居跡出土遺物観察表	21
第3表	A区第4号竪穴住居跡出土遺物観察表	23
第4表	A区第5号竪穴住居跡出土遺物観察表	27
第5表	A区第6号竪穴住居跡出土遺物観察表	30
第6表	A区第7号竪穴住居跡出土遺物観察表	32
第7表	A区第8号竪穴住居跡出土遺物観察表	34
第8表	A区第10号竪穴住居跡出土遺物観察表	35
第9表	A区第11号竪穴住居跡出土遺物観察表	38
第10表	A区第13号竪穴住居跡出土遺物観察表	40
第11表	A区第15号竪穴住居跡出土遺物観察表	41
第12表	A区第16号竪穴住居跡出土遺物観察表	43
第13表	A区第17号竪穴住居跡出土遺物観察表	44
第14表	A区第18号竪穴住居跡出土遺物観察表	45
第15表	A区第19号竪穴住居跡出土遺物観察表	49
第16表	A区第20号竪穴住居跡出土遺物観察表	51
第17表	A区第22号竪穴住居跡出土遺物観察表	52
第18表	A区井戸跡一覧表	55
第19表	A区井戸跡出土遺物観察表	56
第20表	A区第3a・b号溝跡出土遺物観察表	58
第21表	A区第4号溝跡出土遺物観察表	59
第22表	A区溝跡一覧表	60
第23表	A区土壤一覧表	67
第24表	A区土壤出土遺物観察表	67
第25表	A区第2号竪穴住居跡出土遺物観察表	74・75
第26表	A区第3号竪穴住居跡出土遺物観察表	80
第27表	A区第12号竪穴住居跡出土遺物観察表	81
第28表	A区井戸跡一覧表	82
第29表	A区第3号井戸跡出土遺物観察表	82
第30表	A区第1・2・5号溝跡出土遺物観察表	87

第31表	A区溝跡一覧表	87
第32表	A区第11号土壤出土遺物観察表	88
第33表	A区土壤一覧表	88
第34表	A区第1号鍛冶関連遺構出土遺物 観察表	91
第35表	A区河川トレンチ出土遺物観察表	94
第36表	A区ピット計測表	95
第37表	A区グリッド出土遺物観察表	97・98
第38表	B区第1号竪穴住居跡出土遺物観察表	107
第39表	B区第2号竪穴住居跡出土遺物観察表	109
第40表	B区第5号竪穴住居跡出土遺物観察表	112
第41表	B区第6号竪穴住居跡出土遺物観察表	113
第42表	B区第8号竪穴住居跡出土遺物観察表	116
第43表	B区第9号竪穴住居跡出土遺物観察表	117
第44表	B区第11号竪穴住居跡出土遺物観察表	119
第45表	B区第12号竪穴住居跡出土遺物観察表	120
第46表	B区第13号竪穴住居跡出土遺物観察表	120
第47表	B区第14号竪穴住居跡出土遺物観察表	122
第48表	B区第15号竪穴住居跡出土遺物観察表	124
第49表	B区第16号竪穴住居跡出土遺物観察表	125
第50表	B区第17号竪穴住居跡出土遺物観察表	128
第51表	B区第18号竪穴住居跡出土遺物観察表	132
第52表	B区第22・23号竪穴住居跡出土遺物 観察表	134
第53表	B区第28号竪穴住居跡出土遺物観察表	135
第54表	B区第26号竪穴住居跡出土遺物観察表	137
第55表	B区井戸跡出土遺物観察表	139
第56表	B区井戸跡一覧表	140
第57表	B区第3号溝跡出土遺物観察表	144
第58表	B区溝跡一覧表	144
第59表	B区第3号竪穴住居跡出土遺物観察表	147
第60表	B区第4号竪穴住居跡出土遺物観察表	148

第61表	B区第7号竪穴住居跡出土遺物観察表	148	観察表	175	
第62表	B区第10号竪穴住居跡出土遺物観察表	149	第83表	C区第10号竪穴住居跡出土遺物観察表	176
第63表	B区第20号竪穴住居跡出土遺物観察表	150	第84表	C区第11・12号竪穴住居跡出土遺物 観察表	178
第64表	B区第21号竪穴住居跡出土遺物観察表	151	第85表	C区第14・17号竪穴住居跡出土遺物 観察表	180
第65表	B区第27号竪穴住居跡出土遺物観察表	152	第86表	C区第20号竪穴住居跡出土遺物観察表	182
第66表	B区第30号竪穴住居跡出土遺物観察表	153	第87表	C区第21号竪穴住居跡出土遺物観察表	183
第67表	B区第4号井戸跡出土遺物観察表	155	第88表	C区井戸跡出土遺物観察表	187
第68表	B区第4号溝跡出土遺物観察表	157	第89表	C区井戸跡一覧表	187
第69表	B区第5号溝跡出土遺物観察表	157	第90表	C区第5号溝跡出土遺物観察表	188
第70表	B区第7号溝跡出土遺物観察表	158	第91表	C区溝跡一覧表	188
第71表	B区溝跡一覧表	158	第92表	C区土壤一覧表	189
第72表	B区土壤出土遺物観察表	159	第93表	C区土壤出土遺物観察表	190
第73表	B区土壤一覧表	159	第94表	C区第15号竪穴住居跡出土遺物観察表	191
第74表	B区土壤一覧表	159	第95表	C区第16号竪穴住居跡出土遺物観察表	192
第75表	B区グリッド出土遺物観察表	160	第96表	C区第1号掘立柱建物跡出土遺物 観察表	194
第76表	B区ピット計測表	160	第97表	C区溝跡一覧表	196
第77表	C区第2号竪穴住居跡出土遺物観察表	165	第98表	C区ピット計測表	197
第78表	C区第4号竪穴住居跡出土遺物観察表	166	第99表	C区グリッド出土遺物観察表	198
第79表	C区第5号竪穴住居跡出土遺物観察表	170			
第80表	C区第6号竪穴住居跡出土遺物観察表	170			
第81表	C区第7号竪穴住居跡出土遺物観察表	172			
第82表	C区第8・9号竪穴住居跡出土遺物				

## 写真図版目次

### (第1分冊)

卷頭図版 1	1 子持勾玉・勾玉形集合	
卷頭図版 2	1 金属製品集合	
卷頭図版 3	1 第1号遺物集中 須恵器甕出土 状況	
	2 第1号遺物集中 須恵器甕集合	
卷頭図版 4	1 第2号遺物集中 須恵器甕等出 土状況	
	2 第2号遺物集中 須恵器甕集合	
卷頭図版 5	1 第2号遺物集中 須恵器脚付長 頬壺出土状況	

2 第2号遺物集中 須恵器脚付長 頬壺集合		
卷頭図版 6	1 第2号遺物集中遺物出土状況	
	2 第2号遺物集中 須恵器集合	
卷頭図版 7	1 第2号遺物集中 土器集合	
	2 第2号遺物集中 土師器高环集 合	
卷頭図版 8	1 第3号遺物集中遺物出土状況	
	2 第3号遺物集中 須恵器甕集合	

# I 発掘調査の概要

## 1 発掘調査に至る経過

埼玉県企業局地域整備課では、行田富士見工業団地拡張地区産業団地について、第3次田園都市産業ゾーン基本方針に基づき行田市との共同で整備を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課では、県が実施するこうした公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前から関係機関と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

行田富士見工業団地拡張地区産業団地整備事業地内の埋蔵文化財の取扱いについては、平成29年度「公共事業と埋蔵文化財保護の調整会議」で照会があった。

事業予定地は「北大竹遺跡（No68-048）」に該当しており、行田市教育委員会が平成31年2月12日から平成31年3月27日に確認調査を実施したところ、縄文時代・古墳時代～平安時代と思われる遺構や遺物が確認された。この結果に基づき、令和元年8月1日付け教生文第873-1号で次の通り地域整備課長宛回答した。

### 1 埋蔵文化財の所在

事業予定地には次の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在します。

名称	種別	時代	所在地
北大竹遺跡 (No68-048)	集落跡	古墳 奈良、 平安	行田市大字若小玉 字根1900-1他

### 2 法手続き

工事予定地内には、上記の埋蔵文化財包蔵地が所在しますので、工事に先立ち、文化財保護法第94条の規定による発掘通知を提出してください。

### 3 取扱いについて

別添図のうち、「発掘調査をする区域」については、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

「工事に着手して差し支えない区域」については、保護層が確保される場合に限り工事に着手して差し支えありませんが、工事中に新たに埋蔵文化財を発見した場合は、直ちに工事を中止して、取扱いについて当課と協議してください。

その後、事業の計画変更及び埋蔵文化財の現状保存は困難との結論に達したため、記録保存の措置を講ずることとした。

調査に際し、発掘調査実施機関である公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、地域整備課、文化資源課の三者で、工事日程、調査計画、調査期間などについて会議を開催し、各種の調整を行った。

文化財保護法第94条第1項の規定に基づく埼玉県知事からの通知に対する同条第4項の規定による埼玉県教育委員会教育長からの勧告は以下のとおりである。

令和元年9月6日付け教文資第4-983号

文化財保護法第92条第1項の規定に基づく公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長からの発掘調査届に対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知は以下のとおりである。

令和元年10月14日付け教文資第2-31号

（埼玉県教育局市町村支援部文化資源課）

## 2 発掘調査・報告書作成の経過

### (1) 発掘調査

北大竹遺跡第18次の発掘調査は、行田富士見工業団地拡張地区産業団地整備事業に伴って実施された。

発掘調査は、令和元年度から令和2年度にかけて実施した。調査区はA区・B区・C区に分け、調査対象面積は5,280m<sup>2</sup>である。発掘調査期間は、令和元年10月15日から令和2年10月31日まで実施した。

令和元年10月10日に埋蔵文化財発掘届を提出し、事前準備を開始した。調査はB区から着手し、11月8日に動力の設置工事を、12日に開墾設置工事に着手した。

重機による表土掘削は、11月18日から開始し、12月2日から補助員作業を開始した。基準点測量及びグリッド杭打設作業委託は12月24日に実施した。確認された遺構については、土層断面図・平面図の作成、写真撮影等の記録作成を行った。高所作業車による全景写真的撮影を3月5日に、空中写真撮影を6日に実施した。

B区は一部を除き、3月25日から埋め戻しを開始し、3月30日に終了した。

A区の調査はB区と並行して実施し、防塵ネット設置を12月10日、動力の設置工事を16日から開始し、重機による表土掘削を12月19日から開始した。基準点測量及びグリッド杭打設作業委託は3月16日に実施し、本格的な補助員作業は令和2年度から開始した。

令和2年度の発掘調査は、4月8日に補助員作業を開始した。並行してC区の調査を開始し、C区の表土掘削は4月16日から開始した。

確認された遺構については、土層断面図・平面図の作成、写真撮影等の記録作成を行った。その際の平面図の測量は、トータルステーションシステムを用いて実施した。C区の基準点測量及びグリッド杭打設作業委託は、6月10日に実施した。

A区の高所作業車による写真撮影は7月29日に空中写真撮影は8月4日に実施した。C区の高所作業車による写真撮影と空中写真撮影は9月3日に実施した。また、自然科学分析委託は、8月4日に委託業者へ資料の引き渡しを行い、9月30日に成果が納品された。

A区の補助員作業は8月31日まで行い、B区、C区の補助員作業は9月17日まで行った。

9月24日に埋蔵物発見届（行田警察署長あて）と埋蔵文化財保管証（埼玉県教育委員会あて）を提出し、実績報告書作成等の事務処理を行った。

A区の本格的な埋め戻しとB区・C区の安全対策工事を10月1日から開始し10月30日に終了した。

### (2) 整理・報告書の作成

北大竹遺跡第18次調査の整理・報告書作成作業は、令和2年10月1日から令和4年3月29にかけての18箇月、2箇年度にわたり実施した。

令和2年度の作業は出土遺物の水洗・注記から開始し、直ちに接合復元に着手した。復元を終えた遺物は順次実測、トレース、採拓を経て、遺構ごとに印刷用の挿図を作成した。並行して、発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図等を照合し、修正を加えてスキャナでコンピュータに取り込んだ。その後、画像編集ソフトを用いて遺構ごとにトレースし、土層説明等を組み込んで、印刷用の版下とした。

令和3年度にも引き続き、遺物の水洗・注記、接合復元、実測、トレース、採拓を行い、9月から遺物の写真撮影を行い、7月から原稿執筆を開始した。10月6・7日に口絵写真撮影を行った。

令和4年1月までに原稿執筆を終え、報告書の編集を行った。入稿後、3回の校正を経て、令和4年3月23日に報告書（本書）を刊行した。

なお、図面や写真などの記録類や遺物は、令和4年3月に整理分類のうえ、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

### 3 発掘調査・報告書作成の組織

#### 令和元年度（発掘調査）

理 事 長	藤 田 栄 二	調査部	
常務理事兼総務部長	高 津 導	調 査 部 長	黒 坂 穎 二
総務部		調 査 部 副 部 長	吉 田 稔
総務部副部長	山 本 靖	主幹兼調査第二課長	大 谷 徹
総務課長	新 井 了 智	主 任 専 門 員	渡 邊 理 伊 知
		主 事	赤 熊 浩 一
		主 事	砂 生 智 江
		主 事	鈴 木 知 怜

#### 令和2年度（発掘調査・報告書作成）

理 事 長	藤 田 栄 二	調査部	
常務理事兼総務部長	福 沢 景	調 査 部 長	吉 田 稔
総務部		調 査 部 副 部 長	福 田 聖
総務部副部長	山 本 靖	調査部副部長兼整理第一課長	上 野 真 由 美
総務課長	鈴 木 裕 一	主幹兼調査第一課長	栗 岡 潤
		主幹兼整理第二課長	大 谷 徹
		主 任	渡 邊 理 伊 知
		主 任	砂 生 智 江
		主 任 専 門 員	赤 熊 浩 一
		主 事	桑 原 安 須 美

#### 令和3年度（報告書作成）

理 事 長	依 田 英 樹	調査部	
常務理事兼総務部長	福 沢 景	調 査 部 長	田 中 広 明
総務部		調査部副部長兼整理第一課長	福 田 聖
総務部副部長	上 野 真 由 美	主 任	渡 邊 理 伊 知
総務課長	鈴 木 裕 一	主 任 専 門 員	赤 熊 浩 一

## II 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境

北大竹遺跡(1)は埼玉県行田市藤原町・若小玉に所在する遺跡である。

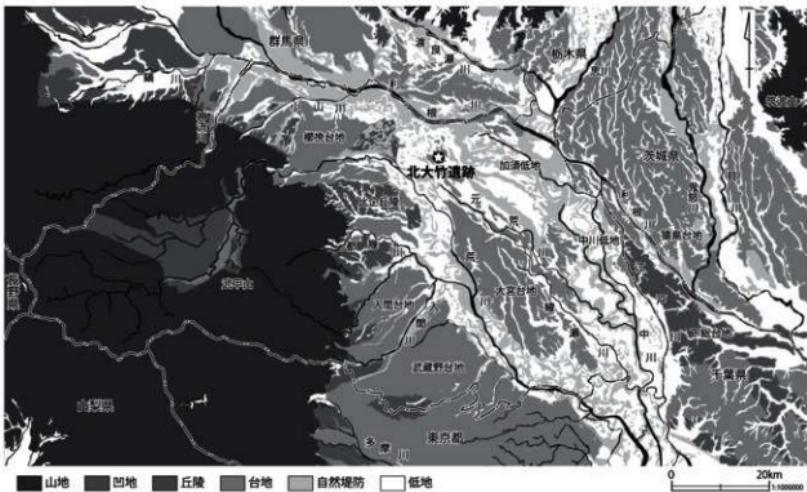
埼玉県は、盆地と周辺の山地からなる県西部地域、荒川から西にかけての武藏野台地、入間台地、高坂台地、東松山台地、江南台地などからなる県中部地域、荒川低地・中川低地と大宮台地などの低台地からなる県東部地域に分かれる西高東低の地形である。また、利根川と荒川を中心とした河川が多く、中部地域から東部地域にかけては全体的に平坦な地形である。そのため、河床勾配が緩く、蛇行している河川も多い。埼玉県の面積は約3,800平方キロメートルであり、県全体の面積に対する河川面積の占める割合は3.9%である。この割合は日本一であり、埼玉県は河川との関わりが深い県といえる。

行田市は埼玉県北東部に位置しており、北部には利根川が東流し、利根川を境に群馬県邑楽郡千

代田町と接している。市内全域が利根川と荒川による沖積平野であり、地形区分では加須低地に位置する。標高は約20m前後であり、高低差がほぼない平らな地形である。

加須低地の形成には、利根川から排出される堆積物と関東造盆地運動と呼ばれる沈降運動が大きく関わっている。関東造盆地運動とは、関東平野の中心部が沈降する一方で、関東西部の山地や房総半島といった周縁部において地盤が隆起するという地殻運動である。そのため市内の多くの場所で埋没ロームがみられ、埋没したローム台地が現地表下4mで確認される地域もある。行田市内には、古墳が埴丘ごと埋没している事例もみられ、古墳時代以降の洪水被害の凄まじさがうかがえる。

利根川は、新潟県と群馬県の県境に位置する水上山を源流とする。現在は茨城県と千葉県の県境に位置する銚子沖の河口から太平洋へ注いでいる。



第1図 埼玉県の地形

る。流路延長が約322kmで信濃川に次ぐ日本第2位、流域面積は16,840km<sup>2</sup>で日本第1位の規模を誇り、「坂東太郎」の異名を持つ大河川である。本来の利根川は幾多の支流を形成しつつ、東京湾へ流れしており、時期によっても流路が異なる。

江戸時代には、忍藩によって現在の羽生市川俣付近で河川を締切り、南流していた河川を東流するようにしている。また、徳川幕府による治水事業によって、東京湾へ流れていた流路を銚子沖へ流れるようにした利根川東遷事業が実施された。

中世頃には行田市に隣接する加須市内を流れる会の川がかかつての本流筋であったとみられる。日本最大級の河畔砂丘が連なる状況からもその名残をうかがうことができる。

古代以前の利根川流路については、行田市内を流れる星川の周辺から利根川上流に位置する榛名山から流入する角閃石安山岩転石の分布が認めら

れ、星川に利根川水系の水が角閃石安山岩転石を伴って流れ込んでいた時期がある(秋池2000)。そのことから、現在の星川に利根川の水が流れ込んでいた時期があったことがわかる。

榛名山の火山活動は6世紀代に活発化しており、6世紀以降の利根川は行田市南河原付近から南下し、星川に合流する流路を西端としてそれより東側に複数の流路が流れていたとされる(熊谷市史考古専門部会2011)。また元々、埼玉古墳群の西側を流れていた利根川の流路が、6世紀代のどこかの段階で埼玉古墳群の東側へ流路を変遷させている可能性も想定されている(埼玉県教育委員会2018)。

現在、行田市内には利根川や星川の他に忍川、旧忍川、元荒川、奈良川、福川が流れており、他に武藏水路、見沼代用水、埼玉用水路といった水路が流れている。

## 2 歴史的環境

北大竹遺跡第18次の調査では、主に古墳時代から古代にかけての遺構が検出され、他に縄文時代の土器片や石器が出土しているが、遺構は検出されなかった。中世以降の遺構は僅かながら検出された。

### 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は多くない。北大竹遺跡においても過去の調査で石器や剥片が出土している。周辺でも馬場裏遺跡(8)、内郷遺跡(17)において石器や剥片が数点出土している程度であり、詳細は明らかでない。

### 縄文時代

縄文時代の遺跡の多くは埋没台地やその支台上に分布している。行田市内では草創期の石槍が出土した神明遺跡(5)が最も古い。また、小針遺跡(10)では早期後半の集石と土壤が検出されており、これが最も古い遺構となる。前期前半には馬場裏遺跡において竪穴住居跡が13軒検出されている。

中期から後期にかけての主な遺跡としては、船原・内郷通遺跡(18)で中期後半から後期前半の袋状土壙や後期後半の竪穴状遺構が検出されている。また、高畑遺跡(31)からは後期中葉の土偶が出土している。

### 弥生時代

弥生時代の遺跡はあまり多くはないが、主だった遺跡は行田市から熊谷市にかけて位置する荒川扇状地の扇端部周辺の微高地に立地している。遺跡としては行田市小敷田遺跡(45)とそれに隣接した熊谷市の池上遺跡から中期中葉の環濠集落や方形周溝墓が検出されている。

また、熊谷市の北島遺跡においては前期末葉から中期初頭に位置付けられる再葬墓が、前中西遺跡では旧河川跡を境に北側に集落域、南側に方形周溝墓による墓域が広がる状況が確認されている。

### 古墳時代

古墳時代には、遺跡数が増加する。前期・中期の

主な集落遺跡としては石田堤遺跡(26)、武良内遺跡(32)、高畠遺跡、陣馬遺跡(12)、小針遺跡、白鳥田遺跡(46)、柳坪遺跡(41)、小敷田遺跡などがある。この時期の古墳は少なく、鴻巣市に立地する袋・台遺跡(54)で中期の円墳が確認されている。

しかし、中期後半に全長120mの前方後円墳で、「辛亥年」の紀年銘などを刻む金錯銘鉄劍が副葬された稻荷山古墳(A 1)が造営されると、以後、約150年にわたり埼玉古墳群(A)が形成される。埼玉古墳群は5世紀後半から7世紀中頃にかけて造営された全国有数の古墳群であり、国の特別史跡に指定されている。史跡内に8基の前方後円墳、1基の円墳、史跡の隣接地に所在する1基の円墳と1基の方墳からなる合計11基の古墳群である。また、稻荷山古墳から出土した金錯銘鉄劍を含めた副葬品は国宝に指定されている。

後期には築道下遺跡(22)や小針遺跡といった大規模な集落遺跡が現れるとともに、佐間古墳群(D)、齐条古墳群(F)、酒巻古墳群(H)などの古墳群が造営される。この時期前後に造営される小見真觀寺古墳(E 1)や真名板高山古墳(K)、久喜市の菖蒲天王山塚古墳は同時期の埼玉鉄砲山古墳(A 7)に匹敵する規模を有する。

北大竹遺跡と深く関連する若小玉古墳群(B)もこの時期から造営が開始される。北大竹遺跡で本格的に集落が展開するのは古墳時代前期からであるが、その後、後期初頭頃に小型の円墳が築かれて若小玉古墳群の造営が開始される。後期前半には墳長約70mの三方塚古墳(B 1)が造営される。三方塚古墳の下には前期から古墳造営の直前まで集落が展開していたが、古墳造営の際に集落が移転している状況が確認されている。

墳丘は残っていないが、三方塚古墳のほか荒神山、愛宕山、福仙塚、笹塚・稻荷山と呼ばれていた古墳の存在が「埼玉県史」に記録されている。また、太田西小学校に須恵器とともに保管されていた「見取図」にはオトカ塚、カキビン塚、ヤキバという古

墳の位置が記されている(埼玉県教育委員会1980)。

北大竹遺跡の西側に位置する中村遺跡(2)においても円墳が確認されており、一連の古墳群が西側へ広がっていたことも確認されている。

現在でも残っている古墳としては、終末期古墳に位置付けられる八幡山古墳(B 2)、地蔵塚古墳(B 3)の2基の古墳がある。八幡山古墳は昭和9年(1934)の小針沼干拓事業の際に土取りのために墳丘が崩されたが、副室構造の横穴式石室が確認されている。地蔵塚古墳では、埼玉県で唯一、石室に線刻壁画が描かれている。

#### 古代

飛鳥時代に入ると畿内に宮都が造営され、全国で評制が施行される。埼玉県では榛澤評家に比定される深谷市の中宿遺跡や熊野遺跡、幡羅評家に比定される深谷市・熊谷市の幡羅官衙遺跡群において評家関連遺跡が確認されているが、北大竹遺跡の位置する前玉評を含め県内他地域では確実な評家関連遺跡は確認されていない。しかし、奈良県橿原市の日高山瓦窯跡から「前玉評 大里評」という刻書文字瓦が出土している。日高山瓦窯跡は藤原京の造営の際に必要な瓦を生産した瓦窯であり、この段階での前玉評と大里評の存在を示している。

幡羅官衙遺跡群では、古代寺院である西別府庵寺が確認されるとともに、祭祀遺跡として湧泉に関する祭祀が執り行われた西別府祭祀遺跡が調査され、そこから7世紀後半の櫛形や馬形、剣形の石製模造品や有孔円板、臼玉が出土している。また、後続する奈良時代以降にも祭祀が継続して行われており、壇や塊、皿などの土器を用いた祭祀に転換していく様相が確認されている。

北大竹遺跡の周辺は、奈良・平安時代には武藏国埼玉郡に属する。飛鳥時代と同様に埼玉郡は未だ明確な官衙遺跡は確認されていない。寺院跡としては、旧盛德寺跡(9)が小針遺跡の範囲内に所在し、8世紀後半に比定される瓦が確認されている。なお、寺伝では大同年間(806~809)の創建とされている。

この時代の主な集落遺跡は高畠遺跡、原遺跡(13)、内郷遺跡、船原・内郷通遺跡、八ツ島遺跡(23)、馬場裏遺跡、柳坪遺跡、小敷田遺跡、築道下遺跡、小針遺跡などが挙げられる。小敷田遺跡からは公出舉に関する木簡が出土している。また、小針遺跡からは平安時代の堅穴住居跡から「丈部鳥麻呂」と線刻された紡錘車が出土しており、この時期の武藏国造である「丈部直」との関連が想定される。

また、奈良時代末に成立したとみられる『万葉集』には「埼玉の小崎の沼に鴨ぞ羽露るおのが尾に降り置ける霜を掃ふとにあらし」と「埼玉の津に居る船の風をいたみ綱は絶ゆとも言な絶えそね」の2つの歌に「さきたま」の名称がみられる。「埼玉の小崎の沼」と「埼玉の津」はいずれもいくつかの候補地が比定されているが、確定には至っていない。

## 中世

中世の武藏国では、武藏武士と呼ばれる武士団が活躍する。行田市域にも多くの武士が知られるが、武藏武士の館跡とみられる遺跡が確認された事例は少ないので、確認された事例として、内郷遺跡で渡柳館跡と推定される堀跡が検出されている。また、神明遺跡からは二重の堀跡が検出され、外堀からは多量の柿経が出土している。築道下遺跡からは13・14世紀代の区画溝や上部施設に板碑を有する蔵骨器に埋葬された火葬墓が検出されており、有力者の館や墓域が所在していた。

『吾妻鏡』には若児玉小次郎や若児玉次郎、若児玉氏元と称する武士の名がみられる。若児玉氏は武藏七党の児玉党とされるがその系図には表れない。また、上野国の園田氏の系統に若児玉小五郎なる人物があり、これに関わるという説もある(行田市史編さん委員会2012)。若児玉氏の館は、近世の地誌である『新編武藏風土記稿』の「埼玉郡若小玉村」によれば、村内の小名鞆戸耕地に所在し祠が残っていたが、今は陸田となり祠も失われているとある。

中世後半以降の周辺地域は、下総国古河に本拠

を構えた古河公方と関東管領上杉氏が対峙した最前線に位置していた。

忍城址(47)は扇ガ谷上杉氏方に属していた忍氏を滅ぼした成田氏によって築城されたとされる。成田氏はその後、太田道灌の執り成しで扇ガ谷上杉氏と和睦するが、越後上杉氏への恭順と離反を経て、相模国小田原の後北条氏の勢力拡大により、その影響下に降った。

成田氏の忍城は、天正18年(1590)の豊臣秀吉による小田原征伐の際に石田三成が指揮を執った水攻めによる攻城戦を小田原城開城まで耐え抜いたことで知られる。この際に石田三成が築いた堤である石田堤(25・26・52)が一部、現存している。

石田堤は数地点で発掘調査が行われている。石田堤遺跡第4次調査地点では、地形の低い調査区西側で地形の高い東側と同じ高さまで小丘状に土を盛るという盛土構造が確認されている。類似した盛土構造は加須市の旧利根川堤防跡でもみられる。

## 近世・近代

江戸時代の行田市域は忍藩領に属した。忍城は忍藩の本拠となり、親藩・譲代の大名が入った。まず、文禄元年(1592)に徳川家康の四男松平忠吉が10万石、その補佐役として松平忠家が1万石に入った。その後、忠家は下総小見川へ移り、忠吉も慶長5年(1600)の関ヶ原の合戦で武功を挙げ、尾張清洲藩52万石に加増封された。

その後しばらくは天領となり、代官の伊奈忠次や大河内久綱らが治めた。寛永10年(1633)に大河内松平家が3万石で入り、改めて忍藩が置かれた。寛永16年(1639)に松平信綱は島原の乱の武功で6万石に加増され武藏川越藩へ移り、代わって5万石で阿部家が入り長らく忍藩を治めたが、文政6年(1823)に陸奥白河藩へ移封となった。

その後は10万石で奥平松平家が入った。奥平松平家第5代藩主の忠敬は明治2年(1869)の版籍奉還で忍藩知事となった。しかし明治4年(1871)7



第2図 周辺の遺跡分布図

第1表 周辺の遺跡一覧表(第2図)

No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名
行田市	29 東谷遺跡	57 明用一ノ耕地A遺跡	B 2 八幡山古墳				
1 北大竹遺跡	30 西谷遺跡	58 赤城遺跡	B 3 地藏塚古墳				
2 中村遺跡	31 高畠遺跡	59 光安寺遺跡	C 若王子古墳群				
3 中村東遺跡	32 武良内遺跡	羽生市	D 佐間古墳群				
4 鶴巻遺跡	33 謙訪山遺跡	60 六反坪遺跡	D 1 大日塚古墳				
5 神明遺跡	34 謙訪山北遺跡	61 橋塚遺跡	D 2 大人塚古墳				
6 中斎遺跡	35 野合遺跡	62 橋塚南遺跡	E 小見古墳群				
7 林遺跡	36 星敷通遺跡	63 上寄遺跡	E 1 見真親寺古墳				
8 馬場裏遺跡	37 星敷通西遺跡	64 宿郷遺跡	F 齊条古墳群				
9 田城寺守跡	38 星敷通北遺跡	65 別所遺跡	F 1 齊条5号墳				
10 小針遺跡	39 桧原遺跡	66 上新郷遺跡	G 犬塚古墳群				
11 小針北遺跡	40 文殊前遺跡	67 五十ヶ谷戸遺跡	G 1 とやま古墳				
12 陣馬遺跡	41 柳坪遺跡	68 竜住遺跡	H 酒巻古墳群				
13 原遺跡	42 南河原条里遺跡	69 道標遺跡	H 1 酒巻8号墳				
14 原東遺跡	43 池守遺跡	70 中妻遺跡	H 2 酒巻14号墳				
15 原南遺跡	44 蝶尾遺跡	古墳・古墳群	H 3 酒巻15号墳				
16 百塚原遺跡	45 小牧田遺跡	行田市	I 大福荷古墳群				
17 内郷遺跡	46 白鳥田遺跡	A 境玉古墳群	I 1 大福荷1号墳				
18 船原・内郷通遺跡	47 忍城址	A 1 稲荷山古墳	J 愛宕神社古墳				
19 杉原通遺跡	48 立野遺跡	A 2 丸墓山古墳	K 真名板高山古墳				
20 稲荷通遺跡	49 宅地遺跡	A 3 斧削山古墳	鴻巣市				
21 北舟戸遺跡	50 船川遺跡	A 4 二子山古墳	L 愛宕神社古墳				
22 梁築下道跡	51 砂原遺跡	A 5 愛宕山古墳	M 宝養寺古墳				
23 ハツ島遺跡	鴻巣市	A 6 双耳古墳	N 三嶋神社古墳				
24 篠田氏船跡	52 石田堤	A 7 鉢覆山古墳	羽生市				
25 中通南遺跡	53 吹上1号遺跡	A 8 奥の山古墳	O 新郷古墳群				
26 石田堤遺跡	54 壱・台遺跡	A 9 中の山古墳	O 1 愛宕塚古墳				
27 武良内・中通遺跡	55 袋遺跡	B 若小五古墳群	P 下新郷1号墳				
28 武良内(鴻)遺跡	56 前野・宮脇遺跡	B 1 三方原古墳					

月の庵藩置県で忍藩は廃藩されて忍県が置かれ、11月には埼玉県に統合された。

忍藩の藩運営は治水や洪水と深く関わる。文禄3年(1594)に松平忠吉から命を受けた家老の小笠原三郎座衛門によって、現在の埼玉県羽生市本川俣で会の川の締切りが行われた。これにより利根川の幹川は現在、加須市中心部を流れる会の川から加須市大越方面を経て、浅間川へ至るようになつた。

北大竹遺跡の北側約300m付近を南東方向へ流れ見る見沼代用水は、用水を引いて新田開発を行う目的で、幕府の旗本であった井沢弥惣兵衛為永が普請に取り掛かり、享保13年(1728)に完成している。行田市街地を通る見沼代用水は星川の流路を活かす形で通されている。

寛保2年(1742)8月には江戸三大洪水の1つといわれる大洪水によって多摩川や荒川とともに利根川も氾濫している。『徳川実紀』によると忍城下も被害を受けたことが記録されている。

『見沼代用水沿革史』によると天明2年(1782)6月に「洪水のため見沼代用水路砂埋多し」とあり、見沼代用水が砂で埋まることがあったことがわかる。翌年、天明3年(1783)には、浅間山が噴火し、それによって利根川に泥流が流れ込んだことで河床が上昇し、洪水が頻発するようになる。それにより天明3年や同6年に洪水が発生した。

近代以降も大規模な洪水は起こり、明治43年(1910)の大洪水や昭和22年(1947)のカスリーン台風による被害が広く知られる。

近世及び近代に位置付けられる遺跡の調査は多くはないが、忍城址第9次調査では、諫訪曲輪東側に位置する堀跡が調査されており、元禄期の木樋や阿部家の家紋である「丸に遠い鷹の羽」の漆椀蓋が出土している。

また、平成24年度の埼玉鉄砲山古墳の発掘調査では、多量の鉄弾や砲弾、遠眼鏡のレンズや雷管が出土しており、この場所が忍藩の砲術演習場である埼玉村角場であったことが明らかになった。

### III 遺跡の概要

#### 1 これまでの調査概要

北大竹遺跡は、行田市藤原町・若小玉に所在する。行田市によって平成2年（1990）に第1次調査が行われて以来、断続的に発掘調査が行われている（第3図）。また、周辺には中村遺跡や中村東遺跡も展開し、北大竹遺跡と同様に集落を構成する竪穴住居跡や円墳の周溝が確認されている。

これまでの発掘調査で北大竹遺跡からは、旧石器時代の石器や縄文時代の土器片なども出土しているが、古墳時代前期頃から本格的に集落が形成されたことが明らかになっている。

その後、埼玉古墳群において最初の前方後円墳である稻荷山古墳が造営される頃に、北大竹遺跡の遺跡範囲とその周辺にかけても、墳径20m以下の小型の円墳が造営され始め、若小玉古墳群の造営が開始される。

これまでの発掘調査成果において、特筆されるものとして、第3次調査において、隠滅していた前方後円墳である三方塚古墳が検出されたことが挙げられる。三方塚古墳は墳長約70mと推定され、前方部が北西を向き、周溝は方形で北側のくびれ部全面に外堤部が突き出しており、ここから人物埴輪や馬形埴輪が出土している。埴輪の年代から古墳の築造時期は6世紀中頃と推定される。

三方塚古墳の下層からは、古墳時代前期から三方塚古墳の築造直前までの集落が検出されていることから、古墳の築造に伴って集落の移転が図られた様子がうかがえる。

他に三方塚古墳の西側約300mの地点に荒神山古墳が推定されているが詳細は不明である。また、北大竹遺跡の南西方向には、昭和22年（1947）に取り壟されるまで愛宕山古墳が残されていた。前方部を南に向けた墳長約72mの前方後円墳で、発掘調査は行われずに取り壟されたが、その際に円筒埴輪が1点出土しており、その年代

から三方塚古墳に後続する前方後円墳と推定されている。

このように若小玉古墳群では6世紀代には70m級の前方後円墳が複数造営されている。

7世紀に造営された終末期古墳として若小玉古墳群に残る古墳としては、八幡山古墳と地蔵塚古墳がある。

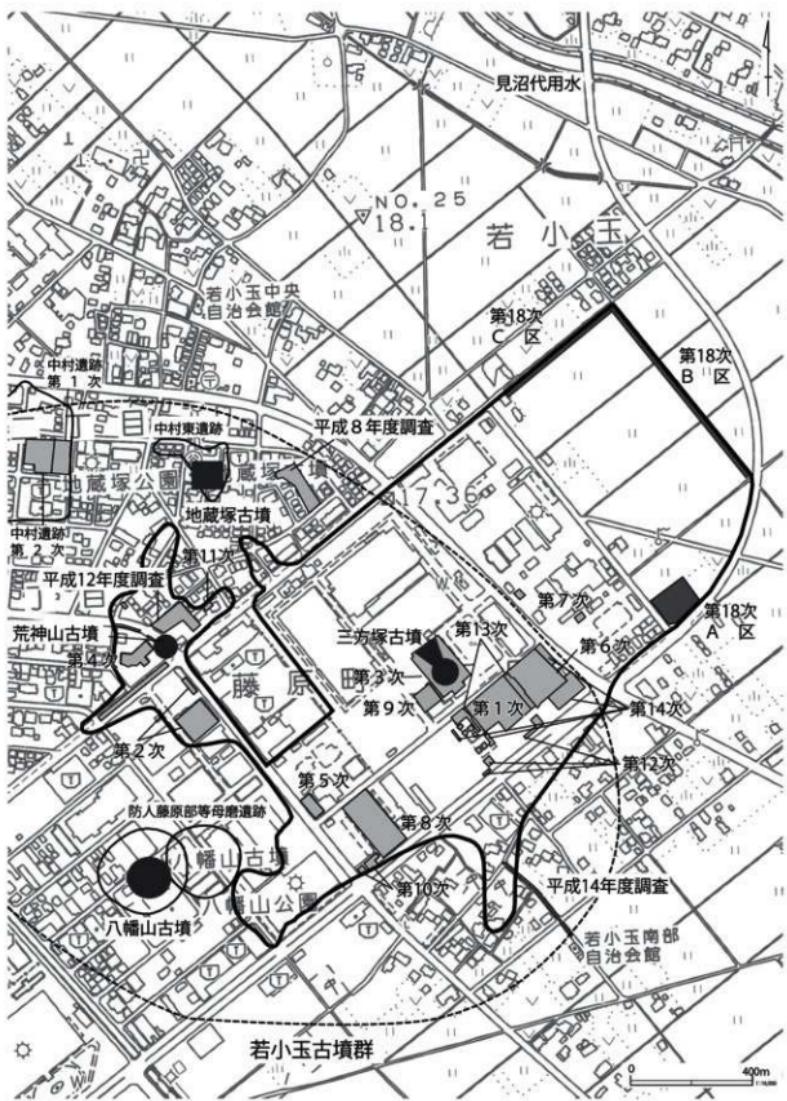
八幡山古墳は昭和9年（1934）に小針沼の干拓事業のために墳丘が取り壟され、現在は石室のみが残る。元々は約9.5mの高さ、直径約80mの規模を持つ大型の円墳であった。

石室は羨道、前室、中室、奥室で構成されており、羨道部分は失われている。推定全長は16.7mとされるが、現存長は14.7mとなっている。奥壁の横幅は約4.8mで大型の横穴式石室である。石室に用いられた石材は、奥室の壁に角閃石安山岩と輝石安山岩質溶岩、天井や中室、前室の側壁には巨大な緑泥片岩の板石も用いられている。

副葬品も豊富に確認されており、須恵器長頸壺、銅鏡、青銅製八花棺金具、長刀片、乾漆器片、夾紵棺片、漆塗木棺片及び銅鏡、鉄釘、銀製弓筈金物片、鐵鎌、銅漆装方頭柄頭、金銅装鞞尻金具が出土している。

地蔵塚古墳は一辺約28m、高さ約4.5m、周溝幅約1mの方墳で、若小玉古墳群の最後の古墳に位置付けられる。石室は胴張りで緑泥片岩を奥壁と天井石に用いている。石室内の左右の壁と奥壁に鳥帽子を被った人物、弓を引いている人物、馬、水鳥、家などが線刻によって描かれている。

律令期以降の北大竹遺跡の様相としては、第6次調査地点において、6世紀代から10世紀代にかけての集落が検出されている。竪穴住居跡75軒以上の他、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡などの遺構とともに大量の土器類が出土している。



第3図 遺跡調査地点位置図

## 2 第18次調査の概要

北大竹遺跡第18次調査はA区、B区、C区の3区に分かれた地点の発掘調査を実施した。

行田富士見工業団地拡張に伴う発掘調査で、A区は調整池の設置、B区・C区は現道の拡幅に伴う発掘調査である。各調査区の距離間は、A区の東端からC区西端まで約360m、A区の南東端からB区・C区の接点まで約420mの距離を測る。

A区は、第18次調査地点の中で南側に位置し、これまでの調査地点と最も近い地点となる。調査面積は3,067m<sup>2</sup>である。ローム層を地山とし、遺構検出面とした。調査区の南側半分において、遺構が検出された。一方で調査区の北側半分は洪水によって削平されており、遺構は一切確認されなかった。試掘調査の際に、遺構検出面の標高約15mからさらに約3m掘削し、下層の様相が確認されているが、ローム層は確認されなかった。この洪水により流れ込んだ砂層は旧表土直下から確認され、肥前系の染付磁器が出土していることから、18世紀後半以降の洪水によるものと想定される。遺構は、古墳時代・飛鳥時代の竪穴住居跡18軒、井戸跡13基、溝跡4条、土壙14基である。7世紀代の遺構が多い傾向にあり、ウマを含めた獸骨を伴う土壙が検出されている。奈良時代・平安時代の遺構は、竪穴住居跡3軒、井戸跡5基、溝跡3条、土壙1基、鍛冶関連遺構1基、旧河川跡1箇所である。9世紀代を中心とする時期で10世紀代には下らない。

B区は第18次調査で最も北東側に位置する。調査面積は1,448m<sup>2</sup>である。幅約6mで約260mにかけて調査を行った。ローム層を地山とし、遺構検出面とした。B区において検出された古墳時代・飛鳥時代の遺構は、竪穴住居跡21軒、井戸跡11基、溝跡4条、遺物集中が3箇所である。B区の奈良時代・平安時代の遺構は、竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基、溝跡3条、土壙4基である。奈良時代・平安時代の遺構は調査区

中央から南東寄りの地点に多く分布する傾向にある。他に中世とみられる土壙が1基検出された。

C区は第18次調査で最も北西側に位置する。調査面積は765m<sup>2</sup>である。幅約6mで約165mにかけて調査を行った。ローム層を地山とし、遺構検出面とした。C区において検出された古墳時代・飛鳥時代の遺構は、竪穴住居跡18軒、井戸跡8基、溝跡4条、土壙7基である。C区の奈良時代・平安時代の遺構は、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟、柱穴列2条、溝跡3条である。奈良時代・平安時代の遺構は調査区の中央から南西寄りの地点に多く分布する傾向にある。

北大竹遺跡第18次調査で得られた最大の成果はB区で検出された3箇所の遺物集中地である。主に6世紀中頃から7世紀中頃にかけての大量的な遺物が、大きく3箇所にわたって確認された。最も南側で確認された第1号遺物集中は、7世紀中頃を主体とする時期である。残存率の高い須恵器の甕を8点並べ、周囲から須恵器の环や土師器の环、甕などとともに子持勾玉12点や石製模造品を伴って出土している。

その北西側へ約13mの地点で確認された第2号遺物集中は、6世紀中頃から後半を中心とする時期であり、5mほどの範囲に掲載資料で須恵器122点、土師器559点、子持勾玉19点、石製模造品187点、白玉765点、金属製品307点といった量の遺物が出土している。

そこからさらに北西へ約25mの地点で確認された第3号遺物集中は、7世紀初頭頃を中心とする時期であり、須恵器甕11点を並べた様相が確認された。子持勾玉は11点出土している。

この3地点で6世紀中頃から7世紀中頃までにかけて確認された遺物の共通点としては、須恵器の甕と子持勾玉を一貫して用いているという点が挙げられる。これらを用い、継続した祭祀行為が執り行われたことによる結果といえよう。



第4図 A・B・C区位置図

# IV A区の調査

## 1 A区の概要

A区は第18次調査地点の中で最も南東に位置し、これまで調査された北大竹遺跡の調査地点からは、第6次調査地点、第14次調査地点から北東へ約160mの場所に位置する。

調査面積は3,067m<sup>2</sup>である。掘削深度は現地表面から2.2m～3.0m下で地山となるローム面（X-1層）を検出している。

検出された遺構は主な時代のものとして古墳時代・飛鳥時代・奈良時代・平安時代の時期に位置付けられる遺構を主体に検出された。遺構数は、古墳時代・飛鳥時代の竪穴住居跡が18軒、井戸跡が13基、溝跡4条、土壙14基が検出されている。

古墳時代・飛鳥時代の特徴として、獸骨を伴う土壙が多数検出された点が挙げられる。ウマの骨を放射性炭素年代測定した結果、6世紀後半から7世紀前半頃の年代に収まるという成果が得られた。これは竪穴住居跡の年代と一致する。このことから、A区において6世紀後半から7世紀前半に展開していた集落はウマとの関りが深い人々が生活していた集落であった可能性が想定される。

奈良時代・平安時代の遺構は、竪穴住居跡が3軒、井戸跡が5基、溝跡3条、土壙1基が検出されている。平安時代となる9世紀前半頃の遺構を

### 基本土層

I-1 砂表土

I-2 田表土

II 近世後期の水田面（B・C区）

灰褐色土、As-a粒子多量  
しまり、粘性やや強い

範囲

しまり、粘性なし

III-1 近世の洪水砂（B・C区）

褐色粘土質土、しまり、粘性弱い

III-2 第Ⅱ級洪流水路の底面泥（B・C区）

褐色粘土質土、しまり強く、粘性強い

範囲

しまり強く、粘性強い

III-3 近世の洪水砂（A区）

褐色粘土質土、しまり強く、粘性強い

範囲

しまり強く、粘性強い

III-4 近世の洪水層（A区）

褐色粘土質土、しまり強く、粘性強い

範囲

しまり強く、粘性弱い

N-1 中近世の洪水堆積土（B・C区）

褐色粘土質土、赤褐色粒子少量  
しまり強く、粘性弱い

範囲

しまり強く、粘性弱い

N-2 中近世の洪水堆積土（B区）

褐色粘土質土、しまり強く、粘性弱い

範囲

しまり強く、粘性弱い

N-3 中近世の洪水堆積土（B区）

褐色粘土質土、黒褐色土、砂少量  
しまり強く、粘性弱い

範囲

しまり強く、粘性弱い

N-4 中近世の洪水堆積土（B区）

褐色粘土質土、L1⑥グリッドの遺物包含層  
黒褐色ブロック多量、しまり強く、

粘性やや強め

N-5 中近世の洪水堆積土

褐色粘土質土、赤褐色粒子少量  
しまり強く、粘性やや強め

範囲

しまり強く、粘性弱い

V-1 中世面（B・C区）

褐色粘土、白色粒子少量  
しまり強く、粘性弱い

範囲

しまり強く、粘性弱い

V-2 中世面（A区）

灰白色土、白色粒子含む  
しまり強く、粘性強め

範囲

As-b粒子多量

第5図 A区基本土層土層説明

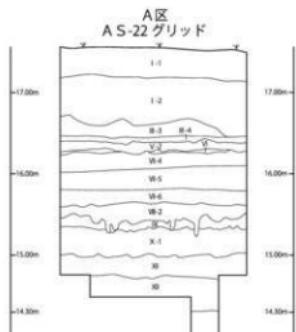
最後にその後の遺構は検出されていない。9世紀以降は土地利用の在り方が生活域だったものから変化していったとみることができる。

また、小規模ながら鍛冶関連の遺構も検出されていることから、集落内での鉄製品の生産や補修を行っていた様子もうかがえる。

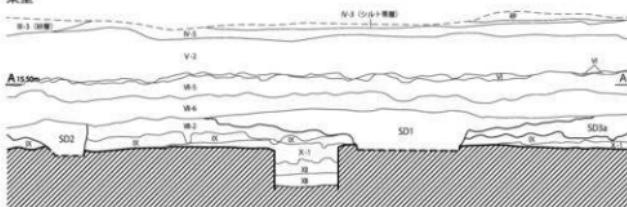
これらの遺構は全て調査区の南西側半分において検出されており、北東側半分は旧河川跡が検出され、それ以外の遺構は一切検出されていない。この旧河川跡は遺構検出面で確認されたものは平安時代頃と想定されるが、現表土下から淡褐色砂質土が検出されており、これは近世か近代の洪水に起因するものに位置付けられる。

また、行田市教育委員会によって調査が行われている第6次調査地点において、6世紀代から10世紀代にかけての竪穴住居跡が75軒以上検出されている。このことから、この第6次調査地点から第18次調査区A区にかけての範囲に大規模な集落が展開していた可能性があり、A区の旧河川跡の辺りが集落域の際であったとみられる。しかし、この旧河川跡を挟んだ対岸に位置するB区においても集落域が確認されており、広範囲な集落内に河川が流れ込んでいたようである。

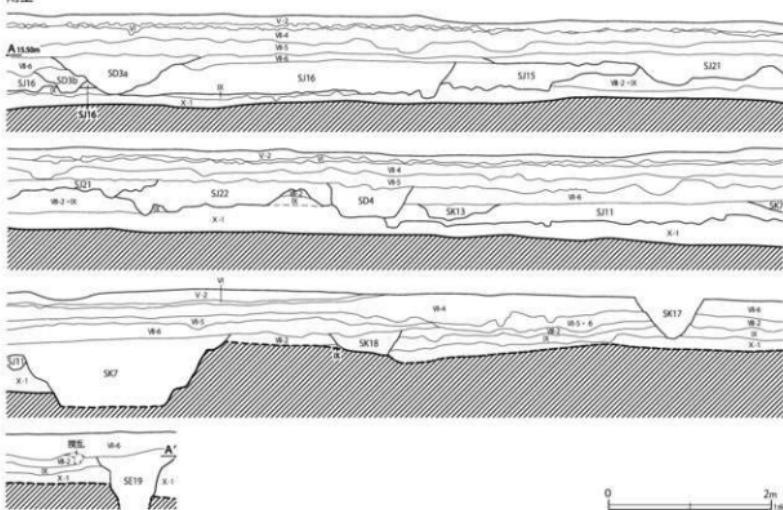
VI-1 古代面（B・C区）	暗褐色粘土質土、炭化物多量、赤褐色粒子微量 しまり、粘性弱い
VI-2 古代面（B・C区）	灰褐色土、下層に炭化物少量 しまり、粘性やや強め
VI-3 古代面（B・C区）	灰褐色土、しまり、粘性弱い にぶく灰褐色土、しまり、粘性強い
VI-4 古代面（A区）	にぶく灰褐色土、しまり、粘性強い 黄褐色粒子微量 しまり、粘性弱め
VI-5 古代面（A区）	にぶく灰褐色土、黄褐色粒子微量 しまり、粘性弱め
VI-6 古代面（A区）	白色粒子、黄褐色粒子少量、雲母微量 しまり、粘性あり にぶく灰褐色土、しまり、粘性あり
VI-7 古墳時代面（B・C区）	黒褐色土、炭化物少量、Fa火炎痕、赤褐色粒子微量、しまり、粘性やや弱い 黒褐色土、ローム粒子微量、しまりあり
VI-8 古墳時代面（A区）	黒褐色土、ローム粒子微量、しまりあり 粘性やや弱い
IX 誰とX-1の堆積層	暗褐色土、ロームブロック多量、炭化物少量 しまり、粘性やや強め 黄褐色土、炭化物少量、Fa火炎痕、しまり、粘性弱い 黄褐色土、白色粒子、黄褐色粒子含む しまり強く、粘性弱い
X-1 ソフトローム層	黄褐色土、白色粒子、黄褐色粒子含む しまり、粘性やや強め
XI ハードローム層（B・C区）	黄褐色土、白色粒子、黄褐色粒子含む しまり、粘性やや強め
XII 黒色面	黒色土、白色粒子、黄褐色粒子含む しまり強く、粘性弱い
XIII 黒色面2	灰褐色土、白色粒子少量、しまりやや弱い 粘性あり 黄褐色土
XIV 立川ローム層（C区）	黄褐色土



東壁



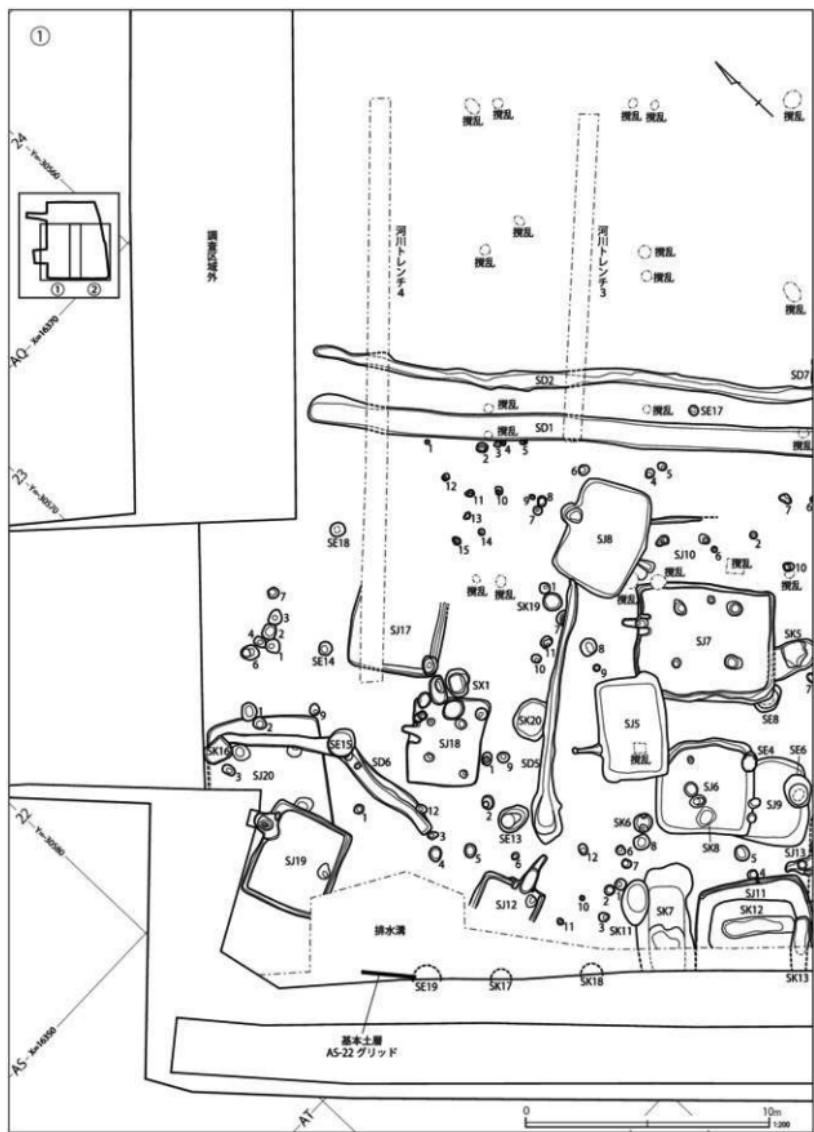
南壁



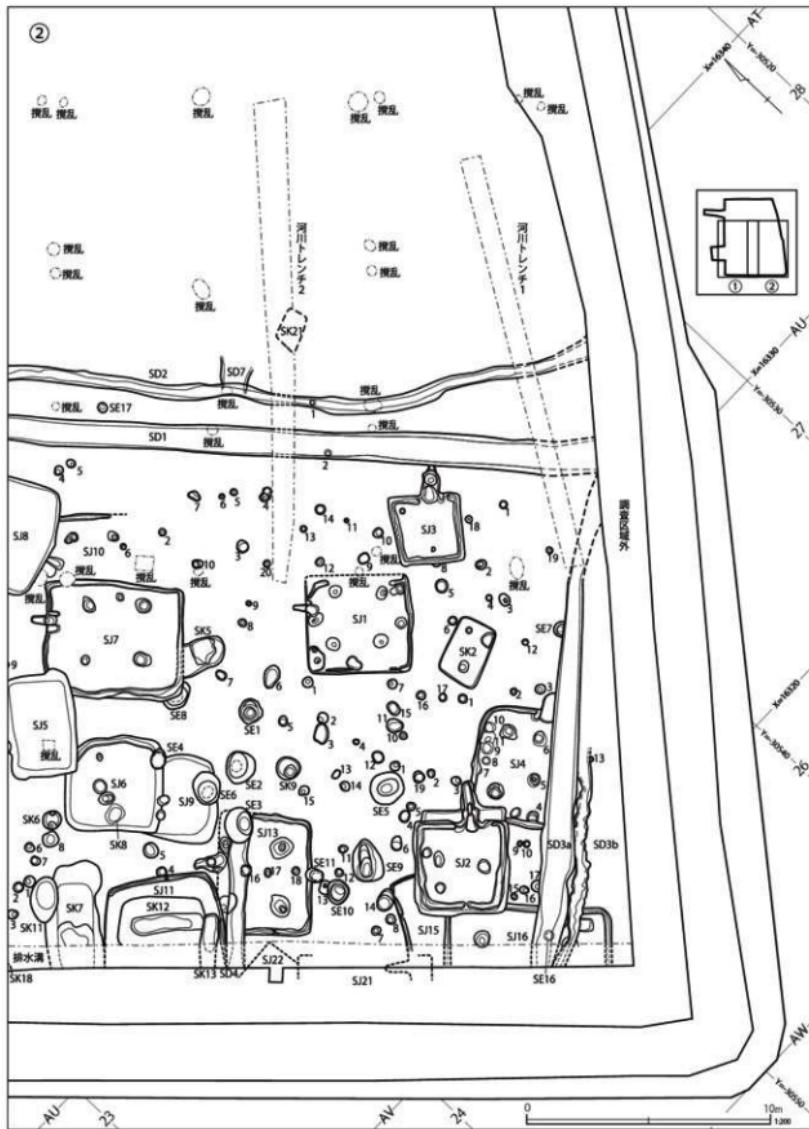
第6図 A区基本土層東壁・南壁断面図



第7図 北大竹遺跡第18次A区全体図



第8図 北大竹道路第18次A区区割図(1)



## 2 古墳時代・飛鳥時代の遺構と遺物

A区において検出された古墳時代・飛鳥時代の遺構数は、竪穴住居跡18軒、井戸跡13基、溝跡4条、土壙が14基検出されている。後世に削平されている調査区北半分を除いて、調査区南半分のほぼ全域に遺構が分布しており、調査区域外の西側、東側、南側へ集落が広がっていると想定される。

### (1) 竪穴住居跡

#### A区第1号竪穴住居跡（第10図）

A区の第1号竪穴住居跡は調査区の南東部、AT-24・25グリッドに位置する。

他の遺構との重複関係は認められないが、覆土が削平され浅く、北東辺の遺存状態は良くない。平面形は隅丸方形で、残存規模は長軸長4.40m、短軸長4.03m、深さ0.09mである。主軸方位はN-40°-Wを指す。

覆土はロームブロックを含む黒褐色土を主体とするが、削平されていることから堆積状況は不明瞭である。

カマドは北西辺に設置され、規模は長さ1.04m、幅0.72mで燃焼部の深さは0.07mである。煙道部は残存長0.50m、深さ0.02m程度の残存であり、先端部が削平されて、実際はもっと長かった可能性がある。燃焼部は住居内部に収まる。袖は左右ともに残存状態が悪いが、地山削り出しとみられる。

カマドの反対側にあたる南東辺付近に0.5m～0.7m程度の範囲にかけて硬化面が広がっている。

貯蔵穴は検出されなかった。柱穴・ビットは9基検出された。このうち、P1～4は配置関係から竪穴住居跡の主柱穴であるとみられるが、いずれも柱痕は確認されなかった。P5はカマドの反対側の南東辺に位置することから、入口施設に関わる可能性が想定される。P6～9は竪穴住居跡に伴う可能性は低いが、カマドや壁溝に切られていることから、竪穴住居跡の構築以前の時期に帰

属する可能性がある。

壁溝は残存状態が悪いが南西辺、南東辺及び北側コーナーで検出されている。幅は0.08m～0.26m、深さは0.02m～0.09mである。

遺物は、須恵器、土師器、石製品、石製模造品が出土している。第11図1は須恵器の壺蓋である。体部に稜がみられ、端部が垂直に延びる。产地は末野窯と推定される。2は須恵器の縁である。外面に波状文が残る。

3～5は土師器の壺である。3は有段口縁壺で内外面に黒色処理が施されている。4は蓋模倣壺である。5は身模倣壺で外面に黒色処理が施されている。6は緑泥片岩の敲石とみられる。7と8は滑石製の石製模造品である。いずれも孔の部分から欠損している。8は北辺コーナー付近から出土している。9と10は滑石の白玉である。いずれも中央付近から出土している。

時期は、須恵器からTK10（新）型式に位置付けられ、6世紀中頃～後半頃と推定される。

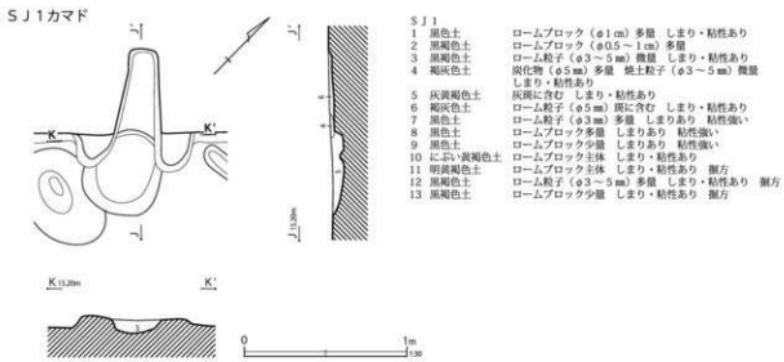
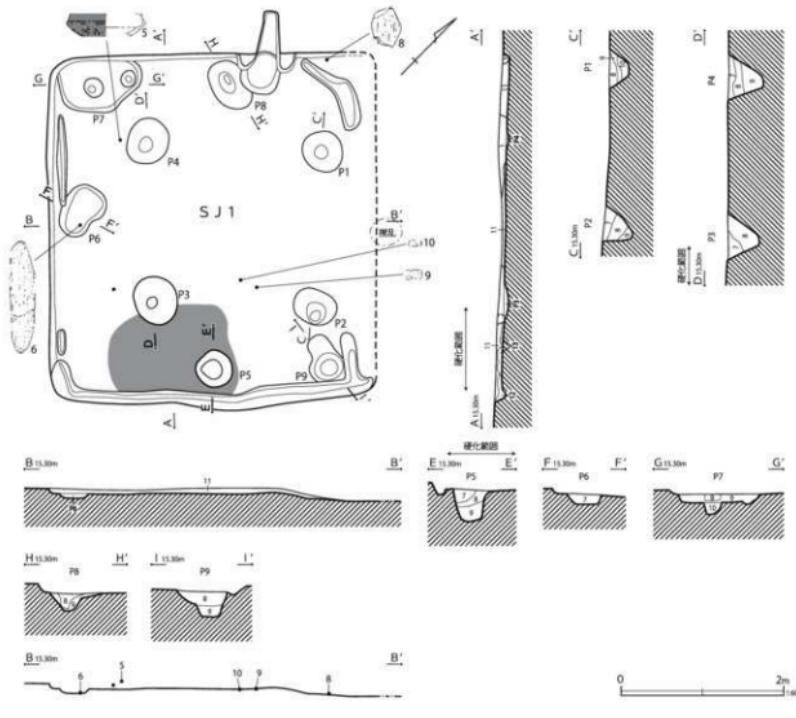
#### A区第4号竪穴住居跡（第12・13図）

A区の第4号竪穴住居跡はAU-24・25グリッド、調査区の南東部に位置する。

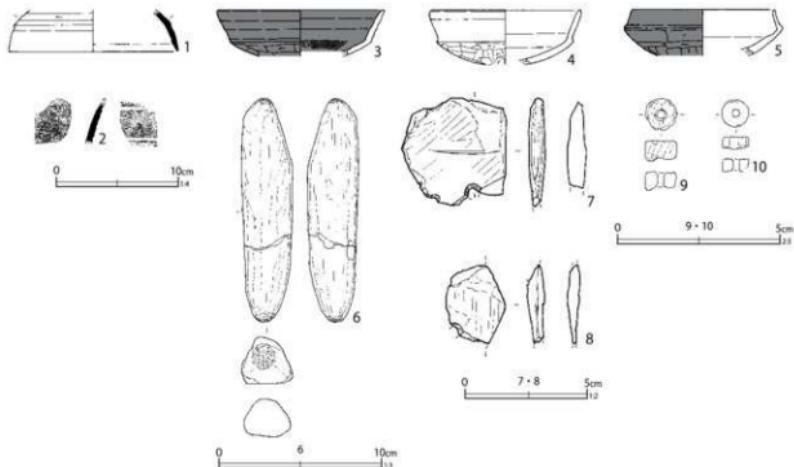
第3号溝跡に南西部から北東部にかけて壊されている。また、西コーナー部分は第2号竪穴住居跡に切られている。平面形は、3箇所のコーナーが残存していないが、残存する北西部のコーナーから隅丸方形と想定される。残存規模は長軸長4.75m、短軸長3.24m、深さ0.19mである。主軸方位はN-49°-Eを指す。

覆土は黒褐色土及び暗褐色土を主体とする。中央部を中心に貼床が認められ、部分的に掘方も残る。

カマドは北東辺に設置されているが、南東側半分が第3号溝跡によって壊されている。残存規模は長さ1.20m、幅0.90mで燃焼部の深さは0.21mである。燃焼部は住居の外側に張り出すように構



第10図 A区第1号竪穴住居跡



第11図 A区第1号竪穴住居跡出土遺物

第2表 A区第1号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(13.7)	[3.4]	—	I	5	良好	灰	b 末野窯産か	91-1
2	須恵器	壺	—	[3.3]	—	I	5	良好	灰	d 波状文	91-1
3	土師器	壺	(13.4)	[3.8]	—	HK	20	普通	にぶい黄褐色	b・AT-25 有段口縁壺 内外面黒色処理	91-1
4	土師器	壺	(12.2)	[4.4]	—	AH	20	普通	褐	c 蓋模倣壺	91-1
5	土師器	壺	(11.6)	[3.7]	—	AHI	20	普通	黒褐	No 1 身模倣壺 外面黒色処理	91-1
6	石製品	蔽石	長さ13.8 幅3.1 厚さ2.9 重さ150.8 残存100						No 3・AT-24 P 3 緑泥片岩	91-1	
7	石製模造品	不明	長さ[4.4] 幅[4.2] 厚さ0.7 孔径(0.6) 重さ20.6 残存60						d 滑石 片面直 ミガキ	91-1	
8	石製模造品	不明	長さ[3.2] 幅[2.4] 厚さ0.7 重さ5.6 残存40						No 4 滑石 片面直 ミガキ		
9	石製品	白玉	長0.9 短1.0 厚0.6 孔径0.3 重1.0 残存95						No 5 滑石 中C斜(2)a I IV		
10	石製品	白玉	長0.8 短0.8 厚0.8 孔径0.2 重0.3 残存90						No 6 滑石 中D斜(2)c II		

築されている。煙道部は検出されなかった。袖は左側のみ残存しており、地山削り出しとみられる。

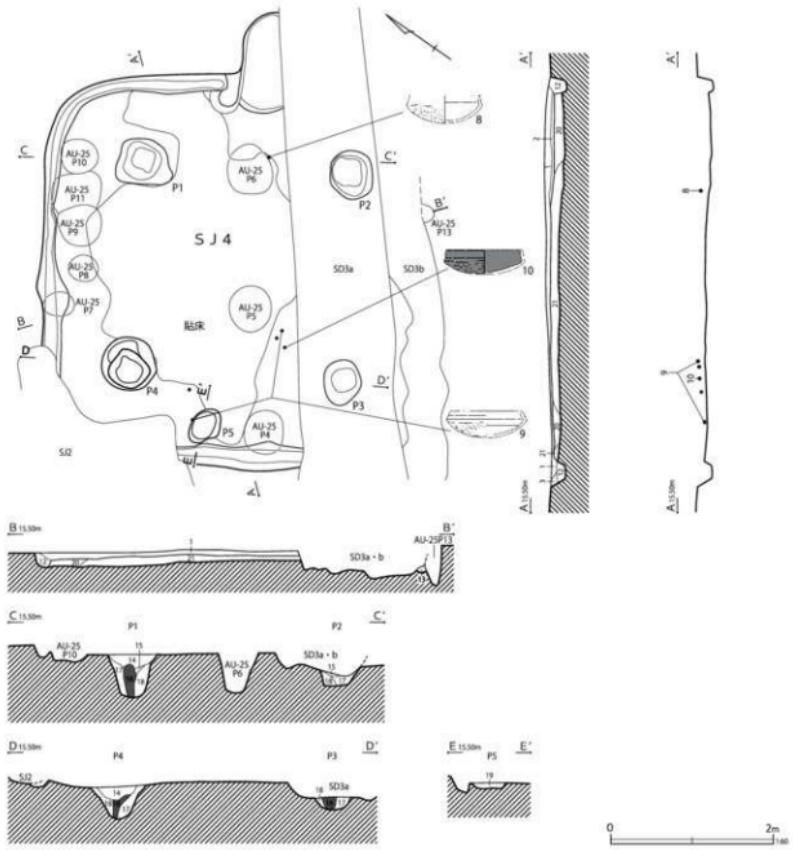
貯蔵穴は検出されなかった。第3号溝跡に切られた場所に位置していた可能性もあるが、溝跡の底面までの0.35m下では確認されていないことから、存在してもこれより浅かったといえる。

柱穴・ピットは5基検出された。P 1～4は位置関係から竪穴住居跡の主柱穴とみられる。このうち、P 2・3は第3号溝跡の底面から検出され

ている。P 5はカマドの反対側に位置する南西辺に位置することから、入口施設に関わる可能性が想定される。

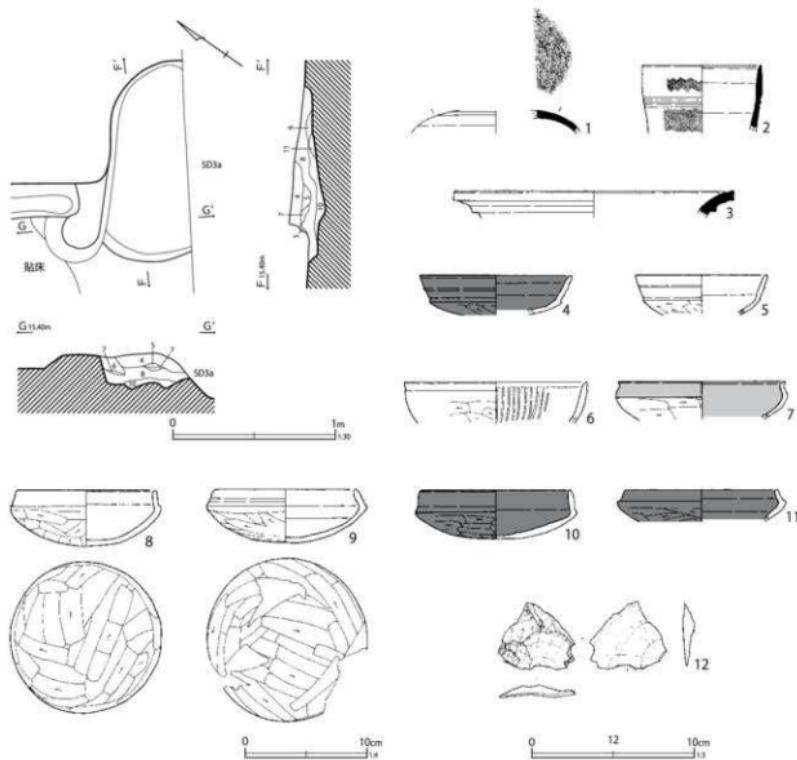
壁溝は、残存している北西辺及び南西辺の一部で検出されている。幅は0.14m～0.38m、深さは0.13m～0.21mである。

遺物は須恵器、土師器、石製品が出土している。第13図1は須恵器の蓋である。体部にヘラ削りの痕が残る。稜は認められない。陶邑窯産の製



- SJ 4**
- 1 前期赤土 均質 ローム粒子 ( $\phi 1 \sim 2$  mm) 少量 棕色粒子微量  
しまり強い 黏性あり
  - 2 黒褐色土 1層より弱い 土中に含む多量 黄灰色粒子 ( $\phi 1$  mm) 少量  
炭化物 ( $\phi 2 \sim 4$  mm) 含む  
2層より少く 黏性あり 保水性弱い
  - 3 前期赤土 1層に近位 ローム粒子多量 上層からの後づ込み堆積土
  - 4 明灰褐色土 砂白色カラマド構造土 ( $\phi 2$  cm)・赤褐色ブロック  
(被熱したカラマド土) 多量 しまり・粘性あり
  - 5 明灰褐色土 砂白色粘土ブロック ( $\phi 1$  cm) 多量  
カマド天井路土と明灰褐色土層在 白色粘土含む  
カマドブロックは被熱し赤色化
  - 6 明灰褐色土 カマド構築土袖部分崩落
  - 7 明灰褐色土 カマド構築土天井路土の一部 全体に被熱し赤色化
  - 8 にぶい黄褐色土 1層より弱い 中層 炭化物 ( $\phi 1$  mm) 面的に広がる  
しまり・粘性やや弱い
  - 9 黑褐色土 ロームブロック・赤褐色ブロック含む  
炭化物・燒土粒子 ( $\phi 2 \sim 5$  mm) 少量 しまりやや弱い  
粘性強い
  - 10 黑褐色土 炭化物・燒土粒子 ( $\phi 2 \sim 5$  mm) 少量 棕色ブロック含む  
しまりやや弱い 粘性強い
  - 11 黄褐色土 きめ細い 炭化物 ( $\phi 5$  mm) 含む ローム土が被熱し赤く変色  
しまり弱い 黏性あり
  - 12 黑褐色土 ローム粒子 ( $\phi 2$  mm) 中層 カマド構築粘土粒子 ( $\phi 2$  mm) 微量  
しまり・粘性やや弱い・保水性弱い
  - 13 岩褐色土 1層より弱い 黏性やや弱い・保水性弱い
  - 14 喬褐色土 ロームブロック・ローム粒子 ( $\phi 2 \sim 5$  mm) 多量  
炭化物・焼土粒子 ( $\phi 2$  mm) 少量 しまり強い 黏性やや弱い
  - 15 黑色土 砂や灰土 14層とロームブロック混在 しまりやや弱い 黏性あり
  - 16 黑色土 均質 炭化物 ( $\phi 2 \sim 7$  mm) 少量 ボロボロしている しまり弱い  
粘性あり・柱窓
  - 17 前期赤土 18層に近位 ロームブロック ( $\phi 2 \sim 5$  cm) 含む しまり弱い  
粘性あり
  - 18 前期赤土 しまり弱い 黏性あり 柱設置時埋土か
  - 19 黑褐色土 細粒色ブロック・ローム粒子 ( $\phi 2 \sim 5$  mm) 多量 接触痕か  
柱口下部とか
  - 20 黑色土 不均質 ロームブロック ( $\phi 2 \sim 3.5$  cm) 少量 しまり弱い 黏性あり  
糊方
  - 21 黄褐色土 しまり強い 黏性やや弱い 南側壁から中央にかけて厚く堆積 接触痕

第12図 A区第4号竪穴住居跡



第13図 A区第4号竪穴住居跡出土遺物

第3表 A区第4号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第13図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	団版
1	須恵器	蓋	-	[1.9]	-	I	5	良好	灰	AU-24~26 陶邑窯産か 天井部ヘラケ 欠り	91-2
2	須恵器	壺	(9.6)	[5.5]	-	I	5	普通	灰	b 末野窯産か 波状文	91-2
3	須恵器	壺か	(22.8)	[2.0]	-	EIK	5	良好	灰赤	a 自然釉	91-2
4	土師器	壺	(12.4)	[3.2]	-	GI	5	普通	黒褐	d 有段口縁環 内外面黒色處理	
5	土師器	壺	(10.7)	[3.2]	-	AHI	10	普通	にぶい黄褐	c 有段口縁環	
6	土師器	壺	(14.8)	[3.4]	-	AI	5	良好	橙	c 放射状暗文	
7	土師器	壺	(13.6)	[3.1]	-	HI	5	良好	赤褐	b 比企型壺 内外面赤彩	
8	土師器	壺	11.4	4.6	-	AHI	100	普通	明赤褐	No.6 身模做環	91-2
9	土師器	壺	11.4	4.3	-	AHI	80	普通	にぶい黄褐	d・No.1・4 身模做環	91-2
10	土師器	壺	(12.2)	3.9	-	I	40	普通	褐灰	No.3 身模做環 内外面黒色處理	91-2
11	土師器	壺	(12.2)	[2.6]	-	ACI	10	普通	黒褐	P 1 身模做環 内外面黒色處理	
12	石製品	搔削器か	長さ4.2	幅[4.8]	厚さ0.8	重さ10.0	残存95			a	

品の可能性がある。2は須恵器壺の口縁部で垂直に立ち上がる長頸壺とみられる。2条の沈線を挟んで波状文がみられる。末野窯産の製品とみられる。3は須恵器の壺か小型の甕の口縁部とみられる。内外面に自然釉が掛かる。産地は不明である。4と5は土師器坏で有段口縁坏である。4は内外面に黒色処理が施されているが、摩滅が激しく部分的に剥げている。6は土師器の坏で内面に放射状暗文がみられる。7は比企型坏で内面及び口縁外面に赤彩が施されている。8~11は身模做坏で10と11は内外面に黒色処理が施されている。12は搔削器の可能性がある石製品である。混入品の可能性がある。

時期は、1の須恵器がTK43型式の坏蓋とみられる点、残存状態の良い土師器の模倣坏や有段口縁坏からみても6世紀後半の可能性が高いが、6の暗文土器が混入でなければ、7世紀初頭の豊穴住居跡である可能性もある。

#### A区第5号豊穴住居跡（第14・15図）

A区の第5号豊穴住居跡はAS・AT-23・24グリッド、調査区の南部中央付近に位置する。

他の遺構との重複関係は、第6・7号豊穴住居跡と重複し、これらよりも新しい。

覆土はロームブロックを多量に含んだ黒褐色土を主体とする。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸長4.35m、短軸長2.80m、深さ0.55mである。主軸方位はN-48°-Wを指す。

カマドは西辺に設置されている。規模は長さ120m、幅0.50mで燃焼部の深さは0.29mである。燃焼部は不鮮明である。煙道部は長さ約1m、幅0.19mで煙出しピットがみられる。袖は確認されなかった。

貯蔵穴、柱穴、壁溝の諸施設はいずれも検出されなかった。

遺物は須恵器、土師器が出土している。第16図1は須恵器の坏身で、奈文研分類坏Gに該当する。底部回転ヘラ削り左回転である。また、底部

に「-」とみえるヘラ記号があるが欠損しているため、他の記号の可能性もある。器面に光沢をもつ黒色粒子が付着している。産地は秋間窯とみられる。2は須恵器の坏身で奈文研分類坏Hに該当する。口縁部はやや長く外反して立ち上がる。稜は丸みを持ち短い。底部は欠損しているが、湾曲して丸底になるとみられる。産地は湖西窯とみられる。3は須恵器甕の胴部破片である。外面に平行タタキ、内面に同心円文アテ具痕がみられる。また、外面には自然釉がみられる。産地は不明であるが北関東系の製品とみられる。

4は土師器の皿である。内外面に黒色処理が施されているが摩滅して一部が剥げている。内面に放射状暗文が施されている。5は土師器の坏で4と同様に内面に放射状暗文が施されている。7は高坏で内外面に赤彩が施されている。摩滅により剥離が著しい。混入品である。8は土師器の甕である。口縁部から体部上半にかけて残存している。口唇端部に面を持つ。頭部に指頭押さえがみられる。9と10は土師器壺の底部である。9はカマド付近から出土しており、カマドで用いられていた可能性がある。また、至近から馬齒が出土している。

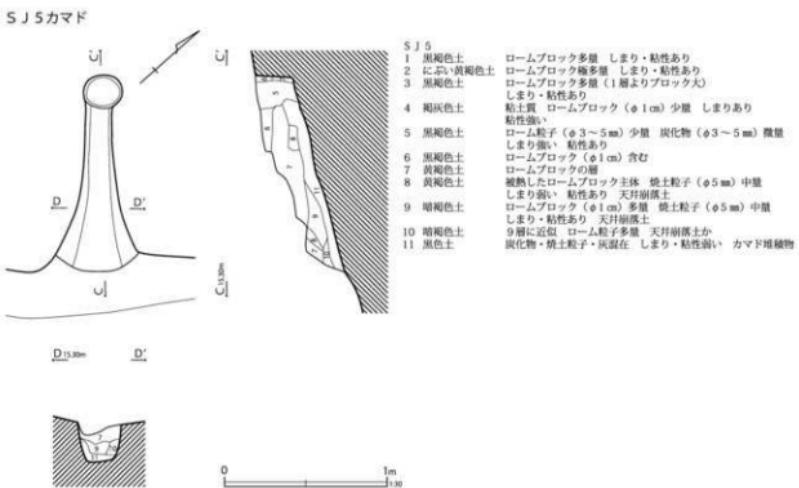
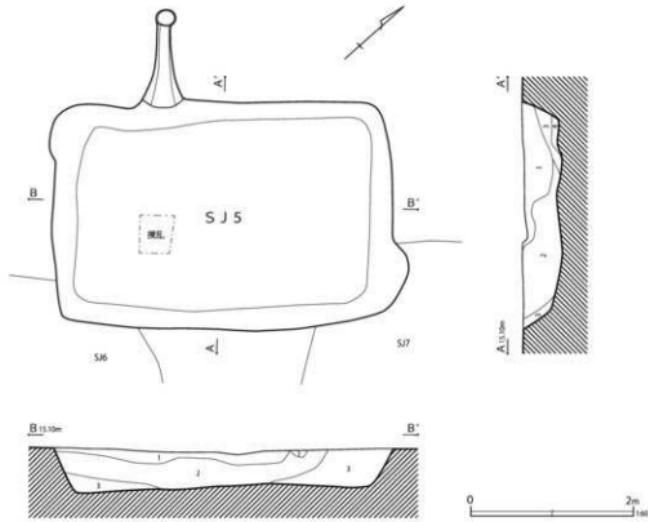
4・6・10は豊穴住居跡中央付近からまとめて出土し、1と8は南側コーナー付近から出土している。時期は、須恵器坏から7世紀中頃～後半とみられる。

#### A区第6号豊穴住居跡（第17図）

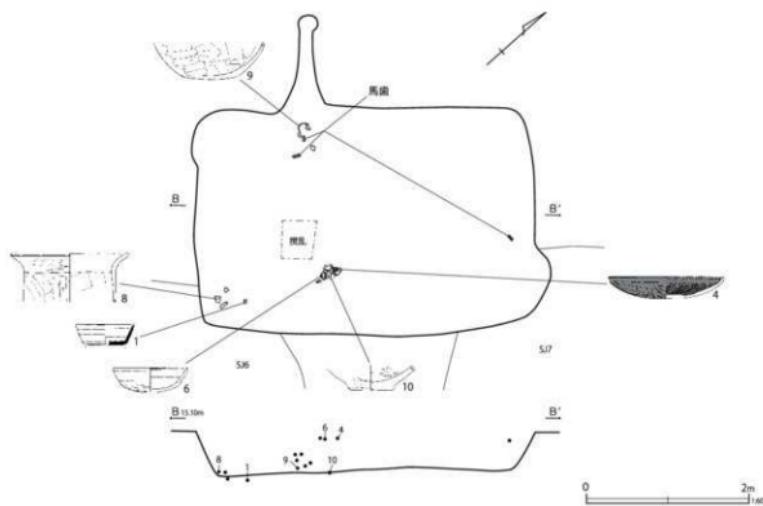
A区の第6号豊穴住居跡はAT-23・24グリッド、調査区の南部中央付近に位置する。

重複する他遺構との新旧関係は、第9号豊穴住居跡と第8号土壤より新しく、第5号豊穴住居跡と第4号井戸跡より古い。

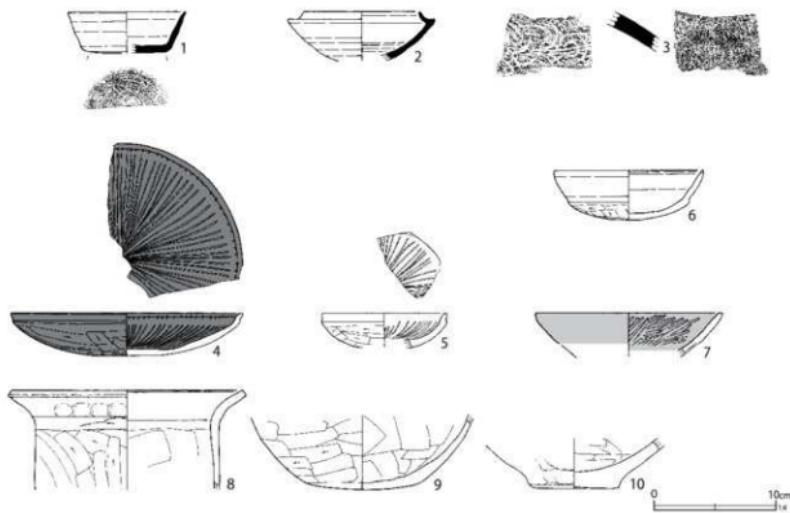
覆土はロームブロック、炭化粒子を含む黒色土を主体とする。平面形は隅丸方形だがやや東辺が歪む。規模は長軸長4.02m、短軸長3.90m、深さ0.20mである。長軸方位はN-42°-Wを指す。



第14図 A区第5号竪穴住居跡



第15圖 A區第5號竪穴住居跡遺物出土狀況



第16圖 A區第5號竪穴住居跡出土遺物

第4表 A区第5号竪穴住居跡出土遺物観察表（第16図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(9.5)	[3.3]	(6.2)	IK	45	良好	青灰	No.11 秋間窯産か 壺 G 底部ヘラケズ リ ヘラ記号	92-1
2	須恵器	壺	(9.5)	[3.9]	—	I	20	良好	灰	a 潟西窯産か 壺 H	92-1
3	須恵器	壺	—	[3.4]	—	I	5	良好	オリーブ黄	d 外面平行叩き 自然釉 内面同心円文	
4	土師器	壺	(18.9)	3.5	—	AI	30	良好	にぶい黄褐	d・No.7 放射状暗文 内外面黒色処理	92-1
5	土師器	壺	(10.0)	[2.8]	—	ACI	20	良好	明赤褐	c 放射状暗文	92-1
6	土師器	壺	(12.1)	4.0	—	ACHI	30	普通	明赤褐	No.8 盖模倣環 内面摩滅により剥離	
7	土師器	高壺	(15.2)	[3.6]	—	AIK	20	普通	明赤褐	AU-23 内外面赤彩 体部外側離	
8	土師器	壺	(18.8)	[8.1]	—	AI	20	良好	燈	No.13	
9	土師器	壺	—	[6.1]	9.2	EHI	30	普通	にぶい黄褐	a・カマド・No.14	92-1
10	土師器	壺	—	[4.1]	7.2	AI	30	普通	燈	No.15	92-1

カマドは検出されなかつたが、北東コーナー付近に焼土が多く、第5号竪穴住居跡に壊されている可能性がある。ピットは4基検出されたが、いずれも浅く、配置も規則性がない。壁溝は東辺のみで確認されている。規模は、幅が0.26m～0.37m、深さは0.06m～0.12mである。

遺物は須恵器、土師器、石製品が出土している。第18図1は、須恵器壺の肩部である。内面に指揮さえの痕がある。外面に、カキ目と自然釉がみられる。胎土が灰赤色を呈している。产地は陶邑窯の可能性がある。2は須恵器壺の胴部片である。外面に平行タタキ痕、内面に同心円文のアヌイ痕がみられる。

3～6は土師器の暗文壺である。いずれも内面に放射状暗文が施されている。3と6は胎土が明るい橙色を呈しているのに対して、4はややくすんだ胎土である。5は内外面に黒色処理が施されている。

7は土師器の比企型壺で口縁部が屈曲し、口唇部に沈線が廻る。胎土は黒褐色を呈している。8は土師器の有段口縁壺である。橙色で明るい胎土を呈している。9は土師器の鉢である。器面が滑らかで堅緻である。10は土師器壺の底部である。胎土に角閃石が多量に含まれている。内面が煤けている。

11は板状の緑泥片岩である。カマドの構築材と

みられるが、中央付近から出土している。

第6号竪穴住居跡では、カマドが検出されていないが、前述の通り、第5号竪穴住居跡に壊された可能性がある。その際に動いたか、他の竪穴住居跡のカマド構築材が混入したものと思われる。

時期は、暗文壺から7世紀中頃に位置付けられる。

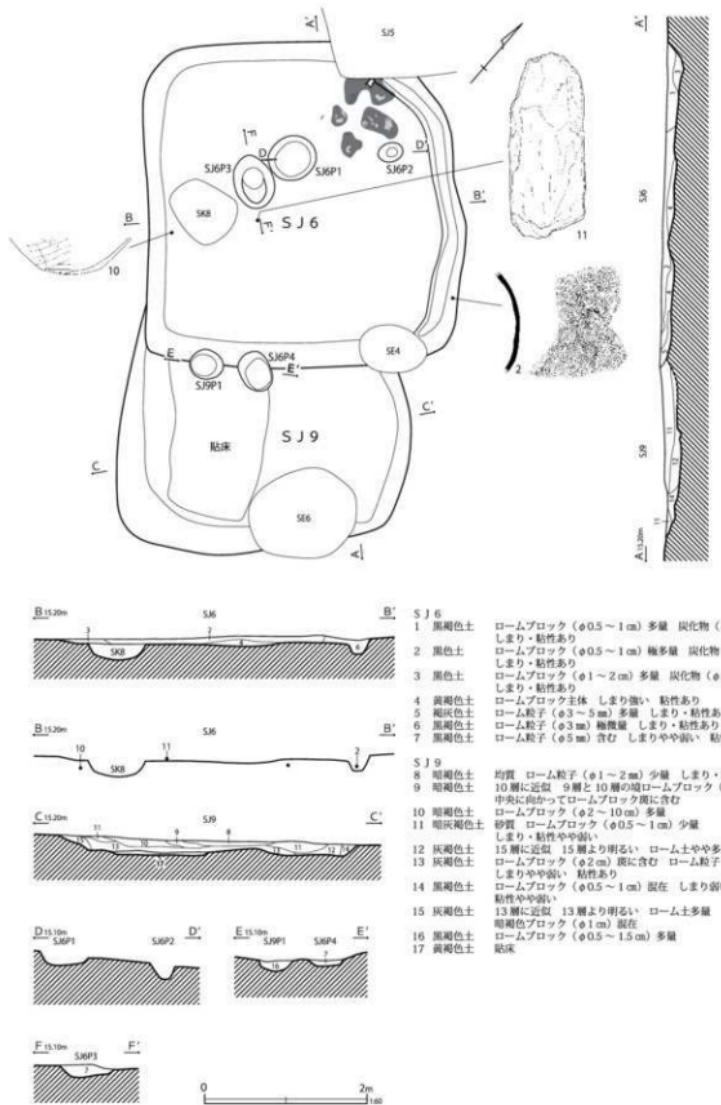
#### A区第9号竪穴住居跡（第17図）

A区の第9号竪穴住居跡はAT-23・24グリッド、調査区の南部中央付近に位置する。

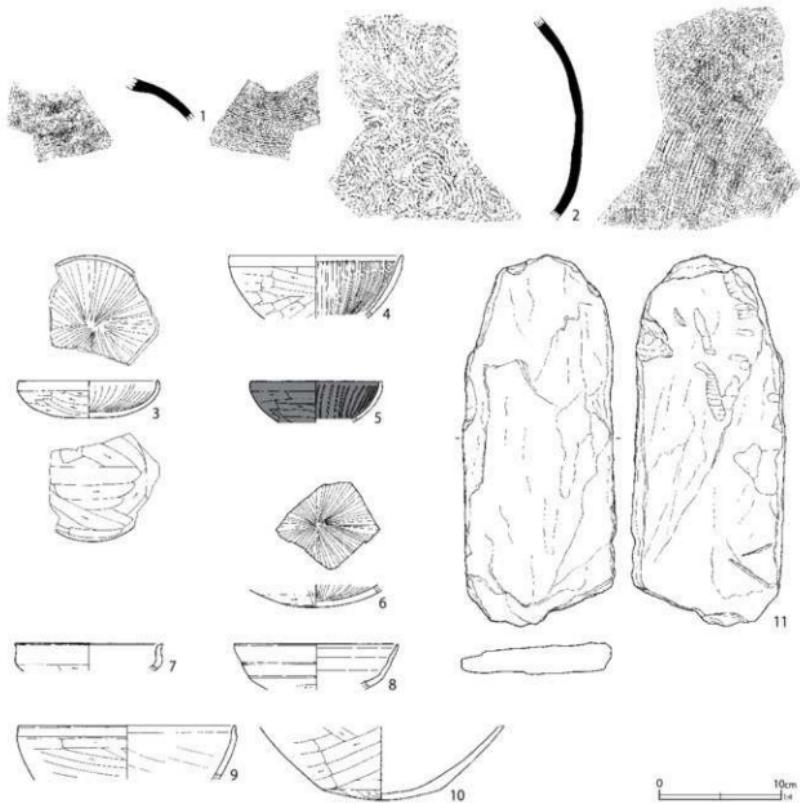
重複する他遺構との新旧関係は、第6号竪穴住居跡により北西辺側が壊されている。また、北東側で第4号井戸跡、南東側で第6号井戸跡に壊されている。

覆土は、上層はロームブロックを含む暗褐色土、下層は灰褐色土を主体とする。平面形は、北辺が残存しておらず、東辺がやや歪んでいるが、隅丸方形であったと想定される。残存規模は長軸長3.60m、短軸長2.32m、深さ0.20mである。長軸方位はN-42°-Wを指す。

カマドは検出されなかつた。北辺に設置されていたものが、第6号竪穴住居跡に壊されている可能性がある。主柱穴の可能性があるピットが1基検出されているが、規模が浅く判然としない。また、中央から西側にかけて貼床が検出されている。壁溝や貯蔵穴は検出されなかつた。



第17図 A区第6・9号竪穴住居跡



第18図 A区第6号竪穴住居跡出土遺物

図示できる遺物は出土しなかったが、第6号竪穴住居跡に壊されていることから、7世紀中頃以前に位置付けられる。

#### A区第7号竪穴住居跡（第19図）

A区の第7号竪穴住居跡はAS・AT-24グリッド、調査区の南部中央付近に位置する。

重複する他遺構との新旧関係は、第10号竪穴住居跡、第8号井戸跡、第5号土壙より新しく、第5号竪穴住居跡より古い。

覆土は浅く残存状況は良くないが、黒褐色土を

主体とする。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸長5.70m、短軸長4.80m、深さ0.10mである。主軸方位はN-42°-Wを指す。

カマドは北西辺に設置されている。残存規模は長さ1.43m、幅0.90mで燃焼部の深さは0.20mである。燃焼部は住居壁からやや外側に位置する。煙道部は長さ0.50m、幅0.33mである。袖は両袖とも一部に粘土が用いられる。

貯蔵穴は検出されなかった。主柱穴は4基検出されている。いずれも深さが0.40m~0.70mあ

第5表 A区第6号竪穴住居跡出土遺物観察表(第18図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	—	[3.4]	—	I	10	良好	灰赤	b・AT-24 陶色窓産か 自然釉	92-2
2	須恵器	甕	—	[6.5]	—	EIK	5	良好	灰	No.2・SK12No.5 外面平行叩き 内面同心円文	92-2
3	土師器	壺	(11.4)	3.0	—	IK	40	良好	明赤褐色	b・AT-24 放射状暗文	92-2
4	土師器	壺	(14.0)	[5.1]	—	ACII	10	良好	黒褐色	a 放射状暗文	92-2
5	土師器	壺	(10.6)	[3.3]	—	ACI	10	普通	黒褐色	b 放射状暗文 内外面黒色処理	92-2
6	土師器	壺	—	[1.9]	—	AII	20	良好	橙	a 放射状暗文	92-2
7	土師器	壺	(12.2)	[2.2]	—	IK	10	普通	黒褐色	比企型壺	
8	土師器	壺	(13.3)	[3.7]	—	CI	5	良好	橙	b 有段口縁壺	
9	土師器	鉢	(17.6)	[4.4]	—	HI	15	良好	褐灰色	a	
10	土師器	蓋	—	[6.0]	9.6	CK	10	普通	にぶい黄橙	No.3 角閃石多量	
11	石製品	カマド構築材	長さ30.4	幅12.5	厚さ2.7	重さ1617.2	残存100			No.4 緑泥片岩	92-2

り、残りが良い。壁溝は全周しているが、残存状況はあまり良くない。規模は、幅が0.20m～0.35m、深さは0.08m～0.12mである。

遺物は須恵器、土師器、白玉が出土している。第20図1は須恵器壺身である。返し部分は受け口より長く突き出す。口縁部は欠損しているが、やや内傾し、小型化している。奈文研分類壺Hに位置付けられる。産地は末野窯とみられる。2は須恵器甕の肩部である。外面に平行タタキ後カキ目痕、内面に同心円文アテ具痕がみられる。3は須恵器甕の胴部である。外面に格子タタキ、内面に同心円文アテ具痕とその後に施されたナデの痕がみられる。

4は土師器壺である。内外面に赤彩が施されているが、大部分は薄くなっている。主柱穴のP2から出土している。5は土師器の有段口縁壺である。内外面に黒色処理が施されているが、部分的に黒色処理が残っていない。6はミニチュア土器である。口縁部は欠損している。体部に縦方向のヘラケズリ調整が認められる。7～9は土師器の甕である。7は口縁部にヨコナデ、胴部に斜方向にヘラケズリ調整が残る。胎土は明るい黄橙色を呈する。8も口縁部にヨコナデが残り、胴部にヘラケズリがみられる。9は底部である。底部と外面にヘラケズリ、内面にヘラナデの痕跡がみられる。10は滑石製の白玉である。側面形は弱い棗玉形

で孔面の一方が斜めにカットされている。側面の研磨は斜め方向に施されている。孔面には両面とも研磨は施されていない。穿孔は片面穿孔で錐先貫通である。

時期は、須恵器壺身から7世紀前半～中頃に位置付けられよう。

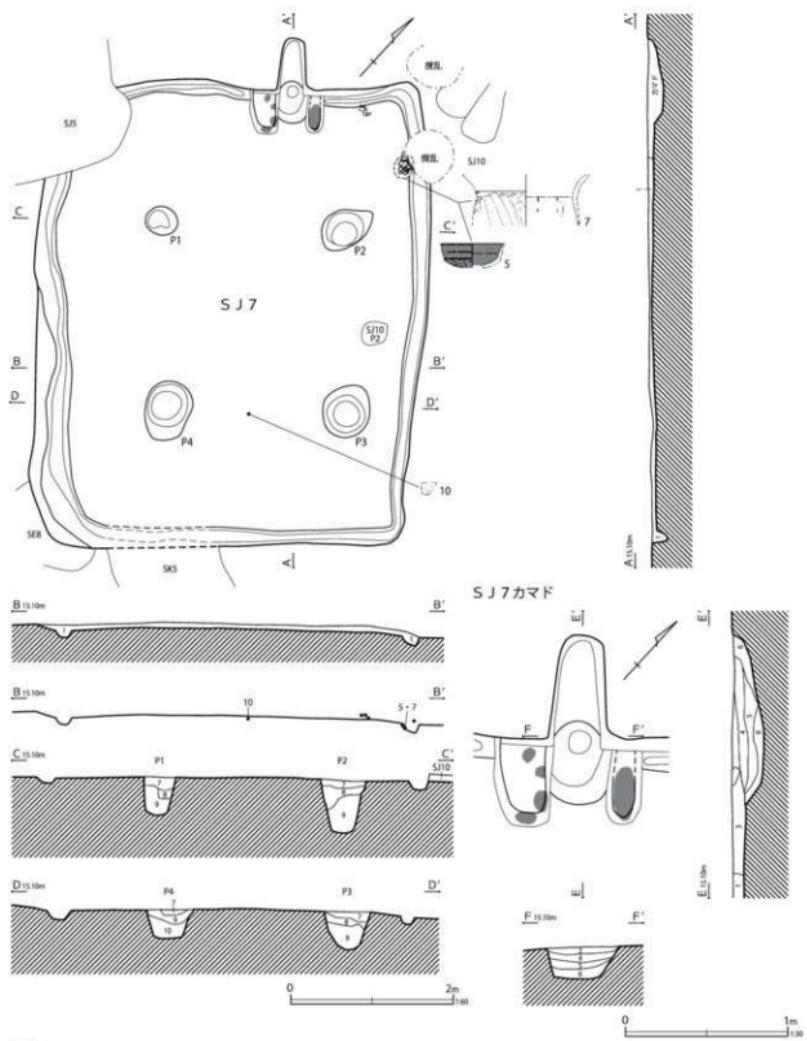
#### A区第8号竪穴住居跡(第21・22図)

A区の第8号竪穴住居跡はAS-24グリッド、調査区の南部中央付近に位置する。重複する他遺構との新旧関係は、第10号竪穴住居跡より新しく、第5号溝跡より古い。

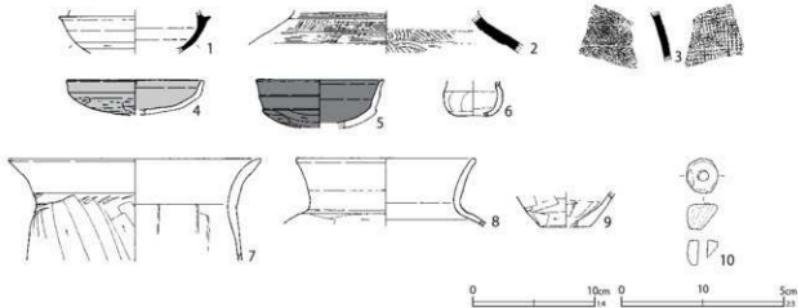
覆土はロームブロックを含む暗褐色土を主体とする。平面形は東西方向にやや長い隅丸長方形で、規模は長軸長4.55m、短軸長3.20m、深さ0.45mである。主軸方位はN-20°-Wを指す。

カマドは北西辺に設置されている。残存規模は長さ0.90m、幅0.93mで燃焼部の深さは0.60mである。燃焼部は住居壁からやや外側に位置する。煙道部は検出されなかった。カマドの燃焼部前及び中央から東側にかけて硬化面が広がっていた。貯蔵穴、主柱穴、壁溝は検出されなかった。

遺物は、須恵器と土師器が出土している。第23図1は、かえりを持つ須恵器の蓋である。胎土は灰白色を呈する。部分的に焼けている。2は須恵器の壺である。底部回転ヘラケズリ調整で左回転と思われる。産地は末野窯とみられる。3は土師



第19図 A区第7号竪穴住跡



第20図 A区第7号竪穴住居跡出土遺物

第6表 A区第7号竪穴住居跡出土遺物観察表（第20図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	—	[3.5]	—	EI	15	良好	青灰	末野窯産か 壺H b 外面平行叩き後力キ目 内面同心円文	93-1
2	須恵器	甕	—	[3.4]	—	I	5	良好	青灰	c 外面格子叩き 内面同心円文後ナデ自然釉	93-1
3	須恵器	甕	—	[4.2]	—	IK	5	良好	暗青灰	P 2 内外面赤彩	93-1
4	土師器	壺	(11.2)	[2.8]	—	AI	40	良好	明赤褐	No 1 有段口縁壺 内外面黒色処理	93-1
5	土師器	壺	(10.2)	[3.9]	—	AI	40	普通	褐灰	a	93-1
6	土師器	ミニチュア土器	—	[2.8]	(2.8)	EI	20	普通	灰褐	No 1	93-1
7	土師器	甕	20.4	[8.3]	—	CHIK	30	良好	黄橙	a・AS-24	93-1
8	土師器	甕	(14.4)	[5.5]	—	CHIK	20	普通	にぶい黄橙	b・SI10 底部ケズリ	
9	土師器	甕	—	[2.8]	(3.8)	CDIK	10	普通	灰黄褐	No 7 滑石 中B斜(2) c II	
10	石製品	臼玉	長1.1 短1.0 厚0.8 孔径0.3 重1.1 残存100								

器の壺である。口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリ調整がみられる北武藏型壺である。4は土師器甕である。胴部に斜め方向にヘラケズリ調整、内面にヘラナデ痕がみられる。胎土に角閃石をやや多く含む。5は土師器の甕である。口縁端部に面を持ちへこむ。胴部外面に縦方向の細かいヘラケズリ、内面には丁寧なヘラナデが施され、器面が滑らかであるが、一部の粘土が剥離している。

土師器の甕と甕はカマド周辺から出土しており、カマドで使用されていたとみられる。時期は須恵器の年代から7世紀末～8世紀初頭に位置付けられる。

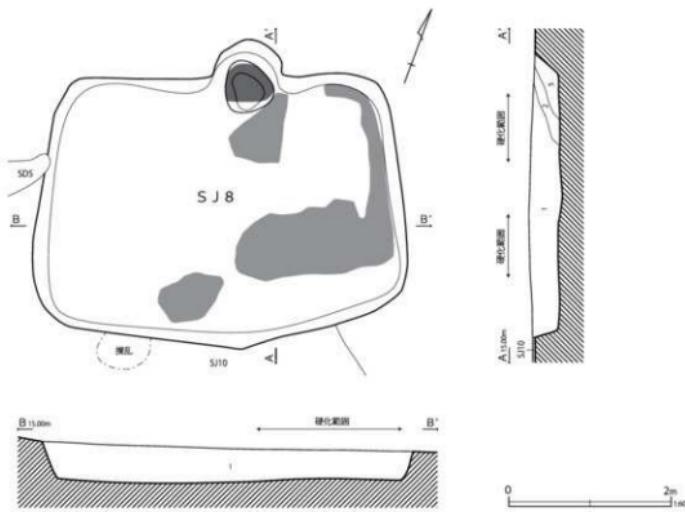
#### A区第10号竪穴住居跡（第24図）

A区の第10号竪穴住居跡はAS-24グリッド、調査区の南部中央付近に位置する。

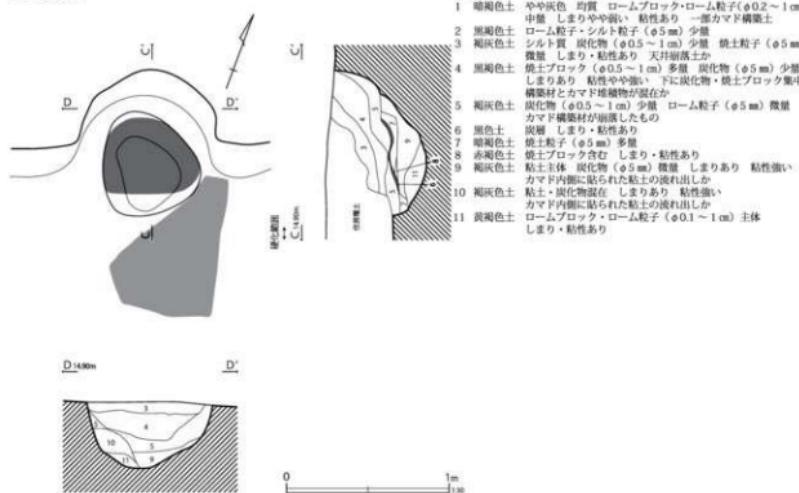
他の遺構との重複関係は、第7・8号竪穴住居跡AS-24P 6と重複し、これらより古い。覆土は黒褐色土を主体とするが残存状態は極めて悪い。竪穴住居跡の北東部分のみが残存しており、大部分が残存していない。平面形は残存範囲から推定すると方形状と思われる。

規模は残存長で長軸長3.10m、短軸長2.70m、深さ0.10mである。主軸方位はN-45°-Wを指す。

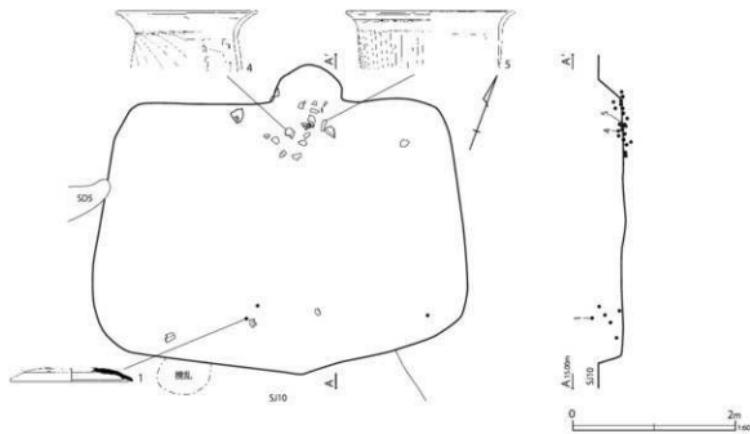
カマドは北辺に袖と想定される粘土ブロックと



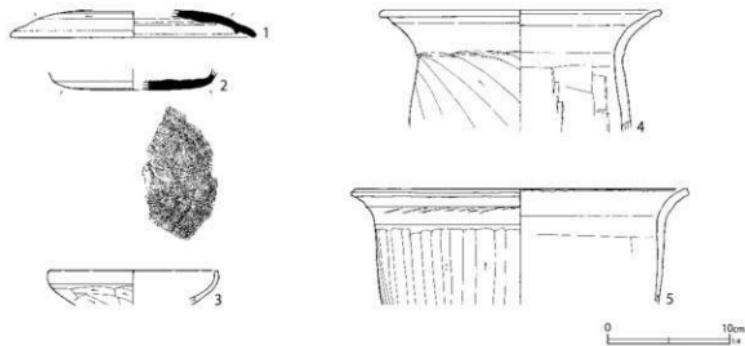
S J 8 カマド



第21図 A区第8号竪穴住居跡



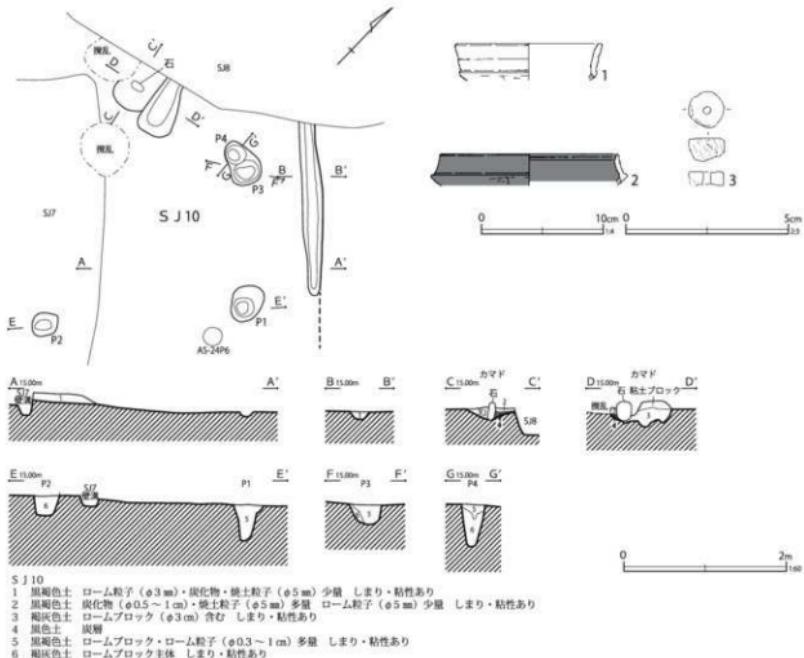
第22図 A区第8号竪穴住居跡出土状況



第23図 A区第8号竪穴住居跡出土遺物

第7表 A区第8号竪穴住居跡出土遺物観察表(第23図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(20.0)	[2.2]	—	K	40	良好	灰白	No.3 かえり蓋 ヘラケズリ	93-2
2	須恵器	环	—	[1.7]	(12.9)	ERK	20	普通	灰	c 末野窯産か 底部ヘラケズリ	93-2
3	土師器	环	(13.5)	[2.8]	—	ACI	20	普通	にぶい橙	c・d 北武藏型环	93-2
4	土師器	甕	(22.6)	[9.0]	—	CI	10	普通	棕	No.19 角閃石や多量	93-2
5	土師器	瓶	(27.0)	[9.4]	—	AHI	10	良好	明褐	No.6 内面粘土剥離	93-2



第24図 A区第10号竪穴住居跡・出土遺物

第8表 A区第10号竪穴住居跡出土遺物観察表（第24図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(11.8)	[2.9]	—	AII	5	普通	にぶい黄褐	カマド	
2	土師器	壺	(14.5)	[2.5]	—	AII	5	良好	黒褐	P 1 身模倣壺 内外面黑色処理	
3	石製品	白玉	長1.1	短1.1	厚0.7	孔径0.2	重0.9	残存50		滑石 中D斜2 c II	

支脚として使用された石が検出されているが、残存状態が極めて悪く規模は不明である。

貯蔵穴は検出されなかった。主柱穴は4基検出されたが、北西側の柱穴は検出されなかった。その一方で北東側の柱は重複している。壁溝は北東コーナーで検出された。幅は0.15m～0.25m、深さは0.02m～0.10mである。他の部分では検出されなかった。

遺物は、土師器と白玉が出土している。第24図1は土師器の壺である。カマドから出土している。2は土師器の身模倣壺である。P 1から出土している。内外面に黒色処理が施されている。1、2ともに破片資料である。3は滑石製の白玉である。側面形は円筒形で孔面の一方が、一部欠損している。側面の研磨は斜め方向に施されている。

孔面には両面とも研磨は施されていない。穿孔は片側穿孔で錐先貫通である。

時期は、土師器の年代から6世紀末頃に位置付けられる。

#### A区第11号竪穴住居跡（第25図）

A区の第11号竪穴住居跡はAT-23・24、AU-23グリッド、調査区中央の南西端付近に位置する。

重複する他遺構との新旧関係は、第13号竪穴住居跡、AT-23P4より新しく、第4号溝跡、第7・12・13号土壤より古い。

覆土はロームブロックを含む黒褐色土を主体とする。平面形は西辺が調査区域外へ至るが、隅丸長方形とみられる。規模は長軸長5.00m、短軸長3.70m以上、深さ0.25mである。長軸方位はN=51°-Wを指す。

カマドと貯蔵穴は検出されなかった。主柱穴は2基検出された。壁溝は東辺から南辺にかけて検出された。幅は0.15m~0.24m、深さは0.08m~0.22mである。

遺物は須恵器、土師器、土製品などが出土している。第26図1は須恵器壺の壺身で、奈文研分類壺Gに該当する。底部回転ヘラケズリ右回転である。産地は末野窯である。

2は土師器の壺で有段口縁壺である。内外面に黒色処理が施されているが、内面の黒色処理は薄くなっている。3は土師器の壺で身模倣壺である。口縁部はやや内傾しつつ立ち上がり、体部にヘラケズリ調整を施す。4は土師器の暗文壺である。内面体部に放射状暗文が、見込み部分に螺旋暗文が施されている。口縁部にヨコナデ、外面部にヘラケズリ調整が施されている。5は土師器の壺である。口縁部にヨコナデ、外面部にヘラケズリ調整が施されている。胎土に角閃石を多く含む。6と7は土師器の壺である。6は口縁部にヨコナデ調整、胸部内面にヘラケズリ調整、内面にヨコナデ調整がみられる。7は底部を含む破片

で、胸部下半から底部にかけてヘラケズリ調整がみられる。

8・9・10は土製品で、8は土玉、9は土錘である。10は棒状の形状を呈するが、器種は不明である。11は有孔砥石である可能性がある。やや軟質である。詳細な石材は不明である。

時期は須恵器の壺Gや暗文壺から7世紀中頃から後半に位置付けられる。

#### A区第13号竪穴住居跡（第27図）

A区の第13号竪穴住居跡はAT・AU-23・24グリッド、調査区の中央のやや南寄り付近に位置する。

重複する他遺構との新旧関係は、第11号竪穴住居跡、第3・11号井戸跡、第4号溝跡より古く、AT-24P16・17、AU-24P18との新旧関係は不明である。

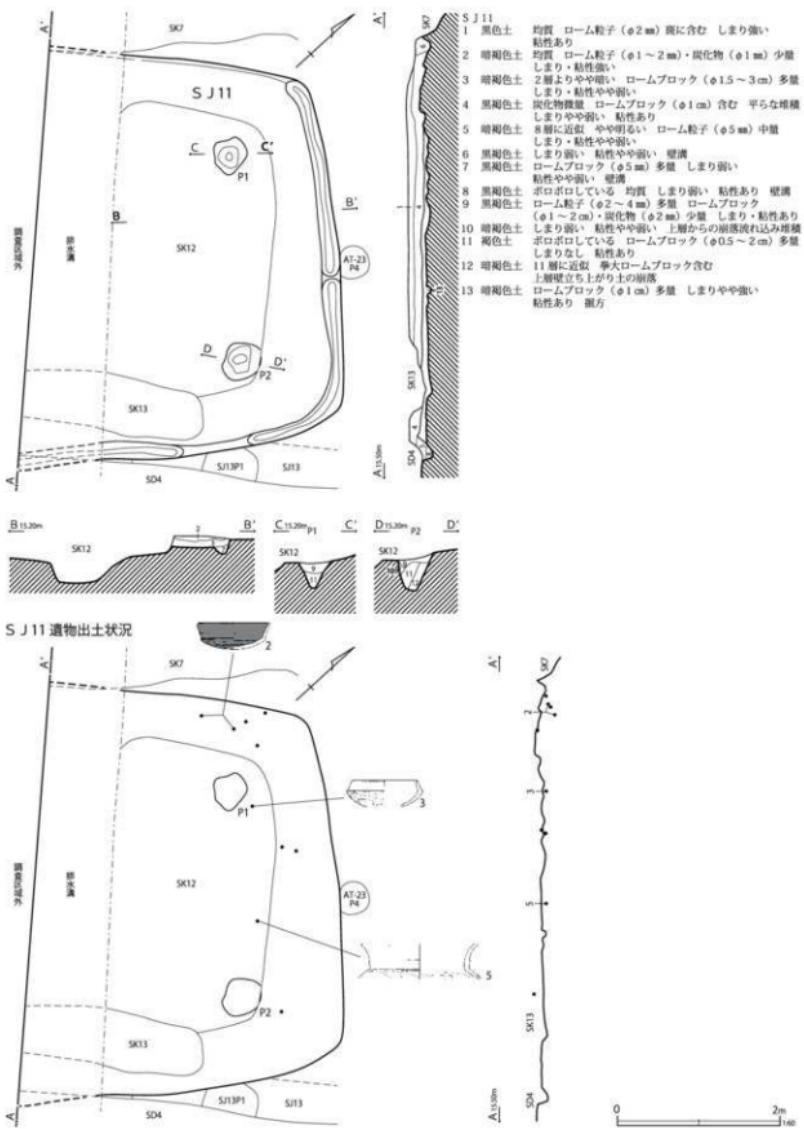
覆土は、大部分が削平されていることから堆積状況は不明瞭である。

平面形は北辺の立ち上がりが削平され不明瞭であるが、カマドの燃焼部が検出されていることから、推定線から大きく外れることはない。プランは東西方向にやや長い隅丸長方形で、規模は長軸長4.96m、短軸長3.87m、深さ0.05mである。主軸方位はN=43°-Wを指す。

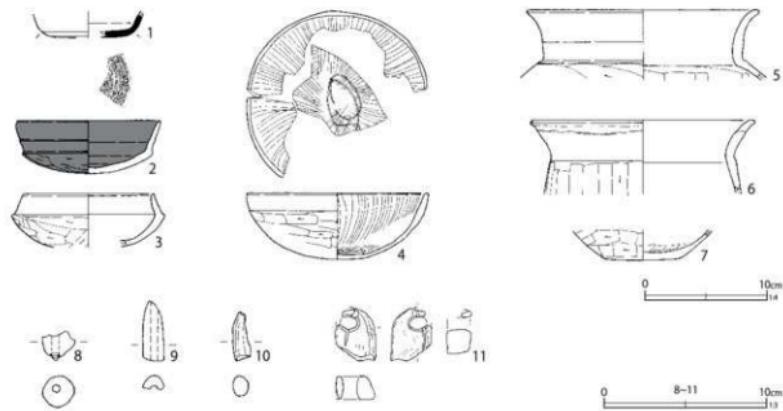
カマドは北西辺に設置されている。残存規模は長さ1.50m、幅0.76mで燃焼部の深さは0.20mである。燃焼部は住居壁からやや外側に位置する。煙道部は検出されなかった。

貯蔵穴は検出されなかった。主柱穴は四方に4基検出された。壁溝は北辺以外で検出された。幅は0.11m~0.32m、深さは0.06m~0.15mである。

遺物は、須恵器、土師器が出土している。第28図1は須恵器壺の胸部である。外面に平行タタキ痕、内面に同心円文アテ具痕がみられる。胎土は灰白色を呈する。2は土師器の蓋模倣壺である。体部にヘラケズリ調整が施されている。P1から出土している。3は土師器の有段口縁壺である。



第25図 A区第11号竪穴住居跡



第26図 A区第11号竪穴住居跡出土遺物

第9表 A区第11号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	—	[2.2]	(6.2)	AIIK	15	普通	灰黄	c 末野窯産 壺G 底部外面ヘラケズり	94-1
2	土師器	壺	(11.5)	4.3	—	CHII	40	普通	黒褐	No.3・4 有段口縁環 内外面黒色処理	94-1
3	土師器	壺	(10.6)	[4.3]	—	ACHI	30	良好	にぶい橙	No.8 身模倣壺	94-1
4	土師器	壺	(14.7)	5.4	—	HIIK	40	普通	橙	b・c 放射状暗文・螺旋暗文	94-1
5	土師器	壺	(18.6)	[5.7]	—	CHI	10	普通	明黄褐	No.2・AT-23 角閃石多量	94-1
6	土師器	甕	(18.0)	[6.0]	—	AIII	10	普通	灰黃褐	a・d	94-1
7	土師器	甕	—	[2.5]	6.1	HI	10	普通	褐灰	a・b 底部ヘラケズリ	94-1
8	土製品	土玉	最大高1.3 幅2.0 重さ3.7 孔径0.5		—	AIII	50	普通	にぶい黄橙	b	
9	土製品	土鍤	長軸長3.7 最大幅1.3 重さ3.8 孔径(0.5)		—	AI	30	普通	にぶい黄橙	a	
10	土製品	不明	長さ[2.9] 幅[1.2] 重さ2.8		—	AI	50	普通	にぶい黄橙	a 棒状製品	
11	石製品	砥石か	長さ[3.2] 幅2.5 厚さ1.5 孔径(1.2) 重さ12.7		—	—	—	—	—	—	

胎土は浅黄橙色を呈する。黒色処理は施されていない。

時期は主柱穴から出土した土師器から7世紀中頃以降には機能していたとみられる。

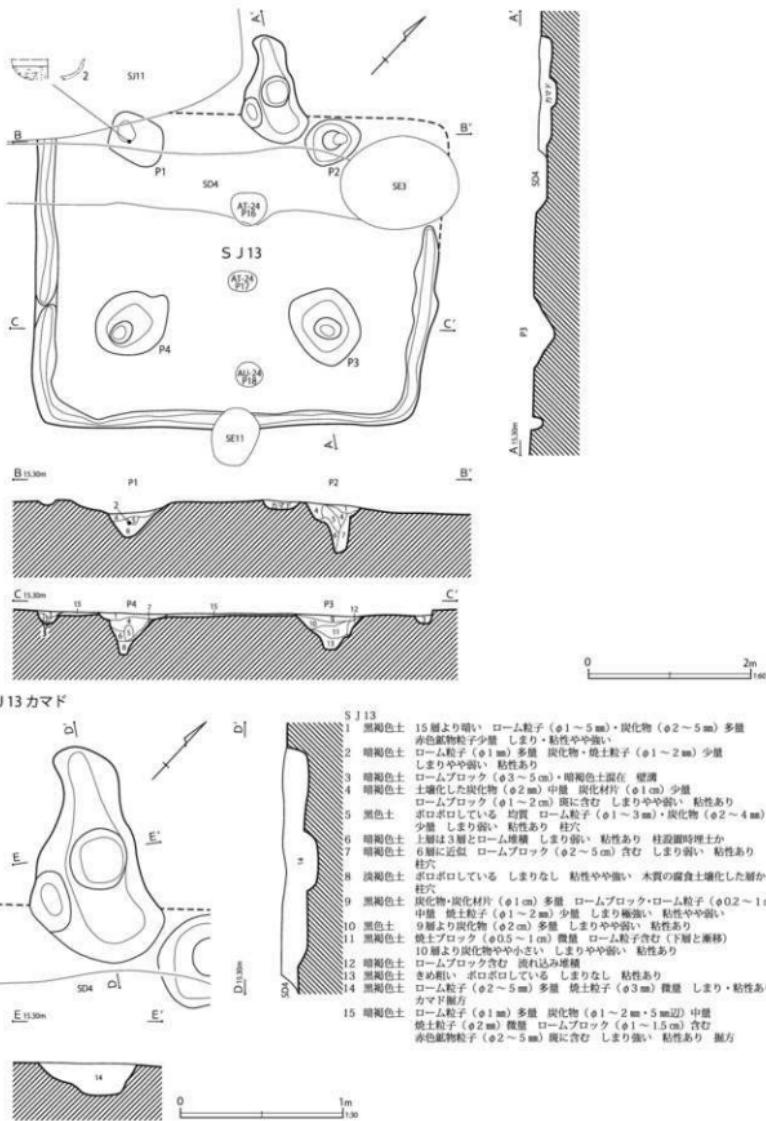
#### A区第15号竪穴住居跡 (第29図)

A区の第15号竪穴住居跡はAU-24グリッド、調査区の南側に位置する。重複する他遺構との新旧関係は、第2・16・21号竪穴住居跡、AU-

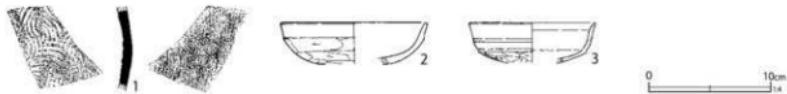
24P14より古い。覆土は暗褐色土と黒褐色土を主体とする堆積土であるが、西側は調査区域外に至り、南側は第2・16号竪穴住居跡によって壊されており平面形は不明である。

規模は残存部分で長軸長4.96m、短軸長3.87m、深さ0.15mである。主軸方位はN-55°-Wを指す。

カマドは調査区南壁において検出されたが、東



第27図 A区第13号竪穴住居跡



第28図 A区第13号竪穴住居跡出土遺物

第10表 A区第13号竪穴住居跡出土遺物観察表（第28図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	—	[6.9]	—	IK	5	普通	灰白	P 1 外面平行叩き 内面同心円文	94-2
2	土師器	壺	(11.8)	[3.3]	—	AK	30	普通	にぶい椎	P 4・No.1 蓋模倣壺	94-2
3	土師器	壺	(10.3)	[3.3]	—	CIK	30	普通	浅黄橙	有段口縁壺	94-2

側は排水溝の掘削によって削平され、西側は調査区分法面に位置するが、安全対策上掘削できなかつたため、平面形は不明である。

貯蔵穴、主柱穴は検出されなかった。壁溝は北東コーナー部分で検出された。幅は0.09m～0.20m、深さは0.04m～0.10mである。

遺物は、第29図1の土師器蓋模倣壺が1点出土している。時期は土師器壺から6世紀代に位置付けられるが、1点のみのため精度に欠ける。しかし第2号竪穴住居跡に壊されていることから8世紀末以前であることは確実である。

#### A区第16号竪穴住居跡（第30図）

A区の第16号竪穴住居跡はAU-24、AV-24・25グリッド、調査区の南端に位置する。重複する他遺構との新旧関係は、第15号竪穴住居跡、第16号井戸跡より新しく、第2号竪穴住居跡、第3号溝跡より古い。

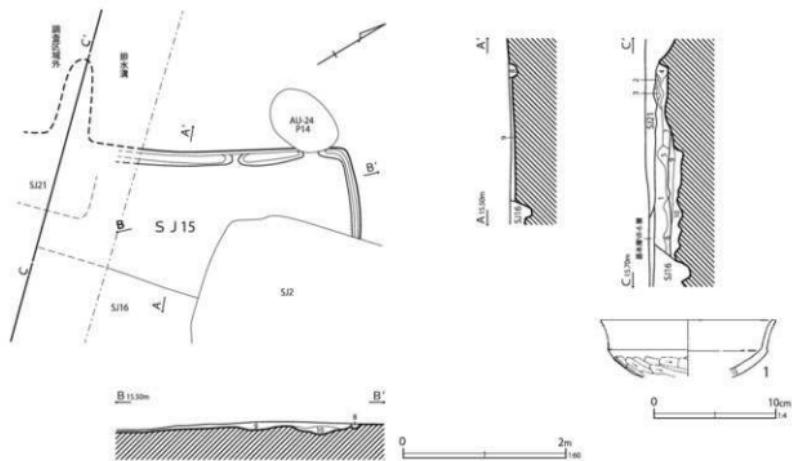
覆土は暗褐色土及び黒褐色土を主体とする。平面形は南西辺が調査区域外へ至るが、隅丸長方形とみられる。残存規模は長軸長6.80m以上、短軸長1.70m、深さ0.17mである。主軸方位はN-46°-Eを指す。

カマドは北東辺の中央やや東寄りの場所に設置されている。規模は長さ1.50m、幅1.56mで燃焼部の深さは0.10mである。燃焼部は住居壁からやや外側に位置する。袖は燃焼部の両脇に土師器の

甕が2点並んで出土したことから、これが、袖の芯材として転用されていた可能性がある。

貯蔵穴はカマドの東隣にて検出された。規模は長軸長0.80m、短軸長0.54m、深さ0.36mである。覆土は焼土粒子、炭化物粒子を多量に含む暗褐色土であり、カマド燃焼部からもたらされた土で埋没したとみられる。主柱穴は北側に2基検出された。いずれの柱穴も深さ約0.50mあり、残存状態が良好であったので、調査区域外にあたる南側の2基も残存している可能性が高い。壁溝は検出された範囲を全周する形で確認された。幅は0.19m～0.28m、深さは0.10m～0.17mである。調査区域外にあたる南側でも残存している可能性が高い。

遺物は土師器が多く出土している。第31図1は土師器の壺である。口唇端部に沈線が廻り窪む。口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリ調整が施される。器面はやや滑らかである。2は身模倣壺である。口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリ調整が施される。胎土がやや砂質で器面がざらつく。3と4は土師器の比企型壺である。いずれも内外面に赤彩が施されている。5～9は土師器の甕である。いずれも口縁部が残存しており、胴部には縦方向のヘラケズリ調整が施されている。5と6は口唇端部に面を持つ。9は小型の甕で口唇部が肥厚する。6と7はカマドの袖材として転用され



- SJ15  
 1 單褐色土 塗化物（ $\phi 2\text{ mm}$ ）少量 白色粒子（ $\phi 1\text{ mm}$ ）微量  
 ローム粒子（ $\phi 1\text{ mm}$ ）含む しまりやや弱い、粘性あり 遺物含む  
 2 黑褐色土 4層に近似 均質 ローム粒子・塗化物（ $\phi 2\text{ mm}$ ）少量  
 しまり・粘性やや弱い カマド煙道部覆土  
 3 黑褐色土 塗化物多量 黒褐色土ブロック含む しまりやや強め、粘性強い 9 黑褐色土  
 カマド下部煙道部覆土  
 4 單褐色土 2層に近似 均質 塗化物（ $\phi 5\text{ mm}$ ）・粘土含む  
 しまり・粘性やや弱い カマド煙道部覆土  
 5 黑褐色土 塗化物（ $\phi 0.5\sim 1\text{ cm}$ ）・ローム粒子含む しまりやや弱い  
 黏土・しまり極弱い カマド煙道部覆土  
 6 黑褐色土 塗化物（ $\phi 0.5\sim 1\text{ cm}$ ）・ローム粒子含む しまりやや弱い  
 黏性弱い 焼口部覆土

- 7 單褐色土 10層より明るい 塗化物（ $\phi 0.2\sim 1\text{ cm}$ ）・焼土粒子（ $\phi 2\sim 4\text{ mm}$ ）多量  
 ロームブロック（ $\phi 3\sim 5\text{ cm}$ ）・カマド構築土粒子含む  
 混入物多く瓦れた土 カマド煙道部覆土  
 8 黑褐色土 均質  
 ローム粒子（ $\phi 1\sim 5\text{ mm}$ ）多量 塗化物（ $\phi 1\sim 2\text{ mm}$ ）中量  
 塗化物（ $\phi 5\text{ mm}$ ）・焼土粒子（ $\phi 2\text{ mm}$ ）少量 しまり弱い、粘性あり  
 遺物（ $\phi 1\text{ mm}$ ）含む 覆方  
 9 ローム土 ロームブロック（ $\phi 3\sim 5\text{ cm}$ ）多量 塗化物（ $\phi 1\text{ cm}$ ）斑に含む  
 しまり弱い、粘性あり 覆方  
 10 單褐色土

第29図 A区第15号竪穴住居跡・出土遺物

第11表 A区第15号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(14.3)	[4.6]	—	E1	20	良好	橙	南壁内 盖模倣壺	

ていた可能性がある。

時期は、土師器から6世紀後半に位置付けられる。

#### A区第17号竪穴住居跡 (第32図)

A区の第17号竪穴住居跡はAR・AS-23グリッド、調査区の西側に位置する。

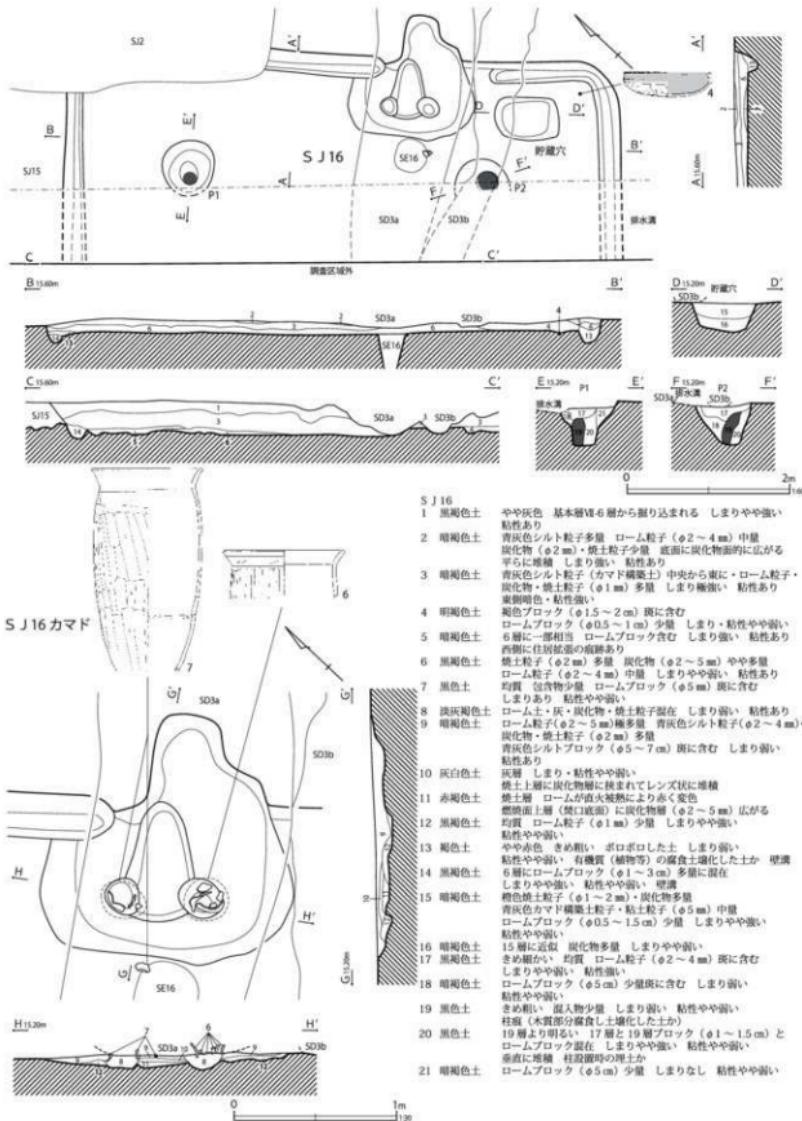
重複する他遺構との新旧関係は、第1号鍛冶関連遺構の炉跡と重複しこれより古い。

覆土は暗褐色土及び黒褐色土を主体とする。東辺が残存していないが、平面形は隅丸長方形とみられる。規模は長軸3.85m、短軸長3.50m以

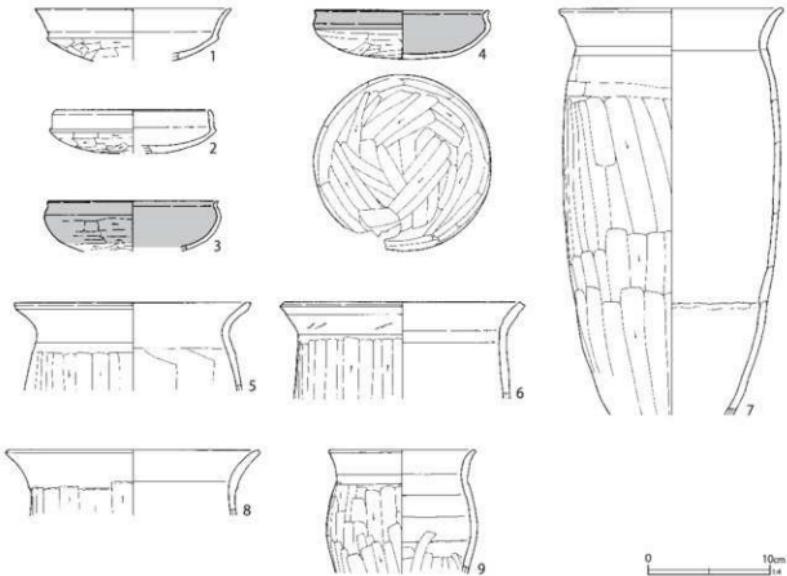
上、深さ0.38mである。長軸方位はN-35°-Wを指す。

カマド、主柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は南東辺及び南西辺で検出された。幅は0.30m~0.39m、深さは0.30m~0.39mである。北西辺において覆土が残っていたが、壁溝が検出されなかったことから、この部分では当初から壁溝は存在していなかった可能性がある。

遺物は、須恵器と土師器が出土している。第33図1と2は須恵器甕の胴部片である。いずれも外面に平行タタキ後力キ目、内面に同心円文アテ



第30図 A区第16号竪穴住居跡



第31図 A区第16号竪穴住居跡出土遺物

第12表 A区第16号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第31図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(16.0)	[4.2]	—	HII	20	良好	黄橙	蓋模倣坏	95-1
2	土師器	壺	(12.7)	[3.5]	—	ACGH	30	普通	にぶい橙	AU-24 身模倣坏 角閃石や多量	95-1
3	土師器	壺	(13.8)	[4.1]	—	IHK	10	良好	赤褐	a 比企型壺 内外面赤彩	95-1
4	土師器	鉢	14.1	3.9	—	HII	95	良好	赤褐	No.5 比企型壺 内外面赤彩	95-1
5	土師器	甕	(19.3)	[7.2]	—	AEI	10	普通	にぶい赤褐	SJ14b	
6	土師器	甕	19.2	[7.9]	—	AHI	20	普通	にぶい赤褐	No.4・SJ14	
7	土師器	甕	18.0	[33.1]	—	GI	50	普通	にぶい橙	No.3・SJ14・SJ14b・SJ14Na 1・SD3	95-1
8	土師器	甕	(20.4)	[5.3]	—	AEGI	10	普通	橙	SJ14・SJ14b 砂粒子多量	
9	土師器	甕	(11.9)	[10.1]	—	GHI	20	普通	にぶい赤褐	SJ14b	

具痕がみられる。同一個体の可能性がある。3は土師器の壺で、浅黄橙色を呈する北武藏型壺である。4は土師器の鉢である。胸部に縦方向のヘラケズリ調整がみられる。甕の可能性もある。時期は北武藏型壺から7世紀末頃と想定される。

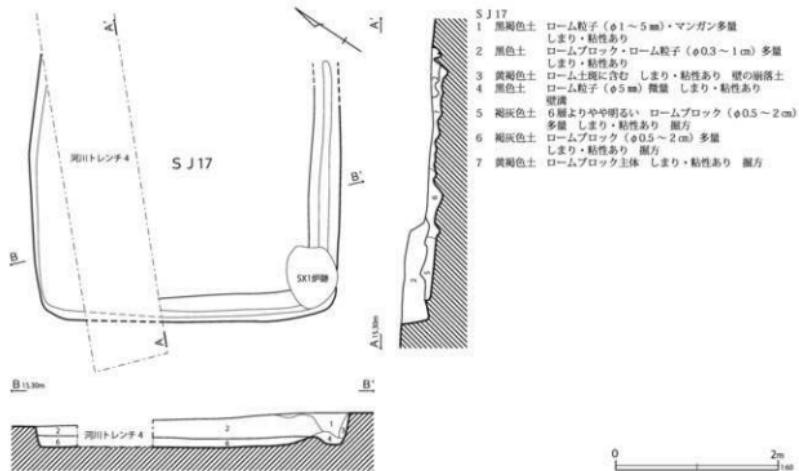
#### A区第18号竪穴住居跡 (第34図)

A区の第18号竪穴住居跡はAS-23グリッド、

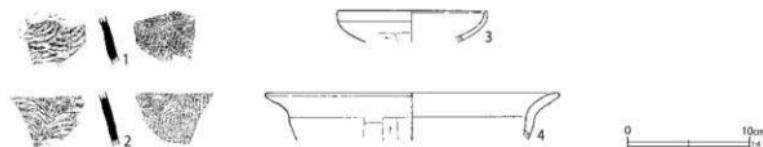
調査区の西側に位置する。

重複する他遺構との新旧関係は、第1号鍛冶関連遺構と重複しこれより古い。

覆土は部分的に黒色土が堆積しているが、大部分が削平されている。平面形はやや歪んだ隅丸長方形とみられる。規模は長軸長3.65m、短軸長2.97m、深さ0.15mである。主軸方位はN-36°



第32図 A区第17号竪穴住居跡



第33図 A区第17号竪穴住居跡出土遺物

第13表 A区第17号竪穴住居跡出土遺物観察表（第33図）

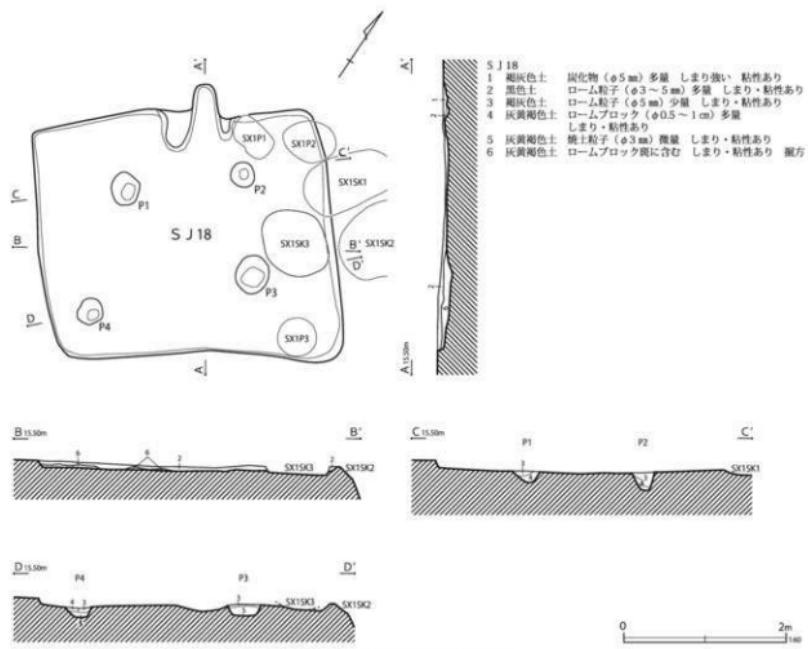
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	国版
1	須恵器	甕	—	[3.9]	—	I	5	良好	灰	2と同一個体か 外面平行叩き後カキ目	95-2
2	須恵器	甕	—	[4.4]	—	I	5	良好	灰	1と同一個体か 外面平行叩き後カキ目 内面同心円文	95-2
3	土器器	壺	(12.2)	[2.5]	—	CI	5	良好	浅黄橙	北武藏型壺	95-2
4	土器器	鉢	(23.8)	[3.9]	—	ACHII	5	普通	にぶい赤褐		95-2

—Wを指す。

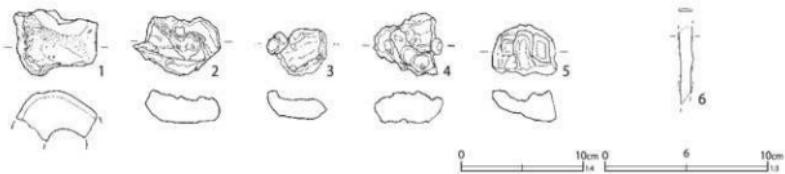
カマドは北西辺の中央に設置されている。規模は長さ0.80m、幅0.95mで燃焼部の深さは0.06mであるが、残存状態が悪い。袖は地山削り出しであった可能性がある。主柱穴は4基検出されたが、P 4のみやや外側にずれる。貯蔵穴、壁溝は

検出されなかった。

遺物は、羽口、鉄滓、鉄製品が出土している。土器類は出土しなかった。第35図1は羽口、2から5は楕形鍛治滓である。6は鉄製品である。細長い板状の製品であるが、器種は不明である。これらの遺物は重複している第1号鍛冶関連遺構か



第34図 A区第18号豎穴住居跡



第35図 A区第18号豎穴住居跡出土遺物

第14表 A区第18号豎穴住居跡出土遺物観察表（第35図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土製品	羽口	長さ4.6	幅6.5 厚さ3.1 孔径3.5 外径(7.2)	重さ93.7	HK	30	普通	灰	c	
2	鉄滓	楕円鍛治滓	長さ4.4	幅7.1	厚さ2.1	重さ87.9	残存50			d	
3	鉄滓	楕円鍛治滓	長さ3.8	幅4.8	厚さ1.5	重さ40.1	残存80				
4	鉄滓	楕円鍛治滓	長さ4.9	幅5.5	厚さ2.4	重さ65.1	残存70				
5	鉄滓	楕円鍛治滓	長さ3.5	幅5.2	厚さ2.5	重さ60.9	残存30				
6	鉄製品	不明	長さ[4.8]	幅0.8	厚さ0.15	重さ2.5					

ら混入したものとみられる。時期は第1号鍛冶関連遺構より古い時期となる点から古墳時代後期と推定される。

#### A区第19号竪穴住居跡（第36・37図）

A区の第19号竪穴住居跡はAR・AS-22グリッド、調査区の西側に位置する。

重複する他遺構との新旧関係は、第20号竪穴住居跡と重複しこれより新しい。

覆土の残存状態は良く、黒褐色土を主体とする。平面形は東西方向にやや長い隅丸長方形で、規模は長軸長4.14m、短軸長3.50m、深さ0.50mである。主軸方位はN-17°-Wを指す。

カマドは北辺の中央やや東寄りに設置されている。規模は長さ1.20m、幅1.00mで燃焼部の深さは0.30mである。燃焼部は住居壁からやや外側に位置する。袖は燃焼部の左側に土師器の甕が逆位で置かれていることから、これが袖の芯材として転用されていたとみられる。右袖側では、左側の土師器甕と対になる場所に浅い窪みがあり、土器などが置かれていた痕跡の可能性がある。

主柱穴は検出されなかったが、南辺際の中央付近にピットが1基検出されており、入口施設に関する可能性が想定される。貯蔵穴は検出されなかつた。壁溝は全周して検出されている。幅は0.22m~0.45m、深さは0.06m~0.20mである。

遺物は、須恵器、土師器が出土している。第38図1は須恵器の蓋である。疑宝珠のツマミを持つ。産地は末野窯とみられる。

2は須恵器の甕である。底部のみが残存している。底部回転ヘラケズリ調整がみられる。産地は末野窯とみられる。

3と4は湖西窯産の須恵器で3は甕である。底部回転ヘラ切り後外周ヘラケズリ調整がみられる。成形時のロクロ回転方向は右回転、底部の回転ヘラケズリは左回転となる。4は高台付甕である。底部の中心部は残存していないが、底部が高台よりも張り出すタイプである。5から7は土師

器の甕で北武藏型甕に位置付けられる。8は比企型甕である。内外面に赤彩が施されている。9と10は土師器の甕である。10は燃焼部の左側に逆位で置かれていたものになる。

時期は北武藏型甕の大・中・小の三種、比企型甕、末野窯産の疑宝珠のツマミを持つ蓋、湖西窯産の甕、高台付甕が共伴していることから、7世紀末から8世紀初頭に位置付けられる。

#### A区第20号竪穴住居跡（第40図）

A区の第20号竪穴住居跡はAR・AS-22・23グリッド、調査区の西側に位置する。

他の遺構との重複関係は、第19号竪穴住居跡、第6号溝跡、第16号土壙、AR22-P1・2と重複し、これらに壊されている。

覆土の残存状態はあまり良くない。北側において黒色土及び黒褐色土を主体とする堆積土が確認されている。南側へ至ると残存状態が悪く、掘方のみが確認されている。北西コーナー部分は調査区域外に至り、南西コーナー部分は第19号竪穴住居跡によって壊されているため、詳細な平面形は不明であるが、隅丸長方形になると想定される。残存規模は長軸長4.50m、短軸長4.40m、深さ0.40mである。長軸方位はN-49°-Wを指す。

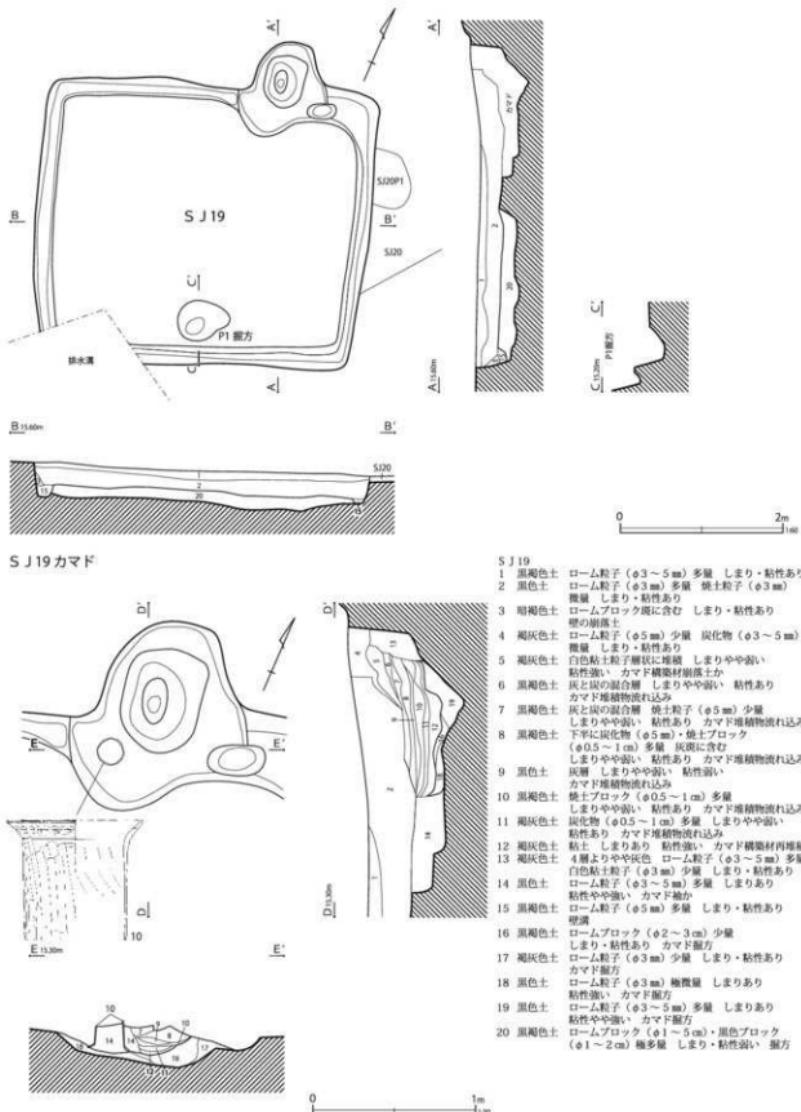
カマド、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。主柱穴は3基検出された。この3基は均等に並んでいることから、北西側の柱穴も調査区域外に現存している可能性が高い。

遺物は、須恵器と土師器が出土している。第41図1と2は須恵器甕の破片である。1は口縁部片で2は胴部片である。外面に平行タタキ、内面に同心円文アテ具痕がみられる。

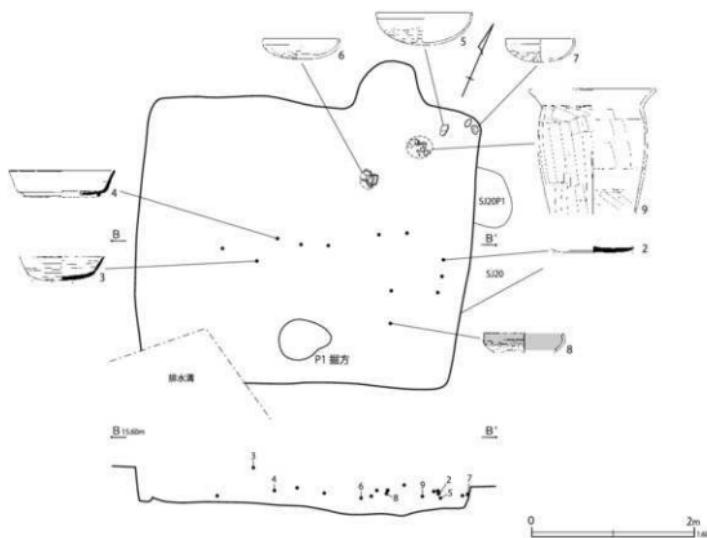
3~5は土師器の甕である。

3は北武藏型甕、4は有段口縁甕、5は暗窓甕である。6は土師器の甕で胎土に角閃石が多く含まれる。7は高窓で内外面に赤彩が施されている。

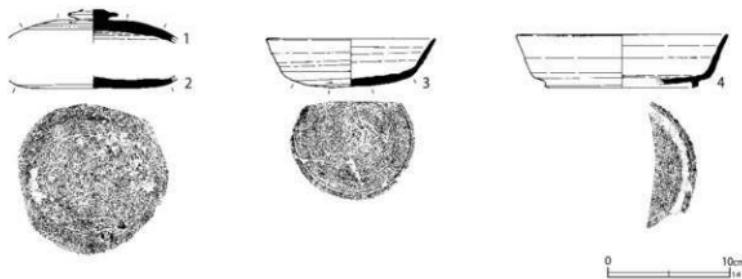
時期は、7世紀後半頃に位置付けられる。



第36図 A区第19号竪穴住居跡



第37図 A区第19号竪穴住跡遺物出土状況



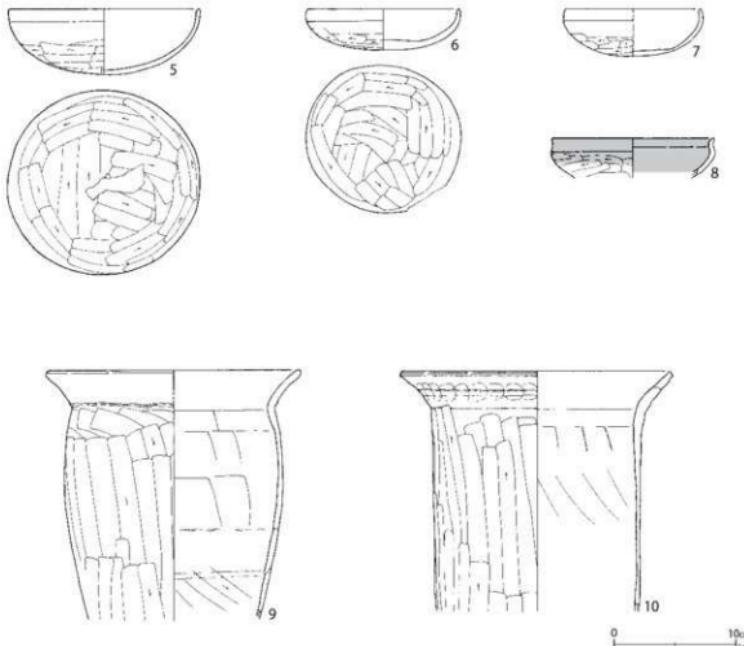
第38図 A区第19号竪穴住跡出土遺物（1）

#### A区第21・22号竪穴住居跡（第42図）

A区の第21・22号竪穴住居跡はAU-23・24グリッド、調査区の南西側に位置する。

いずれの竪穴住居跡も大部分が調査区域外に至るため、平面形は不明である。調査区南壁におい

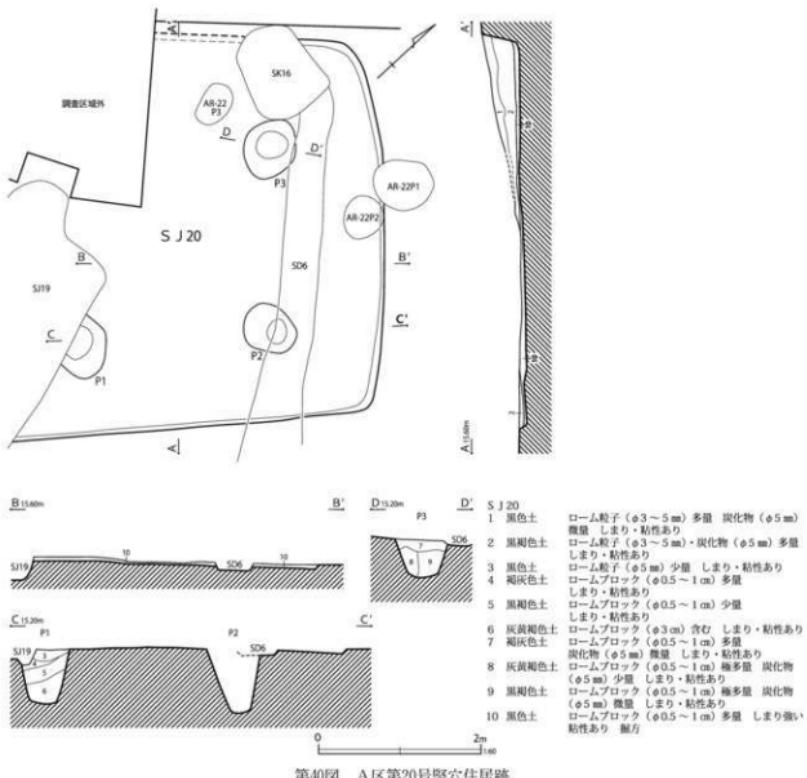
て検出された。重複関係も調査区南壁において確認した。それによると、第21号竪穴住居跡は第15・22号竪穴住居跡と重複し、これより新しい。また、第22号竪穴住居跡は第21号竪穴住居跡、第4号溝跡と重複し、これらより古い。第21号竪穴



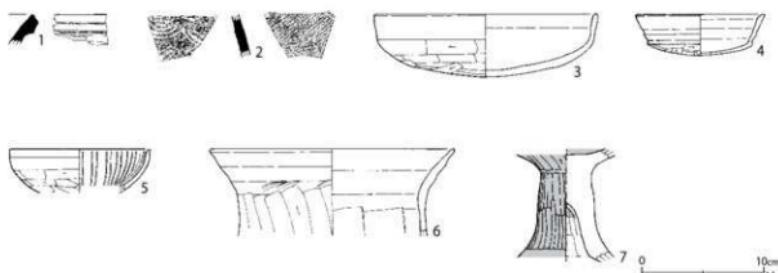
第39図 A区第19号竪穴住居跡出土遺物（2）

第15表 A区第19号竪穴住居跡出土遺物観察表（第38・39図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	施成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	—	[2.9]	—	BEIK	30	良好	灰白	AS-22 末野窯産か ヘラケズリ 疑宝 珠つまみ	96-1
2	須恵器	环	—	[1.1]	12.6	ABEK	50	普通	灰白	No.9 末野窯産か 底部回転ヘラケズリ	96-1
3	須恵器	环	13.8	3.9	9.5	I	70	良好	灰白	No.2 AS-22 湖西窯産 底部ヘラ切り 外周ヘラケズリ	96-1
4	須恵器	高台付环	(17.2)	4.3	(11.8)	IK	40	良好	灰白	No.3 湖西窯産	96-1
5	土師器	环	15.5	5.3	—	CI	90	良好	にぶい橙	b・No.15・AS-22 北武藏型环	96-1
6	土師器	环	12.3	3.3	—	AI	90	良好	橙	No.18 北武藏型环	96-1
7	土師器	环	(11.0)	3.8	—	ACI	70	普通	にぶい橙	No.13 北武藏型环	96-1
8	土師器	环	(13.2)	[3.2]	—	HI	20	良好	赤	比企型环 内外面赤彩	
9	土師器	甕	(20.4)	[20.3]	—	CI	20	良好	にぶい赤褐	カマド・No.16 「く」の字状口縁甕 角閃石 多量	
10	土師器	甕	21.8	[19.5]	—	EGHI	70	普通	にぶい橙	カマド・No.19	96-1



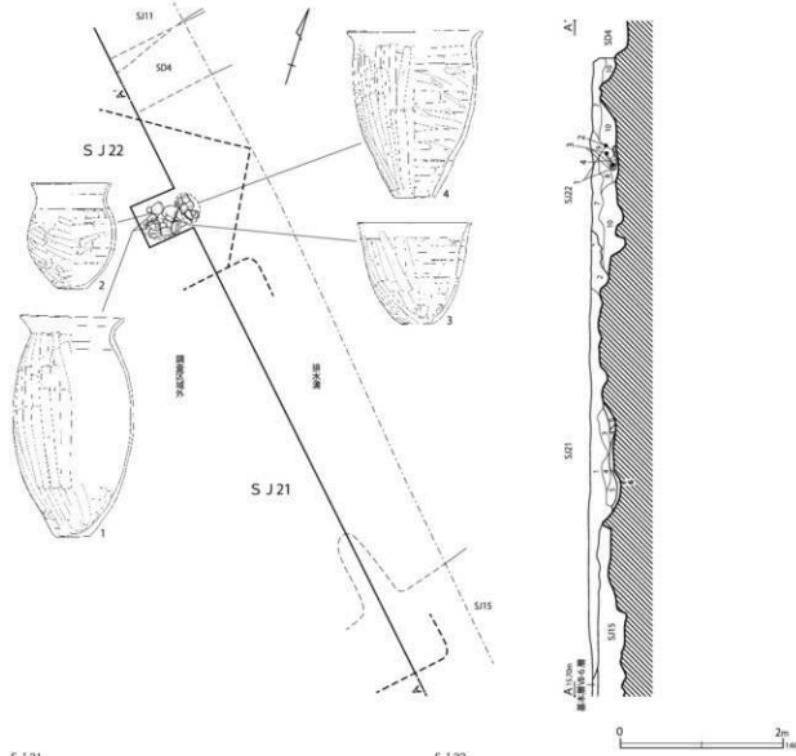
第40図 A区第20号竪穴住居跡



第41図 A区第20号竪穴住居跡出土遺物

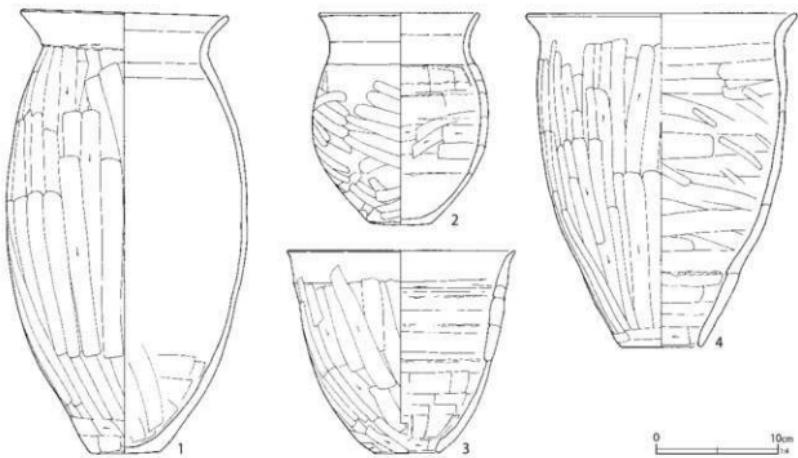
第16表 A区第20号竪穴住居跡出土遺物観察表（第41図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	回版
1	須恵器	甕	—	[2.5]	—	IK	5	良好	黄灰	外腹平行叩き 内面同心円文	96-2
2	須恵器	甕	—	[3.5]	—	I	5	良好	暗灰黄	—	96-2
3	土師器	壺	(17.9)	5.3	—	CIK	30	普通	にぶい黄柾	北式壺型壺	96-2
4	土師器	壺	(10.4)	3.3	—	ACKIK	30	普通	明赤褐	有段口縁壺	96-2
5	土師器	壺	(11.5)	[3.6]	—	CHI	30	良好	橙	暗文壺	96-2
6	土師器	甕	(20.0)	[7.1]	—	CIK	10	普通	にぶい黄柾	角閃石多量 赤褐	96-2
7	土師器	高壺	—	[9.1]	—	ACK	30	普通	赤褐	内外面赤彩	96-2



- S J 21  
 1 始褐色土 均質、温入物少量 しまり・粘性あり  
 2 始褐色土 1層よりやや堅い しまり弱い、粘性やや弱い、遺物含む  
 3 柿色土 塗土主体 カマド構築粘土被熱、しまりやや弱い、粘性あり  
 燃焼部分付近の堆积土か、炭化物土壌化し面に広がる  
 4 青灰褐色土 塗土主体 カマド粘性土、部分的に暗褐色粒子含む しまりあり  
 粘性強い  
 5 灰褐色土 灰褐色土 (φ2~4 cm) 多量、溶解したカマド構築粘土混入  
 しまり・粘性強い  
 6 黒色土 ロームブロック含む、5層との境に黒色炭 (φ5 mm) 層帯状にあり  
 しまり弱い、粘性やや弱い、カマド擦方
- S J 22  
 7 黒色土 均質、しまり強い、粘性あり、遺物含む  
 8 黒色土 7層より暗い、しまり弱い  
 9 黒褐色土 炭化物 (φ2 cm) 含む、しまり・粘性やや弱い  
 10 黑色土 灰褐色シルトブロック (φ0.5~1 cm) 深量、しまりやや弱い、粘性あり

第42図 A区第21・22号竪穴住居跡



第43図 A区第22号竪穴住居跡出土遺物

第17表 A区第22号竪穴住居跡出土遺物観察表（第43図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	16.4	35.8	5.6	CI	80	普通	にぶい黄褐	No.3・4	97-1
2	土師器	甕	(12.8)	17.1	5.0	C	90	良好	橙	No.3 角閃石多量	97-1
3	土師器	瓶	18.4	16.4	5.2	HHK	100	良好	橙	No.2・4	97-1
4	土師器	瓶	(22.0)	27.1	6.5	AGHI	70	普通	にぶい黄褐	No.1・AU-23	97-1

住居跡は調査区南壁においてカマドも検出されているが、詳細は不明である。

遺物は、第22号竪穴住居跡から土師器の甕、瓶がまとまって出土している。部分的な検出であるため、詳細は不明であるが、ここから出土した土器は残存状態が良いことから、貯蔵穴のような土壙にまとめて入れられていたものか、カマド付近で使用されていた可能性が想定される。甕と瓶のみで壺類などは出土していないことから、煮炊きに使用する道具をまとめて置いていたものである可能性がある。

第43図1は土師器の甕である。胴部に縦方向のヘラケズリ調整、内面にナデ調整がみられる。2

は土師器の甕でやや小型である。外面にヘラケズリ後ナデ調整、内面上半にヘラナデ、下半にヘラケズリ調整がみられる。胎土に角閃石を多く含む。

3と4は土師器の瓶である。いずれも胴部外面に縦方向のヘラケズリ調整、内面にヘラナデ調整がみられる。また、3の瓶の胴部内面上半には粘土紐による輪積痕が明瞭に残っている。

時期は、これらの土師器から6世紀後半頃に位置付けられる。

なお、第21号竪穴住居跡から遺物は出土しなかつたが、重複する第22号竪穴住居跡よりも新しかったため、時期は6世紀後半以降に位置付けられる。

## (2) 井戸跡

A区において古墳時代・飛鳥時代に位置付けられる井戸跡は13基検出された。形状は、上端が0.40m~0.70m程度の小型のタイプ、1.00m以上のタイプに分かれる。

また、遺構検出面から1.2mほどで底面に到達するタイプと、そこからさらに下層に至り、安全対策のため掘削できなかったタイプがある。浅いタイプの井戸跡は溜井などに用いられたなど、形状の違いが、井戸跡の用途によって異なっていた可能性が想定される。

検出された井戸跡は全て素掘りである。木材片なども検出されなかつたため、木枠などがあつた可能性も低い。

第18表に検出グリッド、平面形、規模、深さを示した。以下には、それぞれの井戸跡の特徴、重複関係、出土遺物について記す。

### A区第1号井戸跡（第44図）

漏斗状の断面形状を呈する。底面は深さ1.00mで検出されている。底面に土器片を多量に含む砂利層が堆積するが、いずれの土器片も細片で図示できなかつたが、時期は土器片から古墳時代に位置付けられると思われる。

### A区第2号井戸跡（第44図）

上端は1.34mあるが、深さ0.82mより下で幅が狭くなり、底面は検出できなかつた。

遺物は須恵器の蓋、土師器の高壺、壺が出土し、時期は7世紀代に位置付けられる。

### A区第5号井戸跡（第44図）

上端が1.34mで下端が狭い。底面は深さ1.32mで検出されている。

遺物は細片だが、北武藏型壺の口縁部が出土し、時期は7世紀代以降とみられる。

### A区第7号井戸跡（第44図）

上端が0.68mの小型のタイプでほぼ垂直に掘削されている。深さ1.15mでは底面には到達していない。第3号溝跡に壊されている。

遺物は放射状暗文及び螺旋暗文をもつ土師器暗文壺と細片だが土師器の蓋模倣壺の口縁部、甕類の口縁部が出土している。時期は7世紀中頃以降とみられる。

### A区第9号井戸跡（第44図）

不整梢円形の形状を呈する。底面は深さ1.28mで検出されている。遺物は土師器の甕が底面から出土している。残存率が90%と良好であった。時期は6世紀後半に位置付けられる。

### A区第10号井戸跡（第44図）

上端は1.00mあり、底面は深さ0.66mで検出されている。AU-24P13と重複し、これより新しい。

遺物は土師器片が出土しており、時期は6世紀代以降とみられる。

### A区第13号井戸跡（第44図）

不整梢円形の形状を呈する。底面は深さ1.50mで検出されている。

遺物は木葉痕が残る土師器甕の底部と図示できる大きさではないが、土師器の蓋模倣壺口縁部、甕類の細片が出土している。時期は6世紀代以降とみられる。

### A区第14号井戸跡（第44図）

上端が0.56mの小型のタイプでほぼ垂直に掘削されている。底面は深さ1.16mで検出されている。

遺物は図示できないが土師器の細片が出土している。時期は6世紀代以降とみられる。

### A区第15号井戸跡（第45図）

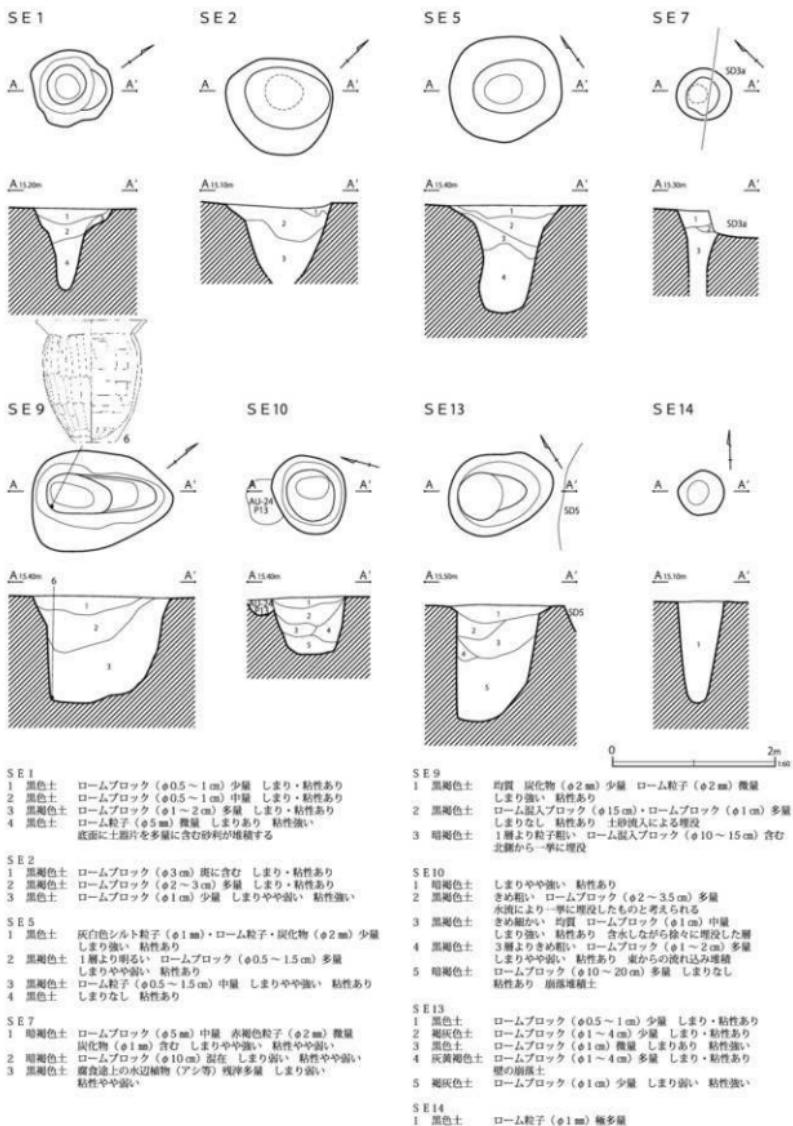
上端が1.24mでほぼ垂直に掘削されている。底面は深さ1.17mで検出されている。

遺物は土師器の鉢が出土しており、時期は6世紀代以降とみられる。

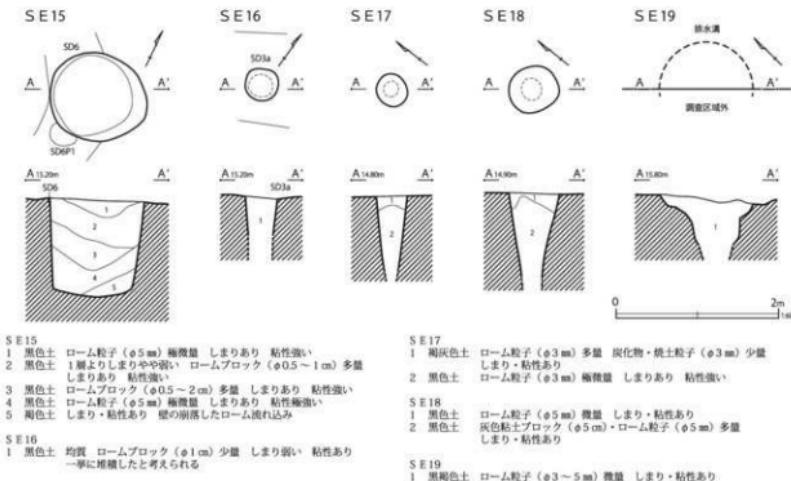
### A区第16号井戸跡（第45図）

上端が0.40mの小型のタイプでほぼ垂直に掘削されている。深さ0.80mでは底面には到達していない。第3号溝跡と重複し、これより古い。

遺物は出土していない。第3号溝跡より古いこ



第44図 A区井戸跡 (1)



第45図 A区井戸跡（2）

第18表 A区井戸跡一覧表

遺構名	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複遺構	遺構名	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複遺構
1	AT-24	円形	上0.98 F0.30	上0.96	1.00		13	AS-23	不整形 円形	上1.16 下0.53	上0.96 下0.44	1.50	
2	AT-24	楕円形	上1.34 F0.54	上1.18 下0.44	[0.82]		14	AR-23	不整形	上0.56 下0.29	上0.52 下0.26	1.16	
5	AU-24	楕円形	上1.34 F0.44	上1.30 下0.40	1.32		15	AS-23	楕円形	上1.24 下1.00	上1.06	1.17	SD6
7	AU-25	不整円形	上0.68 F0.22	上0.63 下0.20	[1.15]	SD3a	16	AU-24	円形	上0.40 下0.30	上0.38 下0.18	[0.80]	SD3a
9	AU-24	不整円形	上1.84 F0.54	上1.20 下0.30	1.28		17	AS-25	円形	上0.40 下0.20	上0.38 下0.18	[0.90]	
10	AU-24	不整形	上1.00 F0.46	上0.86 下0.38	0.66	AU-24P13	18	AR-23	円形	上0.60 下0.28	上0.55 下0.25	[1.20]	
12		欠番					19	AS-AT-22	不明	—	—	[0.70]	

とから時期は7世紀前半以前とみられる。

#### A区第17号井戸跡（第45図）

上端が0.40mの小型のタイプで下層は幅がやや狭くなる。深さ0.90mでは、底面には到達していない。

遺物は土師器の身模倣壺が出土している。時期は6世紀代以降とみられる。

#### A区第18号井戸跡（第45図）

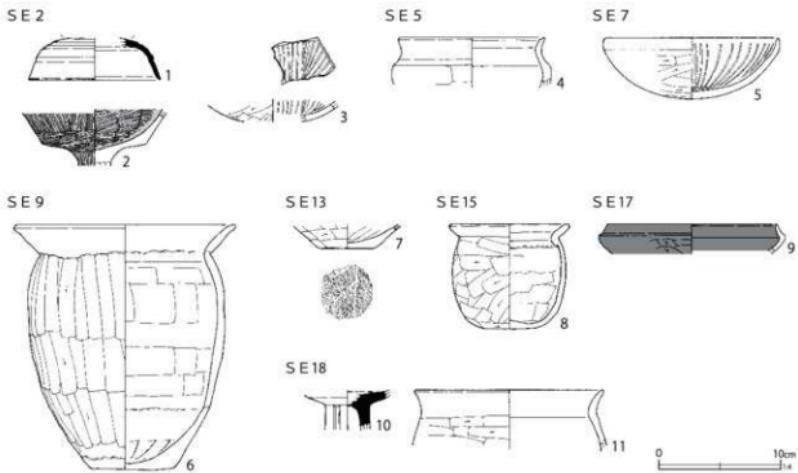
上端が0.60mの小型のタイプで下層は幅がやや

狭くなる。深さ1.20mでは、底面には到達していない。

遺物は須恵器の高壺と土師器の甕が出土している。時期は6世紀代以降とみられる。

#### A区第19号井戸跡（第45図）

調査区南壁において検出された。平面形は不明である。調査区域外に遺構の残り部分が残存している。深さ0.70mで底面には到達していない。遺物は出土していない。時期は不明である。



第46図 A区井戸跡出土遺物

第19表 A区井戸跡出土遺物観察表 (第46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(10.6)	[3.4]	—	I	10	良好	灰	SK 4	
2	土師器	高壺	—	[4.6]	—	CHI	30	普通	にぶい赤褐	SK 4 内外面赤彩	
3	土師器	壺	—	[2.0]	—	I	5	普通	灰褐色	SE 2 晴文壺 内面布目压痕	97-2
4	土師器	甕	(11.8)	[4.1]	—	CEHI	20	良好	明赤褐	SE 5	
5	土師器	壺	(14.0)	5.0	—	EIK	30	良好	橙	SK 3・4 放射状暗文・螺旋暗文	97-2
6	土師器	甕	(18.0)	19.9	6.8	ACGHI	90	普通	褐	SE 9 No.1 外面煤	97-2
7	土師器	甕	—	[1.9]	4.4	CGI	20	普通	黒褐	SE13 木葉瓶	
8	土師器	鉢	(9.6)	8.5	4.3	AII	80	普通	灰褐色	SE15	97-2
9	土師器	壺	(13.8)	[2.4]	—	ACI	5	普通	黒褐	SE17 身横做壺 内外面黒色処理	
10	須恵器	高壺	—	[3.2]	—	EJ	10	良好	灰	SE18 末野窯産 三方透かし	
11	土師器	甕	(15.4)	[4.8]	—	AII	10	良好	にぶい黄橙	SE18	

### (3) 溝跡

A区において古墳時代・飛鳥時代に位置付けられる溝跡は4条検出された。

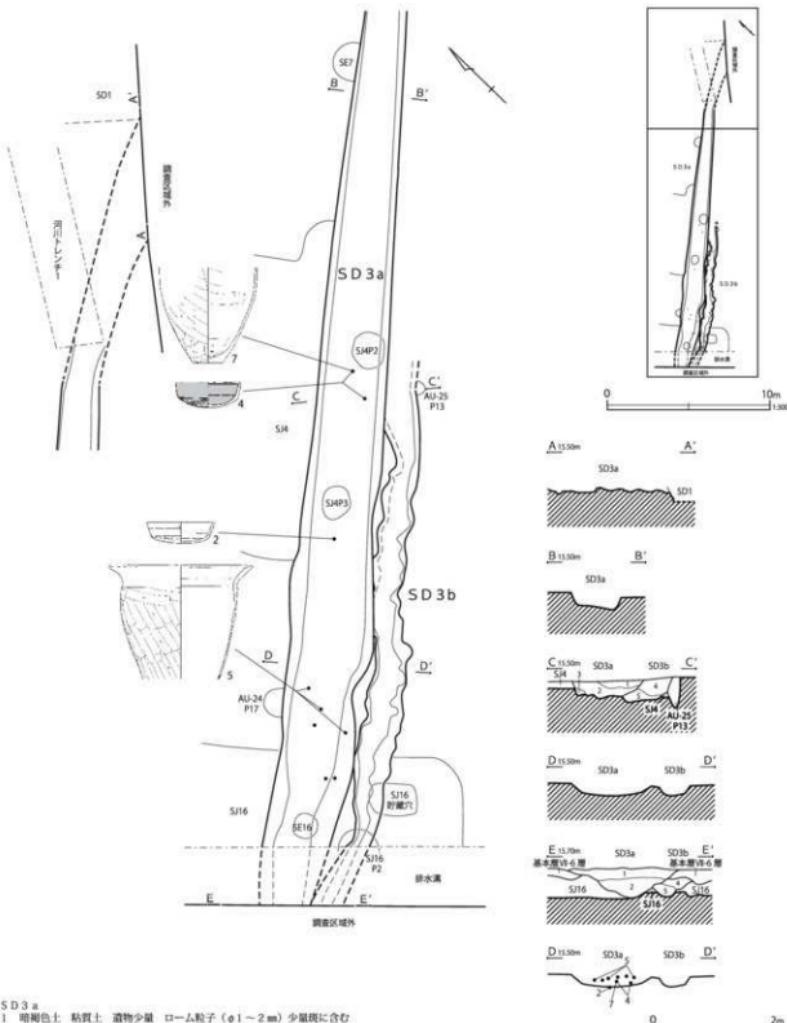
第22表に検出グリッド、方位、長さ、幅、深さを示した。

#### A区第3号溝跡 (第47図)

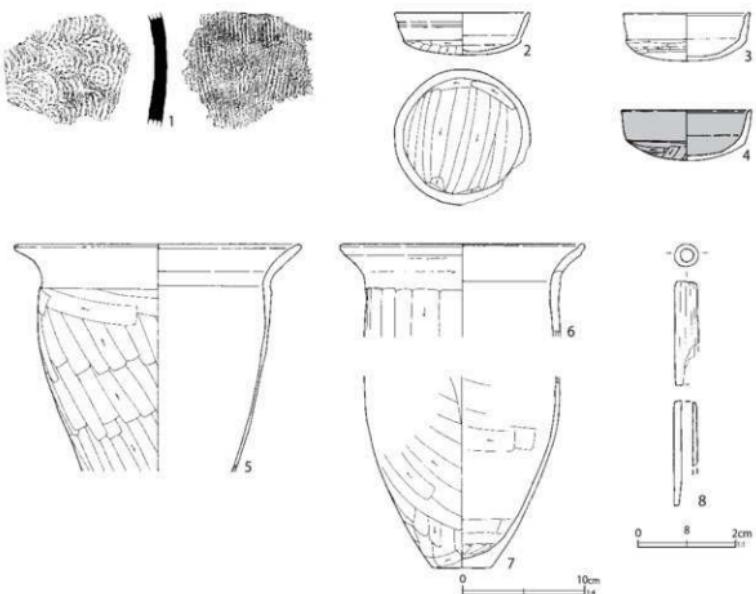
第3号溝跡はaとbの2時期に分かれ、bの方が古い。走行方位はN-52°-Eを指す。北東から南西方向に延びている。両端が調査区域外へ至

るため全長は不明である。重複関係は、第4・16号竪穴住居跡、第7・16号井戸跡、AU-24P 17、AU-25P 13と重複し、aとbいずれもこれらより新しい。

検出された規模はaが長さ15.38m、幅1.10m~2.00m、深さ0.22m~0.35mである。bが長さ7.50m、幅0.26m~0.64m、深さ0.22m~0.35mである。bはaと比べて規模が小さく、掘方も不均等である。これに対し、aは直線的に掘削されて



第47図 A区第3 a・b号溝跡



第48図 A区第3a・b号溝跡出土遺物

第20表 A区第3a・b号溝跡出土遺物観察表（第48図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	—	[9.3]	—	EI	5	普通	黄灰	末野窯産か 外面平行叩き 内面同心円文	
2	土師器	坏	11.0	3.4	—	ACI	90	普通	棕	No.1 有段口縁坏	97-3
3	土師器	坏	10.3	3.9	—	AII	70	良好	明赤褐	蓋模倣坏	97-3
4	土師器	坏	10.6	4.1	—	AI	90	良好	明赤褐	No.2・3 蓋模倣坏 内外面赤彩	97-3
5	土師器	甕	(23.2)	[18.5]	—	AGI	40	普通	棕	No.5・6・7 「く」の字状口縁甕	97-3
6	土師器	甕	(19.8)	[7.6]	—	AII	20	普通	にぶい棕		
7	土師器	甕	—	[15.6]	4.6	CHI	40	普通	にぶい棕	No.3 角閃石多量	97-3
8	石製品	碧玉	長さ2.2 幅0.5 厚さ0.5 孔径0.3 重さ0.7 残存80							SD 3 碧玉 片面直 ミガキ	

いる。

遺物はaから多く出土している一方でbから図示できるような遺物は出土しなかった。第48図1は須恵器甕の胴部片である。産地は末野窯とみられる。2から4は土師器の坏である。2は有段口縁坏、3と4は蓋模倣坏である。5から7は土師器の甕である。8は碧玉製の管玉である。部分的

に欠損している。また、ウマの歯及び骨が出土している。

時期は、aは出土遺物から7世紀前半とみられ、bはそれ以前となる。しかし6世紀後半の遺構を壊していることから、aとさほど変わらない時期に掘削された後、bに掘り直されたとみることができる。

#### A区第4号溝跡（第49図）

A区の第4号溝跡の走行方位はN-45°-Eを指す。北東から南西方向に延びている。南端が調査区域外へ至り、北端は第3号井戸跡に壊されているが、その先へは延びていない。全長は不明である。検出された規模は長さ4.00m、幅0.68m～0.78m、深さ0.07m～0.40mである。

重複する遺構の新旧関係は、第11・13・22号竪穴住居跡より新しく、第3号井戸跡、AT-24P 16より古い。

遺物は土師器の甕が1点出土している。時期は6世紀代以降とみられる。

#### A区第6号溝跡（第51図）

A区の第6号溝跡の走行方位は北西側がN-44°-W、南側がN-0°を指す。南から北方へ延び、中心付近で北西に屈曲する。南端は調査区域内で立ち上がり、北端は第16号土壙に壊されているが、そこから先へは延びていない。

検出された規模は長さ9.70m、幅0.38m～0.90m、深さ0.08m～0.23mである。

重複する遺構の新旧関係は、第20号竪穴住居跡より新しく、第15号井戸跡、第16号土壙、AS-23P 12より古い。

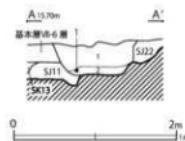
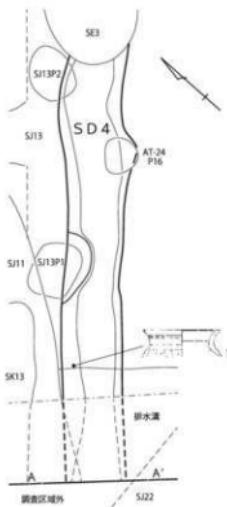
遺物は図示できなかったが、木杭が出土している。時期は第15号井戸跡より古いことから6世紀代以前に位置付けられる。

#### A区第7号溝跡（第51図）

A区の第7号溝跡の走行方位はN-57°-Eを指す。南西から北東方向へ延びる。南端は第2号溝跡に壊され、北端は旧河川跡に壊されている。検出された規模は長さ1.20m、幅1.05m～1.25m、深さ0.10mである。遺物は出土していない。残存状態が極めて悪く、時期を含め詳細は不明である。

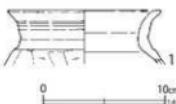
第21表 A区第4号溝跡出土遺物観察表（第50図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(12.5)	[4.4]	—	CI	20	普通	明赤褐色	No.1	

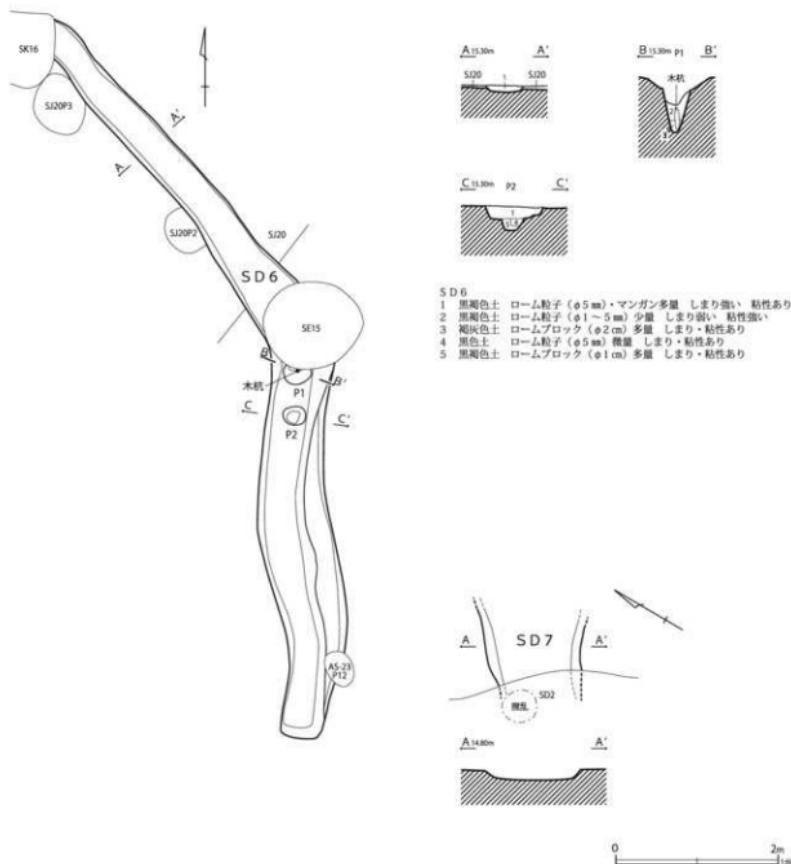


SD 4  
1 黒褐色土 均質 棱角色粒子（φ2 mm）微量 混入物少量 しまりやや弱い  
2 黒色土 ロームブロック（φ2～3 cm）中量 しまりやや弱い 粘性強

第49図 A区第4号溝跡



第50図 A区第4号溝跡出土遺物



第51図 A区第6・7号溝跡

第22表 A区溝跡一覧表

No	グリッド	方位	方位	長さ(m)	幅(m)		深さ(m)		重複遺構				
					最大	最小	最大	最小					
3	AT-25-26 AU-24-26 AV-24	N-52°-E	—	15.38 7.50	2.00 0.64	1.10 0.26	0.35 0.35	0.22 0.22	SJ4 SJ16 SE7 SE16 SD1 AU-24P17 AU-25P13				
4	AT-23-24 AU-23-24	N-45°-E	—	4.00	0.78	0.68	0.40	0.70	SJ11 SJ13 SJ22 SE3 AT-24P16				
6	AR-22-23 AS-23	N-44°-W	N-0°	9.70	0.90	0.38	0.23	0.08	SJ20 SE15 SK16 AS-23P12				
7	AS-25	N-57°-E	—	(1.20)	(1.25)	1.05	0.10	—	SD2				

#### (4) 土壙

A区において古墳時代・飛鳥時代の土壙は14基検出された。用途不明の土壙が多いが、ウマの骨やウマの歯と思われる獸骨が出土している土壙も認められ、これらはウマを埋葬した墓か廃棄した土壙であった可能性がある。また、小型で円形ぎみの形状を呈する土壙は、炭化物や焼土を含む覆土で埋没している特徴がある。

第23表に検出グリッド、平面形、規模、深さを示した。以下には、それぞれの土壙の特徴、重複関係、出土遺物について記す。

##### 第2号土壙（第52図）

平面形は長方形の形状を呈する。底面にピットが3基検出された。

遺物の出土量が多い。出土地点をみると、多くが土壙内の外周に位置し中心付近には少ない。この土壙から骨や歯は出土していないが、他の土壙と類似した長方形型の形状などから、中心付近に遺体などを置いた余地は残る。

第55図1～7は土師器の壺である。1は内外面に黒色処理が施されている有段口縁壺である。2・4・5は蓋模倣壺である。3と7は口縁部が直立するタイプの壺である。6は胎土に石英粒を多く含む。比企型壺である。内外面に赤彩が施されている。8と9は高壺である。8は壺部分で角閃石を多く含む。9は脚部であるが、8とは別個体である。10は壺である。内面に黒色の付着物が認められる。11は甕である。底部に木葉痕がみられる。須恵器は出土していない。時期は6世紀末頃に位置付けられる。

##### 第5号土壙（第52図）

平面形は楕円形の形状を呈する。西側が第7号竪穴住居跡と重複し上端が壊されている。

遺物の出土量が多い。出土地点をみると、多くが土壙内の外周に位置し、中心付近には少ない。この土壙から骨や歯は出土していないが、他の土壙と類似した楕円形型の形状などから、中心付近

に遺体などを置いた余地は残る。第55図12～15は土師器の壺である。12と13は蓋模倣壺、14は小針型に類似した壺、15是有段口縁壺である。16と17は甕の口縁部である。須恵器は出土していない。時期は6世紀末頃に位置付けられる。

##### 第6号土壙（第52図）

平面形は不整円形の形状を呈する。覆土に炭化材、炭化粒子、焼土粒子を含む。遺物は出土していない。

##### 第7号土壙（第53図）

平面形は不整長方形の形状を呈する。南西側は調査区域外に至る。第11号土壙と重複し、これに壊されている。長軸側は緩やかに立ち上がり、短軸側は中段を持ち立ち上がる。底面はほぼ水平である。覆土に炭化材片や炭化物が含まれる。また、獸骨が出土している。

遺物は土師器が出土している。第55図18は北武藏型壺、19は甕の口縁部である。時期は7世紀末頃に位置付けられる。

##### 第8号土壙（第52図）

平面形は不整楕円形の形状を呈する。覆土に炭化材、炭化粒子、焼土粒子を含む。遺物は出土していない。

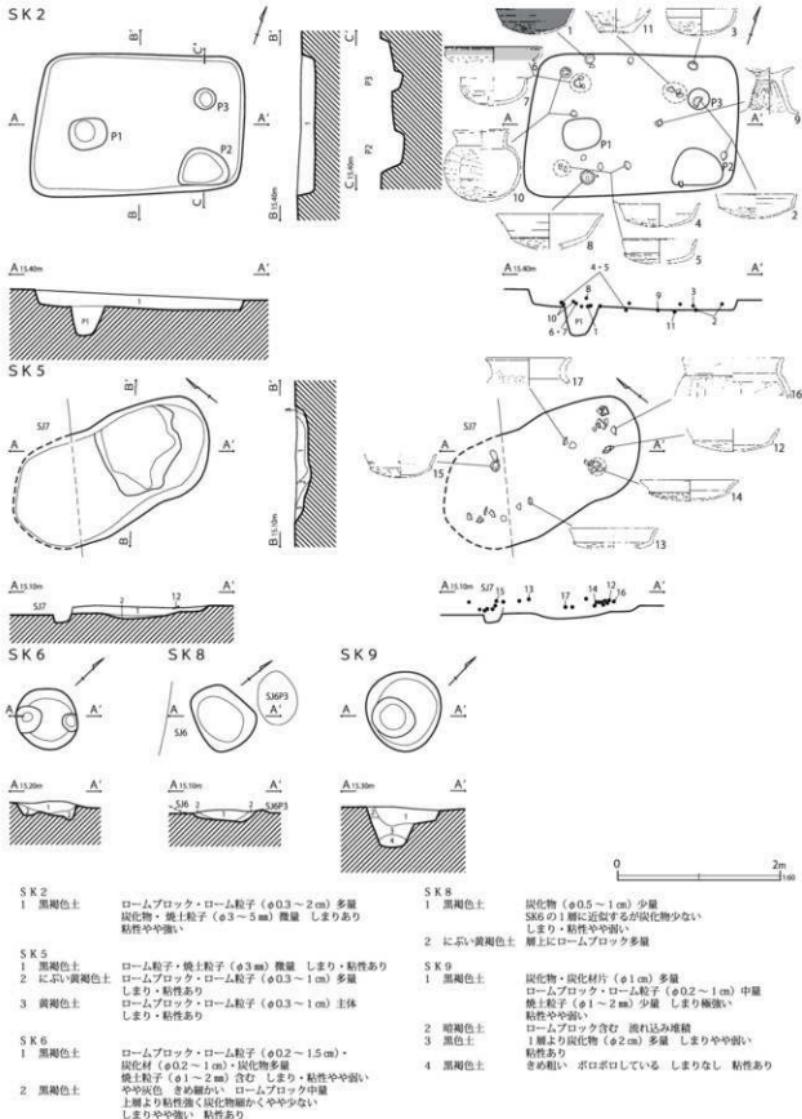
##### 第9号土壙（第52図）

平面形は不整円形の形状を呈する。覆土に炭化材、炭化粒子、焼土粒子を含む。遺物は須恵器甕の破片が出土している（第55図20）。時期は須恵器片から6世紀～7世紀に位置付けられる。

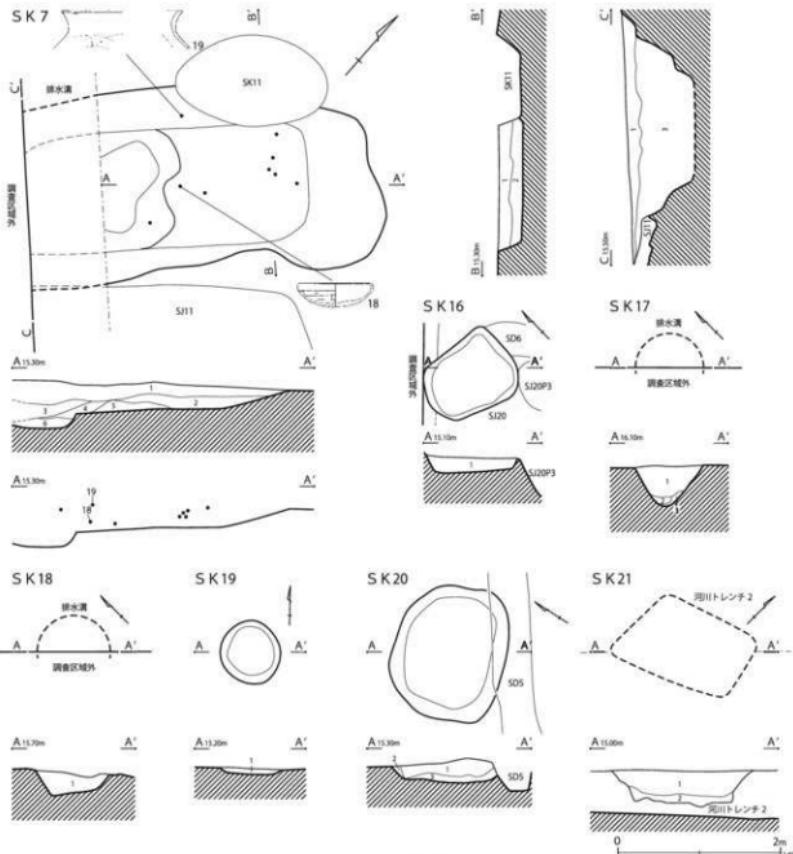
##### 第12号土壙（第54図）

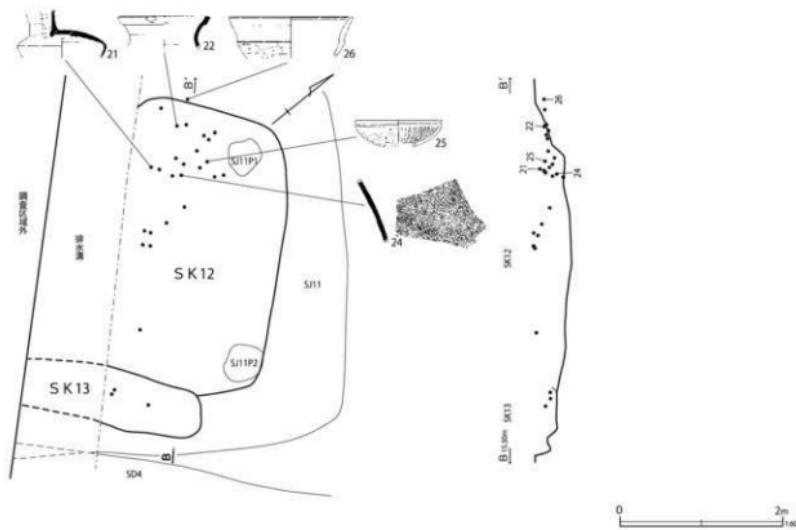
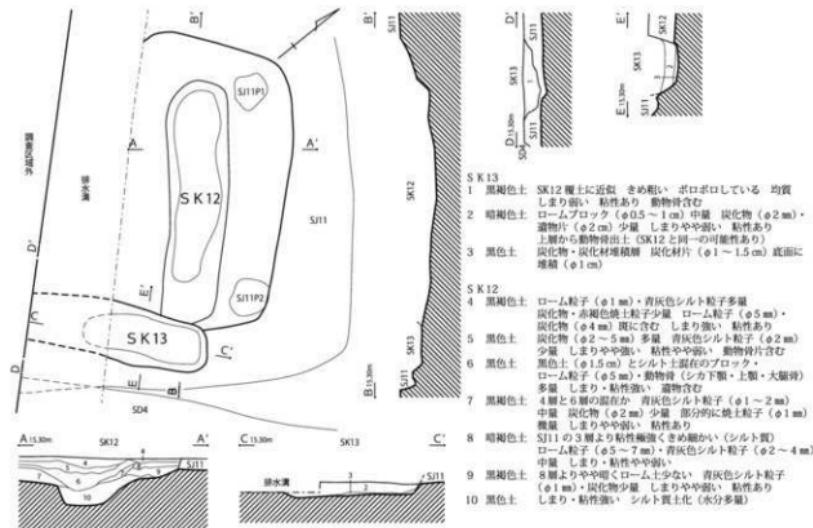
平面形は長方形の形状を呈する。第11号竪穴住居跡の廃絶後に掘削されている。南東辺が第13号土壙に壊されている。ウマを埋葬または廃棄したものと思われる。第12号土壙は第13号土壙より一回り大きいが平面プランや底部分が箱形長方形を呈す形状が類似している。

出土した獸骨は放射性炭素年代測定を実施しており、その結果、ウマの中手骨または中足骨であ



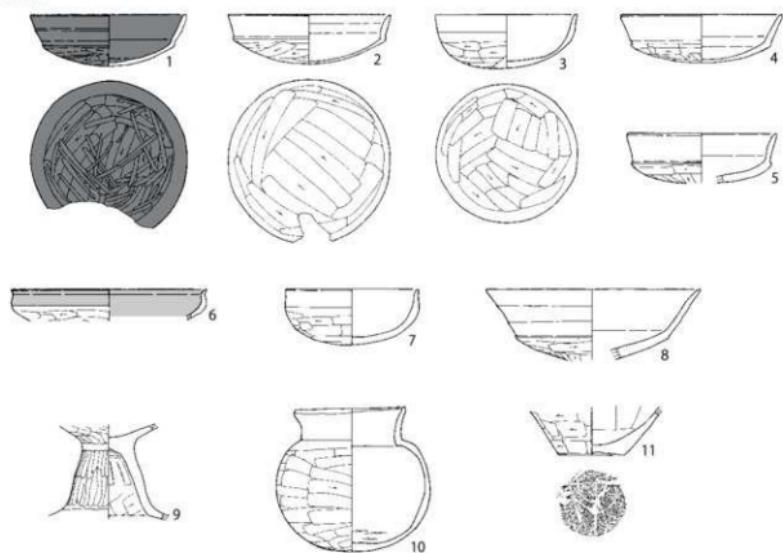
第52図 A区土壤 (1)



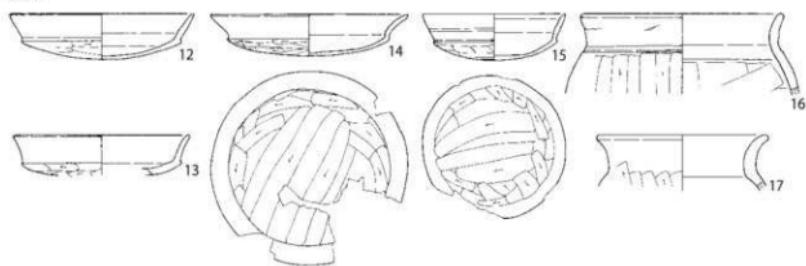


第54図 A区土壤 (3)

## SK 2



## SK 5



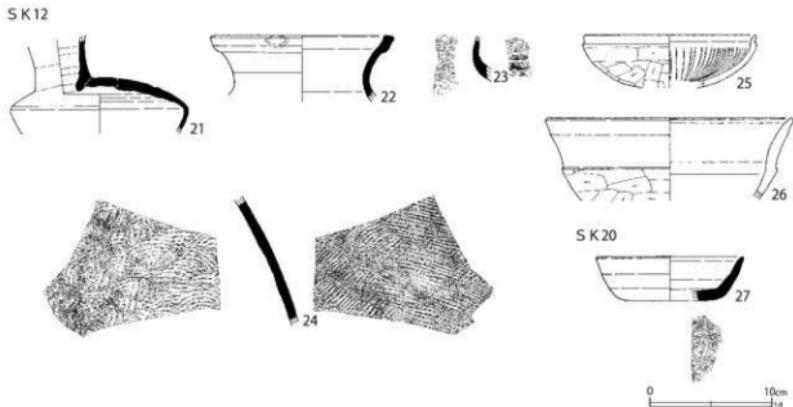
## SK 7



## SK 9



第55図 A区土壤出土遺物（1）



第56図 A区土壤出土遺物（2）

り、測定結果から得られた年代は6世紀後半～7世紀前半の間である。

遺物は須恵器、土師器が出土している。第56図21は須恵器の平瓶である。外面に自然釉がかかり、胎土に黒色粒が多量に含まれる。産地は秋間窯とみられる。22と23は須恵器の壺口縁部である。22は内面に窯壁片が付着している。外面には釉玉がみられる。産地は末野窯か。23は外面に波状文と沈線、内面に同心円文アテ具痕がみられる。24は須恵器甕の胴部で外面に平行タタキ痕とヘラ状工具によるカキ目、内面に同心円文アテ具痕がみられる。25は土師器の暗文坏、26は土師器の鉢である。時期は7世紀後半に位置付けられる。

#### 第13号土壤（第54図）

平面形は不整長方形の形状を呈する。重複関係は第11号竪穴住居跡、第12号土壤と重複しこれらよりも新しい。南西側は調査区域外に至る。覆土に炭化物を含む。遺物は出土していない。

#### 第16号土壤（第53図）

平面形は不整方形の形状を呈する。重複関係は第20号竪穴住居跡、第6号溝跡と重複し、これらより新しい。覆土にはロームブロックを多量に含

む。遺物は出土していない。

#### 第17号土壤（第53図）

調査区南壁で検出された。平面形は、排水用に溝を掘削した際に削平され残存していない。遺物は出土していない。

#### 第18号土壤（第53図）

調査区南壁で検出された。平面形は削平され残存していない。遺物は出土していない。

#### 第19号土壤（第53図）

平面形は不整円形の形状を呈する。覆土に炭化物を含む。遺物は図示できる大きさではないが、鉄津が出土している。

#### 第20号土壤（第53図）

平面形は不整方形の形状を呈する。重複関係は第5号溝跡と重複し壊されている。覆土にはロームブロックを多量に含む。遺物は第56図27の須恵器坏が出土している。奈文研分類の坏Gに位置付けられる。産地は末野窯とみられる。

#### 第21号土壤（第53図）

河川トレンチ2東壁において検出された。平面形はトレンチ掘削の際に削平され残存していない。遺物は出土していない。

第23表 A区土壤一覧表

遺構名	グリッド	平面形	長軸方位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	遺構名	グリッド	平面形	長軸方位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
1			欠番				12	AT-23	長方形	N-43° -W	(3.60)	(2.00)	0.57
2	AT・AU-25	長方形	N-70° -E	2.58	1.75	0.20	13	AT・AU-23	不整長方形	N-47° -E	(1.80)	(0.68)	0.20
3			欠番				14		欠番				
4			欠番				15		欠番				
5	AT-24	梢円形	N-66° -W	(2.70)	1.26	0.18	16	AR-22	不整方形	N-78° -W	1.14	0.93	0.19
6	AT-23	不整円形	N-50° -E	0.76	0.74	0.22	17	AT-22	不明	—	—	—	0.50
7	AT-23	不整長方形	N-48° -E	(3.80)	2.33	0.66	18	AT-23	不明	—	—	—	0.30
8	AT-23	不整梢円形	N-90°	0.84	0.68	0.14	19	AS-24	不整円形	N-43° -W	0.77	0.73	0.11
9	AT-24	不整円形	N-40° -W	0.98	0.92	0.52	20	AS-23	不整方形	N-73° -E	1.65	1.37	0.33
10			欠番				21	AS-25	不明	—	—	—	0.43

第24表 A区土壤出土遺物観察表 (第55・56段)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	12.6	4.2	—	HI	80	良好	橙	SK2 № 8 有段口縁环 黒色処理	97-4
2	土師器	壺	13.2	4.0	—	ACGHI	95	良好	橙	SK2 № 14-16 蓋模倣坏	97-4
3	土師器	壺	11.5	4.4	—	AEHI	100	普通	にぶい橙	SK2 № 12	97-4
4	土師器	壺	(13.2)	3.9	—	CHI	30	良好	橙	SK2 № 2・5 蓋模倣坏	97-4
5	土師器	壺	(12.0)	[4.0]	—	HIK	40	良好	浅黄橙	SK2 № 2・5 蓋模倣坏	
6	土師器	壺	(16.0)	[2.5]	—	HI	20	良好	赤	SK2 № 7 比企型壺 赤影 石英多量	
7	土師器	壺	10.8	4.5	—	ACEGH	60	普通	橙	SK2 № 7	97-4
8	土師器	高壺	17.3	[5.8]	—	CHI	40	良好	橙	SK2 № 1 角閃石多量	
9	土師器	高壺	—	[7.8]	—	I	30	良好	橙	SK2 № 15	
10	土師器	壺	8.8	11.6	—	AHK	80	良好	灰褐	SK2 № 6-10 内面黒色付着物	97-4
11	土師器	甕	—	[3.9]	5.5	AGI	10	普通	にぶい赤褐	SK2 № 13 底部木葉痕	97-4
12	土師器	壺	(15.0)	3.7	—	AHI	30	良好	明赤褐	SK5 № 15 蓋模倣坏	
13	土師器	壺	(14.0)	[3.2]	—	ACI	30	普通	にぶい黄橙	SK5 № 10 蓋模倣坏	
14	土師器	壺	16.0	3.4	—	ACEHI	80	良好	明赤褐	SK5 № 14 蓋模倣坏	97-5
15	土師器	壺	11.6	3.8	—	AHI	90	良好	明赤褐	SK5 № 2 有段口縁环	97-5
16	土師器	甕	(16.3)	[6.6]	—	ACHI	20	普通	にぶい橙	SK5 № 16	
17	土師器	甕	(13.8)	[4.5]	—	CHIK	20	普通	明赤褐	SK5 № 11	
18	土師器	壺	(12.0)	3.9	—	ACEI	40	良好	橙	SK7 № 2 北武藏型壺	97-5
19	土師器	甕	(19.4)	[6.4]	—	ACI	20	普通	にぶい褐	SK7 № 1	97-5
20	須恵器	甕	—	[4.2]	—	EI	5	良好	灰	SK9 未野窯産 外面平行印き 内面同心円文	97-5
21	須恵器	平瓶	—	[8.1]	—	I	30	良好	灰白	SK12 № 12 秋間窯産か 外面自然釉 内面黒色粒多量	97-6
22	須恵器	甕	(14.6)	[5.3]	—	I	5	良好	オリーブ黒	SK12 № 3 未野窯産か 内面釉、窯壁片 外面粗粒	97-6
23	須恵器	甕	—	[3.9]	—	I	5	良好	暗灰	SK12 外面波状文・辻線 内面同心円文	
24	須恵器	甕	—	[10.5]	—	EI	5	良好	オリーブ黒	SK12 № 10 外面平行印き・ヘラ状工具によるカス目 内面同心円文	97-6
25	土師器	壺	(13.8)	[4.3]	—	CHI	20	良好	橙	SK12 № 7 暗文壺	97-6
26	土師器	鉢	(20.0)	[6.7]	—	ACDI	20	良好	にぶい黄褐	SK12 № 1	
27	須恵器	壺	(12.0)	3.6	(7.4)	BEI	30	良好	黄灰	SE12 未野窯産か 壺 G 底部ヘラ切り 石英多量	

### 3 奈良時代・平安時代の遺構と遺物

A区において検出された奈良時代・平安時代の遺構数は、竪穴住居跡3軒、井戸跡5基、溝跡3条、土壌1基、鍛冶関連遺構1基、旧河川跡一箇所である。後世に削平されている調査区北半分を除いて、古墳時代・飛鳥時代同様に調査区南半分のほぼ全域に遺構が分布しており、調査区域外の西側、東側、南側へ集落が広がっていると想定される。

#### (1) 竪穴住居跡

##### A区第2号竪穴住居跡（第57～59図）

A区の第2号竪穴住居跡はAU-24・25グリッド、調査区の南部に位置する。

他の遺構との重複関係は、第4・15・16号竪穴住居跡と重複し、これらよりも新しい。

遺構の残りは極めて良好である。平面形は隅丸方形で、残存規模は長軸長4.37m、短軸長3.92m、深さ0.56mである。主軸方位はN-45°-Eを指す。覆土は暗褐色土を主体とする。

カマドは北東辺に設置され、規模は長さ2.06m、幅1.46mで燃焼部の深さは0.55mである。煙道部は残存長1.35m程度である。燃焼部は住居の外側に張り出すように構築されている。第62図40の石材が支脚として設置されていた。袖は直立させた石材と青灰色粘土を用いて構築されている。煙道部の天井は、崩落していたが一部に青灰色粘土が残存していた。

カマドの左右両側において棚状施設が検出された。竪穴住居跡の壁よりも外側に張り出すタイプで、地山を掘り残してそこに粘土を充填し、使用面を構築しているとみられる。カマド廃絶後に一部の棚状施設構築の粘土が崩落し、カマド構築の粘土を覆っている様子が確認された。

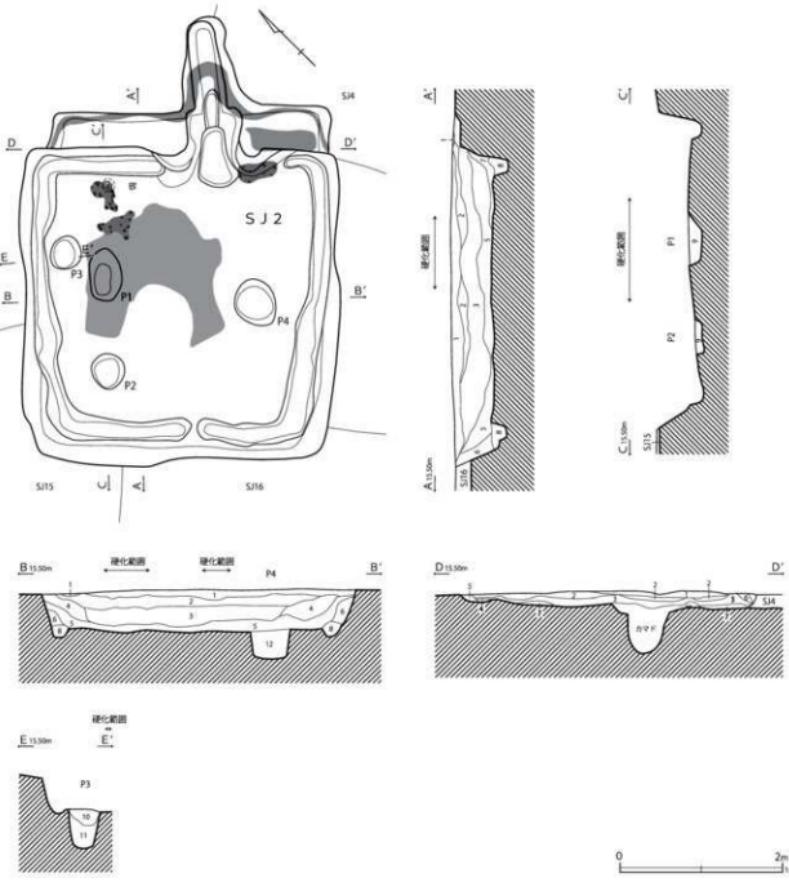
中心部からやや北西にかけて部分的に硬化面が広がっている。貯蔵穴は検出されなかった。柱穴・ビットは4基検出された。いずれも配置が不規則であるため主柱穴かは判然としないが、いず

れも床面から検出されている。しかしP1に関しては、硬化面下から検出されていることから、古い時期の別遺構の可能性もある。いずれも柱痕が確認されなかった。

壁溝はほぼ全周して検出されているが、南西辺で部分的に立ち上がる。幅は0.18m～0.40m、深さは0.10m～0.17mである。

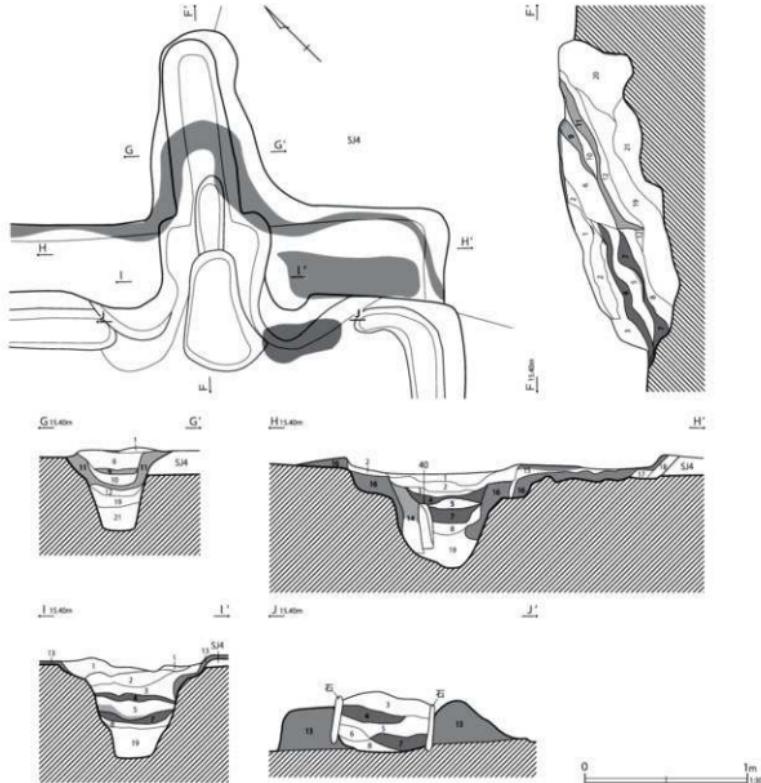
遺物は、須恵器、土師器、石製品が出土している。第60図1は須恵器の蓋である。完形品である。内面に朱墨が認められるが、研磨跡はみられないため、転用窯として使用された可能性は低い。産地は南北企窓と推定される。2も須恵器の蓋である。内面の外周に煤が多く付着している。カマド燃焼部付近からこの2点の須恵器蓋が重なって出土している。

3～21は須恵器である。3はほぼ完形の坏で底部に回転糸切り後外周ヘラケズリがみられる。口縁部に煤が付着し、見込み部分に漆と思われる付着物が残っている。4は底部回転糸切り後無調整である。全体的に煤けている。5は底部に回転糸切り後外周ヘラケズリがみられ、薄いが「+」のヘラ記号がみられる。6は底部に回転糸切り後外周ヘラケズリがみられる。底部から外面の大部分と、内面の口縁部付近にかけて煤けている。7は底部に回転糸切り後外周ヘラケズリがみられ、5と同様に薄いが「+」のヘラ記号がみられる。8は底部静止糸切り後外周ヘラケズリがみられる。体部の内外面2箇所に「川」とみられる墨書がある。9は底部全面にヘラケズリ調整がみられる。口縁部が煤けている。10は底部回転糸切り後無調整である。口縁部が少し煤けているが、他の土器と比べると少ない。11は底部回転糸切り後無調整である。底部に「才」のような墨書がみられる。12～17も須恵器の坏であるが、残存率は低い。また、他の残存率が高い須恵器坏と異なり、煤けていない。



- |         |  |
|---------|--|
| S J 2   |  |
| 1 暗褐色土  | 青灰色シルト粒子（φ2～7 mm）少量<br>炭化物・堆土粒子微量 ローム粒子（φ5 mm）斑に含む<br>しまりあり、粘性やや弱い   |
| 2 暗褐色土  | 1層より明るい。ローム粒子（φ2～5 mm）多量<br>カマド焼瓦土（φ0.5～1 cm）・ロームブロック・炭化材片混在<br>しまりあり、粘性やや弱い                                   |
| 3 暗褐色土  | 2層より明るい。きめ粗い。含有物・ローム粒子（φ2～4 mm）多量<br>カマド焼瓦土（φ0.2～1 cm）・炭化物（φ2～4 mm）中量<br>炭化物（φ5 mm）、疊上粒子（φ2～3 mm）少量。しまり・粘性やや弱い |
| 4 明褐色土  | ロームブロック（φ0.5～1 cm）・2層より明るい。<br>含有物（φ1 cm）・ローム粒子（φ2～4 mm）多量<br>カマド焼瓦土（φ0.5～1 cm）・2層より明るい。粘性やや弱い                 |
| 5 暗褐色土  | きめ細かい。均質 カマド焼瓦土・ロームブロック（φ1 cm）多量<br>炭化物（φ1 cm）・ロームブロック中量<br>疊上層に炭化物層（φ1 cm）が全面に広がる しまり弱い、粘性強い                  |
| 6 暗褐色土  | 含有物少量 しまりやや強い、粘性やや弱い、流れ込み堆積か<br>均質 シルト質 しまり強い、粘性あり   |
| 7 淡灰褐色土 | カマド焼瓦土に沿って流れ込んでいる<br>堆積段丘から南に向けて流れ込んでいる<br>炭化物（φ1 cm）少量 ローム粒子微量 しまり弱い、粘性あり<br>壁面                               |
| 8 黑褐色土  | 炭化物（φ3～5 mm）少量 ロームブロック（φ2 cm）混に・<br>ロームブロック（φ5 cm）含む しまり強い、粘性やや弱い  |
| 9 黒色土   | ローム粒子（φ2～4 mm）少量 炭化物（φ1～2 cm）<br>炭化物（φ5 mm）微量 しまり弱い、粘性やや弱い   |
| 10 暗褐色土 | 炭化物（φ1 cm）少量 ロームブロック（φ1 cm）混に・<br>ロームブロック（φ2～4 mm）少量 炭化物（φ1～2 cm）<br>炭化物（φ5 mm）微量 しまり弱い、粘性やや弱い                 |
| 11 黑色土  | ローム粒子（φ2～4 mm）少量 炭化物（φ1 cm）混に・<br>ロームブロック（φ2～4 mm）少量 炭化物（φ1～2 cm）<br>炭化物（φ5 mm）微量 しまり弱い、粘性やや弱い                 |
| 12 黑色土  | カマド焼瓦土の青灰色粘土粒子・炭化物の混在する黒褐色土に<br>ロームブロック（φ2～4 cm）中量 しまり弱い、粘性やや弱い  |

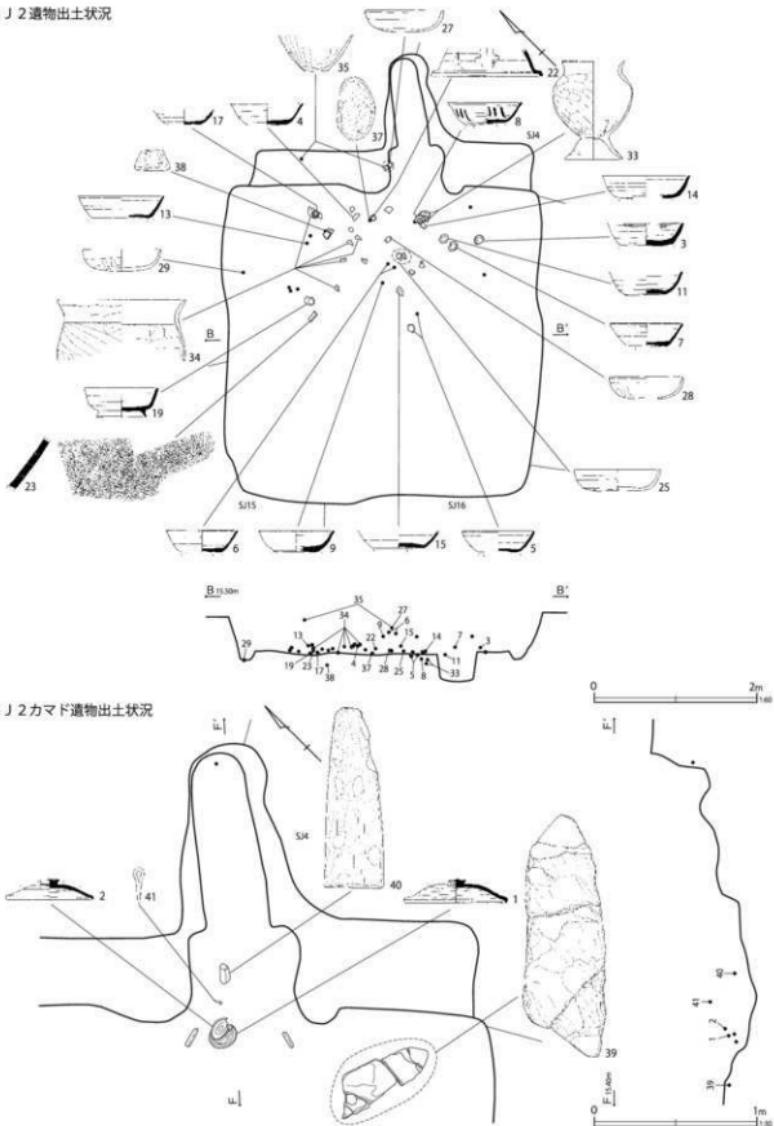
第57図 A区第2号竪穴住居跡



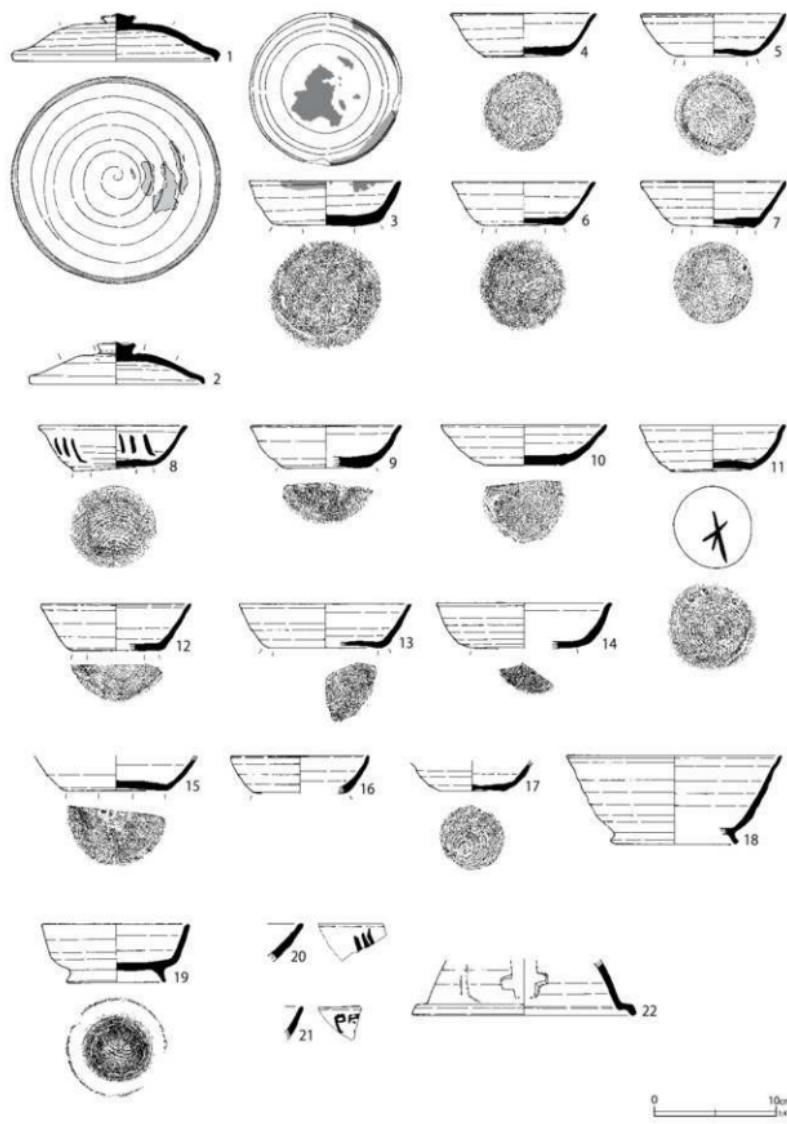
- S J 2 カマド**
- 1 深灰色土 しまり・粘性強い。縦状施設覆土  
一部に砂利と粘土質の塊状物を含む。
  - 2 青灰色土 天然土・角礫土・マダラ風化物。中層にかけて崩落
  - 3 灰褐色土 天然土のラミナードが複数層。灰褐色と黒褐色を呈す。
  - 4 噴灰褐色土 明褐色ブロック（φ1～2 m）含む。灰褐色シルト質土（カマドの土）が溶けた上層と底ざり堆積
  - 5 淡灰褐色土 硫土粒子（φ1 mm）微量。
  - 6 青灰色土 カマド下構造土（φ1～1.5 m）現在 しまり・粘性強い。  
既往の堆積段階では粘土質が洗滌して堆積
  - 7 黑灰色土 きめ細かい、シルト質。しまり強。粘性あり  
カマド構造土堆積
  - 8 噴灰褐色土 シルト質。炭化物質が帶状に堆積。周囲は淡褐色シルト質  
カマド構造土ブロック（φ1 m）含む
  - 9 淡褐色土 シルト質。しまり・粘性強。
  - 10 青灰色土 やや黒色。シルト質土ブロック・被熟した褐色ブロック・  
炭化物質（φ1 cm）帶状。多量
  - 11 淡褐色土 青灰色シルト質土が溶解し、深褐色土と混在  
堆積段階のもの
  - 12 淡褐色土 シルト質土ブロック含む  
きめ細かい。シルト質。しまり強い。粘性あり
  - 13 青灰色土 ガマド構造土堆積
  - 14 青灰褐色土 しまり・粘性強。一部被熱により赤色化  
左側斜面一部崩れ落ちている
  - 15 青灰褐色土 シルト質。しまり・粘性極端。カマド崩落土
  - 16 青灰色土 非常にきめ細かい。シルト質。カマド崩落土  
しまり極端。
  - 17 淡灰褐色土 シルト質。縦状施設部分の粘土施工時のか  
ローム土上に粘土地盤
  - 18 噴灰褐色土 シルト質。化物質が部分 S14層と混在  
しまりやや弱い。粘性あり。S14層のうち上部が  
被熟したシルト質土ブロック・炭化物質含む
  - 19 淡褐色土 淡褐色砂質土に溶解した青灰色シルト質土混入  
ローム粒子（φ2～4 mm）、炭化物・硫土粒子多量  
灰少量。しまり強。
  - 20 黒色土 きめ細かい。ロームブロック・青灰色シルト土ブロック・  
炭化物・硫土含む。9・11・19層ブロック混入  
しまり弱。粘性やや弱い。
  - 21 異褐色土 施設後壁の口側から土砂流入。堆積したものか

第58図 A区第2号豎穴住居跡カマド

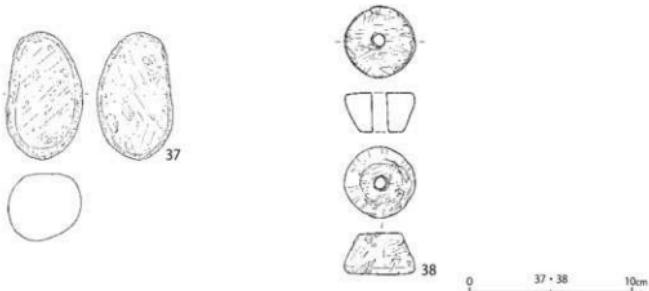
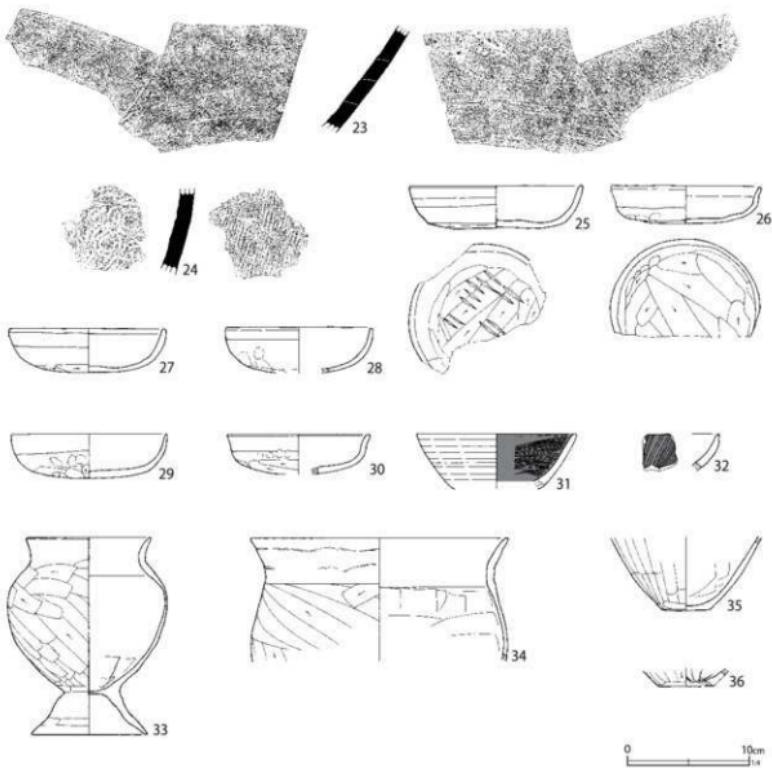
S J 2 遺物出土狀況



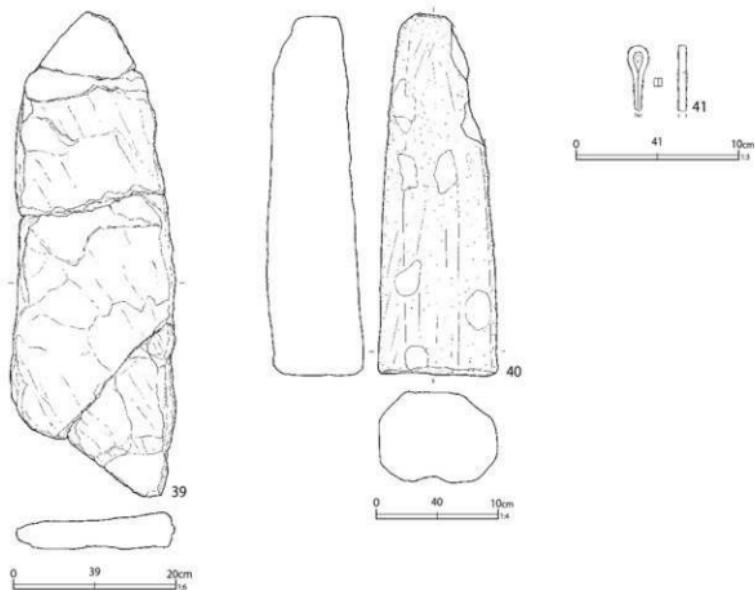
第59図 A区第2号竪穴住居跡・カマド遺物出土状況



第60図 A区第2号竪穴住跡出土遺物（1）



第61図 A区第2号竪穴住居跡出土物（2）



第62図 A区第2号竪穴住居跡出土遺物（3）

第25表 A区第2号竪穴住居跡出土遺物観察表（第60~62図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	16.5	3.9	—	II	100	普通	褐灰	カマドNo.3 南比企窯産か 肩部ヘラケズリ 内面朱墨痕	98-1
2	須恵器	蓋	13.9	3.4	—	EK	80	普通	灰白	カマドNo.2 内面外周煤 肩部ヘラケズリ	98-1
3	須恵器	壺	12.2	3.8	8.6	EI	95	普通	褐灰	No.27 油槽 煤付 見込漆 底部回転糸切り外周ヘラケズリ	98-1
4	須恵器	壺	11.8	3.5	6.2	DK	80	普通	褐灰	b・No.18 底部回転糸切り	98-1
5	須恵器	壺	(11.8)	3.5	6.5	EJ	40	普通	褐灰	b・No.13・36 南比企窯産 底部回転糸切り外周ヘラケズリ ヘラ記号「+」	98-1
6	須恵器	壺	(11.6)	3.6	6.4	IJK	60	普通	黄灰	No.3・4 南比企窯産 被熱 煤 底部回転糸切り外周ヘラケズリ	98-1
7	須恵器	壺	(11.8)	3.7	6.7	EJK	70	普通	灰白	No.28 底部回転糸切り外周ヘラケズリ ヘラ記号「+」	98-1
8	須恵器	壺	11.9	3.8	6.8	IJK	85	普通	褐灰	No.42 南比企窯産 墨書「川」か 底部静止糸切り外周ヘラケズリ	98-1 99-1
9	須恵器	壺	(12.3)	3.5	(6.8)	IK	35	普通	黄灰	No.5 底部ヘラケズリ	98-1
10	須恵器	壺	(13.4)	3.3	6.4	DI	40	普通	褐灰	c 底部回転糸切り無調整	98-1
11	須恵器	壺	11.8	3.7	6.4	II	70	普通	褐灰	No.29 南比企窯産 墨書「才」か 底部回転糸切り無調整	98-1

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
12	須恵器	壺	(12.2)	3.9	(7.0)	IJK	30	普通	黄灰	c 南比企窓産 底部回転糸切り外周ヘラケズリ	98-1
13	須恵器	壺	(13.8)	3.6	(9.4)	EI	10	普通	褐灰	No.7 底部静止糸切り外周ヘラケズリ	
14	須恵器	壺	(14.0)	[3.7]	(8.9)	EI	10	普通	褐灰	No.30 底部ヘラケズリ	
15	須恵器	壺	-	[2.9]	8.0	IJK	30	普通	灰	No.35 南比企窓産 底部回転糸切り外周ヘラケズリ	98-1
16	須恵器	壺	(11.2)	[3.1]	(7.5)	EIK	20	普通	黄灰	b 手持ちヘラケズリか	
17	須恵器	壺	-	[2.5]	5.3	IJK	30	普通	オリーブ黒	No.40 南比企窓産か 底部回転糸切り無調整	98-1
18	須恵器	高台付壺	(17.3)	7.2	(9.8)	EI	10	普通	褐灰	c 末野窓産	
19	須恵器	高台付壺	11.8	4.8	7.9	IK	90	普通	褐灰	No.25 煤 転用規か	98-1
20	須恵器	壺	-	[3.1]	-	I	5	普通	にぶい黄橙	墨書「川」	99-3
21	須恵器	壺	-	[2.7]	-	I	5	普通	褐灰	c 墨書「門」	99-4
22	須恵器	円面鏡	-	[5.6]	(17.8)	U	10	普通	褐灰	No.41 南比企窓産か 十字透かし ヘラ記号「九」	99-2
23	須恵器	甕	-	[8.7]	-	EI	5	良好	褐灰	カマド・No.26 内面指頭圧痕 輪積痕	
24	須恵器	甕	-	[7.0]	-	EI	5	不良	褐灰	c 内面にぶい赤褐 外面平行叩き 内面同心円文	
25	土師器	壺	(13.8)	3.5	-	CI	45	普通	にぶい橙	No.34 底部ヘラケズリ 板状圧痕	98-2
26	土師器	壺	12.0	3.0	-	CHIK	60	普通	にぶい橙	d	98-2
27	土師器	壺	(12.5)	3.6	-	IK	65	普通	明褐	No.46 底部手持ちヘラケズリ	98-2
28	土師器	壺	(11.8)	[3.7]	-	CK	20	普通	にぶい褐	b・No.37 底部手持ちヘラケズリ	
29	土師器	壺	(12.5)	3.6	-	CI	45	普通	にぶい褐	No.48	98-2
30	土師器	壺	(11.3)	3.2	-	AHI	20	普通	にぶい橙	d 底部手持ちヘラケズリ無調整	98-2
31	土師器	壺	(12.8)	[4.5]	-	I	10	普通	にぶい黄橙	d 黒色土器 ミガキ後内面黑色処理	
32	土師器	壺	-	[3.0]	-	HI	5	普通	灰黃褐	b 暗文壺 内面黑色処理	
33	土師器	台付甕	(10.0)	16.0	9.3	AIK	50	普通	にぶい黄褐	No.43-44	98-2
34	土師器	甕	(20.8)	[10.0]	-	HI	30	普通	にぶい橙	b 北武藏甕	98-2
35	土師器	甕	-	[6.0]	3.9	AHI	20	普通	黒褐	カマド・No.11-46	
36	土師器	甕	-	[1.9]	(4.6)	AI	5	普通	黒褐	d	
37	石製品	磨石	長さ7.8 幅4.7 厚さ4.2 重さ89.6 残存100							No.45 角閃石ディサイト	
38	石製品	筋鍊車	長さ4.4 幅4.3 厚さ2.5 重さ55.9 残存100							No.47 流紋岩 片面直 穿孔 ミガキ	
39	石製品	天井石	長さ60.0 幅20.6 厚さ4.5 重さ5832.9							カマドNo.7 緑泥片岩	
40	石製品	支脚	長さ29.8 幅9.8 厚さ8.0 重さ1516.6 残存100							カマドNo.6 砂岩	
41	鉄製品	環釘	長さ[4.0] 幅0.25 厚さ0.5 重さ6.8							カマドNo.1	

18と19は高台付壺である。18は残存率が悪く判断しないが、煤けていない。19は残存率が高い。底部を中心とした周辺と内面見込み部分が煤けている。また、見込み部分が摩滅しており、研具として転用されていた可能性がある。20と21は須恵器壺の口縁部片であるが、墨書き土器である。いずれも口縁部外面の下に20は「川」、21は「門」と墨書きされている。22は須恵器の円面鏡

である。脚部のみ残存し、端部が屈曲して立ち上がる。透かしは残存部分からの推定では十字透かしになるとみられる。透かしに並んでヘラ記号で「ル」のような記号がみえるが、断片的なので判然としない。产地は南比企窓とみられる。

23と24は須恵器甕の胴部片である。23は内面に指頭圧痕と輪積痕が残る。24は外面に平行タタキ痕、内面に同心円文アテ具痕がみられる。

25～32は土師器の壺である。25は口縁部にナデ調整、底部にヘラケズリ痕と板状圧痕がみられる。胎土に角閃石をやや多く含む。31と32は黒色土器である。いずれも破片であるが、内面に黒色処理とミガキ調整がみられる。33は台付甕である。外面及び内面の上半が煤けている。8の「川」記載の墨書き土器とともにカマド正面付近より出土している。34は甕でいわゆる北武藏型甕に位置付けられる。

37は角閃石デイサイト製の磨石である。複数面に擦痕がみられる。刃物痕はみられない。38は流紋岩製の紡錘車である。全体的に摩滅しているが、完形で残存している。39は緑泥片岩のカマド天井石である。右袖の手前で出土しており、原位置から移動している。全体的に被熱し赤く変色している。40は砂岩製のカマド支脚である。カマド燃焼部に直立して出土している。41は鉄製の環釘である。カマド燃焼部から出土している。

遺物の多くはカマド前の範囲に集中して散らばるように出土している。

時期は8世紀末頃～9世紀初頭頃と推定される。

#### A区第3号竪穴住居跡（第63・64図）

A区の第3号竪穴住居跡はAT-25グリッド、調査区の南東部に位置する。

第1号溝跡にカマドの一部が壊されている。平面形は隅丸方形で、規模は長軸2.90m、短軸長2.84m、深さ0.35mである。主軸方位はN-45°-Eを指す。覆土はロームブロックを多量に含む黒褐色土や暗褐色土を主体とする。

カマドは北東辺に設置されている。残存規模は長さ1.65m、幅1.10mで燃焼部の深さは0.45mである。燃焼部は住居の外側に張り出すように構築されている。煙道部は検出されなかったが、重複する第1号溝跡に壊されている可能性がある。袖は右側のみ残存しており、地山削り出しとみられる。

カマド前には広く炭化物が堆積し、袖の下にも

炭化物が確認できる。袖が崩落していたか、造り替えを行っていた可能性がある。

貯蔵穴は検出されなかった。柱穴・ビットは2基検出された。P1は北西コーナー付近に位置するが、対応する他のコーナー付近からは柱穴・ビットが検出されなかった。P2はカマドの反対側に位置する南東辺に位置することから、入口施設に関わる可能性が想定される。

壁溝は、カマド部分を除き全周して検出されている。幅は0.23m～0.38m、深さは0.07m～0.15mである。

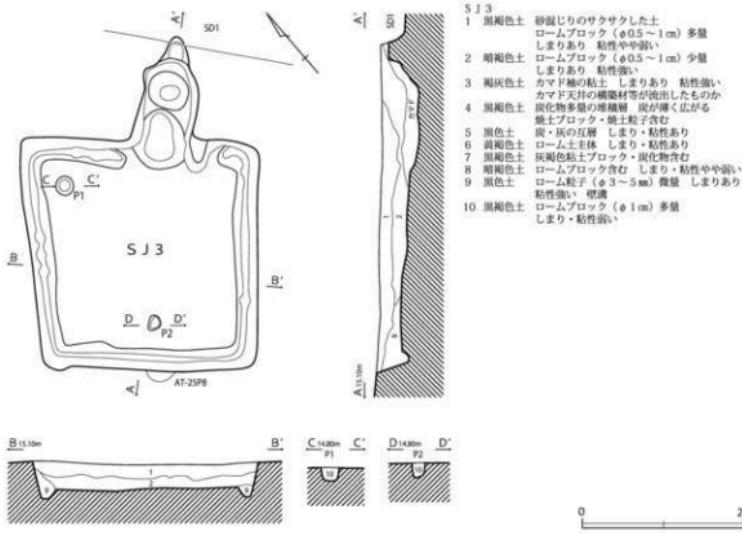
遺物は須恵器、土師器、石製品が出土している。第65図1～4は須恵器の壺である。いずれも南比企窓産の製品である。3のみ完形品である。底部に回転糸切り後外周ヘラケズリ調整がみられ、「十」か「×」のヘラ記号がみられる。4は底部のみ残存しており、回転糸切り後外周ヘラケズリ調整がみられる。外面が煤けている。

5から7は土師器の壺である。いずれも口縁部から体部にかけての一部が残る破片資料である。

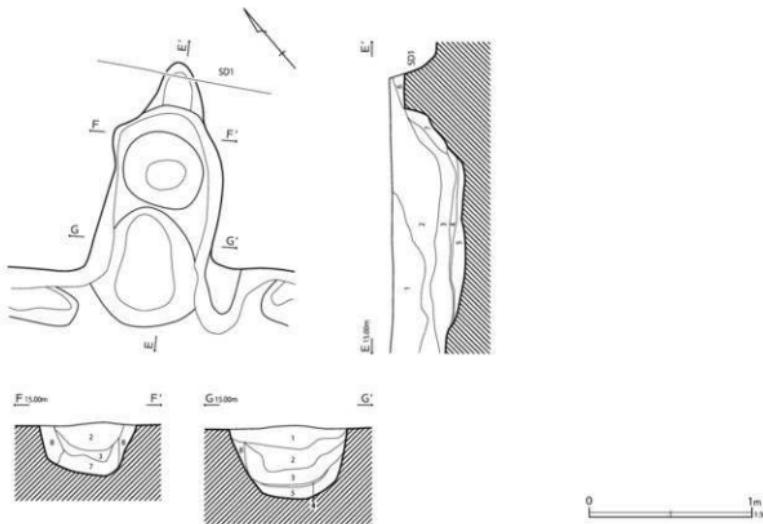
8から10は土師器の台付甕である。8と9は脚部のみの残存で、10は甕部分が残存している。胴部にヘラケズリ調整がみられる。11から14は土師器の甕である。いずれも口縁部から胴部にかけて残存しており、底部は残存していない。「コ」の字状口縁を持つ北武藏型甕に位置付けられるタイプのものである。15は土師器の壺である。口縁部のみの残存である。頭部に縱方向の丁寧なミガキが施されている。16は緑泥片岩製敲石とともにカマドの反対側に位置する南東辺から出土している。

16は緑泥片岩製の敲石である。混入品の可能性もあるが、15の土師器壺と同一地点より出土している。17は滑石製の白玉である。側面形は弱い圓錐形である。側面の研磨は斜め方向に施されている。孔面には両面とも研磨は施されていない。穿孔は片側穿孔で錐先貫通である。

出土した遺物のうち、3の須恵器壺、10の台付

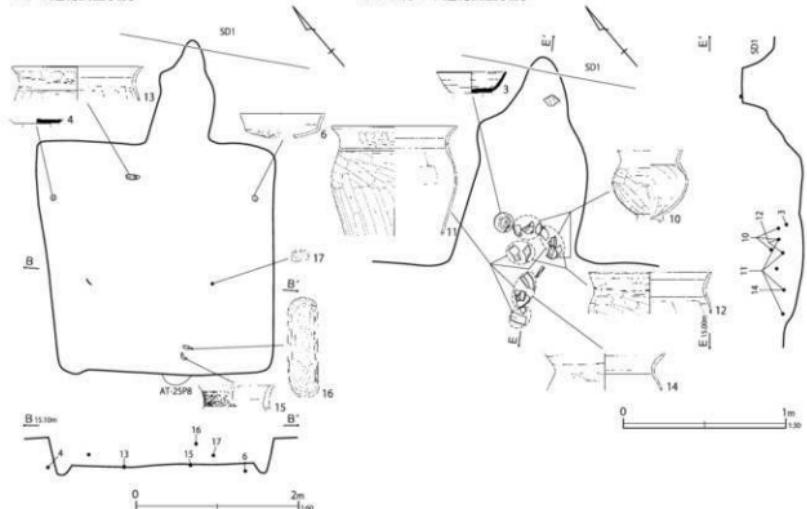


S J 3 カマド



第63図 A区第3号竪穴住居跡

S J 3 遺物出土状況



第64図 A区第3号竪穴住居跡・カマド遺物出土状況

甕、11・12・14の土師器甕はカマドの燃焼部から出土しており、カマドが機能していた時期に使用されていたか、廃絶直後のものと想定することができる。これらの遺物から竪穴住居の時期は8世紀末～9世紀初頭頃と推定される。

#### A区第12号竪穴住居跡（第66・67図）

A区の第12号竪穴住居跡はAS-22・23・AT-23グリッド、調査区の西側付近に位置する。

他の遺構との重複関係はないが、南半分が調査区域外に至る。

覆土はロームブロックを含んだ黒褐色土を主体とする。平面形は残存範囲から推定すると隅丸長方形とみられる。残存規模は長軸長2.80m、短軸長1.60m、深さ0.30mである。主軸方位はN-72°-Eを指す。

カマドは東辺に設置されている。残存規模は長さ1.78m、幅0.90mで燃焼部の深さは0.30mであ

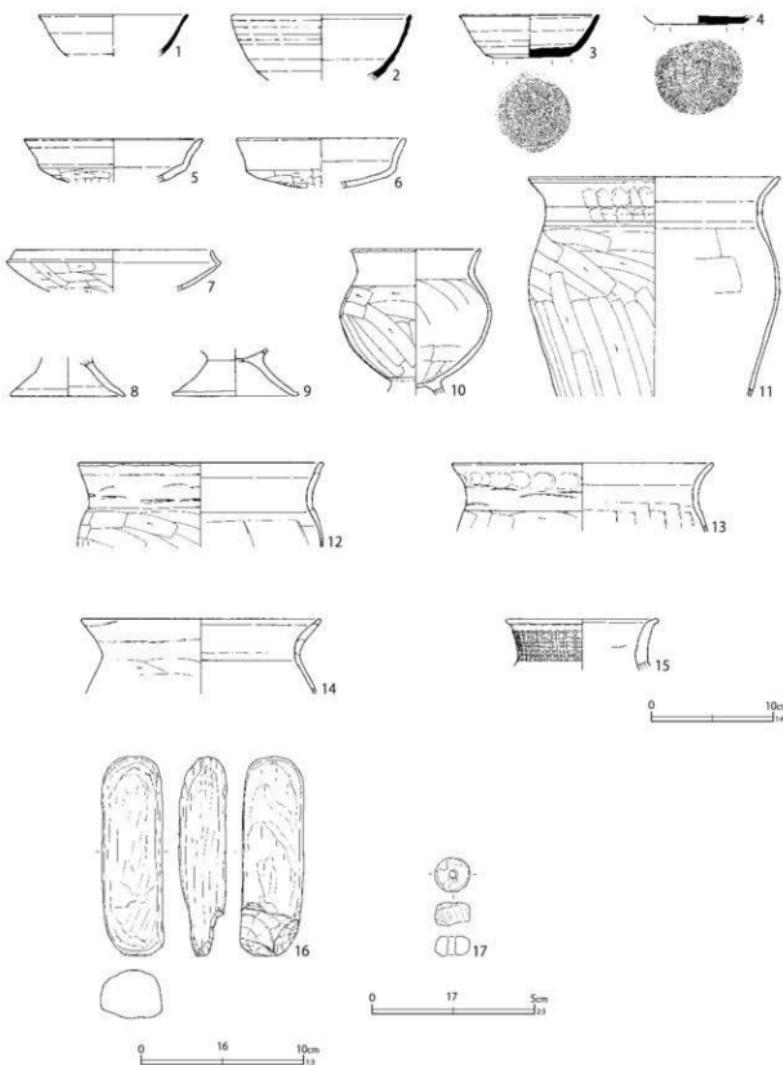
る。燃焼部は住居の外側に張り出すように構築されている。袖は左袖のみ確認された。

貯蔵穴は検出されなかった。柱穴はカマド右側付近より1基検出された。壁溝は検出された範囲ではカマド部分以外で検出されたことから全周していた可能性がある。規模は、幅は0.20m～0.30m、深さは0.05m～0.20mである。

遺物は須恵器と鉄製品が出土している。図示できる土師器は出土していない。

第67図1～3は須恵器の壺である。いずれも底部回転糸切り無調整である。产地は1と3は南比企窯、2は東金子窯である。4は須恵器壺の底部で高台が付く。产地は南比企窯とみられる。

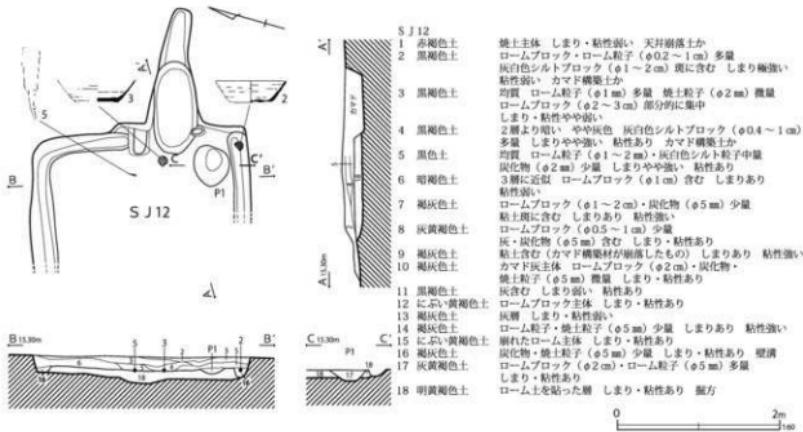
1はカマドの左袖付近、4はカマドの右袖付近からの出土である。また、3もカマドの燃焼部の手前、2も壁溝の西端でカマドに近接した場所からの出土である。



第65图 A区第3号竖穴住居出土遗物

第26表 A区第3号竪穴住跡出土遺物観察表 (第65図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(12.0)	[3.4]	—	IJK	20	普通	灰	d 南北企業産	
2	須恵器	壺	(14.5)	[5.3]	—	IJK	30	普通	灰	c 南北企業産 重ね焼き痕	
3	須恵器	壺	11.2	3.5	6.2	I	100	普通	褐灰	カマドNo 9 南北企業産 底部回転糸切り外周ヘラケズリ ヘラ記号(+/-)か×	99-5
4	須恵器	壺	—	[0.8]	7.2	IJK	20	普通	灰	No 4 南北企業産 底部糸切り外周ヘラケズリ	99-5
5	土師器	壺	(14.0)	[3.5]	—	CHI	20	普通	にぶい黄橙	b・c	
6	土師器	壺	(13.7)	[4.0]	—	CHI	20	良好	にぶい褐	No 2 盖模倣壺	
7	土師器	壺	(16.0)	[3.4]	—	AI	20	普通	灰黄褐	d 身模倣壺	
8	土師器	台付壺	—	[3.2]	9.4	ACI	10	普通	黒褐	d	
9	土師器	台付壺	—	[3.9]	(10.0)	CHI	10	普通	にぶい黄橙	a	99-5
10	土師器	台付壺	(10.4)	[11.9]	—	AC	40	普通	にぶい橙	カマドNo 1・4・5	99-5
11	土師器	甕	(20.4)	[17.8]	—	ACI	30	良好	黒褐	b・カマド・No 4・6・7・8 北武藏型甕	99-5
12	土師器	甕	(20.0)	[6.8]	—	AII	20	普通	にぶい褐	カマド・No 4・6 北武藏型甕	
13	土師器	甕	(21.2)	[5.5]	—	AC	20	普通	にぶい褐	a・No 3 北武藏型甕 金雲母多量	
14	土師器	甕	(19.4)	[6.1]	—	AI	10	良好	褐	カマド・No 7 北武藏型甕 金雲母多量	
15	土師器	甕	(12.1)	[4.2]	—	AIII	20	普通	灰褐	No 6	
16	石製品	蔽石	長さ12.2 幅3.9 厚さ3.0 重さ219.0 残存100						No 7 緑泥片岩		99-5
17	石製品	臼玉	長1.1 短1.1 厚0.7 孔径0.3 重1.2 残存100						No 1 滑石 中C斜2c II		



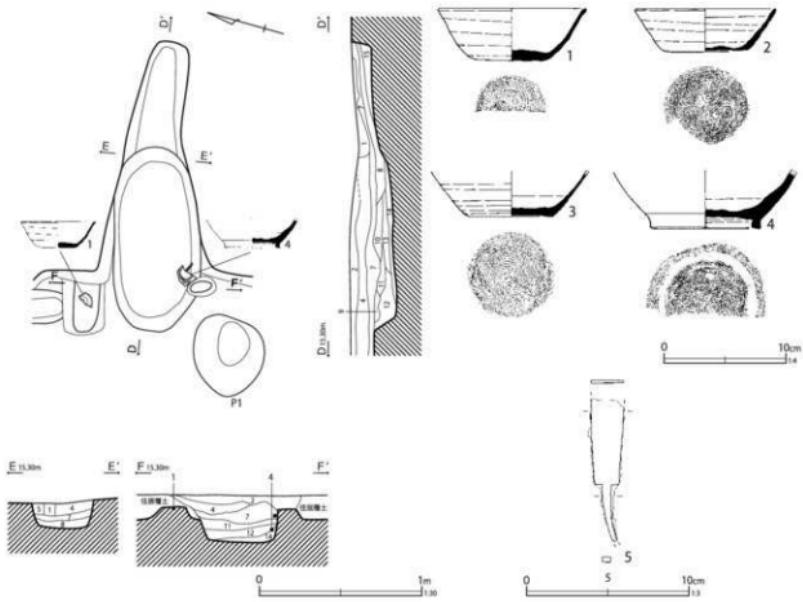
第66図 A区第12号竪穴住跡

5は鉄鏃である。先端部は欠損している。広根式が斧箭式のタイプとみられる。

時期は須恵器の年代から、9世紀前半頃と推定される。

## (2) 井戸跡

A区において奈良時代・平安時代に位置付けられると想定される井戸跡は5基検出された。遺物が伴う構造は少ないが、重複関係などから時期を



第67図 A区第12号竪穴住居跡カマド・出土遺物

第27表 A区第12号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第67図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	鉢土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	12.0	4.3	5.6	GJ	50	普通	灰白	No.6 南北企窓産 底部回転無調整	100-1
2	須恵器	壺	11.4	3.5	6.8	G	70	普通	褐灰	No.3 東金子窓産 底部回転無調整	100-1
3	須恵器	壺	—	[3.8]	6.8	AJ	60	普通	褐灰	No.4 南北企窓産 底部回転無調整	100-1
4	須恵器	壺	—	[4.9]	9.0	EJ	5	普通	灰褐	No.2 南北企窓産	100-1
5	鉄製品	鐵錐	長さ[8.8] 幅2.0 厚さ0.2 重さ10.1				No.5				

位置付けたが、飛鳥時代以前や中世以降の時期の可能性もある。形状は、上端が0.50m~0.70m程度の小型のタイプ、1.00m以上のタイプに分かれる。

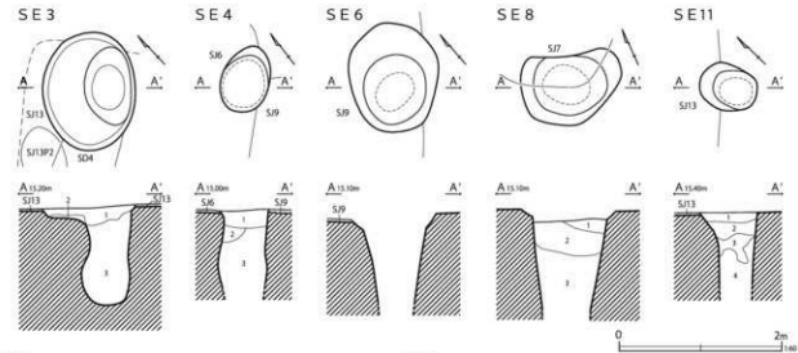
また、遺構検出面から1.2mほどで底面に到達するタイプと、そこからさらに下層に至り、安全対策のため掘削できなかったタイプがある。このような遺構の違いは古墳時代・飛鳥時代の様相と同様である。

第28表に検出グリッド、平面形、規模、深さを示した。以下にそれぞれの井戸跡の特徴、重複関係、出土遺物について記す。

#### A区第3号井戸跡 (第68図)

上端が1.14mであるが、検出面から0.10m下からはほぼ垂直に掘削されている。下半分がやや袋状に広がる。深さ1.22mで底面に到達している。

遺物は土師器の壺と甕の破片が出土している。



- SE 3**
- 1 黄褐色土 半や明るい ローム粒子（φ2 mm）・炭化物粒（φ1 cm） 多量  
成化物（φ0.5 cm）少種 しまりなし 粘性あり
  - 2 黒褐色土 ロームブロック（φ5 cm）多量 しまりなし 粘性やや弱い  
井戸口部が部分的に崩落してブロック状に堆積したものか
  - 3 黒褐色土 均質 道路小石（φ2 cm）微量 しまりなし 粘性やや弱い
- SE 4**
- 1 成黄褐色土 ロームブロック（φ0.5～5 cm）多量 しまり・粘性あり  
2 成黄褐色土 1層よりロームブロックやや小かい しまり・粘性あり  
3 黑褐色土 ローム粒子（φ5 mm）少種 しまりやや弱い 粘性強い
- SE 6**
- 1 成黄褐色土 ロームブロック含む しまり・粘性あり  
2 成黄褐色土 ロームブロック多量 黒色土層間に含む しまり・粘性あり  
3 黑褐色土 含有物少量 しまりやや弱い 粘性強い
- SE 8**
- 1 成黄褐色土 ロームブロック含む しまり・粘性あり  
2 成黄褐色土 ロームブロック多量 黒色土層間に含む しまり・粘性あり  
3 黑褐色土 含有物少量 しまりやや弱い 粘性強い
- SE 11**
- 1 に赤い黄褐色土 ローム粒子（φ2 mm）多量 柄暗色不定形凹槽（φ1 cm）少量  
成化物（φ2 mm）微量 しまりあり 粘性やや弱い
  - 2 に赤り黄褐色土 1層よりやや暗くローム粒子少ない 赤色粒子（燒土ではない）  
(φ2 mm) 少種 3層由赤色粒子が繰り返したものが  
シルト質～粘質土 底・燒土・炭化物互層 炭化物（φ5 mm）・  
成化物層・上層に赤色鉱物粒子（φ1～2 mm）(上層赤色粒子と  
同様) 少量 しまり弱い 粘性強い
  - 3 淡灰褐色土 均質 ロームブロック（φ0.2～1 cm）間に含む しまりなし  
粘性やや弱い
  - 4 暗褐色土

第68図 A区井戸跡

第28表 A区井戸跡一覧表

造構名	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複造構	造構名	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複造構
3	AT-24	不整形	上1.50 F0.55	上1.14 F0.40	1.22	SJ13 SD4	8	AT-24	不整形	上1.24 F0.58	上0.80 下0.45	[1.20]	SJ7
4	AT-24	不整形	上0.82 F0.58	上0.60 F0.52	[0.90]	SJ6 SJ9	11	AU-24	不整形	上0.72 下0.40	上0.50 下0.32	[0.90]	SJ13
6	AT-24	不整形	上1.34 F0.50	上1.10 F0.40	[1.08]	SJ9							



第69図 A区第3号井戸跡出土遺物

第29表 A区第3号井戸跡出土遺物観察表 (第69図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土器	瓶	—	[4.1]	(6.0)	AC1	5	普通	にぶい黄褐	下端に穿孔	100-2
2	土器	甕	—	(4.4)	—	AC1	5	普通	にぶい褐	北武型甕 脚部に径4mmの焼成前穿孔	100-2

第69図1は瓶の下半片である。端部に径8mmの穿孔がみられる。2は甕の胴部破片で北武藏型甕とみられる。胴部に径4mmの焼成前穿孔がみられる。出土している2点の土器片いずれからも穿孔がみられ、同様の目的で使用されていた可能性があるが詳細は不明である。

時期は北武藏型甕から8世紀末から9世紀初頭頃とみられる。

#### A区第4号井戸跡（第68図）

上端が0.6m～0.82mの小型タイプではほぼ垂直に掘削されている。深さ0.90mでは底面に到達していない。遺物は出土していない。

時期は第6号竪穴住居跡より新しいことから7世紀中頃以降とみられる。

#### A区第6号井戸跡（第68図）

上端が1.10m～1.34mで下層に至るにつれて狭くなる。深さ1.08mでは底面に到達していない。遺物は出土しなかった。

時期は第9号竪穴住居跡より新しいことから7世紀中頃以降とみられる。

#### A区第8号井戸跡（第68図）

上端が0.80m～1.24mのタイプで下層に至るにつれて狭くなる。深さ1.20mでは底面に到達していない。遺物は出土しなかった。

時期は第7号竪穴住居跡より古いことから7世紀前半～中頃以前とみられる。

#### A区第11号井戸跡（第68図）

上端が0.50m～0.72mの小型タイプではほぼ垂直に掘削されている。深さ0.90mでは底面に到達していない。

遺物は細片のため図示できなかったが、比企型坏の口縁部片、土師器甕の口縁部片などが出土している。

時期は第13号竪穴住居跡より新しいことから7世紀中頃以降とみられる。

### （3）溝跡

A区において奈良時代・平安時代に位置付けら

れると想定される溝跡は3条検出された。

第31表に検出グリッド、方位、長さ、幅、深さを示した。

#### A区第1号溝跡（第70・71図）

A区第1号溝跡は、走行方位はN-40°-Wを指す。南東から北西方向に延びている。南東端が調査区域外へ至るため全長は不明である。北西端は調査区域内で立ち上がる。A区集落域北側の地形肩部端をほぼ直線的に走る。

断面形状は底面が逆台形となる。覆土は黒褐色土と青灰色粘土を主体とする。重複関係は、第3号竪穴住居跡、AS-25P2と重複しこれより新しい。第2号溝跡とほぼ並行して走り、北西端の立ち上がり地点も同じである。

遺物は須恵器と土師器が出土している。第72図1と2は須恵器甕の胴部片である。1は外面に平行タタキ痕、内面に同心円文アテ具痕と自然軸がみられる。2は外面に平行タタキ痕とカキ目、内面に同心円文アテ具痕がみられる。3は土師器の坏で北武藏型坏である。口縁部が垂直に立ち上がり、体部にヘラケズリ調整がみられる。4は土師器の皿である。体部で緩やかに屈曲し口縁部が外側へ広がる。5は残存率が高い土師器の鉢である。

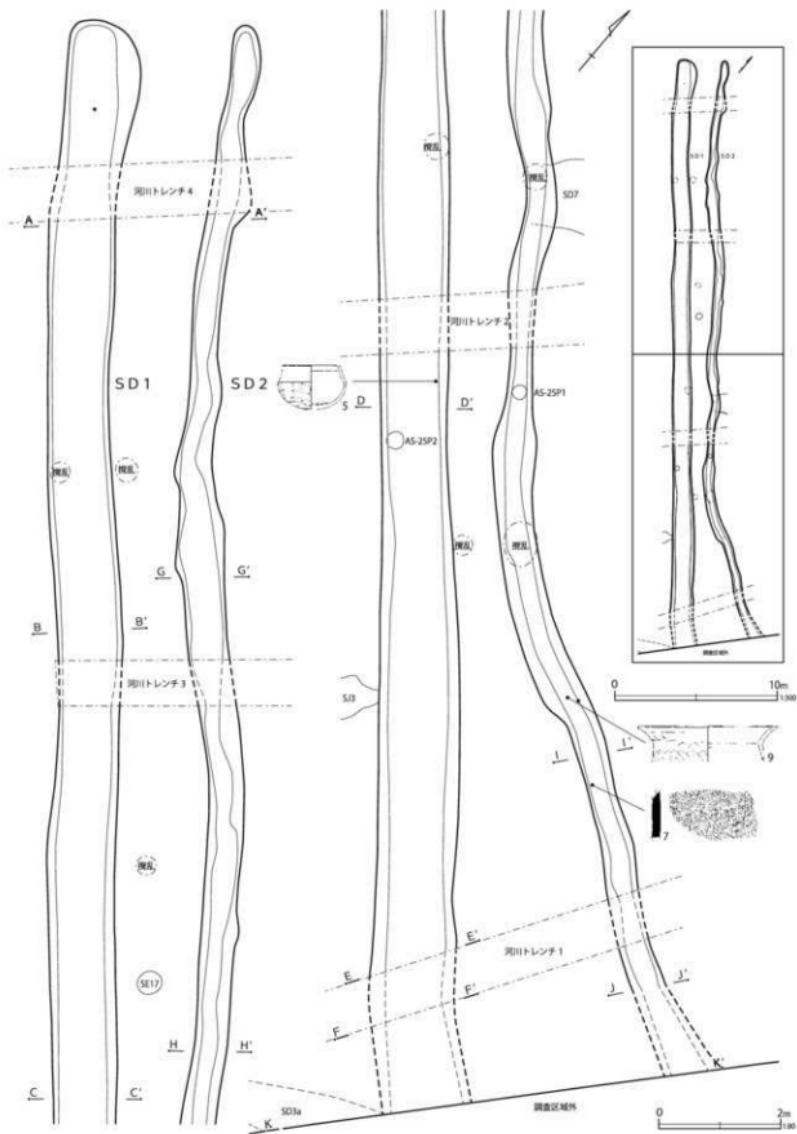
時期は土師器からみると、8世紀初頭頃に位置付けられる。

#### A区第2号溝跡（第70・71図）

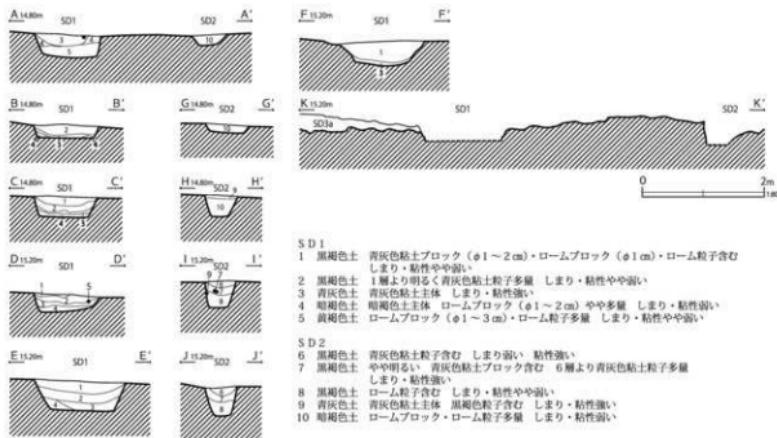
A区第2号溝跡は、走行方位はN-40°-Wを指す。南東から北西方向に延びている。南東端が調査区域外へ至るため全長は不明である。北西端は調査区域内で立ち上がる。第1号溝跡と同様にA区集落域北側の地形肩部端を走るが、第1号溝跡と比べやや歪んで走り、南側の方が東側へ振れている。

断面形状は底面が逆台形となる。覆土は黒褐色土を主体とする。重複関係は、第7号溝跡、AS-25P1と重複しこれより新しい。

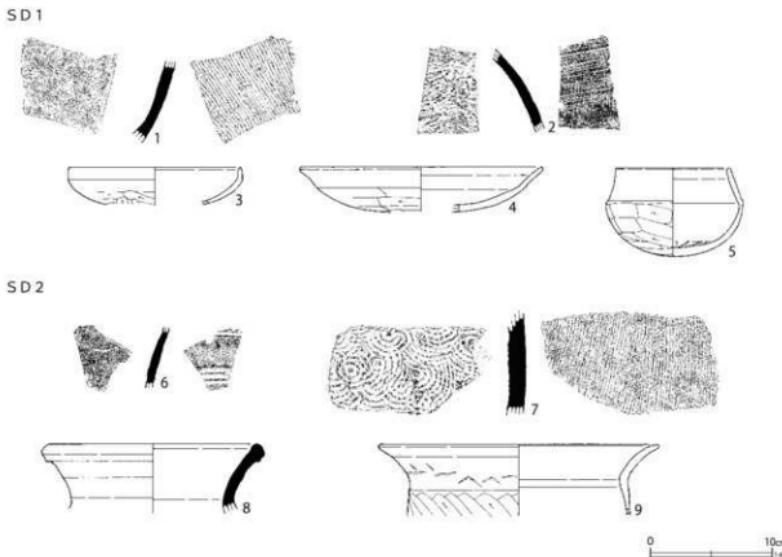
遺物は須恵器と土師器が出土している。第72図



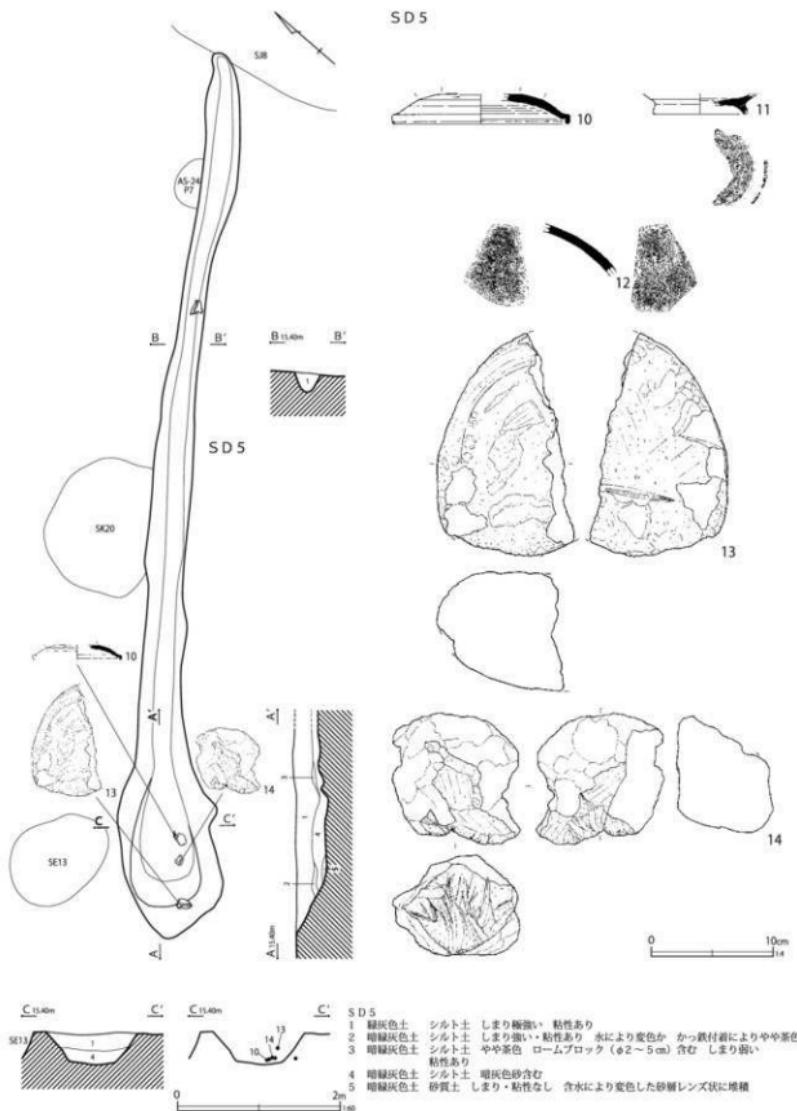
第70図 A区第1・2号溝路（1）



第71図 A区第1・2号溝跡(2)



第72図 A区第1・2号溝跡出土遺物



第73図 A区第5号溝跡・出土遺物

第30表 A区第1・2・5号溝跡出土遺物観察表（第72・73図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考				図版		
										SD1・AT-25	外面平行印き 内面同心円文	後ナデ・自然釉	SD1・AT-25	外面平行印き後カキ目 内面同心円文		
1	須恵器	甕	—	[6.6]	—	I	5	良好	灰	SD1・AT-25	外面平行印き 内面同心円文	後ナデ・自然釉	SD1・AT-25	外面平行印き後カキ目 内面同心円文		
2	須恵器	甕	—	[6.8]	—	IK	5	良好	灰	SD1・AT-25	外面平行印き後カキ目 内面同心円文	SD1・AT-25	外面平行印き後カキ目 内面同心円文			
3	土師器	壺	(14.0)	[3.0]	—	ACI	15	普通	橙	SD1	北武藏型壺		SD1・AT-25		100-3	
4	土師器	壺	(19.7)	[3.7]	—	ACI	20	普通	橙	SD1	北武藏型壺		SD1・AT-25		100-3	
5	土師器	鉢	9.3	7.2	—	CHI	90	良好	橙	SD1	No 1		SD1	No 1	100-3	
6	須恵器	甕	—	[4.9]	—	I	5	良好	灰	SD2	外面波状文		SD2	外面波状文	100-3	
7	須恵器	甕	—	[8.2]	—	I	5	良好	灰	SD2	No 1	末野窯産か 外面平行印き 内面同心円文	SD2	No 1	末野窯産か 外面平行印き 内面同心円文	100-3
8	須恵器	甕	(17.2)	[5.6]	—	BI	10	普通	にぶい褐	SD2	末野窯産か		SD2	末野窯産か		100-3
9	土師器	甕	(22.4)	[5.8]	—	ACHI	20	良好	にぶい褐	SD2	No 2	「く」の字状口縁甕 金雲母	SD2	No 2	「く」の字状口縁甕 金雲母	100-3
10	須恵器	蓋	(14.2)	[2.4]	—	I	30	良好	灰	SD5	No 1	東金子窯産か 肩部ヘラケズリ	SD5	No 1	東金子窯産か 肩部ヘラケズリ	100-3
11	須恵器	高台付壺	—	[1.7]	(7.3)	EIK	20	普通	灰白	SD5	末野窯産か		SD5	末野窯産か		100-3
12	須恵器	壺	—	[4.2]	—	I	5	良好	灰オリーブ	SD5	外表面平行印き 内面無文當て具痕	後ナデ	SD5	外表面平行印き 内面無文當て具痕	後ナデ	
13	石製品	不明	長さ[18.3] 幅[11.3] 厚さ10.4 重さ142.0 残存50				SD5 No 5 安山岩 全体被熱 黒色化				SD5 No 5 安山岩 全体被熱 黒色化					
14	石製品	不明	長さ[10.7] 幅[10.5] 厚さ9.5 重さ146.5				SD5 No 4 安山岩か				SD5 No 4 安山岩か					

第31表 A区溝跡一覧表

No	グリッド	方位	方位	長さ(m)	幅(m)		深さ(m)		重複遺構					
					最大	最小	最大	最小						
1	AQ-24 AR-23・24 AS-24・25 AT-25・26	N-40° -W	—	[36.00]	0.70	0.50	0.46	0.27	SJ3	SD3a	AS-25P2			
2	AQ-24 AR-24・25 AS-25 AT-25・26	N-40° -W	—	[36.00]	0.80	0.36	0.48	0.16	SD7	AS-25P1				
5	AS-23・24	N-57° -E	—	[10.90]	1.10	0.30	0.36	0.21	SJ8	SK20	AS-24P7			

6は甕の頸部である。外面に波状文がみられる。7は須恵器甕の胴部片である。外面に平行タタキ痕、内面に同心円文アテ具痕がみられる。8は須恵器甕の口縁部である。7と8の須恵器はいずれも末野窯産の製品とみられる。9は土師器甕の口縁部で「く」の字状口縁部を持つ。

時期は第1号溝跡よりやや古い時期に位置付けられるが、さらに遡る可能性もある。

#### A区第5号溝跡（第73図）

A区第5号溝跡は、走行方位はN-57° -Eを指す。南西から北東方向に延びている。全長は10.90mで、調査区域内において両端ともに立ち上がる。断面形状は南西側で底面が逆台形、北東

側で葉研形となり、途中で形状が変わる。覆土は暗緑灰色土を主体とする。重複関係は、第8号竪穴住居跡、第20号土壙、AS-24P7と重複し、これより新しい。

遺物は須恵器と安山岩製の不明石製品が出土している。第73図10は須恵器の蓋である。ツマミ部分は欠損している。東金子窯産の製品とみられる。11は高台付壺である。末野窯産の製品とみられる。12は須恵器壺の肩部片である。13と14は安山岩製の石製品とみられるが、擦痕や刃物痕のような痕跡がみられることから砥具として使用された可能性がある。時期は、須恵器から8世紀末～9世紀初頭頃とみられる。

#### (4) 土壙

A区において奈良時代・平安時代と想定できる土壙は1基のみ検出された。

##### A区第11号土壙 (第74図)

平面形は梢円形の形状を呈する。覆土は暗褐色土や黒褐色土を主体とし、炭化粒子や獸骨片を含む。古墳時代や飛鳥時代の土壙に伴うような様相とは異なるので、埋没時に流れ込んだものとみられる。重複関係は第7号土壙と重複し、これより新しい。

遺物は土師器のほかに羽口や図示できなかったが鉄滓などの鍛冶関連の遺物が出土している。第75図1は土師器の壺である。内外面に赤彩が施された比企型壺の破片である。2は土師器の甕である。胸部にヘラケズリ調整がみられる。3は羽口の破片である。周辺に黒色で気泡のあるガラス化した鉄滓が付着している。

図示できなかった破片資料もいくつか出土しており、土師器の模倣壺口縁部片が6点、羽口の破片が3点、鉄滓が18点出土している。これらの鍛冶関連遺物は第1号鍛冶関連遺構から混入したとみられる。時期は8世紀代以降に位置付けられると思われる。

第32表 A区第11号土壙出土遺物観察表 (第75図)

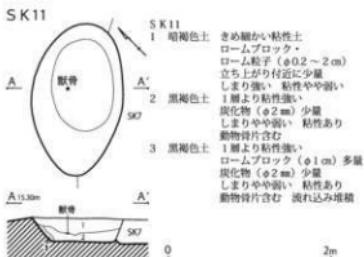
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(11.7)	[2.9]	—	HII	5	普通	赤褐	比企型壺 内外面赤彩	
2	土師器	甕	(18.8)	[6.8]	—	ACI	10	普通	にぶい黄褐	AT-23	
3	土製品	羽口					1	普通	黒	周辺に黒色で気泡のあるガラス化した鉄滓付着 内面酸化鉄色	
			長さ[5.0] 幅[4.8] 厚さ4.3 重さ54.5				10				

第33表 A区土壙一覧表

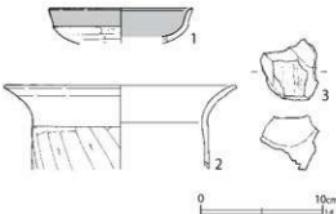
遺構名	グリッド	平面形	長軸方位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
II	AT-23	梢円形	N-46°-E	1.87	1.12	0.30

#### (5) 鍛冶関連遺構群

A区において検出された鍛冶関連遺構群とは、複数の炉跡、土壙やピットから構成され、その周辺から羽口や鍛冶滓、椀形鍛冶滓などが集中的に分布していた範囲とした。これらを包括する竪穴



第74図 A区第11号土壙



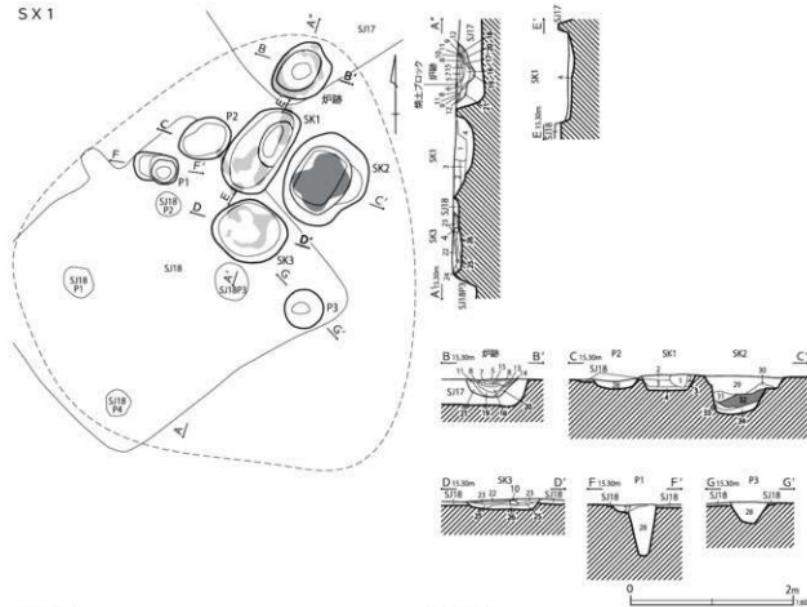
第75図 A区第11号土壙出土遺物

住居跡や掘立柱建物跡などの施設的な遺構は検出されなかった。

##### A区第1号鍛冶関連遺構 (第76図)

AS-23グリッドに位置する。炉跡1基、土壙3基、ピット3基から構成される。

## S X 1



## S X 1 - S K 1

- 1 にぶい赤褐色土 鉄滓極多量 しまり強い 黏性なし 鋼により土硬化
  - 2 にぶい赤褐色土 1層より多い 炭化物（φ5mm）少量 しまり強い  
粘性弱い 鋼により土硬化
  - 3 黒色土 炭化物（φ5mm）多量 しまり・粘性あり
  - 4 灰黄褐色土 炭化物（φ5mm）微量 しまり・粘性あり  
鉄分多量 炭化物（φ5mm）微量 しまり・粘性あり
- S X 1 - S K 2
- 5 灰白色土 球状の鉄（φ1cm）中量 しまりあり 黏性強い
  - 6 褐灰色土 炭化物（φ5mm）多量 球状の鉄（φ1cm）中量 しまりあり 黏性強い
  - 7 褐灰色土 粘土ブロック（φ1cm）多量 炭化物・燒土粒子（φ5mm）・球状の鉄（φ1cm）中量 しまりあり 黏性強い
  - 8 灰黄褐色土 烧土粒子（φ1cm）と崩れた炉壁の混合層 しまり・粘性あり  
しまり 強度弱い が厚
  - 9 褐灰色土 粘土ブロック（φ1cm）と崩れた炉壁の混合層 しまり・粘性あり  
しまり 強度弱い が厚
  - 10 从黄褐色土 しまり強い 黏性弱い が厚
  - 11 棕色土 しまり強い 黏性弱い が厚、被熱面か
  - 12 褐灰色土 燃土粒子（φ5mm）微量 しまり・粘性あり
  - 13 明褐色土 砂層 しまり強い 黏性なし 鋼による赤色化か  
砂層 しまり強い 黏性なし
  - 14 灰色土 被熱した粘土（灰土） しまり・粘性弱い 粘土貼り付け
  - 15 黑色土 被熱した粘土（灰土） しまり・粘性弱い 粘土貼り付け
  - 16 にぶい黄褐色土 しまりあり 黏性弱い 粘土貼り付け
  - 17 にぶい黄褐色土 粘土とロームの混合層 しまりあり 黏性あり 壁の崩落土か  
粘土貼り付け
  - 18 灰黄褐色土 しまりあり 黏性弱い 被熱した粘土 粘土貼り付け
  - 19 灰白色土 燃土ブロック（φ0.5～1.5cm）多量 しまり・粘性あり
  - 20 褐灰色土 被熱した粘土 しまりあり 黏性弱い 粘土貼り付け
  - 21 棕色土

## S X 1 - S K 3

- 22 黒褐色土 炭化物・鐵粒子（φ5mm）少量 しまり・粘性あり
- 23 灰白色土 23層との境に炭が堆積
- 24 黑褐色土 22層間に 25層との境に炭層堆積 しまり・粘性あり  
ローム粒子（φ3mm）微量 しまり・粘性あり
- 25 黑褐色土 鉄状の炭多量 烧土粒子（φ5mm）少量 しまり・粘性あり  
鉄状の炭多量 烧土粒子（φ5mm）微量 しまり・粘性あり
- 26 にぶい黄褐色土 ローム上に近似 炭化物（φ3mm）微量 しまり・粘性あり  
粘性やや弱い

## S X 1 - P 1 ~ 3

- 27 褐灰色土 炭化物（φ5mm）多量 烧土粒子（φ5mm）微量 しまり・粘性弱い 動性あり
- 28 黑褐色土 ロームブロック（φ0.5～1cm）多量 しまり・粘性あり

## S X 1 - S K 2

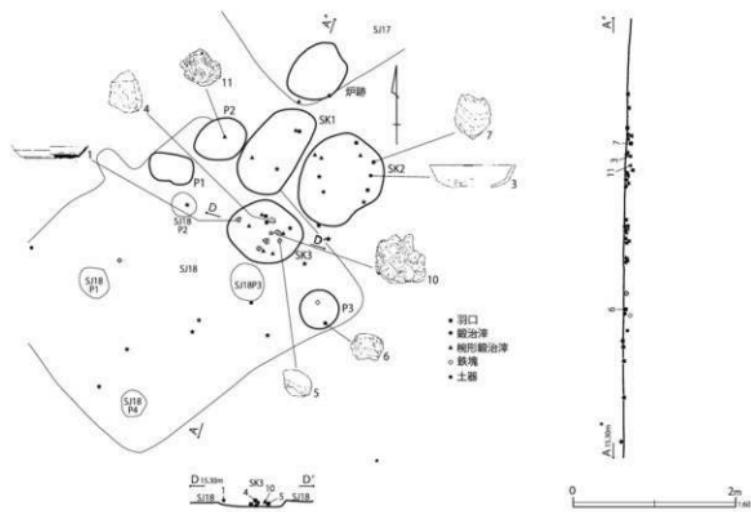
- 29 黑褐色土 ローム粒子（φ5mm）少量 炭化物（φ5mm）微量 しまり・粘性弱い
- 30 褐灰色土 粘土ブロック全体 しまり・粘性あり
- 31 褐灰色土 粘土ブロック（φ0.5～1cm）多量 しまり・粘性あり  
充填された粘土層 炭化物（φ0.5mm）中量 しまりあり  
粘性強い
- 32 黄褐色土
- 33 灰褐色土 炭化物（φ5mm）中量 しまりあり 黏性強い  
ガリガリしている 灰色の粒子（φ1～3mm）多量
- 34 黑褐色土 炭化物（φ5mm）少量 しまり・粘性あり

第76図 A区第1号鍛冶関連遺構

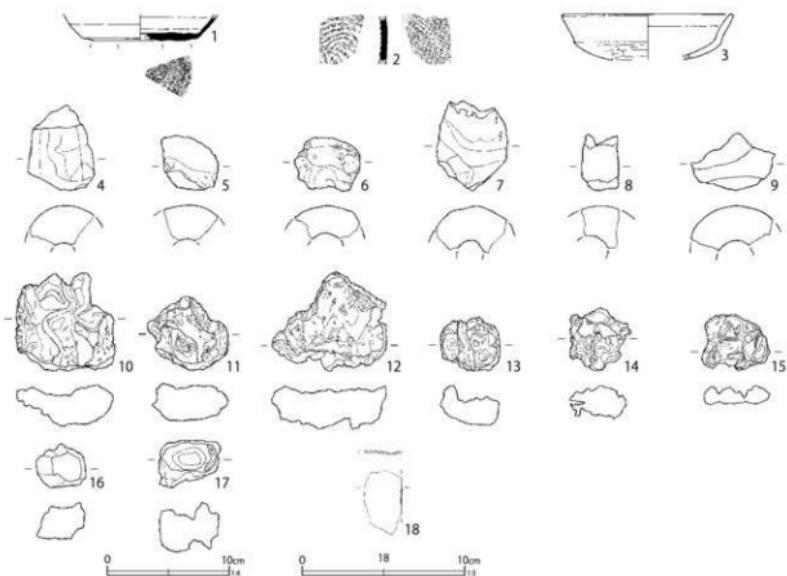
炉跡は第1号鍛冶関連遺構群のなかで北東側に位置する。覆土は灰白色土や褐灰色土、灰黄褐色土が確認されるとともに、被熱した炉壁や炭化物や焼土を含んだ土で埋没している。しかし、この

炉跡から図示できる遺物は出土していない。

第1号鍛冶関連遺構群に属する第1号土壙は炉跡と第3号土壙の間に位置する。鐵滓片などが含まれるが、炉跡とは異なり炉壁などは出土して



第77図 A区第1号鍛冶関連遺構遺物出土状況



第78図 A区第1号鍛冶関連遺構遺物

第34表 A区第1号鍛治関連遺構出土遺物観察表（第78図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	—	[2.1]	(8.0)	HII	10	普通	灰	炉2 No.7 南北企窓産か 底部回転糸切り外周ヘラケズリ	
2	須恵器	甕	—	[4.0]	—	HIIK	5	普通	黄灰	SK15 外面平行叩き 内面同心円文	
3	土師器	壺	(13.8)	[3.7]	—	CI	20	普通	にぶい橙	No.35 蓋模倣壺	
4	土製品	羽口	長さ6.8 幅5.3 厚さ3.0 孔径(2.4) 外径(7.0) 重さ84.2	HI	20	普通				炉2 No.1	
5	土製品	羽口	長さ4.5 幅4.2 厚さ2.9 孔径(2.4) 外径(7.8) 重さ48.3	HIIK	10	普通				炉2 No.4	
6	土製品	羽口	長さ4.0 幅5.3 厚さ2.2 孔径(2.6) 外径(6.8) 重さ44.3	HIIK	10	普通				No.1	
7	土製品	羽口	長さ6.4 幅5.7 厚さ2.7 孔径(2.0) 外径(7.4) 重さ126.3	HI	20	普通				No.4	
8	土製品	羽口	長さ4.1 幅3.0 厚さ2.4 孔径(2.6) 外径(8.2) 重さ38.4	HI	5	普通					
9	土製品	羽口	長さ4.6 幅6.6 厚さ2.8 孔径(2.8) 外径(8.0) 重さ56.0	HIIK	10	普通				SK15	
10	鉄津	楕形鍛治津	長さ7.9 幅7.9 厚さ2.9 重さ217.6 残存80							炉2 No.3	
11	鉄津	楕形鍛治津	長さ5.9 幅6.2 厚さ2.7 重さ121.0 残存70							No.29	
12	鉄津	楕形鍛治津	長さ7.7 幅9.4 厚さ3.0 重さ268.4 残存70							SK15	
13	鉄津	楕形鍛治津	長さ4.2 幅4.8 厚さ2.3 重さ63.3 残存80							SK15	
14	鉄津	楕形鍛治津	長さ5.1 幅4.4 厚さ2.4 重さ61.1 残存80							SK15	
15	鉄津	楕形鍛治津	長さ4.1 幅5.3 厚さ1.4 重さ44.4 残存50							SK15	
16	鉄津	楕形鍛治津	長さ3.5 幅4.0 厚さ2.5 重さ53.7 残存10							SK15	
17	鉄津	楕形鍛治津	長さ3.2 幅4.8 厚さ2.9 重さ76.4 残存50							SK15	
18	鉄製品	不明	長さ[4.0] 幅[2.3] 厚さ0.1 重さ5.5								

いない。

第2号土壙は第1号土壙の東隣に位置する。覆土は黒色土、褐灰色土を主体とする。炉壁片は出土していない。遺物は第78図3の土師器壺と7の羽口の破片を図示した。

第3号土壙は第1号鍛治関連遺構群に属する第1号土壙の南側に位置する。覆土は黒褐色土を主体とし、炉壁片などは出土しておらず炉跡とは異なる。遺物は第78図1・4・5・10が出土している。1は須恵器の壺で底部回転糸切り後外周ヘラケズリ調整がみられる。南北企窓産の製品とみられる。4と5は羽口の破片で、10は楕形鍛治津である。

他にピット3基を第1号鍛治関連遺構群としたが、規則性はなく建物跡に伴う可能性は低い。

## (6) 旧河川跡

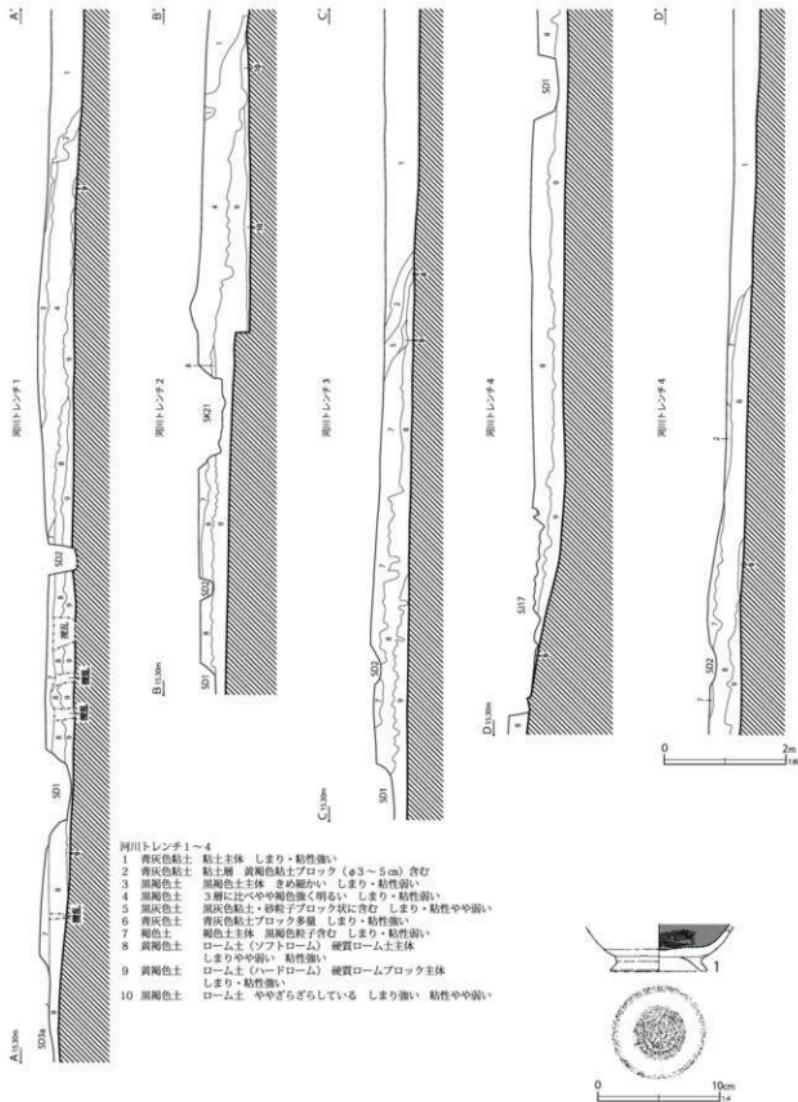
A区調査区の北東側約半分を占めている。埋没状況を確認するため、トレチを4本設定した。（第79・80図）遺構検出面を切り込むように青灰色粘土が堆積する。安全上の問題から断面図を記録することができなかった。遺構検出面から約2.2m～3.0m下まで掘削したが、ローム面を確認できなかった。

遺物はトレチ3から黒色土器が1点出土している。また、図示できなかったが、土師器甕の口縁部片などが出土している。出土した遺物から平安時代の9世紀代以降に埋没したとみられる。

なお、A区基本土層において確認されたIII-3層の淡灰褐色砂質・シルト土は、近世から近代の洪水とみられる。



第79図 A区第1～4号河川トレンチ（1）



第80図 A区第1～4号河川トレンチ・出土遺物（2）

第35表 A区河川トレンチ出土遺物観察表（第80図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考		図版
										トレンチ	3 黒色土器 ミガキ後内面黒色処理 底部指ナデ	
1	土師器	高台壺	—	[4.8]	7.8	AEHI	30	普通	灰黄褐			

## (7) ピット・グリッド検出面出土遺物

A区においてグリッドピットは、132基検出された。分布状況は第8・9図から示した。長径、短径、深さの規模は第36表に示した。全体的に各グリッドにまばらに分布しており、特定の範囲に偏っているという傾向はない。

遺物も図示できるものは少なく、年代の特定が困難なものが多いが、中世以降の遺物が一切出土していない点や他の遺構が6世紀後半～9世紀前半頃に収まることから、これらのピットも同様の時期に収まると推定される。

A区において、明確に建物跡や柵列のように並んだ配列のものは確認されなかつたため、これらピットの性格付けは難しい。

出土遺物はグリッド検出面及び検出面一括、表探遺物については、残存率が高いもの、特徴的なものを選び掲載した。第81図1は土師器の暗文皿である。AR-22グリッドから出土している。内面に螺旋及び放射状暗文がみられる。付近に位置する第20号豎穴住居跡などに帰属するものの可能性がある。

2～4はAR-23グリッドから出土している。2は土師器の壺でAR-23P7のグリッドピットから出土している。3は瓶の把手部分である。4は流紋岩製の有孔石砥である。下半分が欠損している。欠損部以外の面に擦痕と刃物痕がみられる。

5～9はAS-22グリッドから出土している。5は須恵器の壺身である。奈文研分類の壺Hに位置付けられる。6は底部回転糸切り後ナデ調整で糸切り跡を消している。7は壺身で奈文研分類の壺Gに位置付けられる。いずれも产地は木野窯産に位置付けられる。8は須恵器甕の胴部片、9は土師器の壺である。10～16はAS-23グリッドか

ら出土している。10は須恵器の壺蓋である。产地は末野窯産とみられる。11は須恵器甕の胴部片である。AS-23P3から出土している。外面に別個体の破片が着目している。12は土師器壺で北武藏型壺、13は蓋模倣壺でAS-23P4から出土している。14は暗文皿である。15は縄文土器の破片、16は角閃石ディサイトの磨石である。

17はAS-24グリッドから出土している。須恵器の壺身である。18はAS-25グリッドから出土している。北武藏型皿である。19～21はAT-23グリッドから出土している。19は須恵器の壺蓋で天井部分に「升」のようなヘラ記号がみられる。欠損しているため全容は不明である。20は土師器壺で北武藏型壺。21は暗文杯である。

第82図22・23はAT-24グリッドから出土している。縄文土器の破片である。24・25はAT-25グリッドから出土している。25は臼玉である。側面形は平玉形で、側面の研磨は縱方向に施されている。孔面には両面とも研磨は施されていない。穿孔は片側穿孔で錐先貫通である。

26・27はAU-24グリッドから出土している。26は蓋模倣壺で27は比企型壺である。28～32はAU-25グリッドから出土している。28は須恵器の蓋で末野窯産の製品とみられる。29は土師器の壺、30は縄文土器の鉢である。31と32は石器で31は黒曜石の剥片、32はチャート製の石鏃である。33から44は表探資料である。土師器の他に染付磁器や縄文土器が確認されている。

今回の調査区からは、縄文時代の遺構は検出されなかつたが、縄文土器や石器が出土していることから、付近に縄文時代の遺跡が所在する可能性がある。

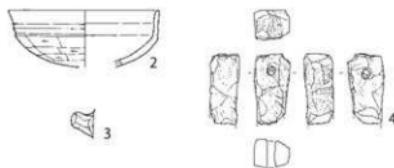
第36表 A区ピット計測表

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
AR-22	P 1	72	62	64	AS-24	P 7	62	60	64	AT-25	P 7	38	38	37
	P 2	53	48	56		P 8	68	66	18		P 8	52	40	49
	P 3	55	35	20		P 9	28	28	7		P 9	46	40	12
AR-23	P 1	60	54	100	AS-25	P 10	44	34	42	AT-23	P 10	42	36	24
	P 2	64	54	20		P 1	24	23	52		P 11	18	17	10
	P 3	60	54	66		P 2	29	28	40		P 12	33	32	14
	P 4	46	34	48		P 3	48	45	100		P 13	26	25	14
	P 5			欠番		P 4	50	36	32		P 14	40	36	12
	P 6	72	60	29		P 5	29	27	22		P 15	58	40	13
	P 7	46	42	76		P 6	22	20	14		P 16	36	32	10
	P 8			欠番		P 7	51	28	26		P 17	30	30	17
	P 9	46	40	72		P 1	44	42	30		P 18	28	26	20
AR-24	P 1	18	16	18	AT-23	P 2	40	40	28	AU-24	P 19	16	16	22
	P 2	44	38	37		P 3	42	34	33		P 20	19	19	50
	P 3	28	24	28		P 4	41	[38]	10		P 1	38	38	28
	P 4	20	16	11		P 5	64	60	17		P 2	34	29	28
	P 5	28	18	22		P 6	37	36	20		P 3	40	33	54
	P 6	44	40	27		P 7	38	35	42		P 4	50	40	10
	P 7	34	30	24		P 8	68	56	74		P 5	36	32	29
	P 8	44	34	8		P 9			欠番		P 6	58	40	14
	P 9	22	18	8		P 10	18	17	10		P 7	36	32	13
	P 10	34	26	18		P 11	28	26	8		P 8	40	36	12
	P 11	34	25	24		P 12	46	36	35		P 9	23	19	8
	P 12	30	22	13	AT-24	P 1	42	40	22		P 10	28	24	10
	P 13	26	22	8		P 2	42	42	82		P 11	38	32	38
	P 14	26	24	18		P 3	84	58	22		P 12	32	30	30
	P 15	36	30	37		P 4	26	20	14		P 13	54	44	30
AS-22	P 1	36	35	37		P 5	42	34	33	AU-25	P 14	92	64	38
AS-23	P 1	55	38	40		P 6	84	64	25		P 15	26	25	18
	P 2	59	46	60		P 7	44	34	15		P 16	39	30	20
	P 3	45	30	16		P 8	32	31	30		P 17	46	(26)	17
	P 4	60	50	38		P 9	20	18	8		P 18	34	30	16
	P 5	56	47	32		P 10	30	30	20		P 19	50	44	18
	P 6	30	27	19		P 11	68	56	18		P 1	37	34	14
	P 7			欠番		P 12	50	44	92		P 2	28	26	18
	P 8			欠番		P 13	38	26	9		P 3	40	35	42
	P 9	48	42	90		P 14	40	36	38		P 4	54	48	35
	P 10	40	34	30		P 15	38	38	32		P 5	57	52	76
	P 11	51	42	17		P 16	44	41	[30]		P 6	62	55	46
	P 12	45	30	50		P 17	36	26	28		P 7	40	30	20
AS-24	P 1	42	42	19	AT-25	P 1	32	30	20		P 8	38	34	10
	P 2	30	27	14		P 2	44	38	48		P 9	52	50	20
	P 3			欠番		P 3	42	38	24		P 10	46	42	8
	P 4	36	34	20		P 4	26	22	10		P 11	62	[50]	16
	P 5	36	32	25		P 5	55	48	80		P 12	15	14	30
	P 6	24	22	14		P 6	36	34	60		P 13	24	(14)	51

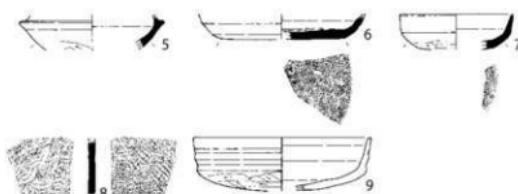
A R-22



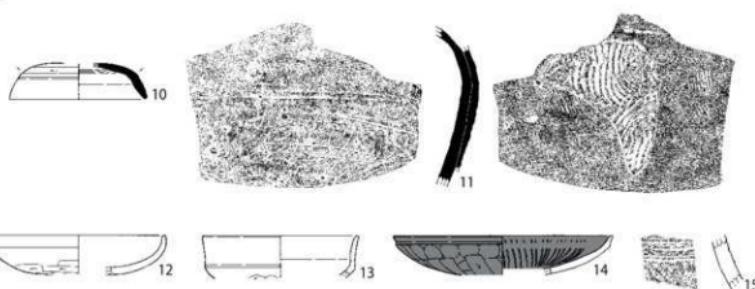
A R-23



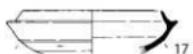
A S-22



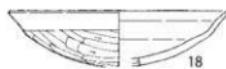
A S-23



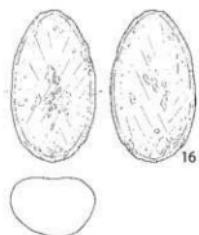
A S-24



A S-25

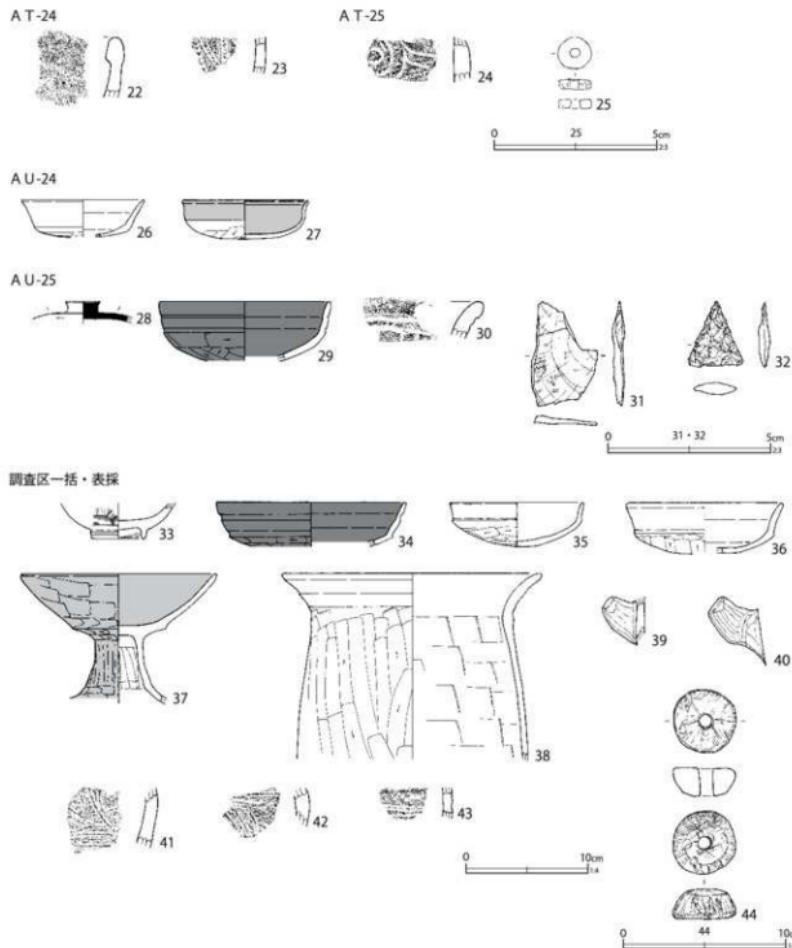


A T-23



0 4·16 10cm 0 10cm

第81図 A区グリッド・調査区一括・表採出土遺物（1）



第82図 A区グリッド・調査区一括・表探出土遺物（2）

第37表 A区グリッド出土遺物観察表（第81・82図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	皿	(17.8)	3.5	—	AIK	30	普通	灰黄褐	AR-22 内面螺旋暗文・放射状暗文 内外面黒色処理	
2	土師器	环	12.0	[4.6]	—	ACEI	50	普通	赤褐	AR-23P 7 有段口縁环	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
3	土師器	瓶	—	[2.4]	—	ACEH	5	普通	にぶい黄橙	AR-23 把手	
4	石製品		長さ [4.3]	幅2.2	厚さ1.8	孔径0.5	重さ22.9			AR-23 P 2 流紋岩 ミガキ 片面直 穿孔	
5	須恵器	壺	—	[2.9]	—	EI	20	普通	灰	AS-22 未野窯産 壺 H 底部手持ちヘ ラケズリ	
6	須恵器		—	[2.1]	(10.2)	BEI	30	普通	黄灰	AS-22 未野窯産	
7	須恵器	壺	(9.2)	[2.9]	(6.0)	I	20	良好	灰	AS-22 未野窯産 壺 G 底部手持ちヘ ラケズリ	
8	須恵器		—	[4.9]	—	IK	5	良好	灰白	AS-22 外面平行叩き 内面同心円文 底部手持ちヘラケズリ	
9	土師器	壺	(14.4)	[4.3]	—	ACI	30	普通	にぶい橙	AS-22 有段口縁壺	
10	須恵器		(11.0)	[2.9]	—	I	30	良好	黄灰	AS-23 未野窯産か 外面ヘラケズリ	
11	須恵器	甕	—	[13.0]	—	EIK	10	良好	灰	AS-23 P 3 №1	
12	土師器	壺	(14.0)	[3.2]	—	ACI	20	普通	橙	AS-23 北武藏型壺	
13	土師器		(12.6)	[3.4]	—	CHI	10	良好	明赤褐	AS-23 P 4 盖模倣壺	
14	土師器	皿	(17.8)	[3.2]	—	I	15	普通	にぶい黄橙	AS-23 放射状暗文 内外面黒色処理	
15	縄文土器		—	[4.3]	—	AGI	5	普通	橙	AS-23-S5c	
16	石製品	磨石	長さ9.3	幅5.2	厚さ3.9	重さ87.7	残存100			AS-23 角閃石デイサイト	
17	須恵器		(11.4)	[3.5]	—	EI	10	良好	灰	AS-24	
18	土師器	皿	(17.8)	[4.5]	—	CHI	25	良好	橙	AS-25 北武藏型皿 赤色粒子多量	
19	須恵器	蓋	—	[2.5]	—	AI	40	良好	灰	AT-23№2 未野窯産 ヘラ記号「升」	
20	土師器		(12.5)	[3.6]	—	AI	20	良好	褐灰	AT-23 北武藏型壺 内外面黒色処理	
21	土師器	壺	(13.0)	[2.8]	—	ACI	5	良好	橙	AT-23 放射状暗文	
22	縄文土器		—	[4.9]	—	CGI	5	普通	橙	AT-24 爪形文	
23	縄文土器	皿	—	[2.9]	—	CGI	5	普通	にぶい橙	AT-25 加曾利E式か	
24	縄文土器		—	[3.8]	—	ACK	5	普通	褐灰		
25	石製品	臼玉	長1.0	短1.0	厚0.3	孔径3.3	重0.5	残存80		AT-25 滑石 中D斜(3) c II	
26	土師器		(10.0)	[3.0]	—	ACHI	40	普通	橙	AU-24 盖模倣	
27	土師器	壺	(10.2)	3.1	—	I	20	良好	赤褐	AU-24 比企型壺 内外面赤彩	
28	須恵器		—	[1.8]	—	I	20	普通	黄灰	AU-25 未野窯産か ヘラケズリ	
29	土師器	蓋	(13.8)	[4.8]	—	CHI	25	普通	にぶい褐	AU-25 有段口縁壺 内外面黒色処理	
30	縄文土器		—	[3.0]	—	ACGHI	5	普通	にぶい赤褐	AU-25	
31	石製品	剥片	長さ3.2	幅2.0	厚さ0.4	重さ1.83				AU-25 P 3 黒曜石	
32	石製品		長さ2.0	幅1.7	厚さ0.4	重さ0.9				AU-25 チャート	
33	磁器	碗	—	[2.9]	4.0	IK	20	良好	灰白	表探	
34	土師器		(15.4)	[3.6]	—	CI	30	良好	灰褐	表探 有段口縁壺 内外面黒色処理	
35	土師器	壺	(10.8)	3.6	—	ACI	60	良好	橙	表探 盖模倣	
36	土師器		(12.5)	[4.2]	—	ACHI	40	良好	淡黄橙	表探	
37	土師器	高壺	(15.8)	[10.6]	—	ACI	40	普通	赤	表探 内外面赤彩	
38	土師器		21.2	[15.0]	—	CEGHI	50	普通	橙	包含層	
39	土師器	甕	—	[3.9]	—	AIK	5	普通	灰黄褐	表探 把手	
40	土師器		—	[4.5]	—	AIK	5	普通	橙	表探 把手	
41	縄文土器	甕	—	[4.9]	—	EG	5	普通	にぶい黄橙	表探 前期	
42	縄文土器		—	[3.0]	—	EG	5	普通	にぶい黄橙	表探 前期	
43	縄文土器	瓶	—	[2.2]	—	EG	5	普通	にぶい黄橙	表探 前期	
44	石製品		長さ3.8	幅3.8	厚さ1.8	孔径1.0	重さ38.7	残存100		滑石 片面直 穿孔 ミガキ	

# V B区の調査

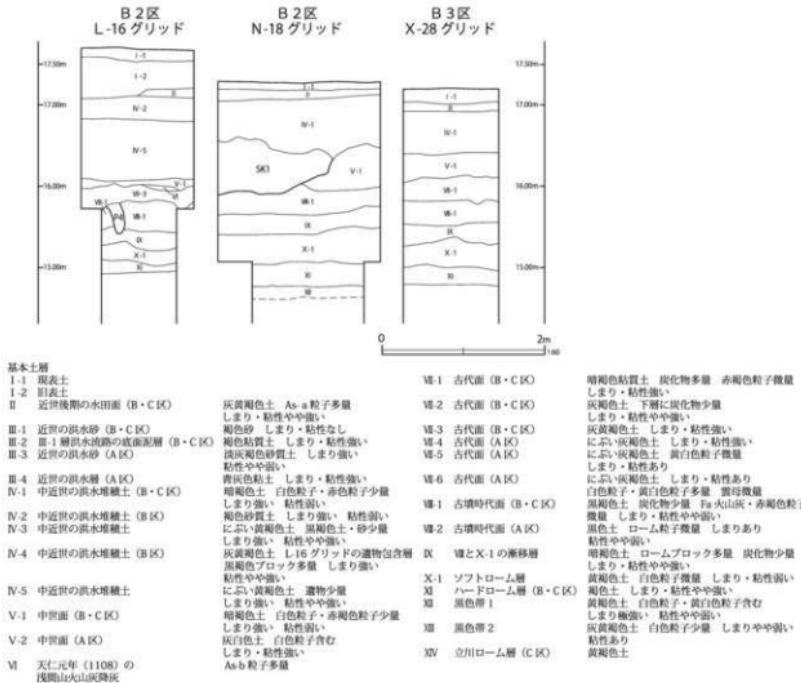
## 1 B区の概要

B区は第18次で調査を行った3地点のなかで最も北東側に位置する。現道の拡幅に伴う発掘調査である。幅約6mで約260mにかけて掘削した。調査面積は1,448m<sup>2</sup>である。掘削深度は現地表面から1.9m~2.4m下で地山となるローム面(X-1層)を検出している。

なお、約95m間隔で調査区に直行するように農業用の用排水路が通っている。この部分は、調査対象外として発掘調査を行わなかった。また、この用排水路を境に調査区を北東から順にB1区、

B2区、B3区、B4区と細分し調査を行った。検出された遺構は主な時代のものとして古墳時代・飛鳥時代・奈良時代・平安時代に位置付けられる。また、少數だが、中世に位置付けられる遺構が検出されている。

古墳時代・飛鳥時代の遺構数は竪穴住居跡が21軒、井戸跡が9基、溝跡が2条検出された。別に項目を立てた第1~3号遺物集中もB区の古墳時代・飛鳥時代に該当する。ローム面の上層にて確認された黒褐色土(VIII-1層)が古墳時代の遺構



第83図 B区基本土層

掘削面にあたる。調査区北西部は第1～3号遺物集中が検出され、それ以外の遺構は希薄である。第1号遺物集中との関連が想定される第1号溝跡より南東側において、竪穴住居跡を始めとした多数の遺構が検出されている。

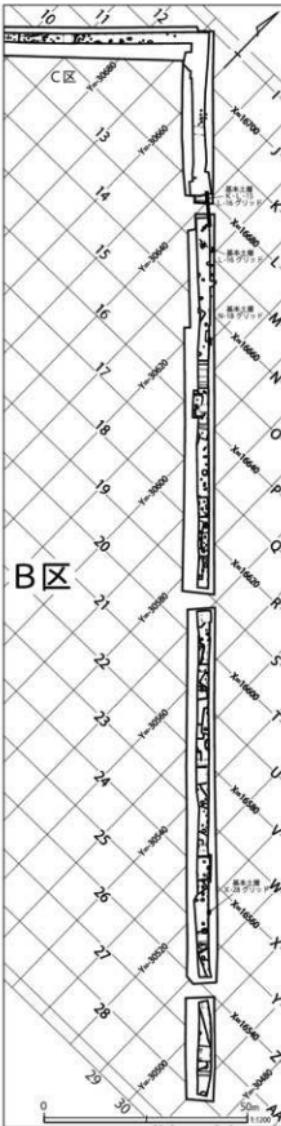
なお、遺物集中及びそれに付随する可能性が高い遺構は、別に取りまとめ、本項では取り扱わない。

遺物集中に伴うとした第1号溝跡より北側では、C区に至るまでの間に古墳時代・飛鳥時代の竪穴住居跡は検出されなかった。第1号溝跡が集落域の区画としての役割を持って機能していた可能性が想定される。

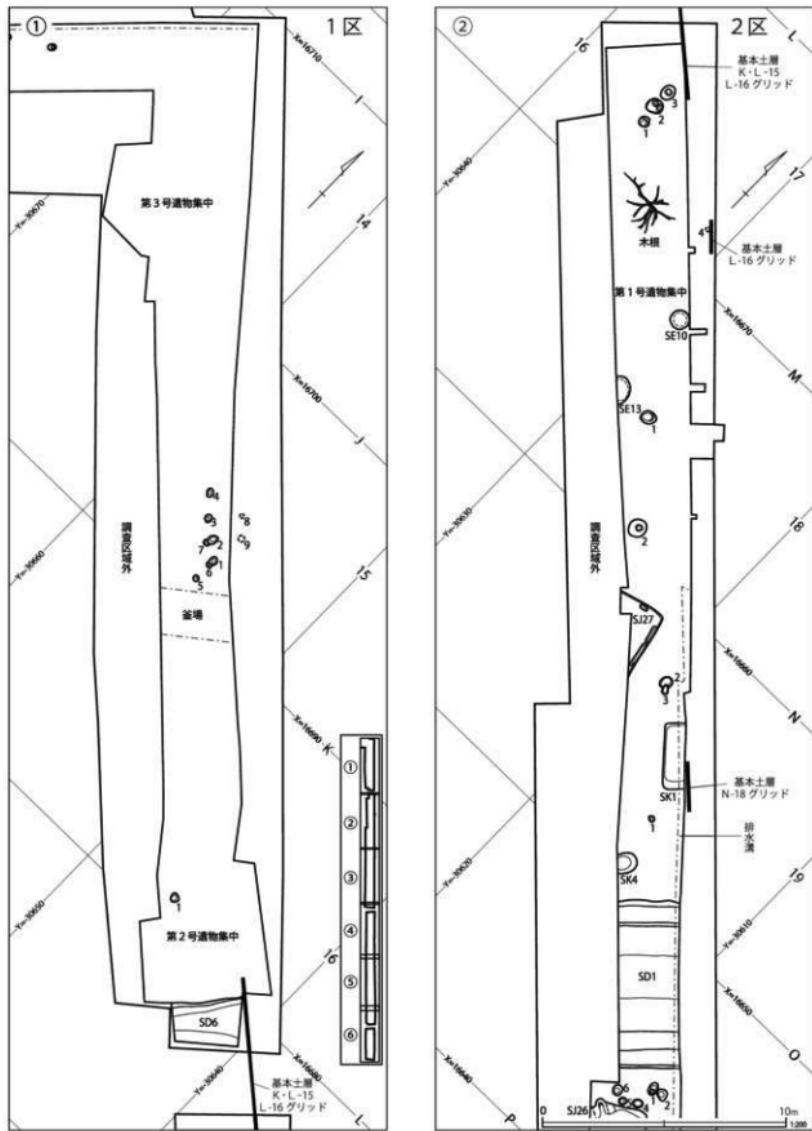
奈良時代・平安時代の遺構数は、竪穴住居跡が9軒、掘立柱建物跡が1棟、井戸跡が1基、溝跡3条、土壙4基が検出された。

奈良時代・平安時代の遺構の特徴としては、B区中央より、やや南側に遺構が多い傾向にある。ただし、第27号竪穴住居跡のみが他と離れた場所に位置する。時期は8世紀代の遺構は少なく、9世紀代の遺構が多いが、10世紀代となる遺構は認められない。C区においてもB区に接続する付近では、奈良時代・平安時代の遺構は検出されていないことから、奈良時代・平安時代の集落の中心はより南側に分布すると想定される。

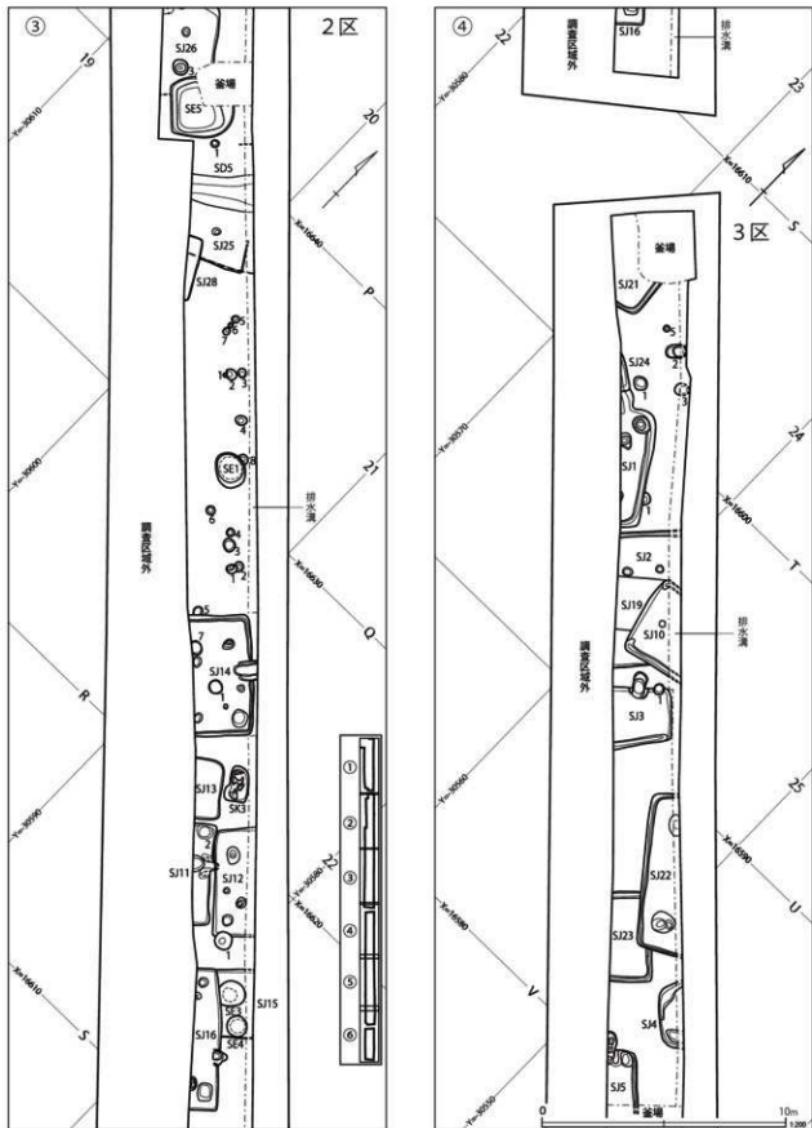
他に中世とみられる土壙が1基検出されている。中世・近世の遺構はさほど多くないが、表土掘削の際に細片であるが、かわらけや肥前系の磁器などが出土していた。現表土下の基本層II層はAs-a軽石粒を含む水田面であるため、近世後期には水田として土地利用されていた。



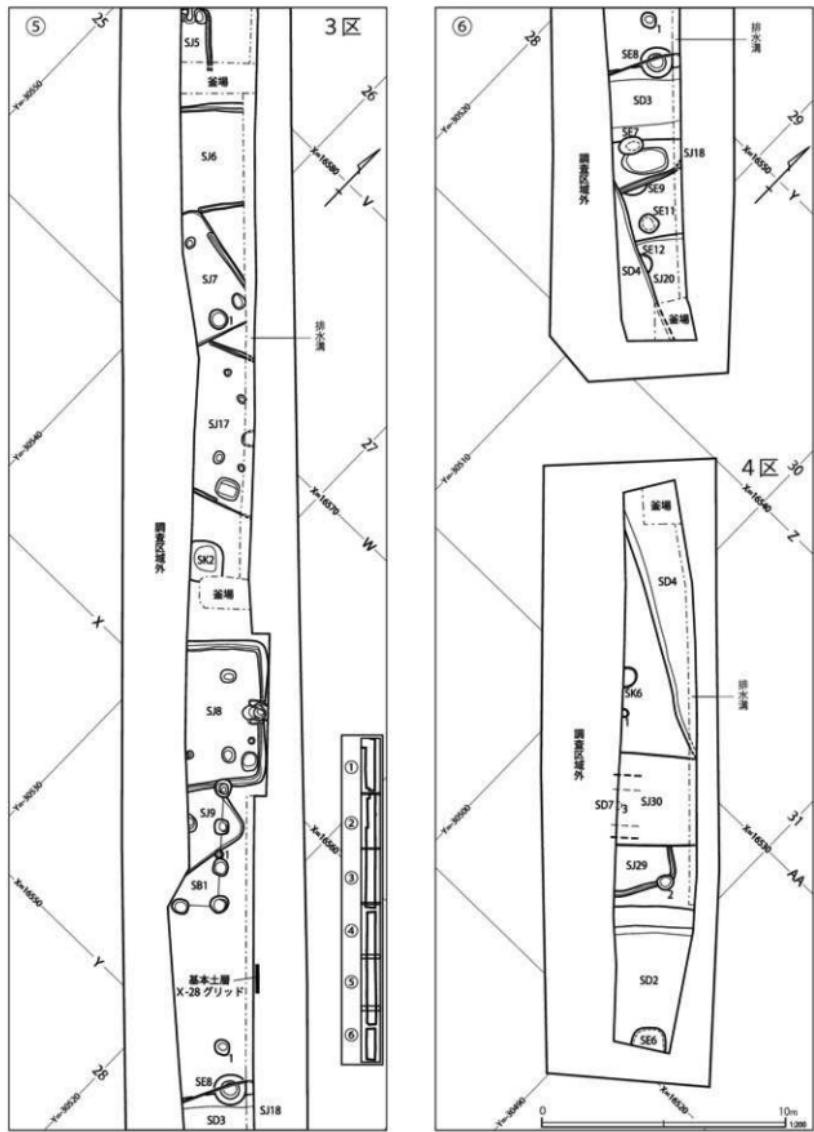
第84図 北大竹遺跡第18次B区全体図



第85図 北大竹道路第18次B区区割図(1)



第86図 北大竹遺跡第18次B区区割図（2）



第87図 北大竹道路第18次B区区割図(3)

## 2 古墳時代・飛鳥時代の遺構と遺物

B区において検出された古墳時代・飛鳥時代の遺構数は竪穴住居跡が21軒、井戸跡が9基、溝跡2条が検出された。調査区北西側の遺物集中が検出された地点からは竪穴住居跡は検出されておらず、他の遺構も希薄である。調査区域内の中央付近に遺構が多く分布する傾向にあり、南東側にも遺構が希薄である。

### (1) 竪穴住居跡

以下、検出グリッド、重複遺構、平面形、規模、

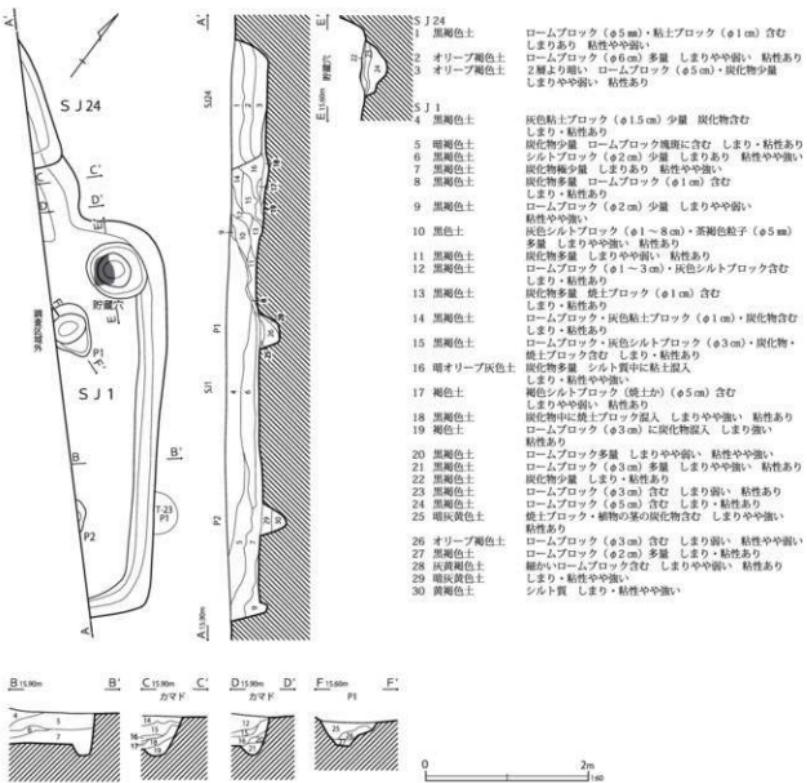
覆土の状況、付帯施設、出土遺物について記す。

#### B区第1・24号竪穴住居跡（第88・89図）

B区の第1号竪穴住居跡はS・T-23グリッド、調査区の中央付近、B3区に位置する。

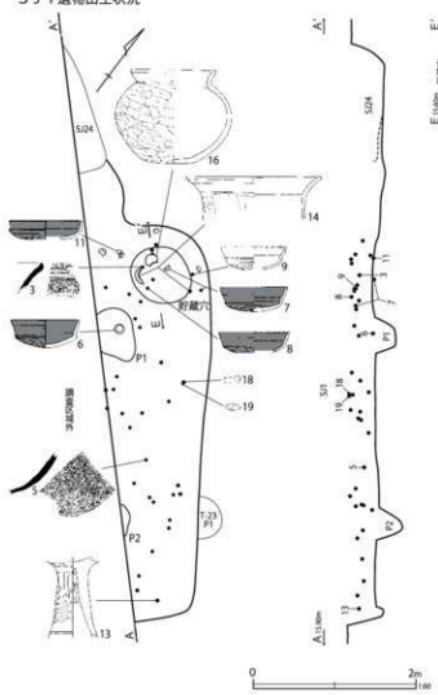
他の遺構との重複関係は第24号竪穴住居跡より古く、T-23P1より新しい。

東辺のみが検出され、半分以上が調査区域外に至る。平面形は検出範囲からの推定であるが、隅丸方形とみられる。検出規模は長軸長4.85m、短

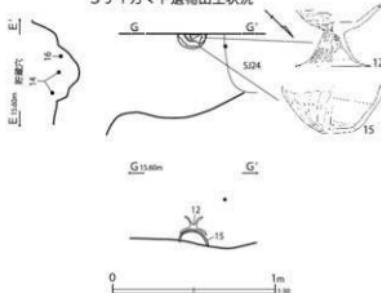


第88図 B区第1・24号竪穴住居跡

SJ 1 遺物出土状況



SJ 1 カマド遺物出土状況



第89図 B区第1号竪穴住居跡・カマド遺物出土状況

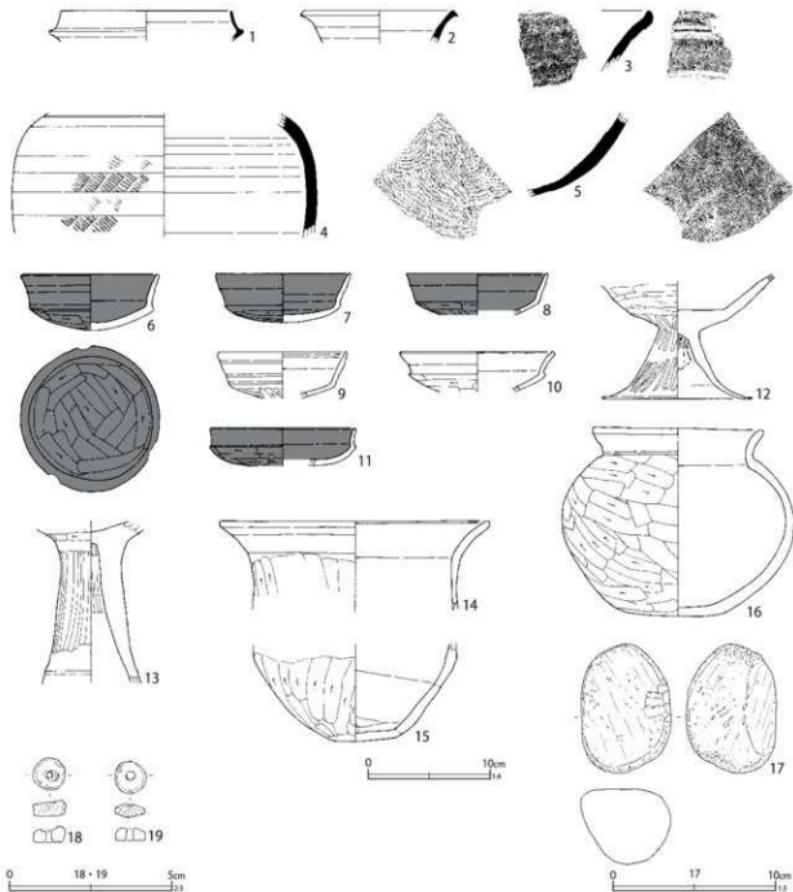
軸長1.25m、深さ0.40mである。主軸方位はN-45°-Wを指す。

覆土はロームブロックと炭化物を含む黒褐色土を主体とする。カマドは北辺で検出された。位置的に竪穴住居跡の中心ではなく東側に寄った位置に設置されたとみられる。規模は長さ2.40m、幅0.50m以上で燃焼部の深さは0.40mである。煙道部は第24号竪穴住居跡に壊され不明である。燃焼部は住居の外側に張り出すように構築されている。袖は検出されなかった。

貯蔵穴はカマドの東側で検出された。深さ0.30m程で上層に炭が堆積している。ピットは2基検出された。いずれも配置関係から竪穴住居跡

の主柱穴であるとみられるが、いずれも柱痕跡は確認されなかった。壁溝は東辺、南辺で検出されている。幅は0.23~0.48m、深さは0.10~0.13mである。

遺物は、須恵器、土師器、石製品が出土している。第90図1は須恵器の壺身である。口縁部がやや内側へ傾き立ち上がる。陶邑編年のTK10(古)頃か。2と3は須恵器壺の口縁部片である。3は波状文がみられるが、2にはみられない。4は須恵器壺の胴部である。外面に自然釉がみられる。木野窯産の製品とみられる。5は須恵器壺の胴部片である。外面に平行タタキ痕、内面に同心円文アテ具痕がみられる。秋間窯産の製品とみられる。



第90図 B区第1号竪穴住居跡出土遺物

6～11は土師器の坏である。6～8は、有段口縁坏で内外面に黒色処理が施されている。9も有段口縁坏であるが、黒色処理はみられない。10は蓋模倣坏で黒色処理は施されていない。11は身模倣坏で黒色処理が施されている。12と13は高坏である。坏部下半から脚部にかけてミガキ調整がみ

られる。13は脚部のみ残存しており、ヘラケズリ調整がみられる。14は甕の口縁部片である。貯蔵穴から出土している。15は甕である。下半部から底部にかけて残存している。内面が煤けているが、割れ口の一部も煤けていることから上半部が欠損後に煤けるような使用をされていたとみら

第38表 B区第1号竪穴住居跡出土遺物観察表(第90図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(14.0)	[2.4]	—	I	20	良好	灰	n	
2	須恵器	壺	(12.2)	[2.7]	—	I	30	良好	暗赤褐色		
3	須恵器	壺	—	[4.9]	—	AEI	5	普通	灰	No28 波状文 末野窯産か	101-1
4	須恵器	壺	—	[10.1]	—	EI	10	良好	灰	排水溝 末野窯産か 外面自然釉	101-1
5	須恵器	壺	—	[6.8]	—	EIK	5	良好	灰	No13 秋間窯産 外面平行叩き 内面同心円文	101-1
6	土師器	壺	11.0	4.6	—	CI	95	普通	にぶい黄褐色	No42 有段口縁环 黒色処理	101-1
7	土師器	壺	(11.0)	4.0	—	IK	30	普通	黒褐	a・No33・40 有段口縁杯 黒色処理	101-1
8	土師器	壺	(11.6)	[3.4]	—	ACI	30	普通	黒褐	a・No25 有段口縁环 黒色処理	
9	土師器	壺	(10.4)	[3.8]	—	CIK	30	普通	にぶい壺	No32 有段口縁环	
10	土師器	壺	(12.4)	[3.2]	—	AHI	30	良好	赤褐	a 盖模倣壺	
11	土師器	壺	(11.8)	[3.1]	—	ACK	30	良好	黒褐	No39 身模倣壺 黒色処理	
12	土師器	高壺	—	[10.2]	12.2	GHI	60	普通	橙	No45	101-1
13	土師器	高壺	—	[13.2]	—	CHI	30	普通	橙	No 9	101-1
14	土師器	甕	(21.8)	[7.3]	—	CI	20	普通	にぶい褐	貯藏穴・No34・49	101-1
15	土師器	甕	—	[8.0]	5.4	GHI	50	普通	にぶい黄褐色	No46 内面煤	101-1
16	土師器	甕	(13.5)	15.3	7.6	CGHI	90	不良	にぶい橙	No48	101-1
17	石製品	磨石	長さ7.9	幅5.5	厚さ4.6	重さ102.6	残存100			角閃石デイサイト	
18	石製品	臼玉	長1.0	短1.0	厚0.5	孔径0.4	重0.6	残存100		No 1 滑石 中D斜2 c III	
19	石製品	臼玉	長1.0	短1.0	厚0.4	孔径0.4	重0.5	残存100		No 2 滑石 中G斜(2) c II	

れる。15の甕はカマド燃焼部に逆位に置かれ、その上を覆うように12の高壺が逆位で重ねられていた。16は土師器の甕である。口縁部と底部の一部が欠損しているが、完形率が高い。貯藏穴の中端付近から出土している。

17は角閃石デイサイトの磨石である。3面に擦痕がみられる。18と19は滑石製の臼玉である。18の側面形は円筒形である。側面の研磨は斜め方向に施されている。孔面には両面とも研磨は施されていない。穿孔は片側穿孔で錐先貫通である。19の側面形は平玉形であるが欠損し、やや不整形となっている。側面の研磨は斜め方向に施されている。孔面には両面とも研磨は施されていない。穿孔は片側穿孔で錐先貫通である。時期は、6世紀中頃から後半頃とみられる。

B区第24号竪穴住居跡は第1号竪穴住居跡と重複し、南東コーナー部分の一部のみが検出された。第1号竪穴住居跡のカマド部分と重複し、炭化物や焼土を多く含むカマドの堆積土は切り込ん

で確認された。隅丸でプランが直線的に延びる点と床面が平らに広がることが確認されたことから竪穴住居跡としたが、ごく一部分のみのため他の遺構である可能性も残る。時期は第1号竪穴住居跡よりも新しいということ以外は不明である。

#### B区第2号竪穴住居跡(第91図)

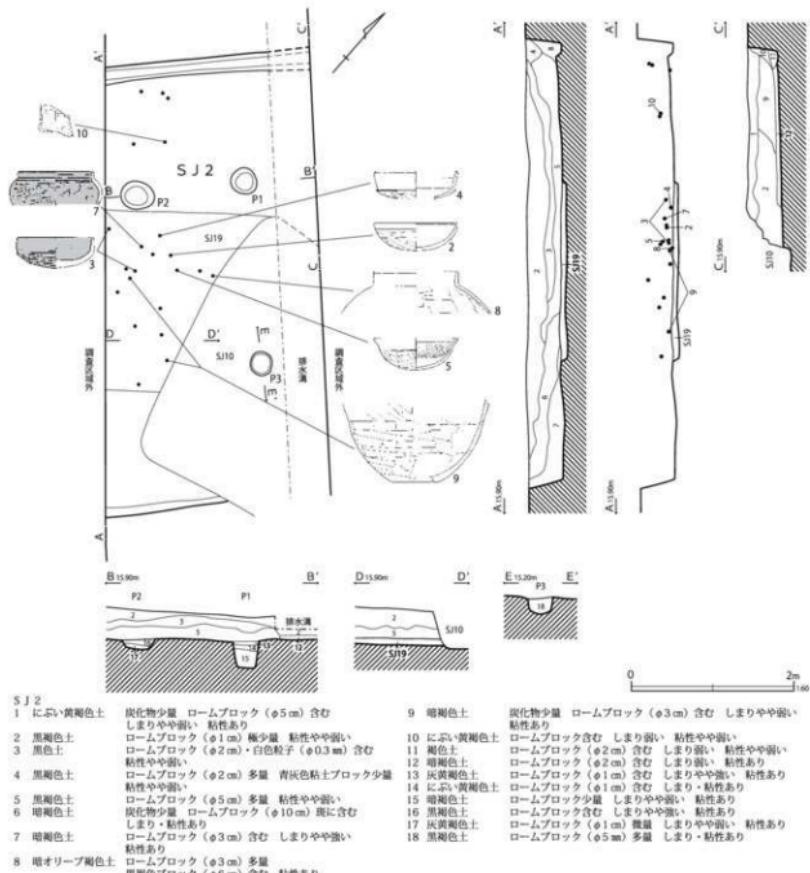
B区の第2号竪穴住居跡はT-23・24グリッド、調査区の南部中央付近に位置する。

他の遺構との重複関係は、第19号竪穴住居跡より新しく、第10号竪穴住居跡より古い。

北西辺と南東辺が検出されており、コーナー部分は全て調査区域外に至り未検出である。検出規模は長軸長5.54m、短軸長2.57m以上、深さ0.36mである。長軸方位はN-42°-Wを指す。

覆土は黒色土及び黒褐色土を主体とする。カマドは未検出である。他のカマドを設置する竪穴住居跡から南東辺に設置されている可能性が高い。

貯蔵穴は検出されていない。柱穴は3基検出された。南東側のみ検出されなかったが、P 2も掘



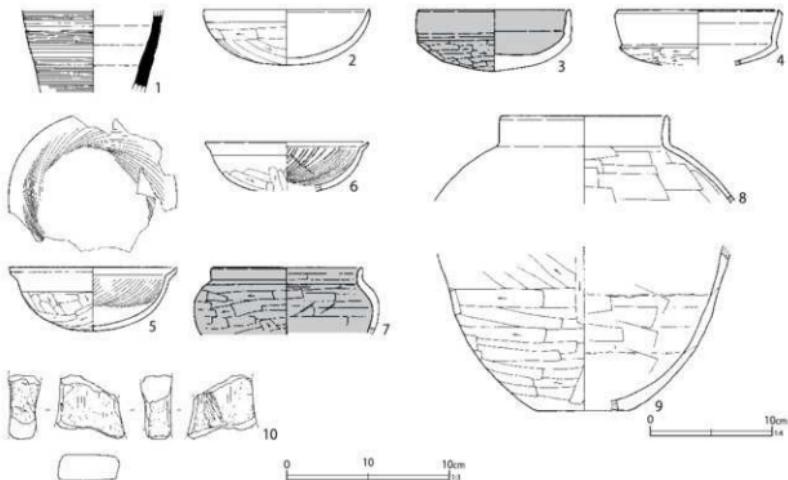
第91図 B区第2号竪穴住居跡

削深度は浅く、隠滅している可能性がある。

壁溝は北西辺で検出された。残存状況はあまり良くない。規模は、幅が $0.18\sim 0.27\text{m}$ 、深さは $0.05\sim 0.10\text{m}$ である。

遺物は須恵器、土師器、石製品が出土している。第92図1は須恵器長頸壺の頸部である。外面に力目を多用している。産地は末野窯の製品と

みられる。2~6は土師器の坏である。2は外面の器壁が一部剝離し、内面の器面も摩滅している。3は内外面に赤彩が施されている。口唇部に使用感があり、摩滅が顕著である。器面の成形が不十分で器壁が厚い。5と6は内斜口縁坏と呼ばれるタイプの坏である。



第92図 B区第2号竪穴住居跡出土遺物

第39表 B区第2号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第92図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	—	[6.8]	—	E	10	良好	暗灰	a 末野窯産 外面自然釉 c №9	101-2
2	土師器	壺	(13.6)	4.5	—	CHI	40	普通	椎	c №9	101-2
3	土師器	壺	12.2	5.0	—	CGHI	80	普通	赤	No.5・11 盖模倣坏 赤彩	101-2
4	土師器	壺	(13.1)	[4.5]	—	AH	20	良好	椎	No.6 盖模倣坏	101-2
5	土師器	壺	13.7	5.7	—	ACHI	70	良好	にぶい赤褐	b №10 内斜口縁環 放射状暗文	101-2
6	土師器	壺	(13.4)	[4.0]	—	ACHI	30	良好	にぶい赤褐	b 内斜口縁環 放射状暗文	101-2
7	土師器	壺	(12.2)	[5.5]	—	ACHI	30	良好	赤	No.7 赤彩	
8	土師器	甕	(13.5)	[7.1]	—	ACEI	20	良好	にぶい黄褐	No.18 雲母片多量	
9	土師器	甕	—	[13.4]	(7.0)	HIK	30	普通	にぶい黄褐	c №13-20	
10	石製品	砥石	長さ[3.9]	幅[4.3]	厚さ[2.0]	—	重さ36.5	残存30	—	No.22 流紋岩か	101-2

#### B区第5号竪穴住居跡 (第93図)

B区の第5号竪穴住居跡はU・V-25グリッド、B3区の中央付近に位置する。

重複する構造はないが、西辺が調査区域外へ至り、南側の大部分が排水用に掘られた釜場によつて大きく壊されている。

覆土はロームブロックを多量に含んだ黒褐色土を主体とする。平面形は確認できる北東辺から隅

丸長方形と想定され、残存規模は長軸長2.25m、短軸長1.20m、深さ0.40mである。主軸方位はN-44°-Wを指す。

カマドは西辺に設置されている。残存規模は長さ1.35m、幅0.35mで、燃焼部の深さは0.40mである。煙道部は長さ0.65m、検出幅0.36mである。右袖のみ確認できた。

貯蔵穴はカマドの右側にあたる竪穴住居跡の北

東コーナー部、壁溝は東辺で検出されたが、柱穴は検出されなかった。壁溝の幅は0.18~0.20m、深さは0.50~0.80mである。

遺物は須恵器、土師器が出土している。第94図1は須恵器の壺蓋で、奈文研分類壺Hに該当する。天井部に左回転ヘラケズリがある。緻密な胎土を有する。産地は湖西窯とみられる。2は甕の胴部片である。外面に平行タタキ痕、内面に同心円文アテ具痕がみられる。産地は末野窯とみられる。3~6は土師器の壺である。3と4は有段口縁壺で内外面に黒色処理が施されている。5は蓋模倣壺である。6は有段口縁壺でいずれも黒色処理は施されていない。

7は土師器の鉢である。体部上半が横方向、下半部が斜方向にヘラケズリされている。8~11は土師器の甕である。いずれも口縁部にヨコナデ、胴部に斜方向や縦方向のヘラケズリ調整が残る。12は手捏ね土器である。外面に縦方向のヘラケズリがみられる。内面は未調整である。時期は、須恵器壺蓋から7世紀中頃とみられる。

#### B区第6号竪穴住居跡（第95図）

B区の第6号竪穴住居跡はV-25グリッド、B3区の中央付近に位置する。

第7号竪穴住居跡によって東辺の一部が壊されている。コーナー部分の全てが調査区域外に至る。

覆土はローム粒子、炭化粒子を含む灰褐色土を主体とする。平面形は南東辺、北西辺ともに調査区域外に延び、平面形は不明である。規模は長軸長4.44m、短軸長2.55m、深さ0.15mである。長軸方位はN-49°-Wを指す。

カマドと柱穴は検出されなかった。壁溝は北西辺、南東辺で検出され、幅は0.15~0.37m、深さ0.02~0.07mである。

遺物は土師器が出土している。第96図1~3は蓋模倣壺である。いずれも口縁部が外反し、ヨコナデ調整され、体部にヘラケズリがみられる。4は比企型壺である。口縁部が屈曲し端部は外側を

向く。内外面に赤彩が施されている。5と6は甕である。5は胴部に縦方向のヘラケズリがみられる。6は下半部から底部である。斜方向ぎみにヘラケズリが施されている。時期は6世紀後半頃とみられる。

#### B区第8・9号竪穴住居跡（第97・98図）

B区の第8号竪穴住居跡はW-X-27グリッド、B3区の南東側に位置する。

他の遺構との重複関係は、東側に重複する第9号竪穴住居跡の西辺を壊しているほか、第1号掘立柱建物跡のP4によって東辺の一部が壊されている。

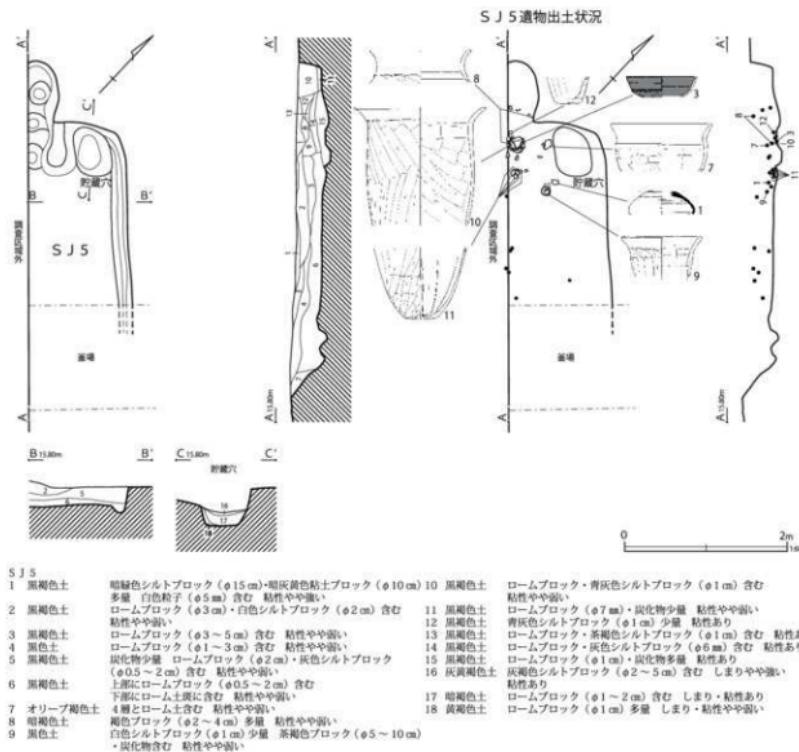
覆土は、ロームブロックを含む暗褐色土である。平面形は、南辺が調査区域外に延び、確認できないが、隅丸方形であると想定される。検出された規模は長軸長6.05m、短軸長3.36m、深さ0.25mである。主軸方向はN-45°-Eを指す。

カマドは北辺中央に設置されている。煙道部は調査区域外に延び、確認できなかった。残存規模は長さ0.91m、幅1.03m、深さ0.47mである。

貯蔵穴はカマドの右側、竪穴住居跡の東コーナー部分に位置する。規模は長軸長0.78m、短軸長0.66m、深さ0.35mである。主柱穴は2基検出された。P1は長径0.67m、短径0.50m、深さ0.52m、P2は長径0.64m、短径0.52m、深さ0.52mと規模も類似し、北東辺壁溝と平行して並ぶ。調査区域外の南西側にも対応して同規模の柱穴が配置されているとみられる。

壁溝は残存するカマドを除く北東辺、南東辺、北西辺で検出された。規模は幅0.25~0.43m、深さ0.05~0.12mである。

遺物は須恵器と土師器が出土している。第99図1は須恵器の甕破片である。外面に格子タタキ痕、内面に同心円文アテ具痕が残る。2は口縁部が垂直に立ち上がる壺である。3~8は土師器の甕である。3の甕はカマド左袖の構築材として使用されていた。下半部は欠損している。胴部外面



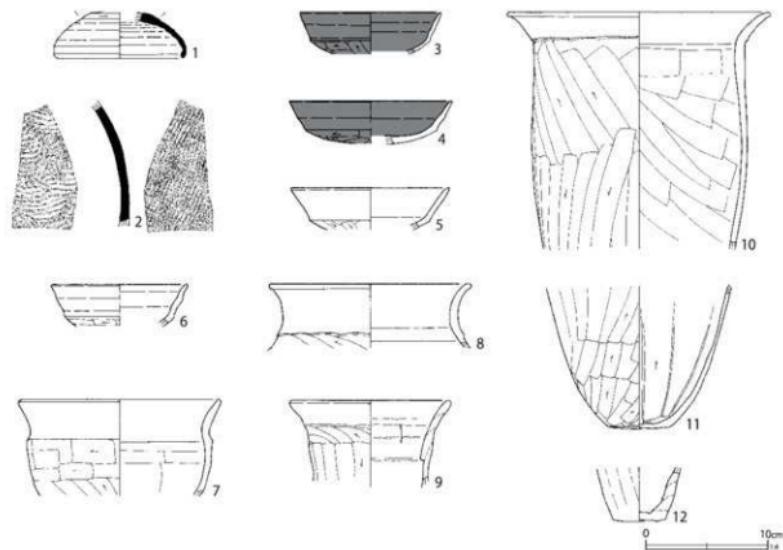
第93図 B区第5号竪穴住居跡

に斜方向のヘラケズリが施されている。内面にはナデ調整がみられる。4はカマド燃焼部に横倒して出土している。胴部外面に斜方向のヘラケズリが施されている。内面にはナデ調整がみられる。5の甕もカマド周辺から出土している。6はカマド右袖の構築材として使用されていた。上半部が欠損している。胴部外面に縦方向のヘラケズリが施されている。内面にはナデ調整がみられる。7はカマド左袖から燃焼部にかけての地点から出土している。3の甕とともに袖の構築材として用いられた可能性があり、それが燃焼部側に崩れた

か。胴部外面に縦方向のヘラケズリが施されている。8は甕の底部である。

B区の第9号竪穴住居跡はX-27グリッド、B3区の南東側に位置する。西側に重複する第8号竪穴住居跡に西辺が壊されている。東辺の一部をグリッドピットに壊される。また、第1号掘立柱建物跡に壊されている。東辺、南辺は調査区域外に延び、北東コーナー部分のみが検出された。

検出された規模は長軸長2.72m、短軸長2.65m、深さ0.23mである。長軸方位はN-14°-Eを指す。ピットが1基検出され、規模は検出



第94図 B区第5号竪穴住居跡出土遺物

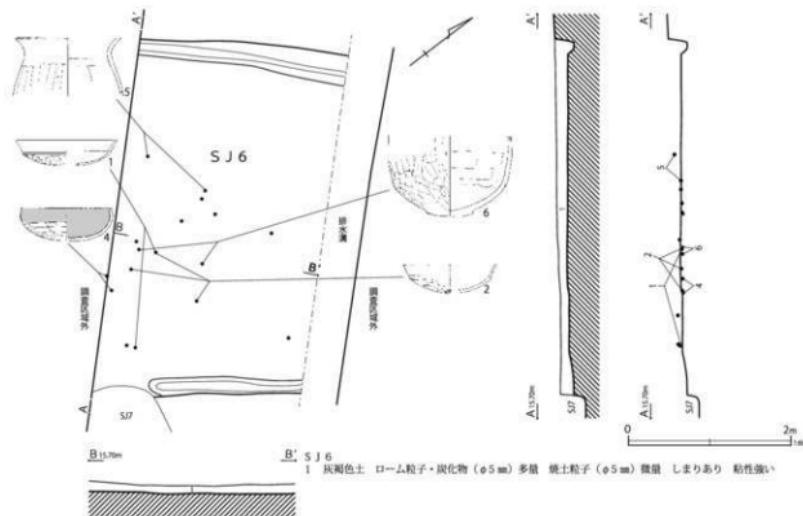
第40表 B区第5号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第94図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(10.4)	[3.7]	—	I	40	良好	灰	a・No.9 潤西窯産 环目 ヘラケゼリ b 木野窯産 外面平行叩き 内面同心円文	102-1
2	須恵器	甕	—	[10.3]	—	I	5	良好	にぶい赤褐		102-1
3	土師器	壺	11.6	[3.4]	—	CI	40	普通	褐	a・No.22 有段口縁壺 黒色処理	
4	土師器	壺	(13.4)	[3.5]	—	CHI	30	普通	黄灰	b 有段口縁壺 黑色処理	
5	土師器	壺	(12.9)	[3.4]	—	CHK	10	普通	にぶい赤褐	b 直根微壺	
6	土師器	壺	(11.2)	[3.4]	—	ACK	20	普通	暗灰黄	a・b 有段口縁壺	
7	土師器	鉢	(16.2)	[7.9]	—	ACHI	30	普通	褐灰	a・No.15	
8	土師器	甕	(16.4)	[5.2]	—	ACHIK	10	普通	灰褐	b・No.16-21	
9	土師器	甕	13.0	[7.2]	—	ACKH	30	普通	にぶい椎	No.8	102-1
10	土師器	甕	21.2	[19.3]	—	CI	50	良好	椎	No.21	102-1
11	土師器	甕	—	[11.6]	5.0	CHI	30	普通	にぶい褐	a・No.10-11-12-18-19	102-1
12	土師器	手捏ね	—	[4.4]	4.2	ACK	20	普通	黄灰	カマド・No.25	102-1

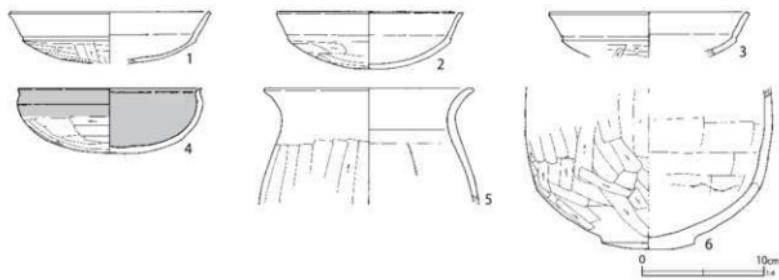
部分で長径0.73m、短径0.34m、深さ0.55mである。

遺物は須恵器と土師器が出土している。第100図1は須恵器の壺蓋である。天井部と体部の境に

稜を持ち口縁端部が「ハ」の字状に開く。いわゆる北関東系須恵器の特徴を有する。2は須恵器の甕である。外面に平行タタキ痕とナデ調整、内面に無文アテ具痕とナデ調整がみられる。平底瓶の



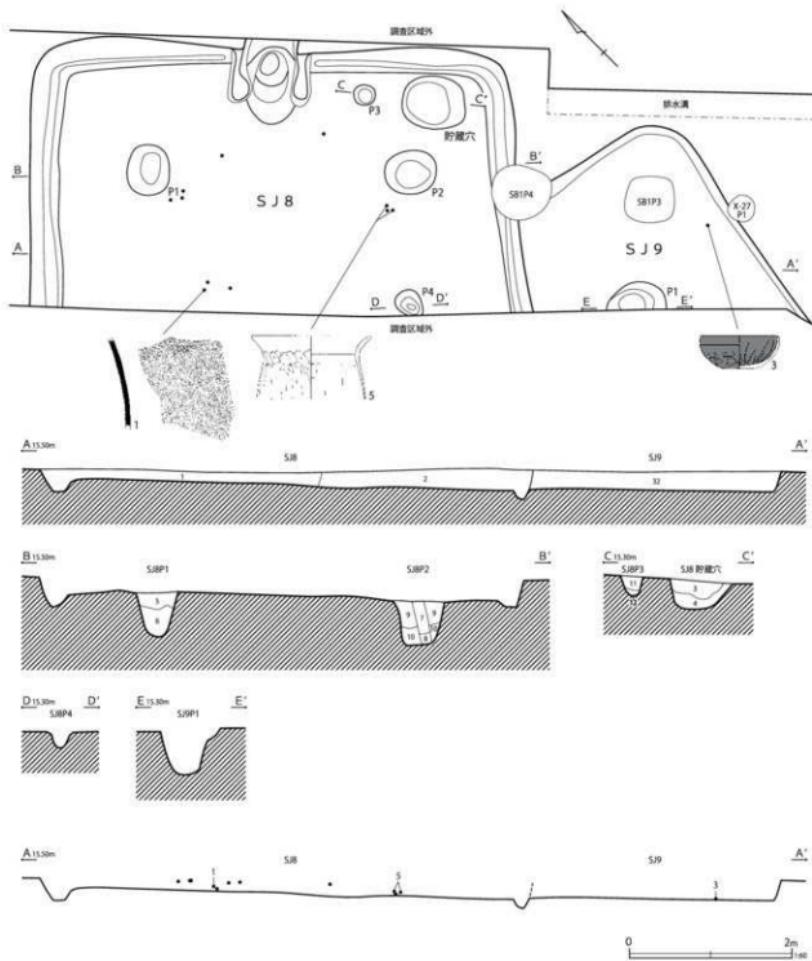
第95図 B区第6号竪穴住居跡



第96図 B区第6号竪穴住居跡出土遺物

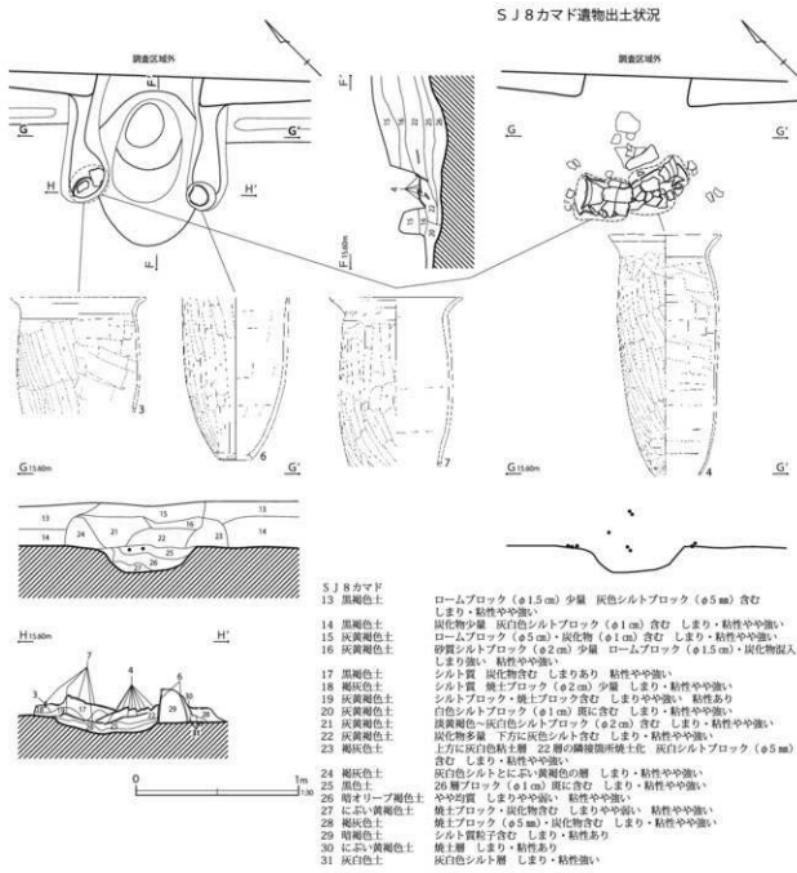
第41表 B区第6号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第96図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(16.2)	[4.2]	—	CHI	40	良好	にぶい橙	No.6・15 蓋模倣壺	
2	土師器	壺	15.1	4.7	—	AHK	70	普通	明赤褐	a・b・No.6・8・12 蓋模倣壺	102-2
3	土師器	壺	(16.2)	[3.7]	—	CHI	10	良好	にぶい橙	b 蓋模倣壺	
4	土師器	壺	15.0	5.3	—	AGHI	55	良好	赤褐	c・No.9・13 比企型壺	102-2
5	土師器	甕	(17.0)	[9.5]	—	ACI	30	普通	にぶい黄褐	b・No.1・2	
6	土師器	甕	—	[13.2]	7.6	AIK	25	普通	にぶい黄褐	No.10・17	102-2



- |        |            |   |
|--------|------------|---|
| 5 J 8  | 8 黑褐色土     | ロームブロック ( $\phi 1\text{cm}$ ) 少量 しまりやや強い<br>ロームブロック ( $\phi 2\text{cm}$ ) 多量 しまり強い 黏性やや強い |
| 1 黒褐色土 | 9 黒褐色土     | ロームブロック多量 しまり強い 黏性やや強い  |
| 2 黒褐色土 | 10 に赤い黒褐色土 | ロームブロック多量 しまり強い 黏性やや強い  |
| 3 黑褐色土 | 11 黄褐色土    | ロームブロック ( $\phi 3\text{cm}$ )、洗土ブロック ( $\phi 2\text{cm}$ ) 含む<br>しまりあり 黏性やや強い             |
| 4 暗褐色土 | 12 に赤い黒褐色土 | ロームブロック ( $\phi 3\text{cm}$ ) 多量 (硬質) しまり、粘性やや強い  |
| 5 黑褐色土 | S J 9      | ロームブロック ( $\phi 1\text{cm}$ ) 含む しまり強い 黏性あり   |
| 6 暗褐色土 | 32 黑褐色土    | ロームブロック ( $\phi 1\text{cm}$ ) 含む しまり強い 黏性あり   |
| 7 黑褐色土 |            |   |

第97図 B区第8・9号竖穴住居跡



第98図 B区第8号竪穴住居跡カマド

可能性もあるか。

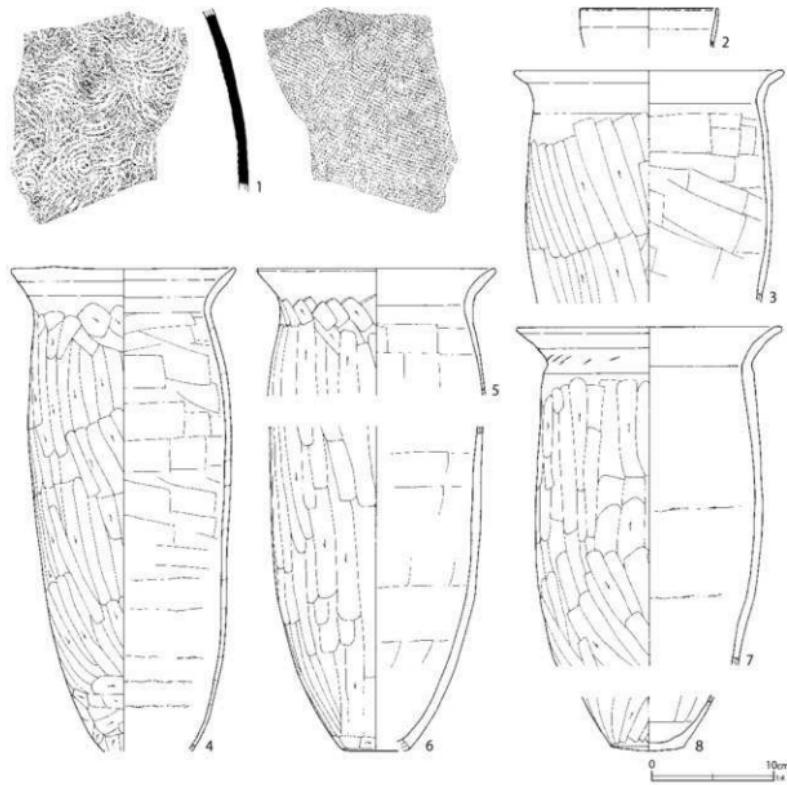
3は土器器の壊である。内外面に黒色処理が施されている。身の深い壊である。内面に放射状暗文が施されている。

時期は第8号竪穴住居跡が7世紀後半～末頃、第9号竪穴住居跡がそれ以前、6世紀中頃～後半頃の可能性がある。

#### B区第11号竪穴住居跡（第101図）

B区の第11号竪穴住居跡はR-21グリッド、B2区の南東側に位置する。

他の遺構との重複関係は、北側に接続する第12号竪穴住居跡によってカマドの一部が壊されている。北辺と西辺、東辺の一部のみ検出され、南側の大部分が調査区域外に至る。



第99図 B区第8号竪穴住居跡出土遺物

第42表 B区第8号竪穴住居跡出土遺物観察表（第99図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	—	[15.0]	—	EI	5	良好	黒灰	No.5 外面格子彙き 内面同心円文	103-1
2	土師器	壺	(11.2)	[3.2]	—	I	20	良好	褐灰	SJ9 盖模倣壺	
3	土師器	甕	(22.0)	[18.9]	—	AEGHI	30	普通	浅黄	No.31カマド	
4	土師器	甕	18.2	[39.5]	—	AHK	80	普通	浅黄橙	No.30カマド	103-1
5	土師器	甕	(19.3)	[10.3]	—	AHI	30	良好	にぶい黄橙	カマド周辺・No.9・11	103-1
6	土師器	甕	—	[26.3]	(5.4)	HIK	75	普通	褐	カマド袖・No.32カマド	103-1
7	土師器	甕	17.4	[23.2]	—	ACEHIK	80	普通	明赤褐	No.29・31カマド	103-1
8	土師器	甕	—	[4.4]	6.0	ACHIK	10	普通	褐灰		



第100図 B区第9号竪穴住居跡出土遺物

第43表 B区第9号竪穴住居跡出土遺物観察表（第100図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	団版
1	須恵器	蓋	(11.5)	[4.2]	—	IK	30	良好	灰	北開東系	103-2
2	須恵器	甕	—	[7.8]	(16.0)	BEI	20	良好	灰	外面平行叩き・ナデ 内面無文当て具・ナデ	103-2
3	土師器	壺	(12.8)	[5.4]	—	AIK	40	普通	黒	P 1・No 1 放射状暗文 黒色処理	103-2

覆土は浅く残存状況が極めて良くなかった。平面形は検出された北西辺と東辺から隅丸方形と想定される。規模は長軸長4.17m、検出された短軸長は0.93m、深さ0.07mである。主軸方位はN-50°-Eを指す。

カマドは北西辺のやや西寄りに設置されている。残存規模は長さ0.95m、幅1.00m、深さ0.30mである。煙道部は第12号竪穴住居跡に壊されている。壁溝、柱穴は検出されなかった。

遺物は土師器が出土している。第101図1と2は蓋模倣壺である。カマド燃焼部から2の壺と同じ地点から出土している。3は有段口縁壺である。内外面に黒色処理が施されている。1と2の壺よりカマドの奥側より出土している。時期は土師器壺から6世紀後半頃に位置付けられる。

#### B区第12号竪穴住居跡（第102図）

B区の第12号竪穴住居跡はQ・R-21グリッド、B2区の南東側に位置する。

南側に接する第11号竪穴住居跡のカマドの煙道部を壊している。また、R-21P1に壊されている。

覆土は暗褐色土及び黒褐色土を主体とする。竪穴住居跡の南辺、西辺、東辺の一部が検出されている。北東辺は調査区域外に至る。平面形は残存

範囲から推定すると隅丸方形の形状と思われる。規模は、検出された範囲で長軸長4.48m、短軸長1.70m、深さ0.37mである。長軸方位はN-44°-Wを指す。

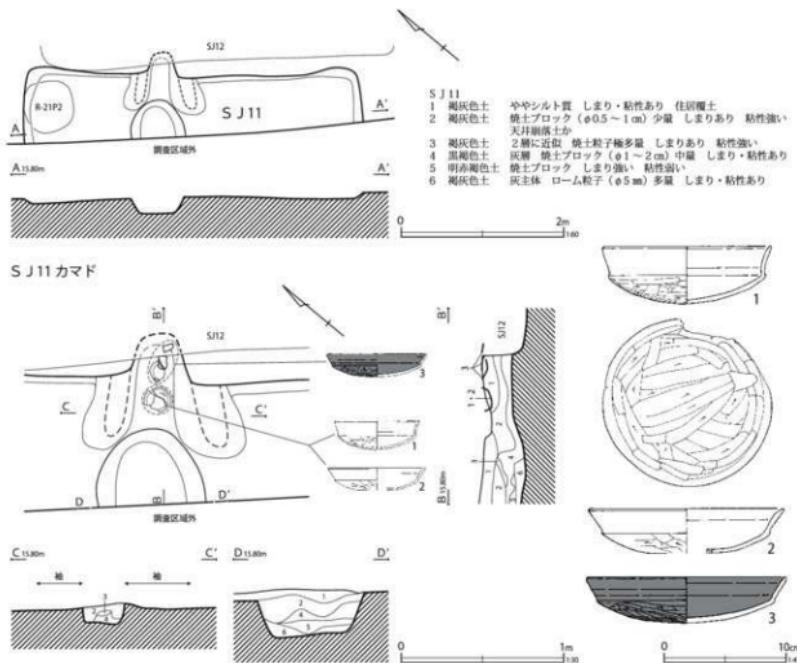
カマドは検出されておらず、調査区域外の北辺に位置すると思われる。壁溝は検出されなかつた。柱穴は4基検出されているが、主柱穴となるかは判然としない。

遺物は土師器が出土している。第103図1～3は壺である。1と2は口縁部が垂直に立ち上がる身の深い壺である。3は口縁部が外反する。4は甕である。胴が張っている。胴部にハケメ調整が施されている。時期は6世紀前半頃に位置付けられる。

#### B区第13号竪穴住居跡（第104図）

B区の第13号竪穴住居跡はQ・R-21グリッド、B2区の南東側に位置する。他の遺構との重複関係はない。

覆土はローム粒子や炭化物を含む暗褐色土を主体とする。平面形は西辺が調査区域外へ至るが、隅丸長方形とみられる。規模は長軸長2.47m、短軸長1.05m以上、深さ0.20mである。長軸方位はN-37°-Wを指す。カマド、柱穴、壁溝は検出されなかった。



第101図 B区第11号竪穴住居跡・出土遺物

遺物は須恵器、土師器、石製模造品が出土している。第104図1は須恵器壺の壊身である。口縁部が垂直に立ち上がる。産地は陶邑窯と思われる。2は土師器の壺口縁部である。内外面に黒色処理が施されている。

3と4は石製模造品である。3は滑石製である。長方形ぎみの形状である。穿孔は片面から錐状の工具で穿たれている。4は粘板岩製である。穿孔は片面から穿たれている。時期は、須恵器の壺から6世紀後半以降に位置付けられよう。

#### B区第14号竪穴住居跡（第105図）

B区の第14号竪穴住居跡はQ-20・21グリッド、B2区の南東側に位置する。他の構造との重複関係は、Q-20P7に切られ、Q-20P5を壊

している。覆土は、ロームブロックを多く含む黒色土、黒褐色土を主体とする。平面形は南北が調査区域外に延びているが、方形または長方形と推定される。

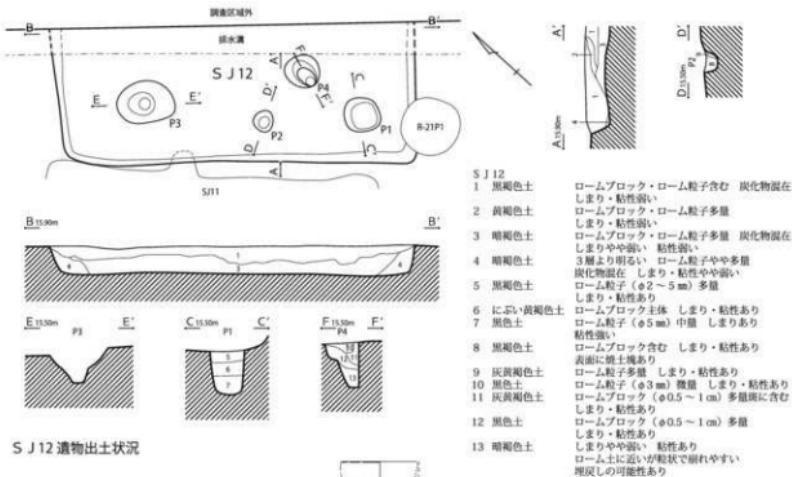
規模は長軸長5.00m、短軸長2.45m、深さ0.27mである。主軸方位はN-45°-Eを指す。

カマドは北西辺に設置されている。煙道部が調査区域外に延びる。検出された規模は長さ1.45m、幅0.80mで燃焼部の深さは0.20mである。燃焼部は住居壁からやや外側に位置する。

貯蔵穴はカマド右側、竪穴住居跡の北東コーナー部で検出された。規模は長軸0.70m、短軸0.64m、深さ0.24mである。柱穴は5基検出されたが、主柱穴となるかは判然としない。壁溝は検

第44表 B区第11号竪穴住居跡出土遺物観察表（第101図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	13.7	4.7	—	ACHIK	90	良好	明赤褐	カマドNo.1 蓋模倣壺	104-1
2	土師器	壺	(15.8)	[3.6]	—	AIK	15	普通	褐	カマドNo.1 蓋模倣壺	104-1
3	土師器	壺	16.2	3.8	—	AHK	55	普通	にぶい黄褐	カマドNo.2 有段口縁壺 黒色処理	104-1

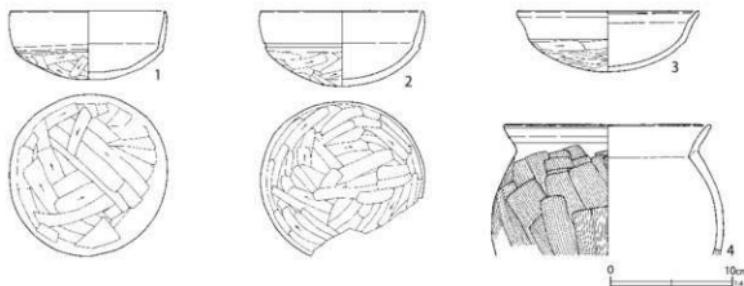


第102図 B区第12号竪穴住居跡

出された竪穴住居跡のカマドを除く全周から検出され、幅0.15~0.27m、深さ0.05~0.15mである。

遺物は土師器と石製品が出土している。第106図1~6は土師器の壺である。1~3は有段口縁

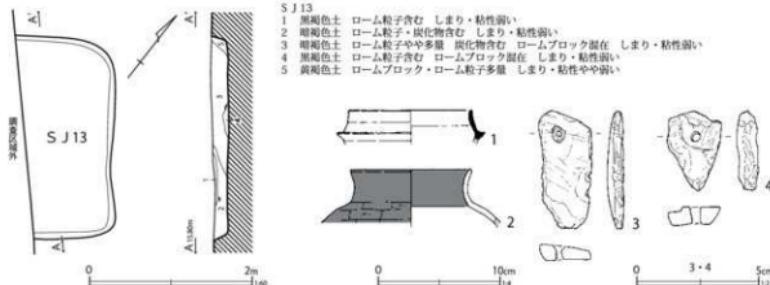
壺である。いずれも内外面に黒色処理が施されている。1は内面にまばらに8条の放射状暗文が施されている。4~6は身模倣壺である。4と6は内外面に黒色処理が施されている。4の口縁部は



第103図 B区第12号竪穴住居跡出土遺物

第45表 B区第12号竪穴住居跡出土遺物観察表（第103図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	12.7	5.6	—	I	90	良好	明赤褐色	No.2・5・7・11	104-2
2	土師器	壺	13.2	6.2	—	CHII	80	良好	褐色	No.1	104-2
3	土師器	壺	(14.8)	5.0	—	AI	35	良好	明赤褐色	蓋模破壊	104-2
4	土師器	甕	(16.6)	[10.7]	—	AHK	10	普通	明赤褐色	No.3	



第104図 B区第13号竪穴住居跡・出土遺物

第46表 B区第13号竪穴住居跡出土遺物観察表（第104図）

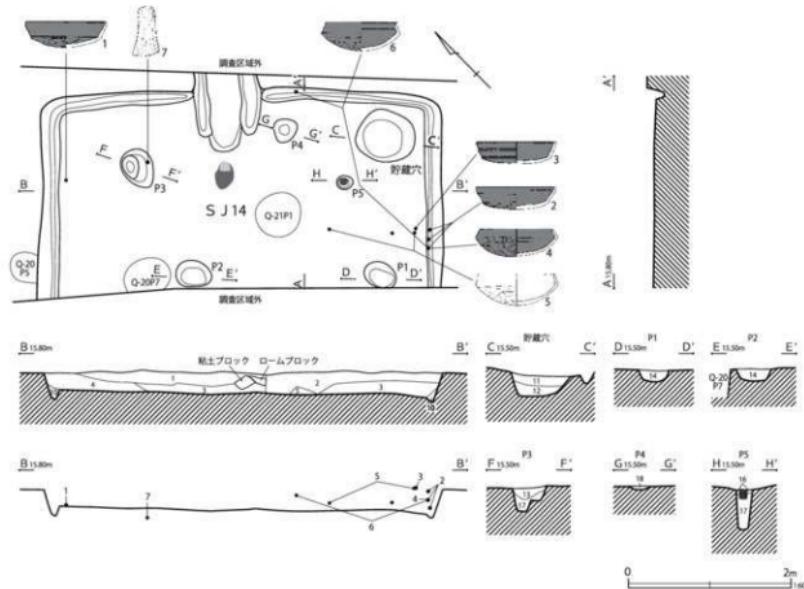
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(10.2)	[2.8]	—	I	15	良好	灰	陶邑窯産	105-1
2	土師器	甕	(9.8)	[4.8]	—	HII	10	良好	にぶい赤褐色	黒色処理	105-1
3	石製模造品	不明	長4.8 短2.2 厚0.7	孔径0.5	重11.2	残存100				滑石 片面押 穿孔 ミガキ	105-1
4	石製模造品	劍形	長3.3 短2.3 厚0.9	孔径0.4	重5.7	残存100				粘板岩 片面直 穿孔 ミガキ	105-1

内傾し、5と6の口縁部は垂直に立ち上がる。

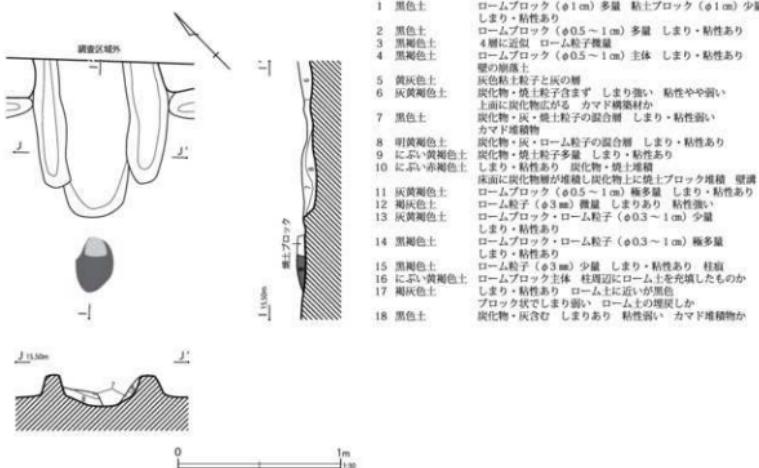
7は有孔砥石である。流紋岩製で両面から穿孔

されている。使用面は5面確認され、その内の1

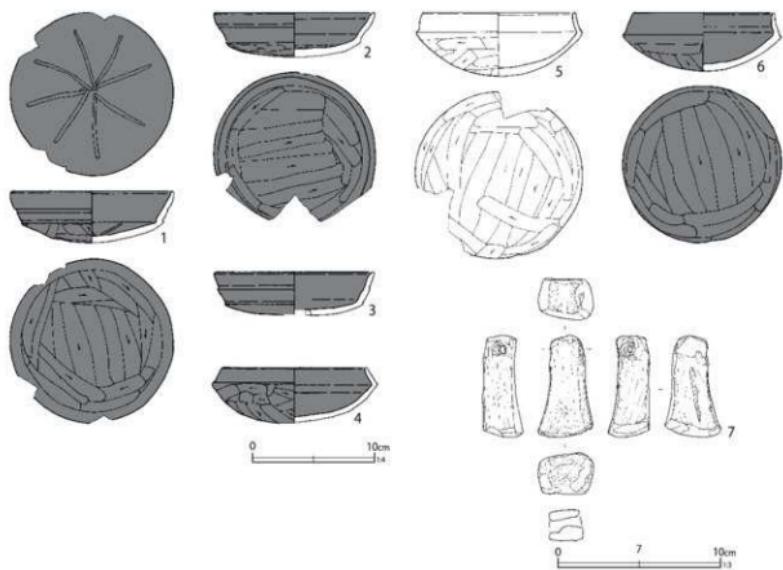
面には、刃物痕が認められる。



S J 14 カマド



第105図 B区第14号竪穴住居跡



第106図 B区第14号竪穴住居跡出土遺物

第47表 B区第14号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第106図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	貼土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	13.2	4.2	—	CHIK	90	普通	黒	No.10 有段口縁壺 放射状暗文 黒色処理	105-2
2	土師器	壺	13.2	3.7	—	ACHIK	85	普通	明赤褐	No.1・2・4 有段口縁壺 黒色処理	105-2
3	土師器	壺	(12.8)	[3.5]	—	CHI	40	普通	にぶい黄褐	No.5 有段口縁壺 黒色処理	105-2
4	土師器	壺	(11.8)	4.5	—	AIK	55	普通	黒褐	貯藏穴No.1 身模倣壺 黒色処理	105-2
5	土師器	壺	12.4	5.2	—	CHI	75	良好	橙	No.3・7 身模倣壺	105-2
6	土師器	壺	11.6	4.8	—	IK	95	普通	浅黄褐	貯藏穴No.1・8 身模倣壺 黒色処理	105-2
7	石製品	砾石	長6.2 短3.4 厚さ2.5 孔径0.9 重さ57.0 残存90							No.9 流紋岩 有孔	105-2

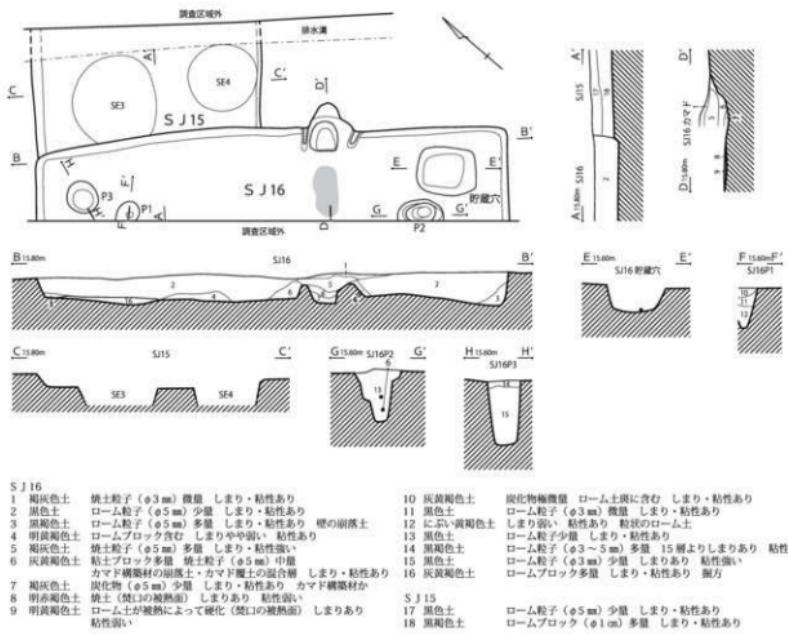
時期は土師器壺から6世紀後半頃になるとみられる。

#### B区第15・16号竪穴住居跡 (第107図)

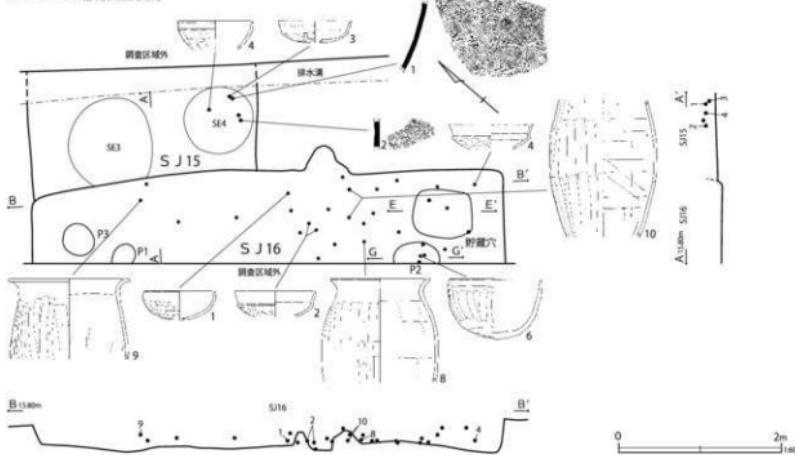
B区の第15号竪穴住居跡はR-21・22グリッド、B2区の南東側に位置する。他の遺構との重複関係は、第16号竪穴住居跡、第3・4号井戸跡によって壊されている。

覆土はロームブロックやローム粒子を含む黒色土及び黒褐色土を主体とする。北側は調査区域外に至り、南側は第16号竪穴住居跡によって壊されており平面形は不明である。

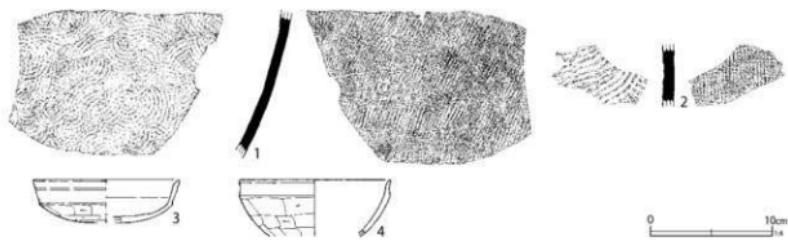
検出された範囲での規模は長軸長2.76m、短軸長1.15m、深さ0.25mである。長軸方位はN-39°-Wを指す。カマド、柱穴、壁溝は検出されな



#### S J 15・16 遺物出土状況



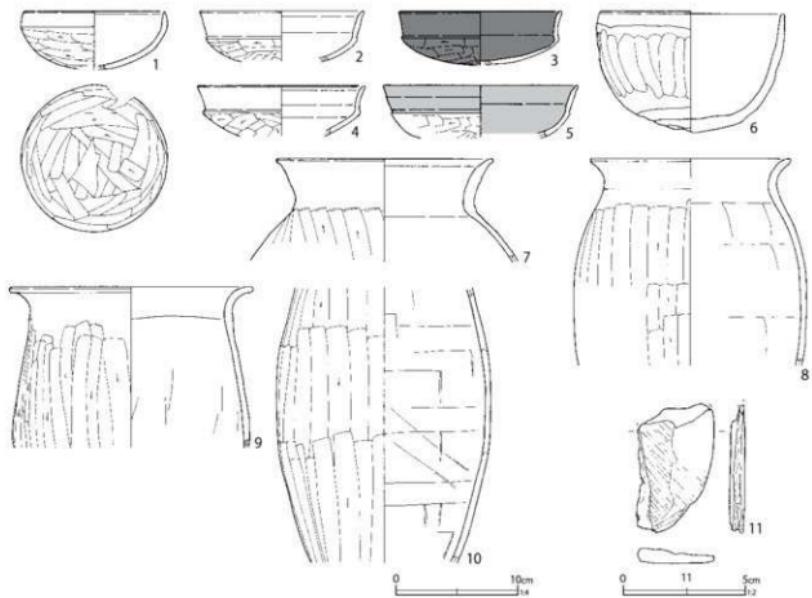
第107図 B区第15・16号竪穴住居跡



第108図 B区第15号竪穴住居跡出土遺物

第48表 B区第15号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第108図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	—	[12.1]	—	IJK	10	良好	灰白	No.2 外面平行叩き・力半目 内面同心円文	106-1
2	須恵器	甕	—	[5.1]	—	I	5	良好	暗灰	No.1 外面平行叩き 内面同心円文	106-1
3	土師器	环	(11.9)	[3.5]	—	CHII	30	普通	橙	No.4 盖模倣环	106-1
4	土師器	环	(12.3)	[4.6]	—	CI	30	良好	橙	No.5 盖模倣环	106-1



第109図 B区第16号竪穴住居跡出土遺物

第49表 B区第16号竪穴住居跡出土遺物観察表（第109図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	11.5	[4.7]	—	EHIK	90	良好	明赤褐	SJ16Ne24-SJ15.16 北武藏型壺	106-2
2	土師器	壺	(13.3)	[4.1]	—	CHI	40	普通	にぶい黄褐	SJ16Ne20-21 蓋模倣壺	106-2
3	土師器	壺	(13.3)	[4.4]	—	CHI	30	普通	明褐	SJ16 蓋模倣壺 黒色処理	106-2
4	土師器	壺	13.7	[4.1]	—	AHI	50	良好	明赤褐	SJ16Ne2 蓋模倣壺	106-2
5	土師器	壺	(15.8)	[4.3]	—	AHI	20	良好	赤	SJ15.16 有段口縁壺 赤彩	
6	土師器	鉢	14.7	9.9	—	CEHIK	95	不良	黒	SJ16 P 2 №1	106-2
7	土師器	甕	17.6	[8.4]	—	AHI	30	良好	明赤褐	SJ16 P 2・貯蔵穴	106-2
8	土師器	甕	(16.3)	[17.0]	—	AGHI	30	普通	にぶい黄褐	SJ16 貯蔵穴・No13-SJ15.16	
9	土師器	甕	(19.7)	[13.2]	—	HIK	30	普通	明赤褐	SJ16Ne27・SE 4	106-2
10	土師器	甕	—	[22.5]	—	AHK	20	普通	暗褐	SJ16Ne15-16	
11	石製品	不明	長[5.3]	短[3.2]	厚さ0.7	重さ14.6	残存50			SJ16 滑石 ミガキ	

かった。

遺物は須恵器と土師器が出土している。第108図1と2は須恵器の甕片である。1は外面に平行タタキ痕とカキ目がみられ、内面に同心円文アテ具痕がみられる。2は外面に平行タタキ痕、内面に同心円文アテ具痕がみられる。3と4は土師器の壺である。

B区の第16号竪穴住居跡はR-21・22グリッド、B2区の南東側に位置する。他の遺構との重複関係は、第15号竪穴住居跡、第3号戸井戸跡を壊している。北辺と西辺、東辺の一部を検出し、南側の大半は調査区域外へと延び、平面形は長方形と推定される。規模は、長軸長5.78m、検出された短軸長1.51m、深さ0.40mである。主軸方位はN-48°-Eを指す。

カマドは、北辺やや東寄りに設置され、規模は長さ1.40m、幅0.90m、深さ0.35mである。煙道部は長さ0.15m、深さ0.10mである。貯蔵穴はカマド右側、竪穴住居跡の北東コーナー部分に位置し、規模は長軸長0.75m、短軸長0.59m、深さ0.28mである。主柱穴はカマド側で3基検出された。P1と対応する可能性があるピットは、P2とP3の2基あり、規模的にはどちらも対応する可能性がある。壁溝は検出されなかった。

遺物は土師器と石製品が出土している。第109

図1～5は土師器の壺である。1は北武藏型壺に位置付けられよう。2～4は蓋模倣壺である。3は内外面に黒色処理が施されている。5は有段口縁壺であるが内外面に赤彩が施されている。6は土師器の鉢である。全体的に摩滅しているが、ほぼ完形である。外面と見込みが煤けている。P2から出土している。7～10は甕である。胴部のケズリ方向はいずれも縦方向である。11は滑石製の製品である。欠損しているが、本来は穿孔を持つ石製模造品である。一方向から研磨されている。時期は、第16号竪穴住居跡は7世紀後半頃で第15号竪穴住居跡はそれ以前となる。

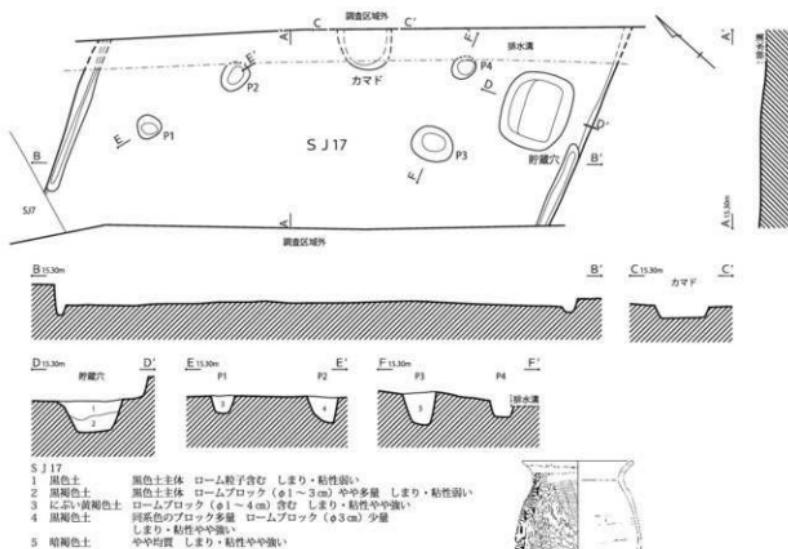
#### B区第17号竪穴住居跡（第110図）

B区の第17号竪穴住居跡はV・W-26グリッド、B3区のほぼ中央に位置する。

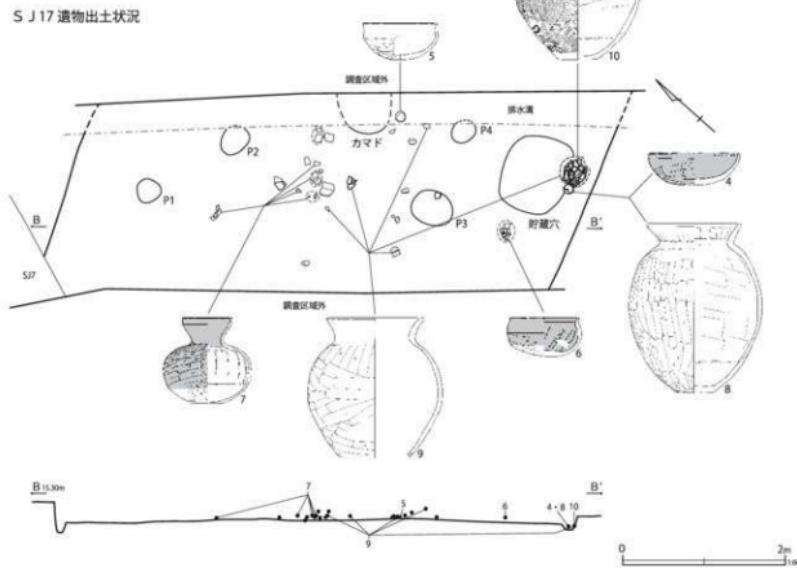
他の遺構との重複関係は、第7号竪穴住居跡に壊されている。北辺と南辺は調査区域外に延びる。

平面形は四方が調査区域外に至るために不明である。規模は長軸長6.10m、検出されている短軸長は2.20m、深さ0.25mである。主軸方位はN-67°-Eを指す。

カマドの一部が北側で検出された。検出された規模は長さ0.15m、幅0.50m、深さ0.13mである。貯蔵穴はカマド右側、東辺近くで検出された。壁溝は西辺と東辺の南半分で検出された。幅



S J 17 遺物出土状況



第110図 B区第17号竪穴住居跡

0.12~0.20m、深さ0.05~0.06mである。

遺物は須恵器と土師器が出土している。第111図1は須恵器の脚付壺の脚部とみられる。透かしの底辺が残る。産地は末野窯の可能性がある。2は須恵器壺の胴部片である。外面に擬格子タタキ痕、内面に同心円文アテ具痕がみられる。3は須恵器壺の破片である。内面に無文アテ具痕がみられる。産地は南比企窯の製品である。

4~6は土師器の壺である。4は内外面に赤彩が施されている。5と6は口縁部が屈曲する。6は内外面に赤彩が施され、内面にミガキが施されている。底部に「キ」のようなヘラ記号がみられる。7は土師器の壺である。内外面に赤彩が施され、内面に放射状暗文が施されている。

8~10は土師器の壺である。いずれも胴部が張ったタイプである。10は外面にハケメがみられる。貯蔵穴の縁部分から出土している。時期は、6世紀代のやや古い時期とみられる。

#### B区第18号竪穴住居跡（第112図）

B区の第18号竪穴住居跡はX・Y-28グリッド、B3区の南東側に位置する。

他の遺構との重複関係は、第8・9号井戸跡、第3号溝跡より新しく、第7号井戸跡、第4号溝跡より古い。

覆土は黒褐色土を主体とする。北辺と南辺は調査区域外に延びる。平面形は不明である。規模は長軸長4.67m、短軸長2.75m、深さ0.40mである。長軸方位はN-65°-Wを指す。

カマドは検出されなかった。貯蔵穴は東辺近くから検出された。規模は長軸長1.88m、短軸長1.04m、深さ0.55mである。壁溝は東辺で検出され、幅0.13~0.23mである。柱穴は検出されなかった。

遺物は須恵器、土師器、石製品が出土している。第113図1と2は須恵器の壺蓋である。1は天井部に「×」のヘラ記号がみられる。2は天井部に「八」のようなヘラ記号がみられるが、欠損

しているため詳細は不明である。3は壺身である。完形品である。口縁部がやや内傾する。底部に「×」のヘラ記号がみられる。また、底部に別個体の破片が張り付いている。これらの須恵器はいずれも北関東系の窯跡製品とみられる。

4~14は土師器の壺である。4~9は蓋模倣壺で10~14は身模倣壺である。15と16は壺である。口縁部が屈曲し、壺より一回り大きい。17は高壺である。蓋模倣の身を持ち、脚部が短く、身部にナデつけておりやや拙い。18~20は壺である。いずれも口縁部にヨコナデ、胴部に横方向にヘラケズリが行われる。

21は鉢である。外面及び内面の一部が煤けている。22~24は甕である。22は小型のタイプである。23と24は胴部が張る球胴甕である。

25は石製模造品である。粘板岩製で円板のような形状である。26~29は白玉である。27は滑石製でほかは粘板岩製である。研磨方向は26は未調整、27と28は斜方向、29は不明である。30はチャートの剥片である。時期は須恵器から6世紀後半頃とみられる。

#### B区第19号竪穴住居跡（第115図）

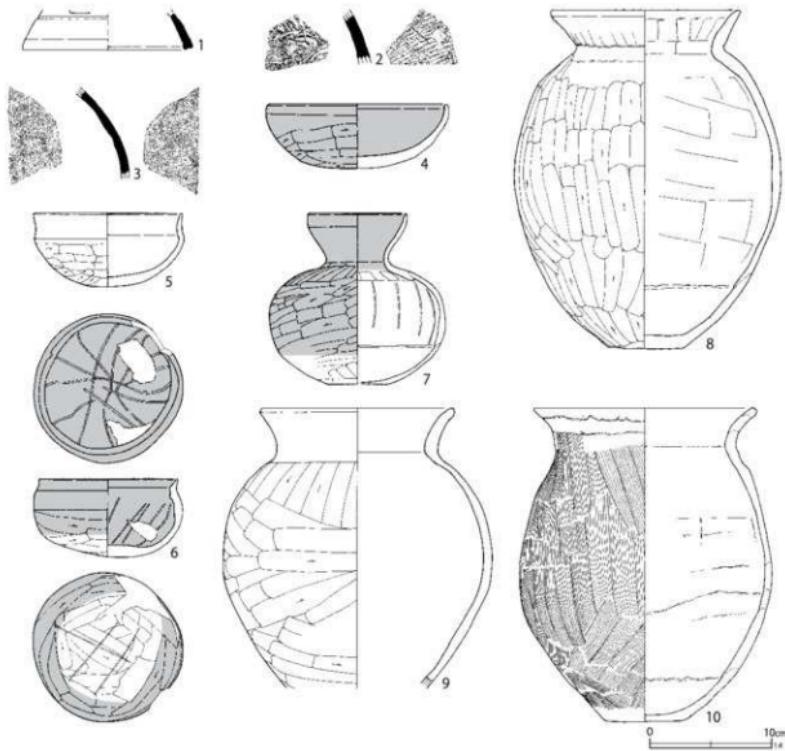
B区の第19号竪穴住居跡はT-23・24グリッド、B3区の北西側に位置する。

他の遺構との重複関係は、第2号竪穴住居跡と第10号竪穴住居跡に壊されている。西辺は調査区域外に延び、北辺と南辺がわずかに確認できた。検出された規模は長軸長2.20m、短軸長1.90m、深さ0.10mである。長軸方位はN-40°-Wを指す。カマド、貯蔵穴、主柱穴、壁溝は検出されなかった。また、遺物も出土しなかった。時期は第10号竪穴住居跡に壊されていることからそれ以前となる。

#### B区第22・23号竪穴住居跡（第116図）

B区の第22号竪穴住居跡はU-24・25グリッド、B3区の北西側に位置する。

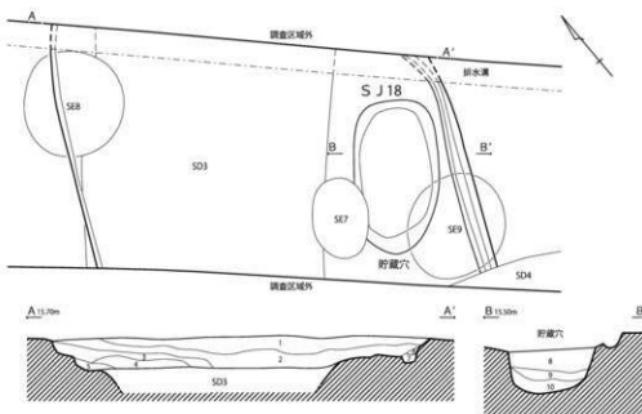
他の遺構との重複関係は、第23号竪穴住居跡を



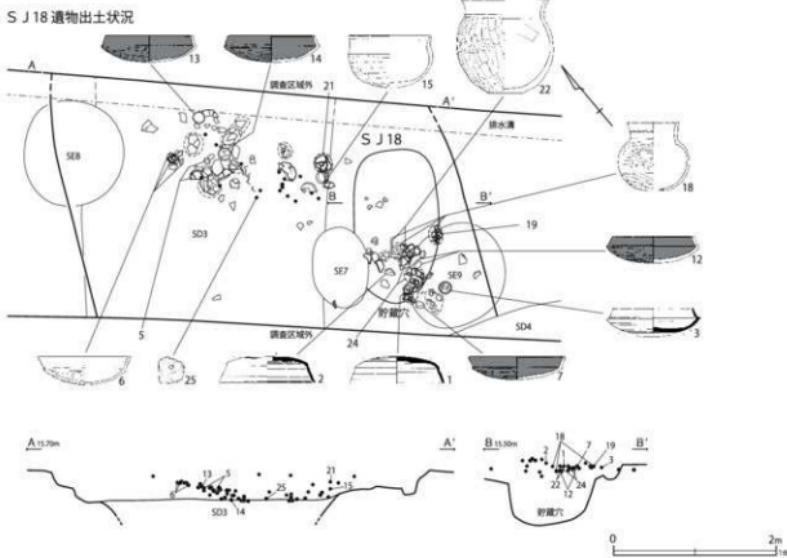
第111図 B区第17号竪穴住居跡出土遺物

第50表 B区第17号竪穴住居跡出土遺物観察表(第111図)

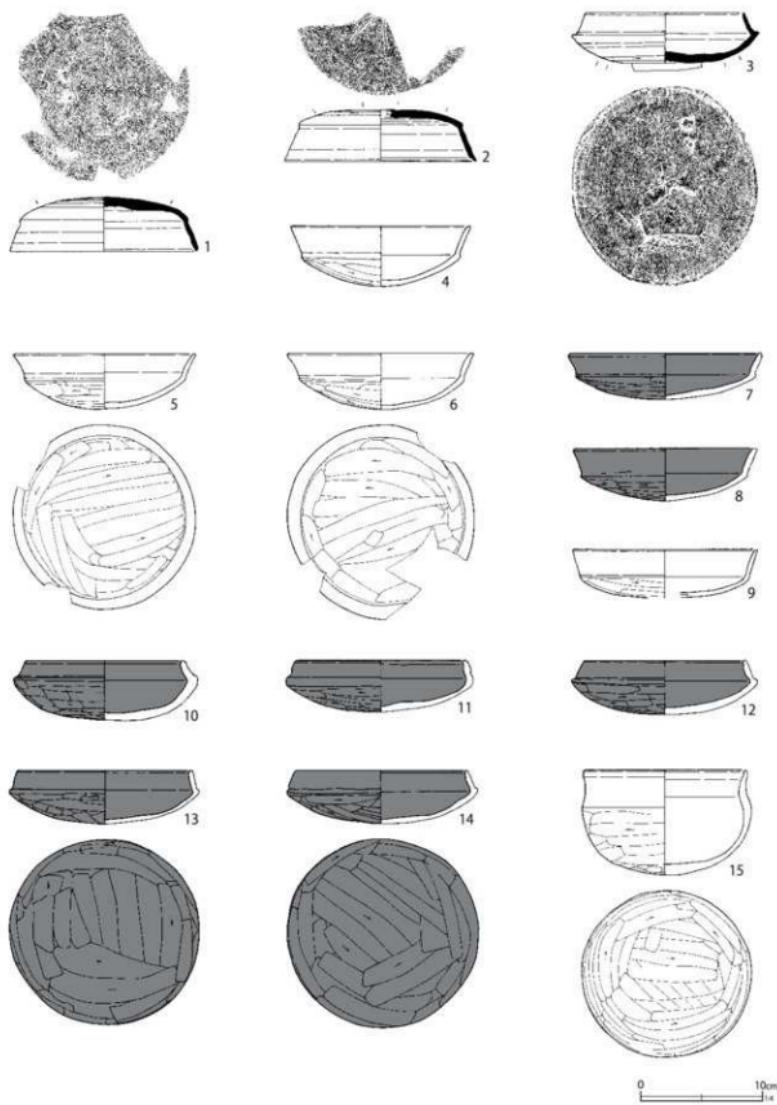
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	脚付壺	—	[3.2]	(13.0)	AI	5	普通	灰	末野窯産 透かし	
2	須恵器	甕	—	[4.5]	—	BEI	5	良好	灰	末野窯産 外面報格子 内面同心円文	
3	須恵器	壺	—	[7.6]	—	EU	5	良好	灰	南比企窯産 内面無文当て具	
4	土師器	壺	14.4	5.7	—	AIK	95	普通	赤	No.1 赤彩	107-1
5	土師器	壺	12.2	6.0	—	GI	95	普通	褐	No.7	107-1
6	土師器	壺	11.3	6.4	—	EIK	90	良好	赤	No.3・SK2 赤彩 放射状暗文 ヘラ記号	107-1
7	土師器	甕	(8.0)	14.0	(4.8)	HI	40	良好	暗赤褐	No.16・18・23・25・カマド・カマドNo.22 赤彩	107-1
8	土師器	甕	15.4	27.6	6.0	EGI	90	普通	にぶい赤褐	貯藏穴No.1	107-1
9	土師器	甕	15.6	[22.8]	—	AGH	40	普通	にぶい褐	No.2・5・12・13・21・SJ17・SK2	107-1
10	土師器	甕	17.8	25.7	6.4	AII	80	普通	にぶい褐	貯藏穴・No.2	107-1



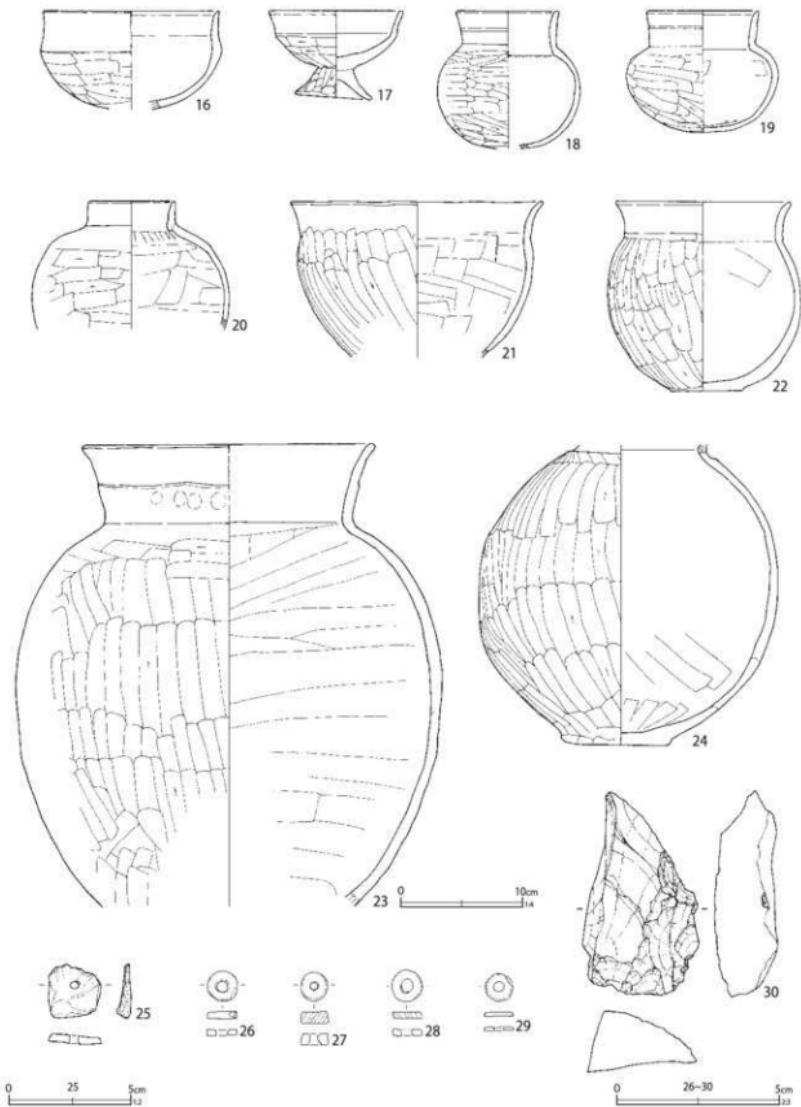
- S J 18
- 1 黒褐色土 灰色シルトブロック ( $\phi 2\text{cm}$ ) 少量 しまり・粘性あり
  - 2 黒褐色土 1層より多い ロームブロック ( $\phi 3\text{cm}$ ) 含む しまりやや強い・粘性あり
  - 3 黒褐色土 ロームブロック中に含む しまりやや強い・粘性あり
  - 4 黒褐色土 劣質 白色粒子含む しまりやや強い・粘性あり
  - 5 黒褐色土 シルトブロック ( $\phi 5\text{cm}$ ) に黒褐色土混入 しまりやや強い・粘性あり
  - 6 黒褐色土 劣質 黄褐色色粒子  $\phi 0.5\text{cm}$  しまりやや強い・粘性あり
  - 7 に多い黄褐色土 ロームブロック中に少量含む しまり弱い・粘性弱い
  - 8 黄褐色土 ロームブロック中に多く含む しまり弱い・粘性弱い
  - 9 黄褐色土 黒褐色土にロームブロック・ローム粒子含む
  - 10 黒褐色土 硬・黒褐色土 しまり・粘性強い



第112図 B区第18号竪穴住居跡



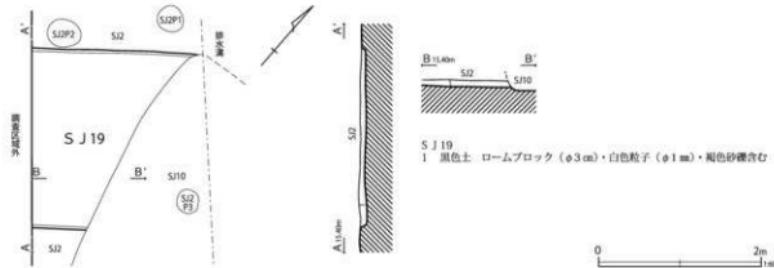
第113図 B区第18号竪穴住居跡出土遺物（1）



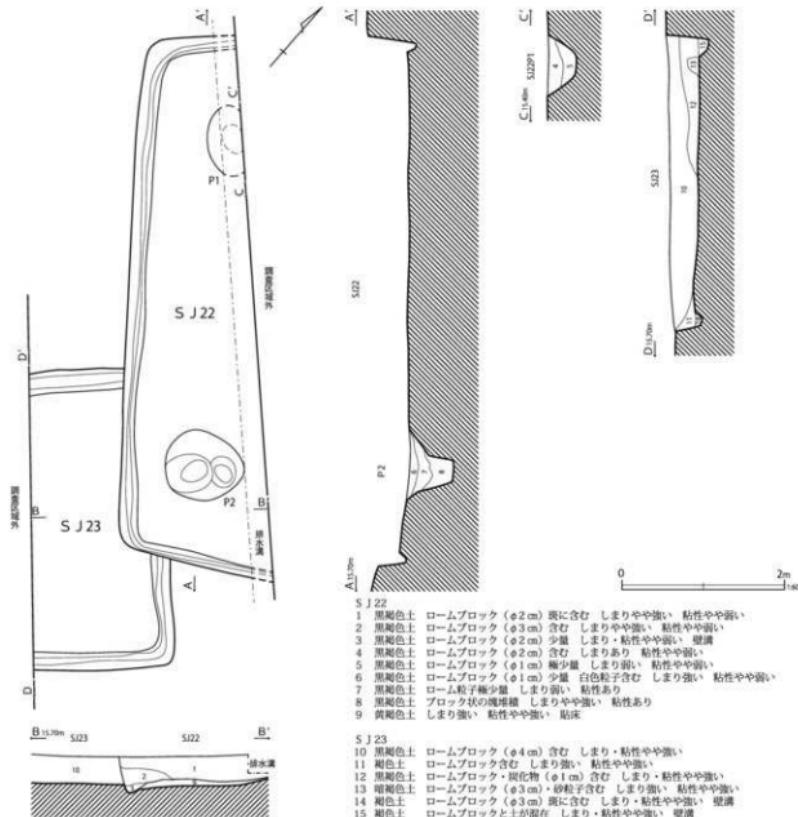
第114図 B区第18号竪穴住居出土遺物（2）

第51表 B区第18号竪穴住跡出土遺物観察表 (第113・114図)

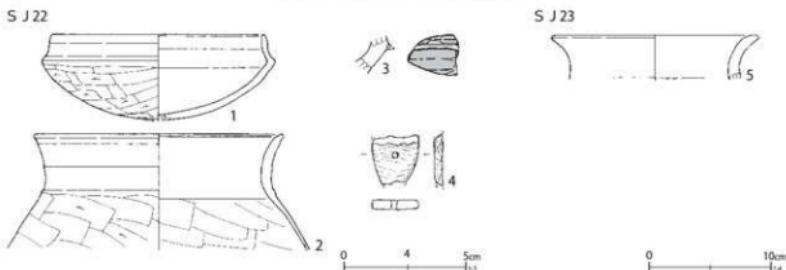
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考			図版			
										c	No.9	ヘラ記号	ヘラケズリ	北開東		
1	須恵器	蓋	(15.0)	4.4	—	BEIK	55	良好	灰	c	No.9	ヘラ記号	ヘラケズリ	北開東	107-2	
2	須恵器	蓋	(15.6)	4.2	—	BEIK	30	良好	灰	No.13	B 3	一括	ヘラ記号	ヘラケズリ	北開東系	107-2
3	須恵器	壺	13.0	4.1	—	BEIK	100	良好	灰	No.3	ヘラ記号	焼き台付着	北開東系	107-2		
4	土師器	壺	(14.6)	4.9	—	CEIK	65	普通	にぶい黄橙	SK 7	蓋模倣壺	—	—	—	108-1	
5	土師器	壺	14.6	4.5	—	BCEHK	95	普通	橙	No.42-45	蓋模倣壺	—	—	—	108-1	
6	土師器	壺	15.0	4.6	—	CEHK	80	普通	にぶい赤褐	No.67-70-71	蓋模倣壺	—	—	—	108-1	
7	土師器	壺	15.6	3.8	—	EIK	50	普通	灰褐	c	No.7	蓋模倣壺	黒色処理	—	108-1	
8	土師器	壺	14.9	4.3	—	EIK	80	普通	灰褐	SE11フク土	蓋模倣壺	黒色処理	—	—	108-1	
9	土師器	壺	(15.1)	[3.9]	—	EHK	50	普通	橙	b+SE11フク土	Y-29	蓋模倣壺	—	—	108-1	
10	土師器	壺	12.9	4.9	—	EHK	75	普通	赤褐	b+SK 7	身模倣壺	黒色処理	—	—	108-1	
11	土師器	壺	13.7	4.3	—	IK	55	普通	にぶい褐	No.75+SD 3	身模倣壺	黒色処理	—	—	108-1	
12	土師器	壺	13.1	4.4	—	EHK	70	普通	にぶい赤褐	c	No.12-20	身模倣壺	黒色処理	—	108-1	
13	土師器	壺	14.4	4.4	—	EHK	100	良好	明赤褐	No.60	身模倣壺	黒色処理	—	—	108-1	
14	土師器	壺	14.0	4.3	—	EHK	100	普通	にぶい赤褐	No.61	身模倣壺	黒色処理	—	—	108-1	
15	土師器	壺	13.1	8.6	—	CEHK	95	普通	にぶい赤褐	No.38	—	—	—	—	108-2	
16	土師器	壺	(14.3)	[8.0]	—	CEHK	30	普通	橙	—	—	—	—	—	108-1	
17	土師器	高壺	10.8	7.3	5.8	CEHK	95	普通	にぶい橙	No.72	—	—	—	—	108-2	
18	土師器	壺	8.1	[11.3]	—	CK	45	普通	にぶい赤褐	b+c	No.15-21-22	—	—	—	108-2	
19	土師器	壺	9.0	10.0	—	CEHK	75	普通	橙	b+c	No.22	—	—	—	108-2	
20	土師器	壺	7.0	[10.5]	—	CEHK	50	普通	橙	a+b	No.37	—	—	—	—	
21	土師器	鉢	20.3	[12.8]	—	CEHK	85	普通	橙	No.74-84-90	—	—	—	—	109-1	
22	土師器	甕	14.4	15.4	5.9	EIK	70	普通	にぶい黄橙	No.20-SJ16	底部	ヘラケズリ	—	—	109-1	
23	土師器	甕	—	[24.4]	8.8	EIK	60	普通	にぶい黄橙	b+c	No.10-14	底部	ヘラケズリ後ナデ	—	109-1	
24	土師器	甕	(23.4)	[37.7]	—	CEIK	20	普通	明赤褐	c	—	—	—	—	109-1	
25	石製機造品	不明	長2.2	短2.2	厚0.6	孔径0.4	重2.5	残存100	—	No.109	粘板岩	片面直	穿孔	ミガキ	—	
26	石製品	白玉	長0.9	短0.9	厚0.2	孔径0.2	重0.2	残存95	—	—	粘板岩	中G 5 c III	—	—	—	
27	石製品	白玉	長0.9	短0.9	厚0.4	孔径0.3	重0.5	残存80	—	—	滑石	中C 2 c III	—	—	—	
28	石製品	白玉	長1.0	短0.9	厚0.2	孔径0.4	重0.2	残存95	—	—	粘板岩	中G 2 c II	—	—	—	
29	石製品	白玉	長0.9	短0.9	厚0.1	孔径0.3	重0.1	残存80	—	—	粘板岩	中G 4 c II	—	—	—	
30	石製品	剥片	長さ6.3	幅3.1	厚さ2.0	—	重さ41.5	—	—	c	チャート	—	—	—	—	



第115図 B区第19号竪穴住跡



第116図 B区第22・23号竪穴住居跡



第117図 B区第22・23号竪穴住居跡出土遺物

第52表 B区第22・23号竪穴住居跡出土遺物観察表（第117図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(17.3)	[7.0]	—	CK	30	普通	にぶい黄	SJ22 身模壺	
2	土師器	甕	(20.2)	[9.5]	—	ACGHI	20	良好	にぶい黄褐	SJ22 B3一括 角閃石多量	
3	土師器	壺	—	[3.2]	—	ACHI	5	普通	赤褐色	SJ22 赤彩	
4	石製模造品	不明	長[2.1]	短[1.9]	厚さ0.4	孔径0.3	重さ3.0	残存60		SJ22 滑石 片面直 ミガキ	
5	土師器	甕	(16.6)	[3.7]	—	AJ	10	普通	にぶい黄褐	SJ23	

壊している。西辺と北辺、南辺の一部のみ検出され、東側は調査区域外に延びる。検出された規模は長軸長6.45m、短軸長1.80m、深さ0.35mである。長軸方位はN-40°-Wを指す。

カマドは検出されなかった。調査区域外に位置するとみられる。主柱穴は2基検出された。P1は検出された範囲で長径0.75m、短径0.18m、深さ0.33mである。P2は長径1.00m、短径0.86m、深さ0.53mである。壁溝は検出された範囲において全周する。幅0.15~0.25m、深さ0.04~0.10mである。

遺物は土師器と石製模造品が出土している。第117図1は土師器の壺である。やや大振りな身模倣壺である。底部が若干煤けている。2は土師器の甕である。3は土師器の壺片である。内外面に赤彩が施されている。器壁がやや厚い。4は石製模造品である。滑石製で片面から穿孔されている。

B区の第23号竪穴住居跡はU-24・25グリッド、B3区の北西側に位置する。他の遺構との重複関係は、第22号竪穴住居跡に壊されている。

北辺、南辺、東辺の一部を検出した。西側は調査区域外に延びる。検出された範囲での規模は長軸長3.70m、短軸長1.70m、深さ0.38mである。

カマド、主柱穴は検出されなかった。壁溝は検出された範囲において全周する。幅0.20~0.27m、深さ0.05~0.10mである。

遺物は土師器甕の口縁部片が1点出土している。時期は第22号竪穴住居跡が6世紀後半で第23号竪穴住居跡がそれ以前となる。

B区第25・28号竪穴住居跡（第118図）

B区の第25号竪穴住居跡はP-19・20グリッド、B2区のほぼ中央に位置する。

第28号竪穴住居跡、第5号溝跡に壊されている。南辺、東辺の一部のみ検出された。検出された範囲での規模は長軸長2.70m、短軸長2.45m、深さ0.07mである。長軸方位はN-33°-Wを指す。覆土はローム粒子、炭化物を含む褐色土である。カマド、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。柱穴は1基検出されたが、主柱穴となるかは不明である。遺物は出土していない。

B区の第28号竪穴住居跡はP-19グリッド、B2区のほぼ中央に位置する。

第25号竪穴住居跡を壊している。東辺と北辺、南辺の一部のみ検出された。西側は調査区域外に延びる。平面形の詳細は不明であるが、方形に近い形状と推定される。

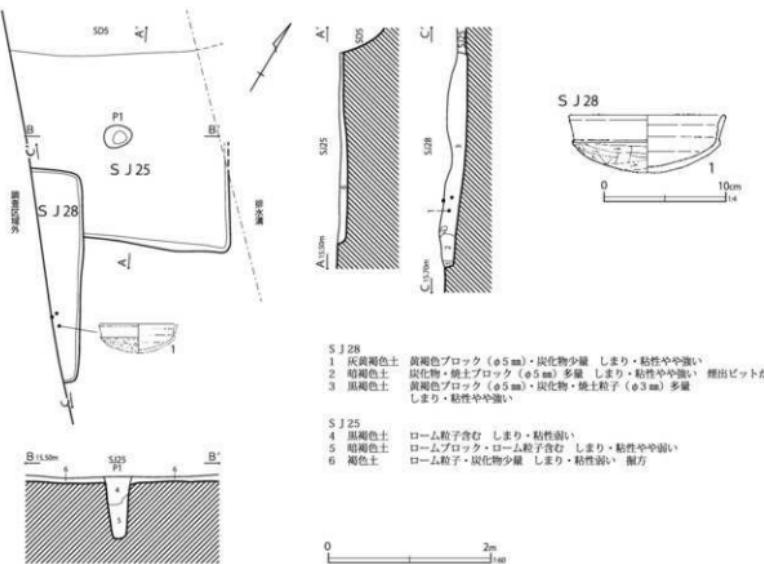
検出された範囲での規模は、長軸長2.60m、短軸長0.57m、深さ0.25mである。長軸方位はN-30°-Wを指す。

遺物は土師器の蓋模倣壺が1点出土している。時期は第28号竪穴住居跡が6世紀後半で第25号竪穴住居跡がそれ以前となる。

B区第26号竪穴住居跡（第119図）

B区の第26号竪穴住居跡はO・P-19グリッド、B2区のほぼ中央に位置する。

第5号井戸跡に壊されている。北辺、東辺の一部を検出した。南辺は第5号井戸跡と排水用に設置した釜場によって壊されている。西側は調査区域外に延びる。検出された範囲での規模は長軸長



第118図 B区第25・28号竪穴住居跡・出土遺物

第53表 B区第28号竪穴住居跡出土遺物観察表（第118図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	団版
1	土師器	壺	12.7	4.7	—	AIK	60	良好	にぶい褐	No.1 蓋模倣壺	

3.20m、短軸長2.33m、深さ0.12mである。主軸方位はN-43°-Wを指す。

カマドは北辺に設置され、規模は長さ0.90m、幅0.50m、深さ0.28mである。燃焼部がやや外側に位置する。

遺物は土師器が出土している。第120図1は壺である。カマドから出土している。口縁部が垂直に立ち上がり口径がやや小さい。2~5は甕である。いずれもカマドから出土している。胴部が張る球形甕である。

## (2) 井戸跡

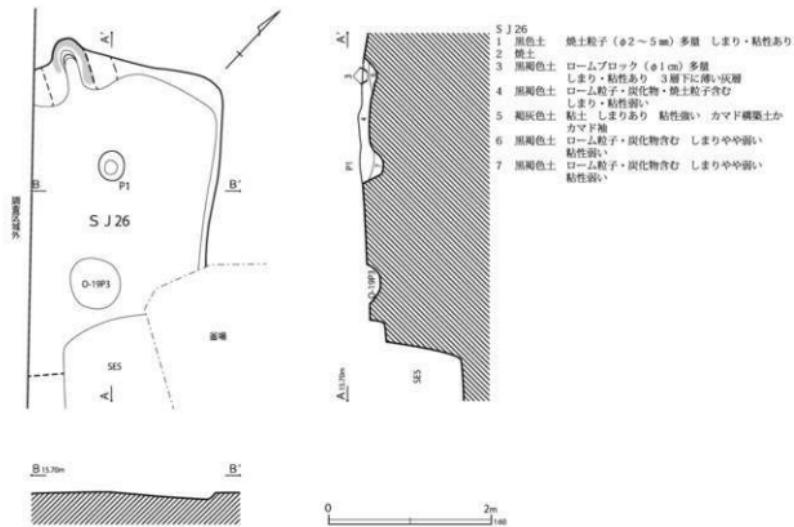
B区において井戸跡は10基検出され、このうち古墳時代・飛鳥時代に位置付けられる井戸跡は9

基検出された。安全対策のため、1・3・7・11・12は底面まで掘り下げなかった。

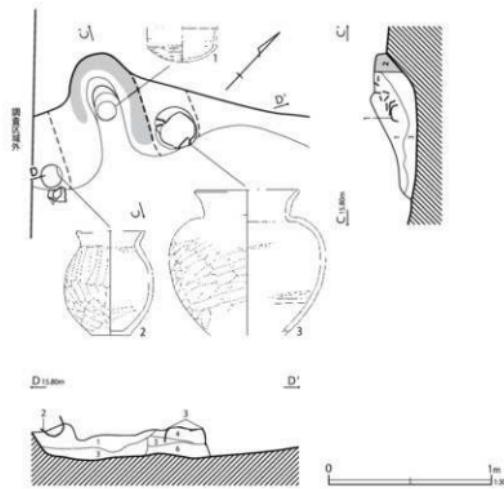
第56表に検出グリッド、平面形、規模、深さを示した。以下にそれぞれの井戸跡の特徴、重複関係、出土遺物について記す。

## B区第1号井戸跡（第121図）

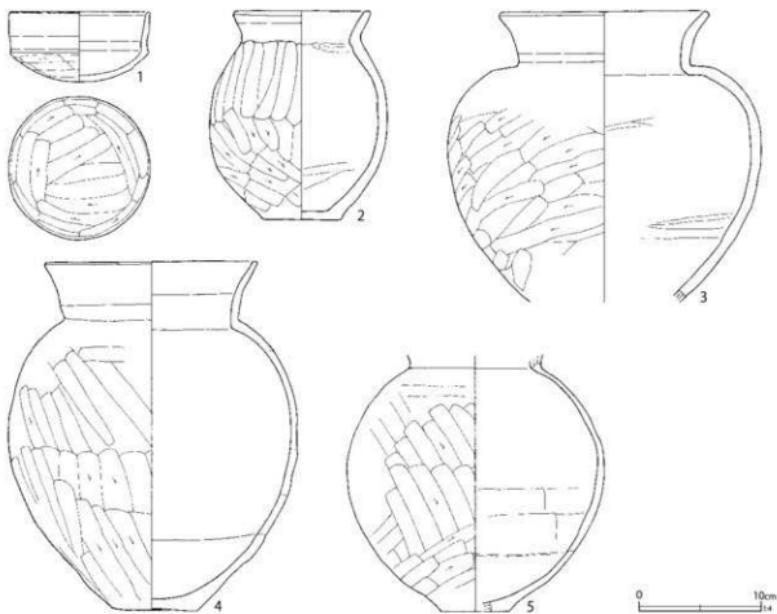
B区南東側に位置する。第14号竪穴住居跡と第25号竪穴住居跡に挟まれた空閑地に所在し、ピットを一部壊している。平面形は楕円形に近く、漏斗状の断面形状を呈する。遺物は、第1層を中心に土師器瓶の破片が散在した状態で出土した。時期は古墳時代後期に位置付けられると思われる。



S J 26 カマド



第119図 B区第26号竪穴住居跡



第120図 B区第26号竪穴住居跡出土遺物

第54表 B区第26号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第120図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	11.4	5.7	—	BHK	95	良好	明赤褐	カマド・No.1 盖模倣壺	109-2
2	土師器	甕	(10.8)	17.1	6.5	IK	60	普通	にぶい赤褐	カマド袖・No.2	109-2
3	土師器	甕	(16.6)	[23.7]	—	CIK	60	普通	にぶい橙	カマド袖・No.3	109-2
4	土師器	甕	17.0	28.3	6.9	IK	80	普通	にぶい黄褐	カマド	109-2
5	土師器	甕	—	[21.0]	(5.6)	CHI	20	良好	橙	カマド	109-2

#### B区第3号井戸跡 (第121図)

B区南東端に位置し、第15号竪穴住居跡を壊し、第16号竪穴住居跡に壊されている。平面形は直径1m前後の楕円形で、漏斗状の断面形状を呈する。遺物は図示できるものはない。

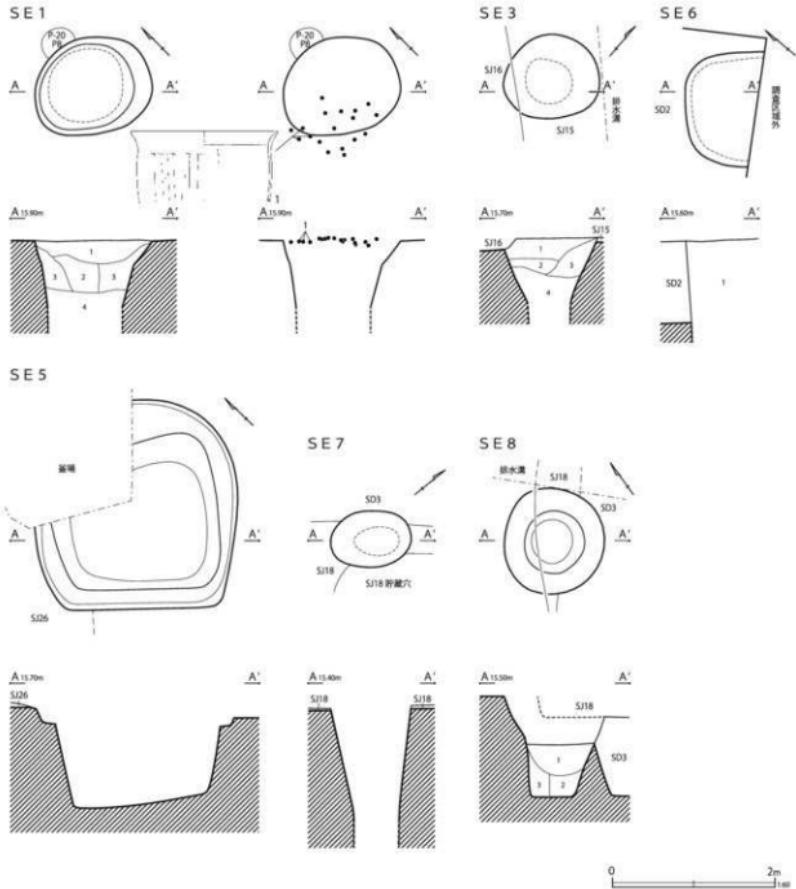
#### B区第5号井戸跡 (第121図)

B区の中央部に位置し、北西側に第26号竪穴住居跡が重複している。平面形は2.5m前後の矩

形を呈する。断面形は浅く掘り込んだ中をほぼ垂直に掘削する有段タイプである。遺物は図示できるものはない。

#### B区第6号井戸跡 (第121図)

B区南東端に位置する。東半分は調査区域外にかかる。第2号溝跡が埋没した後に、埋土を掘り込んでいる。平面形は矩形に近く、ほぼ垂直に掘り込んでいる。覆土は黒色土の単一層で、一気



SE 1  
1 黒褐色土 黒色粒子 ( $\phi 3 \sim 5\text{ mm}$ ) 多量 灰色粘土ブロック ( $\phi 1\text{ cm}$ ) 離散

2 黒褐色土 シルト質、粘性あり、層面に近似 しまりやや弱い

3 黒褐色土 ロームブロック ( $\phi 5\text{ cm}$ ) 多量 しまりあり、粘性強い、壁の崩落土

4 黒褐色土 ローボロした土 ローム粒子 ( $\phi 5\text{ mm}$ ) 多量 しまりやや弱い  
粘性あり

SE 6  
1 黒色土 廃水質少 有機物含む しまり強い、粘性やや強い

2 黑褐色土 シルト質 廃水質や多量 しまりやや弱い、粘性強い

3 黄褐色土 シルト質 黄褐色ブロック ( $\phi 5\text{ mm}$ ) 多量 しまりやや弱い

4 黄褐色土 やや砂質 植物質少量 しまりやや弱い、粘性強い

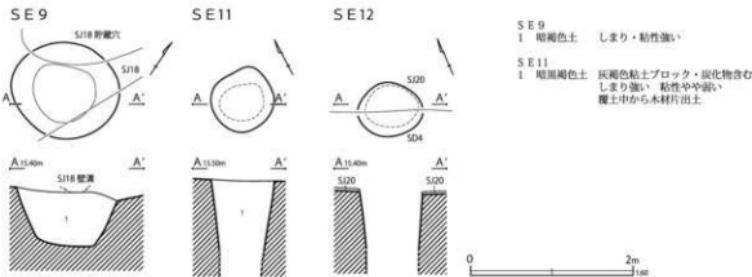
SE 3  
1 黑褐色土 ローム粒子 ( $\phi 5\text{ mm}$ ) 離散 しまり・粘性あり

2 黑褐色土 ロームブロック ( $\phi 0.5 \sim 1\text{ cm}$ ) 少量 しまり・粘性あり

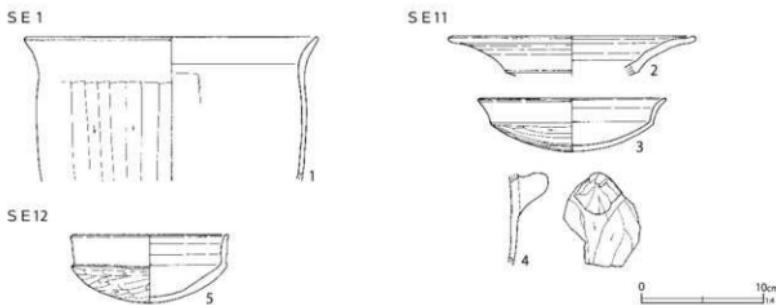
3 灰黃褐色土 ロームブロック混じる しまり・粘性あり

4 黑褐色土 しまりあり、含有物少なく粘性弱い

第121図 B区井戸跡 (1)



第122図 B区井戸跡（2）



第123図 B区井戸跡出土遺物

第55表 B区井戸跡出土遺物観察表（第123図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	団版
1	土師器	瓶	(23.8)	[11.8]	—	ACI	20	普通	にぶい褐	SE 1 No.3・4・11 石英多量	
2	土師器	高杯	(19.7)	[3.2]	—	CHIK	10	良好	にぶい橙	SE 11フク土	
3	土師器	壺	15.2	4.3	—	CHIK	55	普通	にぶい赤褐	SE 11フク土 蓋模倣环	110-1
4	土師器	瓶	—	[7.7]	—	EIK	5	普通	灰白	SE 11フク土	110-1
5	土師器	壺	12.6	5.5	—	CEHKK	70	普通	にぶい褐	SE 12フク土	110-1

に埋没したことが分かる。遺物は図示できるものはない。

#### B区第7号井戸跡（第121図）

B3区東南部に位置する。第18号竪穴住居跡を切り、これより新しい。第3号溝跡の肩部に接するように掘り込まれている。平面形は直径1m前後の楕円形で、下に向かって先細りとなる断面形状である。遺物は図示できるものはない。

#### B区第8号井戸跡（第121図）

B3区東南部に位置する。第3号溝跡の肩部に斜めに対峙するように第8号井戸跡が掘削されている。重複関係は、第3号溝跡が埋没した後に掘り込み、第18号竪穴住居跡に壊されている。

平面形は、直径1.3m前後の円形を呈する。断面形状は逆台形に掘り込んでいる。遺物は図示できるものはない。

第56表 B区井戸跡一覧表

遺構名	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複遺構	遺構名	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複遺構
1	P-20	楕円形	上1.42 下0.91	上1.18 下0.80	[1.50]	P-20P8	7	Y-28	楕円形	上1.00 下0.51	上0.70 下0.36	[1.60]	SJ18 SD3
2		欠番					8	X+Y-28	円形	上1.31 F0.65	上1.23 F0.55	[1.38]	SJ18 SD3
3	R-21	楕円形	上1.15 F0.58	上1.03 F0.55	[0.60]	SJ15 SJ16	9	Y-28	略円形	上1.35 F0.69	上1.20 F0.70	[0.88]	SJ18
5	O-P-19	矩形	上2.57 F1.68	上2.49 F1.37	[1.30]	SJ26	11	Y-28	円形	上1.82 F0.48	上0.76 F0.45	[0.70]	
6	AA-31	矩形	上(1.42) F(1.25)	下[1.00]		SD2	12	Y-28-29	楕円形	上0.71 F0.64	上0.67 下0.55	[0.75]	SJ20 SD4

## B区第9号井戸跡（第122図）

B3区東南部に位置する。第18号竪穴住居跡に壊されている。平面形は直径1.35mの略円形を呈し、断面形状は逆台形に掘り込まれている。覆土は暗褐色土の単一層である。遺物は図示できるものはない。

## B区第11号井戸跡（第122図）

B3区南東部に位置し、第18号竪穴住居跡と第20号竪穴住居跡に挟まれている。平面形は、直径0.80m前後の円形で、下に向かって先細りとなる円錐形に近い断面形状である。覆土は、暗黒褐色土の単一層である。土師器高杯・杯・顎とともに木材片などが出土した。

## B区第12号井戸跡（第122図）

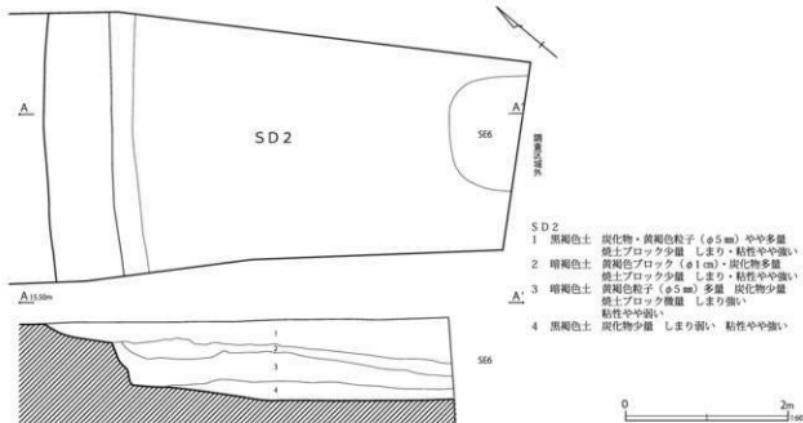
B3区の東南端部に位置する第20号竪穴住居跡の内部に重複し、南半分を第4号溝跡によって壊される。平面形は、直径0.70m前後の楕円形と推定される。壁面はほぼ垂直に掘り込まれている。遺物は典型的な模倣坏が出土した。

## (3) 溝跡

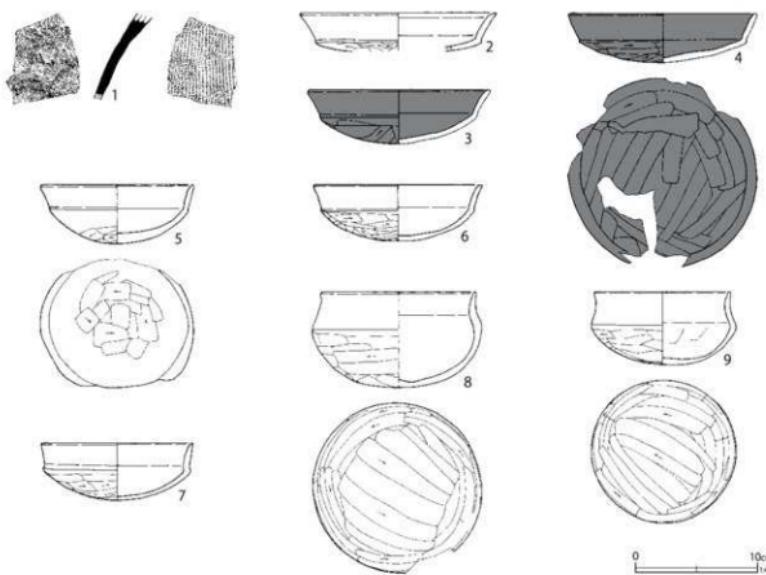
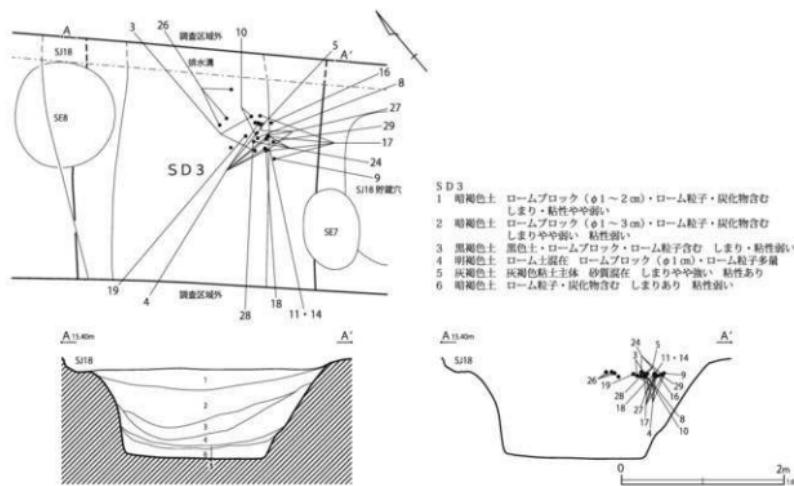
B区において古墳時代・飛鳥時代に位置付けられる溝跡は2条検出された。

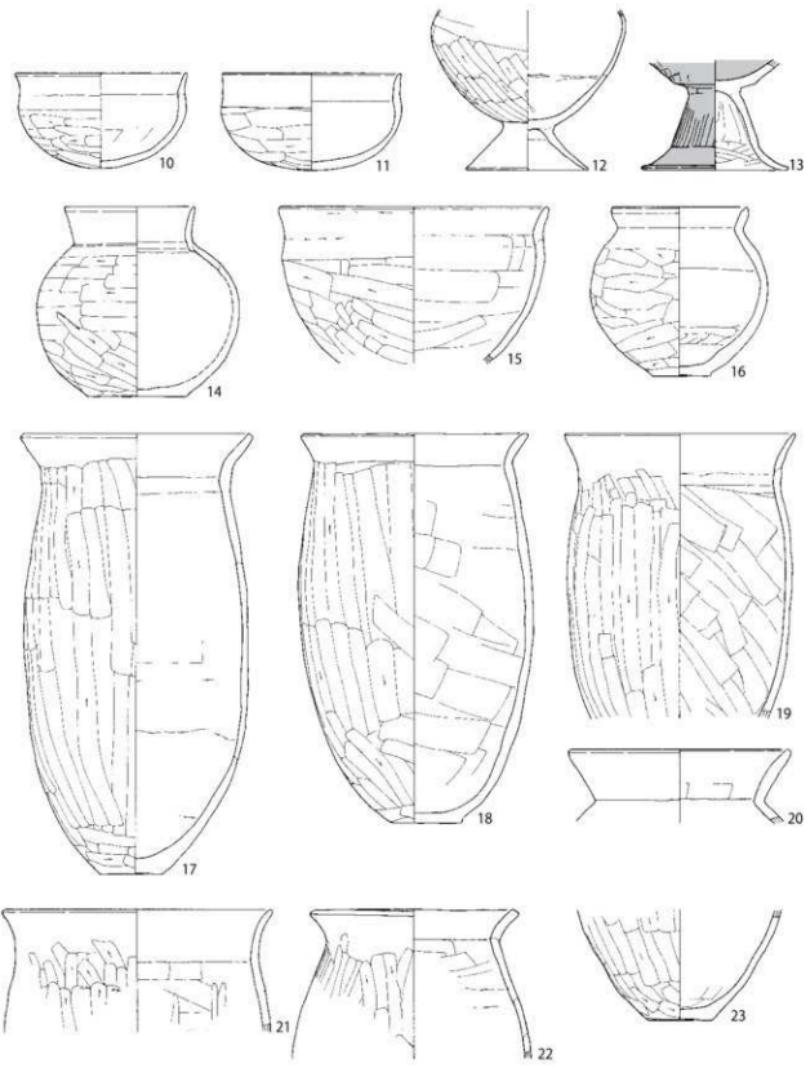
## B区第2号溝跡（第124図）

B区の第2号溝跡は調査区の南端B4区のAA-30・31グリッドに位置する。重複する第6号井戸跡に壊されている。南西から北東へ延び、走行

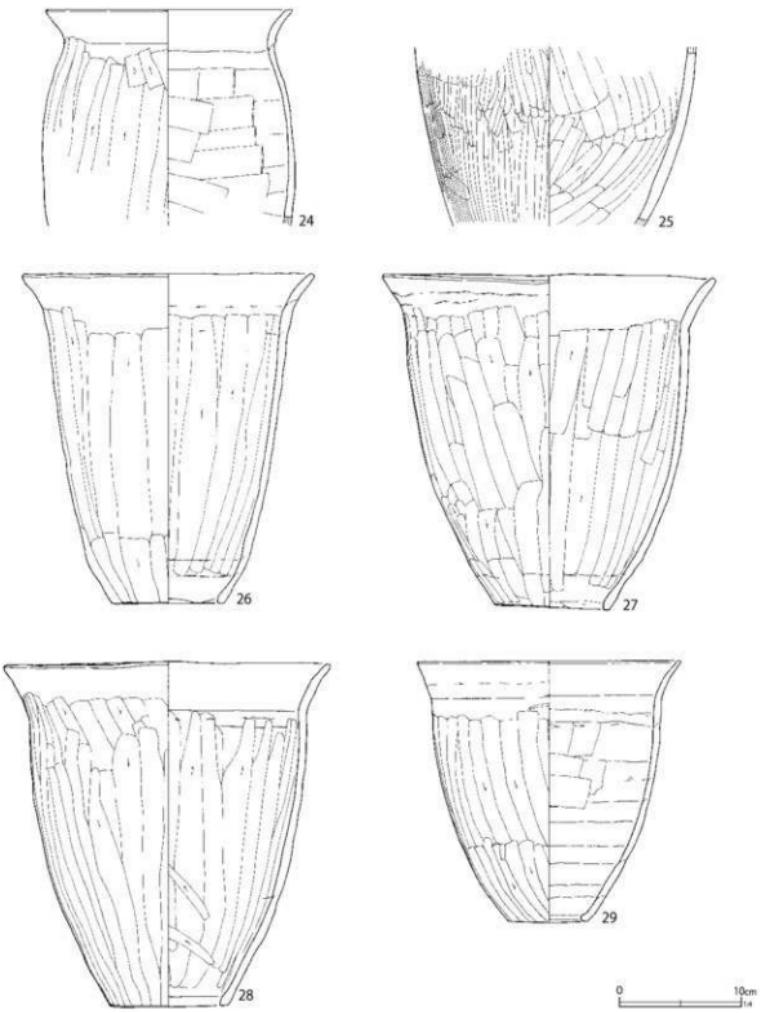


第124図 B区第2号溝跡





第127図 B区第3号溝跡出土遺物（2）



第128図 B区第3号溝跡出土遺物（3）

方位はN-50°-Eを指す。両端及び南東側は調査区域外へ延びる。

検出された長さ3.50m、幅5.00m、深さ1.00m

である。上端から0.30mほど中心側へ進んだ地点で中端がみられ、0.80mほど落ち込み下端となる。遺物は出土していない。

第57表 B区第3号溝跡出土遺物観察表（第126～128図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	—	[7.0]	—	IK	5	良好	黄灰	外面平行叩き	
2	土師器	壺	(15.9)	[3.1]	—	CEHIK	20	普通	にぶい椎		
3	土師器	壺	14.7	4.4	—	CHIK	80	普通	灰褐色	SJ18a・b・No92・98 蓋模倣壺 黒色処理	110-2
4	土師器	壺	15.0	4.0	—	EIK	80	普通	にぶい赤褐色	SJ18・SJ18a・No85・99・100・101・102・103 蓋模倣壺 内外面黒色処理	110-2
5	土師器	壺	12.3	4.8	—	CHIK	85	普通	明赤褐色	SJ18a・No100 蓋模倣壺	110-2
6	土師器	壺	(13.8)	4.5	—	CHIK	45	普通	にぶい褐色		
7	土師器	壺	12.2	4.7	—	HIK	75	普通	椎		110-2
8	土師器	壺	12.6	7.8	—	CEHIK	90	普通	椎	SJ18・SJ18a・No52・90・97	110-2
9	土師器	壺	10.9	6.0	—	CEHIK	95	普通	椎	SJ18a・No88	110-2
10	土師器	壺	14.0	7.7	—	CHIK	70	普通	椎	SJ18・No50・92・97・Y-29	110-2
11	土師器	壺	(14.5)	7.9	—	CEHIK	45	普通	椎	SJ18a・No85 外面椎	
12	土師器	台付甕	—	[13.0]	(10.0)	CHIK	50	普通	褐灰		
13	土師器	高壺	—	[9.0]	(11.4)	HIK	30	普通	にぶい赤褐色	内外面赤彩	110-2
14	土師器	壺	(10.5)	15.5	8.0	CEGHIIK	90	普通	椎	No85 底部ラケズリ	110-3
15	土師器	鉢	(21.6)	[12.8]	—	BCEHIK	30	普通	明赤褐色	No50・63・68・105	
16	土師器	甕	11.0	13.8	4.7	CHIK	100	普通	にぶい椎	SJ18a・No80	110-3
17	土師器	甕	(18.4)	35.7	5.2	BCEIK	55	普通	にぶい赤褐色	SJ18a・No2・4・5・46・48・51・56・59・73・87・88・91・99・102・Y-29	110-3
18	土師器	甕	18.0	31.5	5.7	CEHIK	70	普通	にぶい椎	SJ18a・b・No43・48・54・70・99・Y-29	110-3
19	土師器	甕	(18.6)	[23.1]	—	CEHI	30	良好	明褐色	No33・56・82・Y-29	
20	土師器	甕	(17.8)	[6.0]	—	BCEHIK	10	普通	にぶい椎		
21	土師器	瓶	(21.8)	[10.0]	—	CHIK	5	普通	椎		
22	土師器	甕	16.3	[12.1]	—	BEHHIK	25	普通	にぶい赤褐色		
23	土師器	甕	—	[9.0]	5.3	BHK	20	普通	にぶい赤褐色		
24	土師器	甕	20.0	[17.5]	—	CDEGHIK	40	普通	にぶい黄褐色	a・No62・83・89・90・102	
25	土師器	甕	—	[14.6]	—	IK	30	普通	にぶい黄褐色		
26	土師器	瓶	(13.5)	26.7	(9.1)	CEHIK	25	普通	椎	SJ18a・No94・95・106・108	111-4
27	土師器	瓶	26.8	27.0	(9.4)	CEHIK	70	普通	椎	SJ18a・No49・56・59・65・66・93・99・101・102・104・Y-29	111-4
28	土師器	瓶	26.4	28.1	9.6	CHIK	85	普通	椎	SJ18a・No48・49・56・58・65・66・83・Y-29	111-4
29	土師器	瓶	21.4	21.2	6.4	CHIK	95	良好	明黄色	SJ18・SJ18a・No79・89・90・93	111-4

第58表 B区溝跡一覧表

No	グリッド	方位	方位	長さ(m)	幅(m)		深さ(m)		重複遺構
					最大	最小	最大	最小	
2	AA-30・31	N-50° +E	—	3.50	(5.00)	(4.60)	1.00	—	SE6
3	X-Y-28	N-44° -E	—	2.80	3.10	2.92	1.10	—	SJ18 SE7 SE8

## B区第3号溝跡（第125図）

B区の第3号溝跡は、B区南端X・Y-28グリッドに位置する。重複する第18号竪穴住居跡、第7・8号井戸跡に墳されている。両側は、調査区域外に延びる。

遺物は土師器を中心に多量に出土している。出土地点の多くが、東側の上層から中層にかけてであり、溝跡が埋没の過程で流れ込んだか、上面につくられた第18号竪穴住居跡に伴うものが混入した可能性がある。

### 3 奈良時代・平安時代の遺構と遺物

B区において検出された奈良時代・平安時代の遺構数は、竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基、溝跡3条、土壙4基が検出されている。

調査区の北西側からは竪穴住居跡は1軒検出されているが、他の遺構は調査区域内の中央から南東側に多く分布する傾向にある。

#### (1) 竪穴住居跡

##### B区第3号竪穴住居跡（第129図）

B区の第3号竪穴住居跡はT・U-24グリッド、調査区の中央付近、B 3区に位置する。重複するT-24P 1に壊されている。西側は調査区域外へと延びる。

覆土はロームブロック、炭化物を含む黒褐色土を主体とする。平面形は横長の隅丸方形になるとみられる。規模は長軸長2.55m、検出された短軸長は2.40m、深さ0.40mである。主軸方位はN-45°-Wを指す。

カマドは北辺に設置され、長さ1.50m、幅0.76m、深さ0.50mである。燃焼部が竪穴住居跡の外側へ張り出している。壁構は南辺で検出された。幅0.25m、深さ0.05~0.07mである。貯蔵穴、主柱穴は検出されなかった。

遺物は須恵器と土師器が出土している。第130図1と2は須恵器の壺である。それぞれ口縁部と底部であるが、同一個体とみられるが接合はしない。口縁端部が玉縁となる。底部は右回転糸切り無調整である。焼成は良くない。産地は末野窯の製品とみられる。3は須恵器の高台付壺である。底部は右回転糸切り後高台が貼り付けられる。破片の一部がカマドから出土している。産地は末野窯の製品とみられる。4は須恵器の壺底部である。外面にわずかに自然釉がかかる。

5は土師器の黒色土器である。内面に横方向のミガキが口縁部付近まで施されている。外面下半及び底部にヘラケズりがみられる。6と7は土師

器の蓋である。口縁部が「コ」の字型を呈する北武藏型蓋である。時期は9世紀後半頃に位置付けられる。

##### B区第4号竪穴住居跡（第131図）

B区の第4号竪穴住居跡はU-25グリッド、調査区の中央付近、B 3区に位置する。他遺構との重複はない。南辺と東辺、西辺の一部のみ検出された。北側は調査区域外へ延びる。平面形は検出範囲からは判然としない。

規模は検出された範囲で長軸長2.70m、短軸長は1.05m、深さ0.45mである。長軸方位はN-45°-Wを指す。

壁構は南辺中央から西辺にかけてと、東辺に沿って検出された。幅0.20~0.60m、深さ0.05~0.08mである。カマド、貯蔵穴、主柱穴は検出されなかつた。

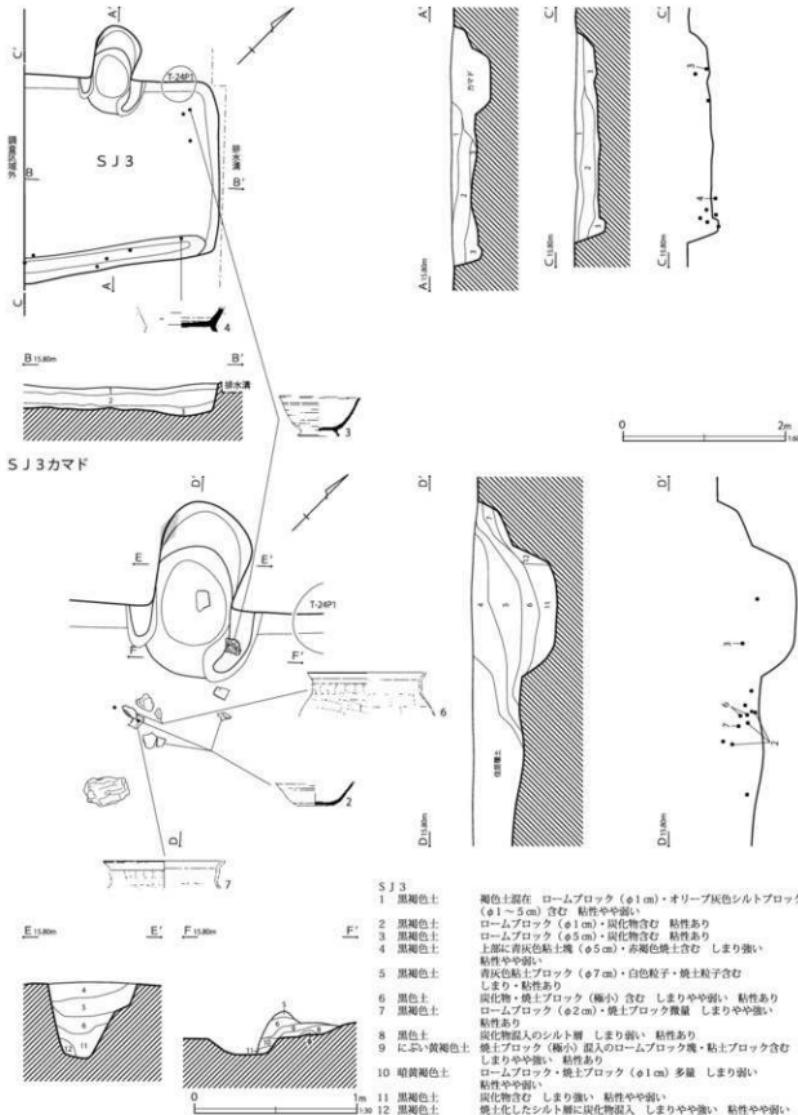
遺物は須恵器と土師器が出土している。第131図1は須恵器の蓋である。つまみ部分のみ残存している。焼成が甘く赤焼けである。2は壺の底部である。底部回転糸切り無調整である。胎土に白色針状物質を多量に含む。南比企窯の製品である。3は須恵器壺の底部片である。外面に平行タキ痕が多方向から叩かれた痕が残り、内面無文アテ具痕がみられる。

4は土師器壺の口縁部片である。口縁部が「コ」の字型を呈する北武藏型蓋である。時期は9世紀後半頃に位置付けられる。

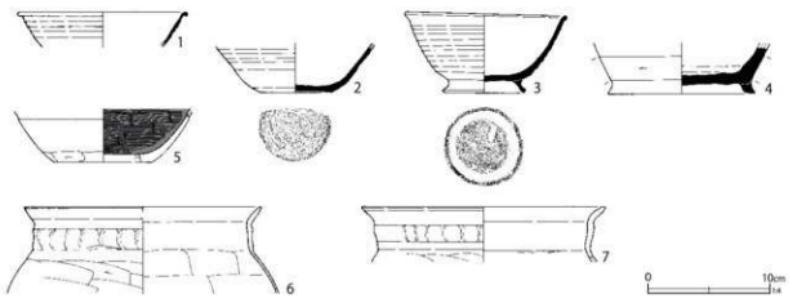
##### B区第7号竪穴住居跡（第132図）

B区の第7号竪穴住居跡はV-25・26グリッド、調査区の中央付近、B 3区に位置する。重複する第6・17号竪穴住居跡を壊し、V-26P 1に壊されている。北東コーナー部分と南側は調査区域外へ延びる。平面形は検出された範囲から推定すると隅丸方形とみられる。

規模は検出された範囲で長軸長5.15m、短軸長2.50m、深さ0.10mである。長軸方位はN-80°-



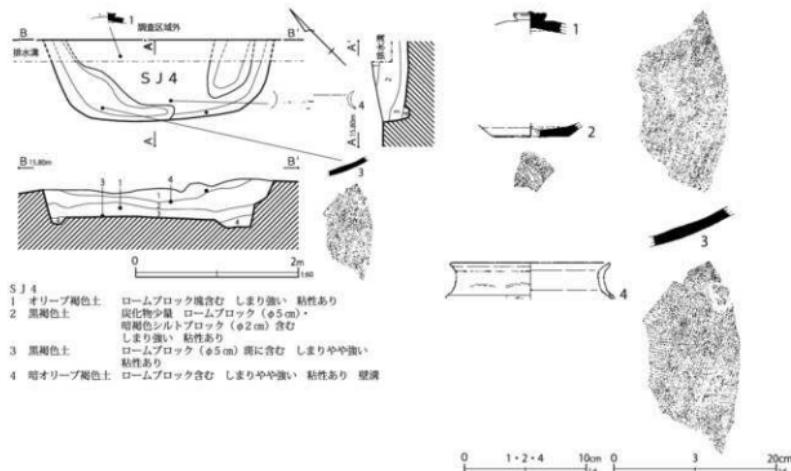
第129図 B区第3号竪穴住居跡



第130図 B区第3号竪穴住居跡出土遺物

第59表 B区第3号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第130図)

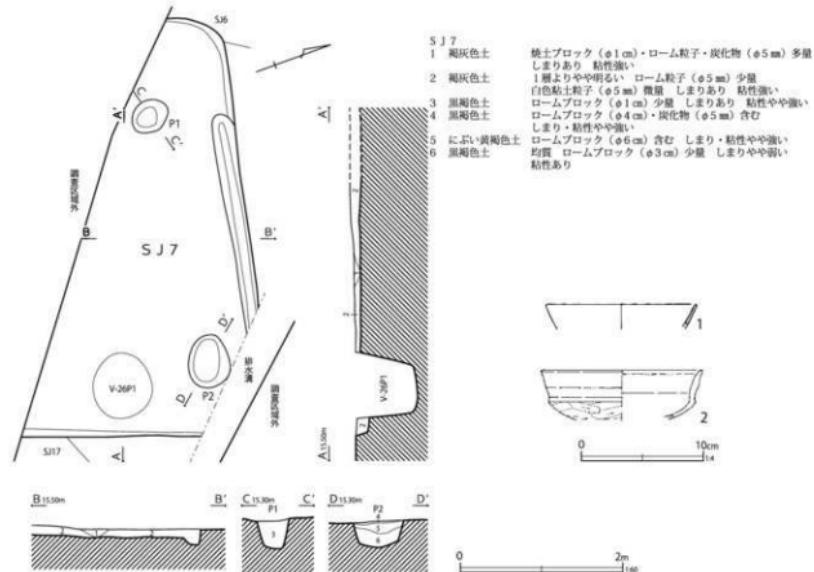
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(13.7)	[2.9]	—	AEH	20	不良	黄褐色	a・b 末野窯産	
2	須恵器	壺	—	[4.0]	6.0	EG	40	不良	灰褐色	カマドNo.4・8・11 底部回転糸切り	111-5
3	須恵器	高台付壺	13.1	6.5	6.4	BEI	70	良好	灰	a・カマド・No 1・2 末野窯産 底部回転糸切り	111-5
4	須恵器	壺	—	[4.2]	(11.9)	EIK	5	良好	灰	No 4	111-5
5	土師器	壺	—	[4.4]	(8.0)	AI	20	普通	褐灰	黑色土器 ミガキ後黒色処理	
6	土師器	甕	(19.2)	[7.1]	—	CHI	10	良好	にぶい赤褐色	b・カマドNo 7・9 北武藏型甕	
7	土師器	甕	(19.8)	[4.5]	—	AHI	10	良好	にぶい赤褐色	カマドNo10 北武藏型甕	



第131図 B区第4号竪穴住居跡・出土遺物

第60表 B区第4号竪穴住居跡出土遺物観察表(第131図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	—	[1.8]	—	II	10	普通	にぶい椎	No.2	111-3
2	須恵器	壺	—	[1.2]	(6.0)	II	10	良好	灰	d 南北企業産 底部回転系切り	111-3
3	須恵器	甕	—	[4.9]	—	EIK	20	良好	灰	No.1 外面平行叩き 内面無文当て具 内底面自然釉 丸底大擴底部破片	
4	土師器	台付甕	(13.0)	[3.0]	—	ACK	10	良好	にぶい褐	No.3 北武藏型甕	



第132図 B区第7号竪穴住居跡・出土遺物

第61表 B区第7号竪穴住居跡出土遺物観察表(第132図)

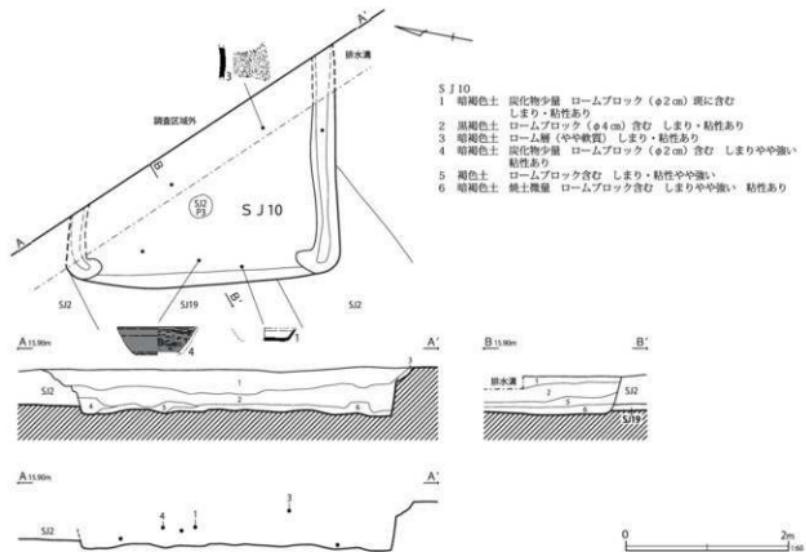
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	綠釉陶器	壺	(12.2)	[2.0]	—	I	10	良好	灰黄	K-90号窯式 猿投窯産	
2	土師器	壺	(13.0)	[4.0]	—	GHHK	20	良好	にぶい赤褐	a 蓋模倣壺	

Wを指す。覆土の残存状況は良くなく、上層は削平されている。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。主柱穴は2基検出された。壁溝は北辺の北西コーナーを除いた部分から検出された。幅0.20~0.30m、深さ0.02~0.10mである。

遺物は綠釉陶器と土師器が出土している。第

132図1は綠釉陶器の壺で口縁部の破片である。内外面に施釉され、淡緑色に発色する。猿投窯産で9世紀後半頃とみられる。2は土師器の蓋模倣壺である。綠釉陶器と土師器で時期に齟齬があるが、第6・17号竪穴住居跡より新しいことから、破片だけ綠釉陶器の時期に機能していた竪穴住居跡と推定される。



第133図 B区第10号竪穴住居跡



第134図 B区第10号竪穴住居跡出土遺物

第62表 B区第10号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第134図)

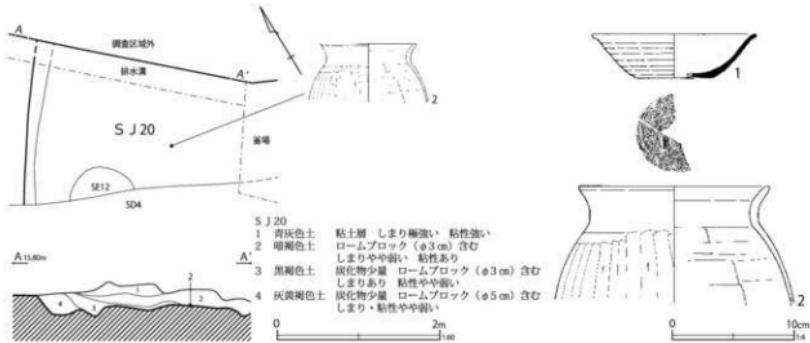
番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	-	[2.3]	6.6	AEI	40	良好	灰	No.3 末野窯産 底部回転糸切り a 南比企窯産 底部糸切り外周ヘラケ アリ	112-1
2	須恵器	壺	-	[1.6]	(6.0)	IJ	20	良好	灰		
3	須恵器	甕	-	[5.8]	-	AIK	5	普通	灰白	No.5 外面縫合き 内面無文當て具 No.2 黒色土器 内面ミガキ内外面黒色 処理	112-1
4	土師器	壺	(13.0)	[4.6]	-	CI	20	普通	黒褐		

B区第10号竪穴住居跡 (第133図)

B区の第10号竪穴住居跡はT-24グリッド、調査区の中央付近、B3区に位置する。重複する第2・19号竪穴住居跡を壊している。

西辺、南辺の一部と北西コーナー一部を検出したが、北辺、東辺は調査区域外に延びる。平面形は検出された範囲から隅丸方形とみられる。

規模は検出された範囲で長軸3.35m、短軸長



第135図 B区第20号竪穴住居跡・出土遺物

第63表 B区第20号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第135図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	団版
1	須恵器	壺	(13.4)	3.6	6.3	ABK	40	普通	灰	末野窯産 底部回転糸切り	112-2
2	土師器	甕	15.6	[9.7]	—	AI	30	普通	にぶい橙	No.1	112-2

2.75m、深さ0.60mである。長軸方位はN-12°-Wを指す。壁溝は南辺と北西コーナー一部のみ検出された。幅0.22~0.30mである。

遺物は須恵器と土師器が出土している。第134図1と2は須恵器の壺である。1は底部右回転糸切り無調整、2は底部回転糸切り後外周ヘラケズリがみられる。3は須恵器の甕である。4は土師器の黒色土器である。内面口縁部付近まで横方向にミガキが施されている。時期は8世紀後半から9世紀初頭頃とみられる。

#### B区第20号竪穴住居跡 (第135図)

B区の第20号竪穴住居跡はY-28・29グリッド、調査区の南側、B3区の南側に位置する。重複する構造はないが、北東側は排水用釜場に壊され、東辺と南辺の一部のみを検出した。検出された規模は長軸長2.25m、短軸長1.60m、深さ0.35mである。長軸方位はN-80°-Eを指す。

壁溝は東辺、南辺から検出され、幅0.15~0.24m、深さ0.10mである。カマド、主柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は須恵器と土師器が出土している。第137図1は高台付壺である。底部に回転糸切り痕がみられる。2は土師器甕の口縁部片である。時期は9世紀後半とみられる。

柱穴、壁溝は検出されなかった。残存状況が悪く上層は削平されている。

遺物は須恵器壺と土師器甕が出土している。時期は9世紀後半頃とみられる。

#### B区第21号竪穴住居跡 (第136図)

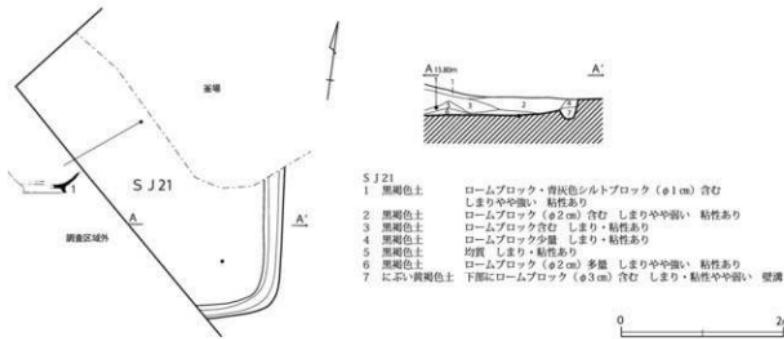
B区の第21号竪穴住居跡はS-22・23グリッド、調査区の中央付近、B3区に位置する。重複する構造はないが、北東側は排水用釜場に壊され、東辺と南辺の一部のみを検出した。検出された規模は長軸長2.25m、短軸長1.60m、深さ0.35mである。長軸方位はN-80°-Eを指す。

壁溝は東辺、南辺から検出され、幅0.15~0.24m、深さ0.10mである。カマド、主柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

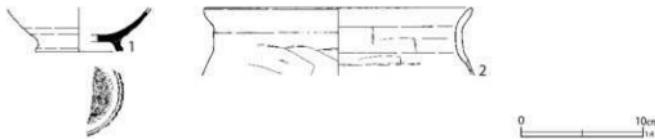
遺物は須恵器と土師器が出土している。第137図1は高台付壺である。底部に回転糸切り痕がみられる。2は土師器甕の口縁部片である。時期は9世紀後半とみられる。

#### B区第27号竪穴住居跡 (第138図)

B区の第27号竪穴住居跡はN-17グリッド、調



第136図 B区第21号竪穴住居跡



第137図 B区第21号竪穴住居跡出土遺物

第64表 B区第21号竪穴住居跡出土遺物観察表（第137図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	団版
1	須恵器	高台付杯	—	[3.6]	(7.0)	AIK	20	普通	灰	No.2 末野窯産 底部回転角切り	
2	土師器	甕	(21.8)	[5.5]	—	CI	5	良好	にぶい橙	S-23 北武藏型甕	

査区北側、B2区に位置する。重複する遺構はない。東辺と北辺の一部を検出した。南辺、西辺は調査区域外に延びる。検出された範囲での規模は長軸長2.85m、短軸長2.00m、深さ0.40mである。長軸方位はN-13°-Wを指す。壁溝は東辺、北辺で一部が検出された。規模は幅0.19~0.22m、深さ0.04~0.05mである。カマド、貯蔵穴、主柱穴は検出されなかった。

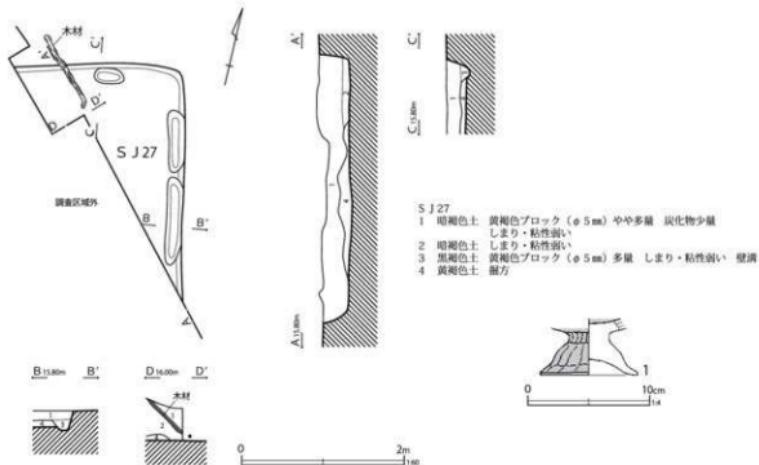
遺物は土師器の高脚部が1点出土しているが、混入したものとみられる。第27号竪穴住居跡からは木材が出土している。樹種はケヤキである。この木材はL字状で一边は床面直上でもう一方が斜めに第2層上層にかかっていた。屋根材などの建築部材であった可能性がある。この木材は放射性炭素年代測定を実施している。その結果、

暦年代は8世紀後半から10世紀中頃までに収まるとの結果が得られた。詳細は「VIII 自然科学分析」を参照のこと。

#### B区第29・30号竪穴住居跡（第139図）

B区の第29号竪穴住居跡はAA-30グリッド、調査区南端のB4区に位置する。重複するAA-30P2に北東コーナー部分を壊され、西側を第30号竪穴住居跡に壊されている。南側は調査区域外へと延びる。検出された範囲での規模は長軸長2.45m、短軸長2.10m、深さ0.24mである。長軸方位はN-30°-Eを指す。壁溝は東辺、北辺で検出された。幅0.17~0.26m、深さ0.03~0.12mである。

B区の第30号竪穴住居跡はZ-AA-30グリッド、調査区南端のB4区に位置する。重複する第



第138図 B区第27号竪穴住居跡・出土遺物

第65表 B区第27号竪穴住居跡出土遺物観察表（第138図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高环	—	[4.6]	(8.0)	ACII	30	良好	赤褐色	赤彩	

29号竪穴住居跡とAA-30P 3を壊し、第7号溝跡に壊されている。検出された範囲での規模は長軸長3.87m、短軸長3.29m、深さ0.60mである。長軸方位はN-45°-Wを指す。カマド、主柱穴、壁溝、貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は第30号竪穴住居跡からのみ出土している。第140図1~4は須恵器の壊で1は底部回転糸切り、2と3は底部回転糸切り後外周ヘラケズリがみられる。5は土師器の壊である。底部手持ちヘラケズリで、やや煤けている。底部に「善」と書かれた墨書き土器である。

時期は8世紀中頃～後半頃とみられる。

#### (2) 挖立柱建物跡

##### B区第1号掘立柱建物跡（第141図）

B区の第1号掘立柱建物跡はX-27グリッド、調査区南寄り、B3区に位置する。

重複する第8・9号竪穴住居跡を壊している。柱列は西側の調査区域外に延びているとみられ

る。建物形態は三間×二間以上で桁行4.80m、梁行1.50m以上の建物である。主軸方位はN-42°-Wを指す。柱穴は5基検出され、全てで柱痕跡を確認した。

#### (3) 井戸跡

##### B区第4号井戸跡（第142図）

B区の第4号井戸跡はR-22グリッド、調査区の中央付近、B2区に位置する。平面形は円形で深さ0.65mでは底面に到達していない。

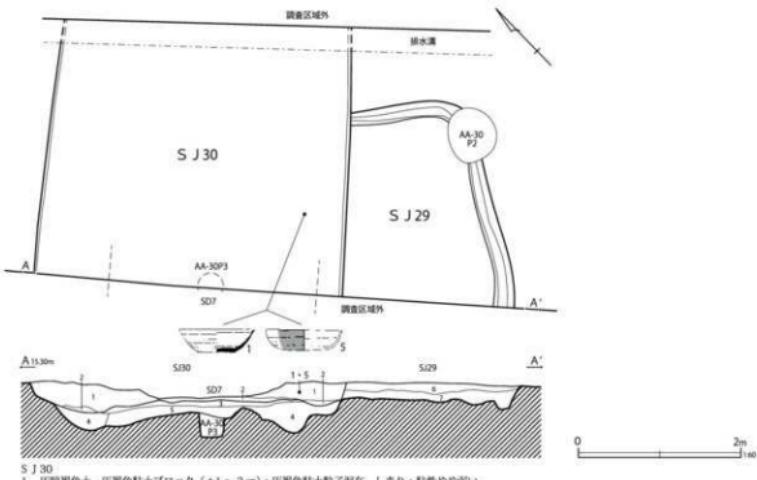
遺物は須恵器壊と土師器が出土している。土師器はいずれも古墳時代のものとみられるが、須恵器は底部回転糸切りの製品であり、9世紀代の製品とみられる。

#### (4) 溝跡

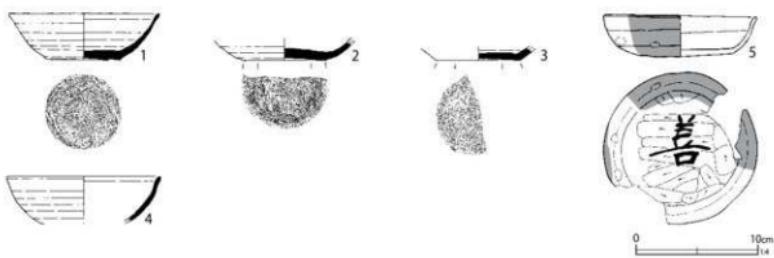
##### B区第4号溝跡（第143図）

B区の第4号溝跡は調査区南端で検出した。北西から南東に走り、両側は調査区域外に延びる。

遺物は底部回転糸切りの須恵器壊や土師器の壊



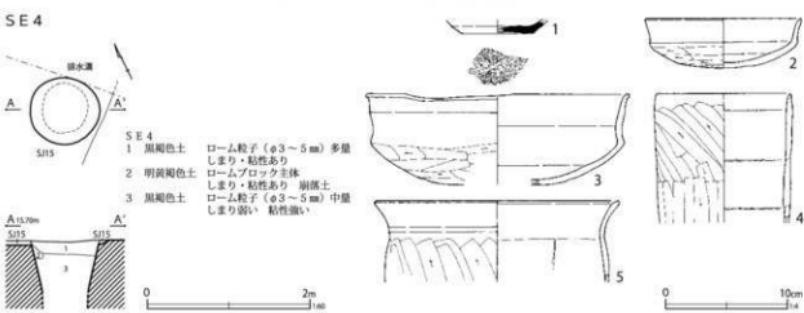
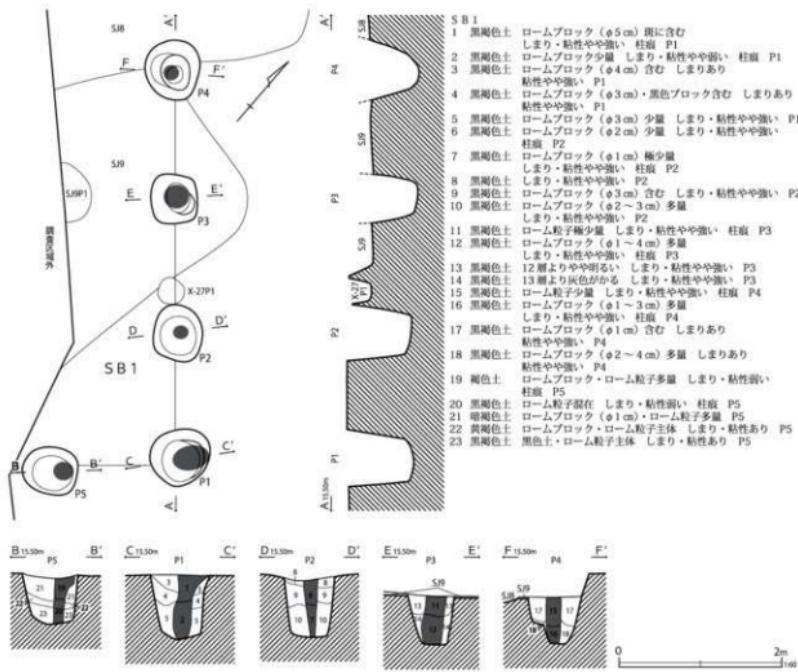
第139図 B区第29・30号竪穴住居跡



第140図 B区第30号竪穴住居跡出土遺物

第66表 B区第30号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第140図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	环	12.2	3.8	6.1	U	80	良好	灰	SX2 No 1 南北企窓産 底部回転糸切り	112-3
2	須恵器	环	-	[1.8]	6.7	U	30	良好	灰	SX2 南北企窓産 底部回転糸切り外周 ヘラケズリ	112-3
3	須恵器	环	-	[1.2]	(6.8)	U	20	良好	灰	SX2 南北企窓産 底部回転糸切り外周 ヘラケズリ	
4	須恵器	环	(12.4)	[3.9]	-	U	30	普通	黄灰	SX2 南北企窓産	
5	土師器	环	12.3	3.4	7.6	C	80	普通	にぶい褐	SX2 No 1 煤 墨書「善」 底部手持ちヘ ラケズリ	112-3



や甕の他に平瓦が2枚出土している。

#### B区第5号溝跡（第145図）

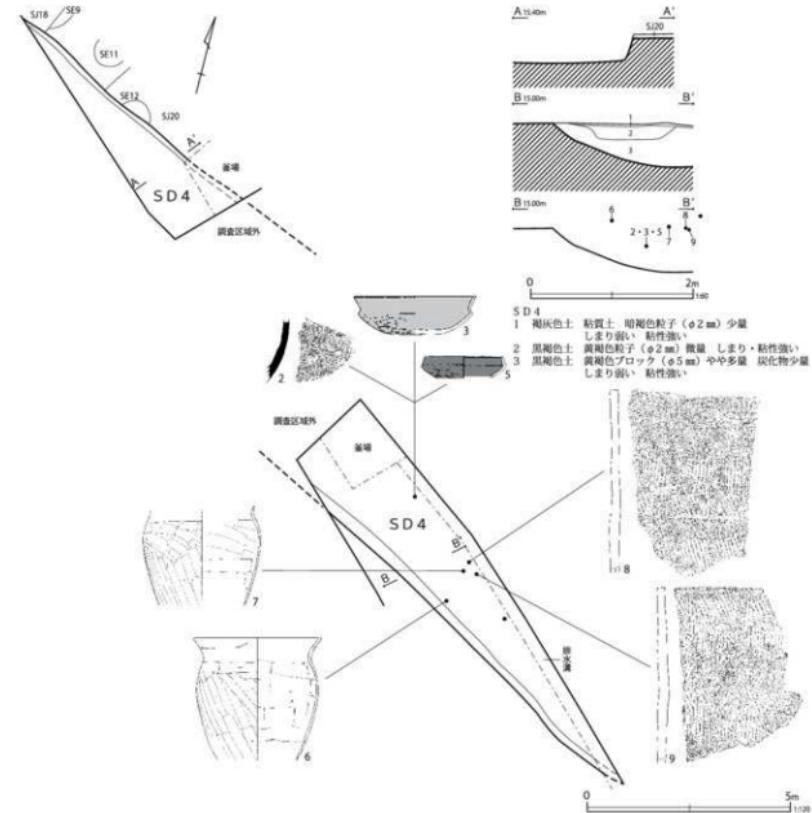
B区の第5号溝跡は調査区中央北寄りで検出さ

れた。南西から北東に走り、両側は調査区域外に延びる。上端は大きく削平され、中端で検出された。

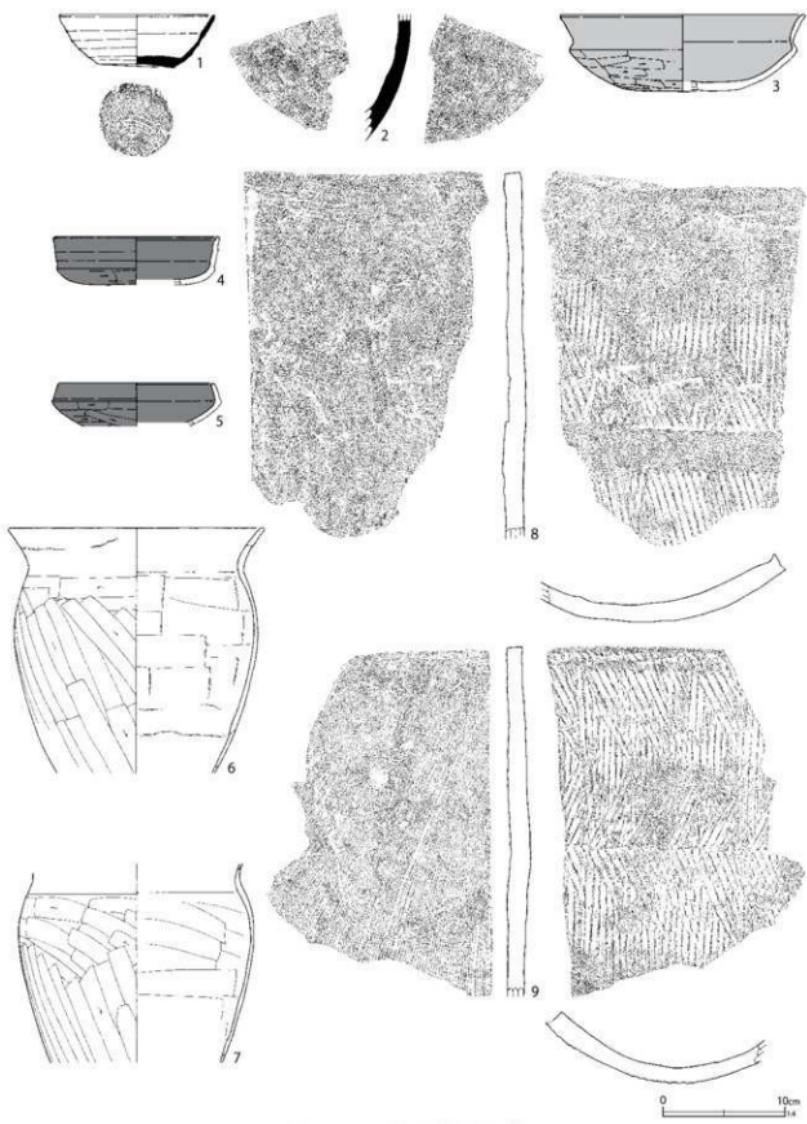
遺物は灰釉陶器の壺と須恵器の壺が出土している。第145図1の灰釉陶器壺は断面形がほぼ四角な角高台を持つ。内面に施釉はない。猿投窯の製品と思われる。

第67表 B区第4号井戸跡出土遺物観察表(第142図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	-	[1.2]	(5.8)	AIK	20	普通	灰	木野流派 底部回転条切り	113-1
2	土師器	壺	12.7	4.0	-	ACHIK	80	普通	にぶい橙 蓋模倣坏	113-1	
3	土師器	壺	(21.2)	[7.4]	-	AHI	40	普通	明赤褐 蓋模倣坏	113-1	
4	土師器	鉢	(11.0)	[10.6]	-	CHI	30	良好	にぶい橙 角閃石多量	113-1	
5	土師器	甕	(19.8)	[6.6]	-	CGI	20	普通	にぶい橙	113-1	



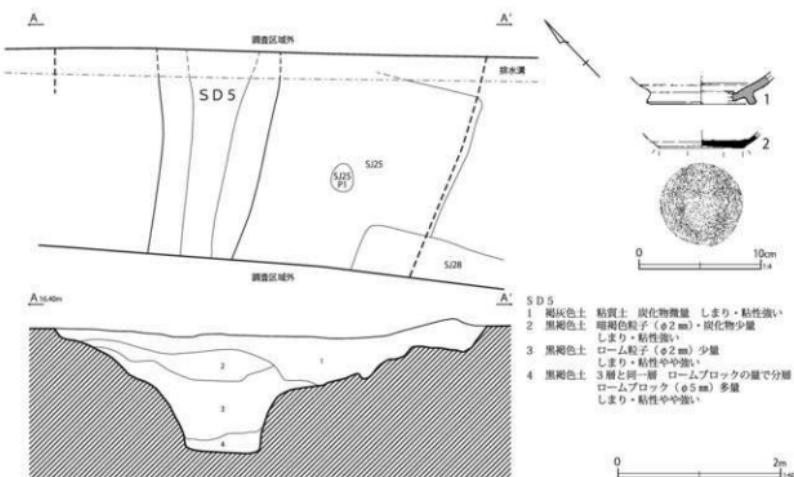
第143図 B区第4号溝跡



第144図 B区第4号溝跡出土遺物

第68表 B区第4号溝跡出土遺物観察表(第144図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	12.6	4.2	6.1	EIJ	70	良好	灰	南北企窓産 底部回転糸切り	113-2
2	須恵器	甕	-	[10.3]	-	BEI	5	良好	灰	No.1 外面ロクロナデ 内面無文当て具	113-2
3	土師器	壺	(19.6)	6.4	-	HI	50	良好	赤褐色	No.1 盖模做壺 赤彩	113-2
4	土師器	壺	(13.4)	[3.9]	-	AI	20	普通	黄灰	黒色処理	113-2
5	土師器	壺	(12.6)	[3.5]	-	IK	20	良好	黒褐色	No.1 身模做壺 黒色処理	113-2
6	土師器	甕	(20.7)	[20.1]	-	ACHIK	40	良好	橙	No.2 「く」の字状口縁甕	113-2
7	土師器	甕	-	[16.2]	-	ACI	30	良好	橙	No.5 「く」の字状口縁甕	
8	瓦	平瓦	長さ[29.7] 幅[9.8] 厚さ1.3~1.7			EGI	70	普通	にぶい橙	No.3	113-3
9	瓦	平瓦	長さ[28.6] 幅[17.6] 厚さ1.2~1.6			EGI	70	良好	灰	No.4	113-4



第145図 B区第5号溝跡・出土遺物

第69表 B区第5号溝跡出土遺物観察表(第145図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	灰釉陶器	壺	-	[2.6]	(9.0)	I	5	良好	灰白	旅投窓産	
2	須恵器	壺	-	[1.5]	6.8	ABK	20	普通	灰	底部回転糸切り外周ヘラケズリ	

## (5) 土壤(第147・149図)

土壤は5基検出された。その中で第1号土壤は検出面が高く、奈良・平安時代ではなく、中世頃の土壤となる。いずれの土壤も浅く、不整形のものが多い。遺物は第2号土壤から須恵器の壺が出

土している。底部に回転ヘラケズリがみられる。また、第3号土壤から灰釉陶器の長頸瓶口縁部片と須恵器甕の胴部片が出土している。

他の遺物を伴わない土壤は覆土の様相の類似性などから、奈良・平安時代の土壤と推定される。



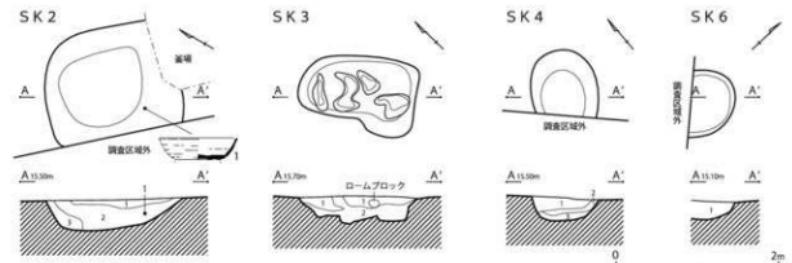
第146図 B区第7号溝跡・出土遺物

第70表 B区第7号溝跡出土遺物観察表(第146図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	-	[4.6]	(10.6)	I	20	良好	黒灰	SX2 No.2 内面自然釉	

第71表 B区溝跡一覧表

No	グリッド	方位	方位	長さ(m)	幅(m)		深さ(m)		重複遺構
					最大	最小	最大	最小	
4	Y-28・29 Z-29・30	N-59°-W	-	24.50	(1.25)	-	0.43	-	SJ18 SJ20 SE12
5	O-19 P-19・20	N-50°-E	-	2.20	1.55	1.05	0.85	-	SJ25 SJ28
7	AA-30	-	-	-	2.58	-	0.39	-	SJ30 AA-30 P 3



- SK2  
1 黒褐色土 2層より灰色がかる やや粘性質 ロームブロック (φ2cm) 少量 しまりあり 粘性強い  
2 黒褐色土 ロームブロック (φ5cm)・ローム粒子・焼土粒子 (φ5mm) 少量 しまりあり 粘性強い  
3 黄褐色土 ロームブロック多量 しまりあり 硬い崩落土
- SK3  
1 黒褐色土 ローム粒子 (φ3~5mm)・炭化物 (φ3mm) 多量 しまりあり 粘性あり 木根または風倒木か  
2 明黄褐色土 サクラクした土 ローム土に近似 黒色土塊に含む しまり弱い  
3 黄褐色土 粘性あり 木根または風倒木か
- SK4  
1 黒褐色土 ロームブロック (φ2cm) やや多量 炭化物微量 しまり 粘性少し強い  
2 にじみ 黃褐色土 1層 黄褐色ブロック (φ2cm) やや多量 しまり・粘性やや強  
3 黄褐色土 ロームブロック (φ2cm) 少量 炭化物微量 しまり・粘性やや強
- SK6  
1 黄褐色土 ロームブロック (φ1~2cm)・ローム粒子多量 炭化物・焼土粒子含む しまり・粘性弱い

第147図 B区土壤

B区第2号土壤 (第147図)

B区W-26グリッドに位置する。方形の形状を有するが、一部が調査区域外へ至る。覆土にロームブロックや焼土を含む。遺物は須恵器の环が1点出土している。底部全面へラケグリズされた南北企窓の製品である。

B区第3号土壤 (第147図)

B区Q-21グリッドに位置する。不整形の形状を有し、底面もがたついている。木根または風倒木痕とみられる。遺物は、灰釉陶器長頸壺の口縁部と須恵器壺の胴部片が出土している。



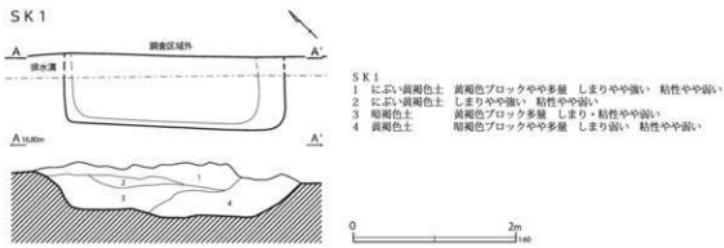
第148図 B区土壤出土遺物

第72表 B区土壤出土遺物観察表(第148図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(12.6)	3.5	7.4	EI	50	良好	灰	No 1 SK2 南北企窓産 底部全面回転 ヘラケズリ	
2	灰釉陶器	長颈瓶	-	[2.0]	-	-	5	良好	灰白	SK3	
3	須恵器	甕	-	[5.5]	-	I	5	良好	暗灰	SK3 外面平行叩き・カキ目・擬格子叩き 内面無文当て具	

第73表 B区土壤一覧表

遺構名	グリッド	平面形	長軸方位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	遺構名	グリッド	平面形	長軸方位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
2	W-26	方形	N=40°-W	1.67	[1.50]	0.42	5						欠番
3	Q-21	不整形	N=36°-W	1.42	0.94	0.36	6	Z-30	不明	N=49°-E	(0.53)	0.81	0.23
4	N-18	楕円形	N=35°-E	[1.06]	0.82	0.30	7						欠番



第149図 B区第1号土壤

第74表 B区土壤一覧表

遺構名	グリッド	平面形	長軸方位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
1	N-18	不明	N=45°-W	2.79	(0.88)	0.67

#### B区第4号土壤(第147図)

B区N-18グリッドに位置する。楕円形の形状を有するが、一部が調査区域外へ至る。覆土に炭化物を含む。遺物は出土していない。

#### B区第6号土壤(第147図)

B区Z-30グリッドに位置する。形状は大部分が調査区域外へ至るため不明である。

#### B区第1号土壤(第149図)

B区N-18グリッドに位置する。調査区壁面で検出した。形状は不明であるが、長方形状になる

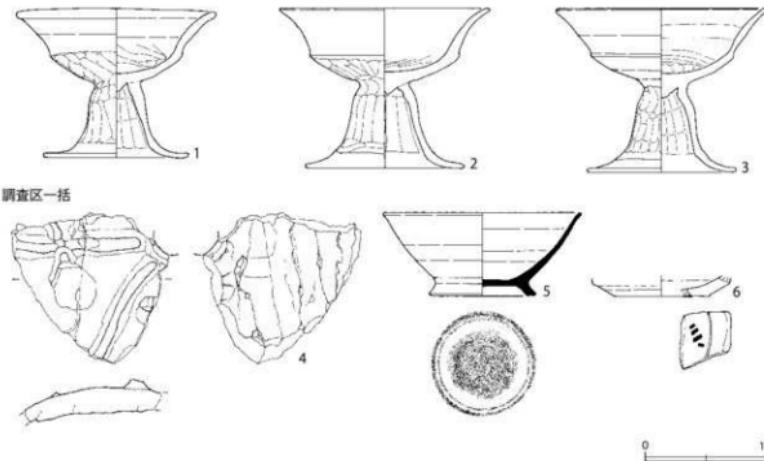
可能性がある。基本層第IV層から掘削され、遺構検出面には達していない。基本層第IV層は中世から近世に位置付けられるため、中世か近世の土壤である。

#### (6) ピット・グリッド検出面出土遺物

遺構に伴わず遺構検出面から出土した遺物の中で特徴的なものとしては、土師器の高杯が3点出土している。いずれもN-17グリッドから出土し、遺物集中から離れて出土している。

B区において検出されたピットは遺物集中に伴うもののみ「VII 遺物集中の調査」で記載した。その他のピットは第76表に長径、短径、深さを掲載した。

N-17



第150図 B区グリッド・一括出土遺物

第75表 B区グリッド出土遺物観察表 (第150図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高环	(16.0)	12.2	11.2	HK	70	良好	明赤褐色	N-17No. 1・3	113-5
2	土師器	高环	(17.0)	13.1	(12.6)	HK	60	良好	橙	N-17No. 2	113-5
3	土師器	高环	(16.8)	13.4	11.9	HK	65	良好	明赤褐色	N-17No. 2	113-5
4	埴輪	馬形埴輪	長さ12.3	幅12.9	厚さ2.1	残存5				B区一括 尻繁部分 焼成普通 色調橙 胎土DEGH	
5	須恵器	高台付壺	(16.0)	6.8	8.4	ACE	70	普通	灰白	古代面No. 1・2・3 底部回転条切り	
6	陶器	壺	-	[1.7]	(7.8)	HK	5	良好	灰白	B3一括 肥前系か 墨書「口」不明	

第76表 B区ピット計測表

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	
N-18	P 1	25	22	22	P-20	P 6	20	20	27	S-23	P 3	58	49	58	
	P 2	53	44	8		P 7	31	28	18		P 4	欠番			
	P 3	40	24	8		P 8	44	34	-		P 5	25	25	37	
O-19	P 1	54	35	21	Q-20	P 1	45	37	34	T-23	P 1	52	(29)	26	
	P 2	47	40	88		P 2	41	[36]	28		P 2	45	40	18	
	P 3	66	60	60		P 3	54	48	52		P 1	80	75	68	
	P 4	43	32	22		P 4	33	32	23		P 1	欠番			
	P 5	32	31	42		P 5	53	38	26		X-27	P 1	38	35	23
	P 6	43	38	60		P 6	37	35	22		X-28	P 1	60	60	82
P-19	P 1	33	29	11	Q-21	P 7	57	(40)	90	AA-30	P 1	[38]	34	66	
P-20	P 1	[18]	[16]	14		P 1	58	55	96		P 2	67	60	87	
	P 2	45	39	13	R-21	P 1	73	70	97		P 3	-	-	27	
	P 3	39	33	10		P 2	62	62	29						
	P 4	48	39	34	S-23	P 1	55	53	55						
	P 5	31	29	12		P 2	86	56	43						

# VI C区の調査

## 1 C区の概要

C区は、現道の拡幅に伴う発掘調査である。第18次調査では、A区、B区、C区の3地点を調査した。C区は北西側に位置し、幅約6m、長さ165mで直線的に掘削した調査区である。調査面積は765m<sup>2</sup>である。遺構検出面は現地表面から1.9m～2.4m掘り下げた位置で、地山のローム土(X-1層)が遺構確認面である。

検出された遺構の主な時代は、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代である。また、検出された遺構の種類と遺構数は、竪穴住居跡20軒、掘立柱建物跡1棟、井戸跡8基、溝跡7条、土壙7基、柱穴列2条である。

調査区の北端部と南端部は、検出された遺構が希薄である。北端部ではピットを中心に検出された。また、南端部はほとんど遺構の検出が認められなかった。北端部はB区で検出された祭祀関連の第1～3号遺物集中に隣接する。このため、C区の集落は遺物集中との間に空間的な距離が保たれていたと推測できる。

一方、南端部の空白は集落域が途切れるのか、あるいは、A区で検出された旧河川跡がC区の南側に東西方向に延びている可能性もある。

古墳時代、飛鳥時代の遺構は、竪穴住居跡18軒、井戸跡8基、溝跡4条、土壙7基で、調査区の中央部を中心検出された。北端側の第2号溝跡を境に、北側はピット、井戸跡が検出され、南側には竪穴住居跡が検出された。また、南端側の第5号溝跡を境に、南側には古墳時代の遺構は検出されなかった。古墳時代、飛鳥時代の集落は、両溝跡に挟まれた範囲に形成されたと考えられる。

C区で検出された最も古い遺構は、6世紀前半の第3・5号井戸跡である。井戸跡の覆土中より出土した土師器で、第175図3は内面に放射状の暗文が施された壺である。蓋模倣壺は口縁部が上

方に直線的に立ち上がるタイプで、第175図4～6や11～14、第176図15・16である。6世紀中・後半には、竪穴住居跡が確認できる。第5～7・20号竪穴住居跡などである。7世紀前半には、第8・11号竪穴住居跡、7世紀末には、第14・17号竪穴住居跡などである。

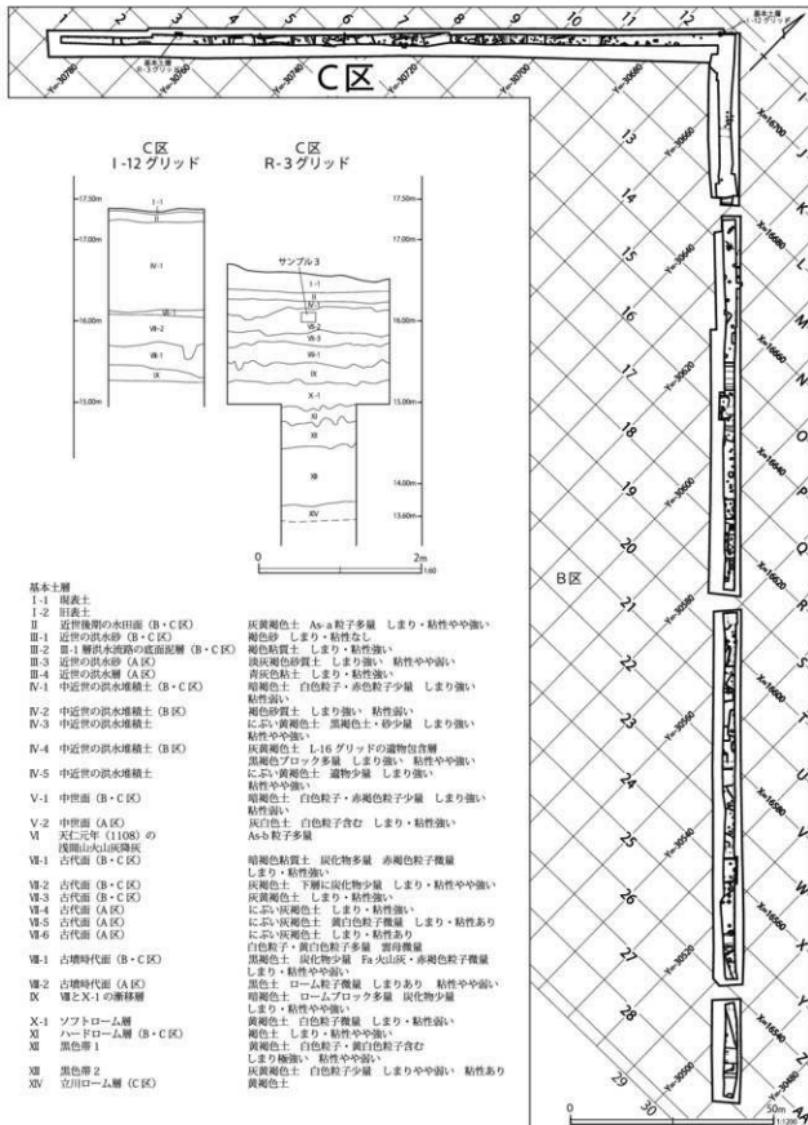
奈良時代、平安時代の遺構は、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟、柱穴列2条、溝跡3条である。掘立柱建物跡と柱穴列は、調査区中央部で検出され、竪穴住居跡は第5号溝跡の南側で検出された。

奈良時代の遺構は、8世紀前半にあたる第15号竪穴住居跡、第1号掘立柱建物跡、第1・2号柱穴列である。第1号掘立柱建物跡は、三間×三間と推定される総柱建物跡である。平安時代の遺構は、9世紀前半にあたる第16号竪穴住居跡が確認された。

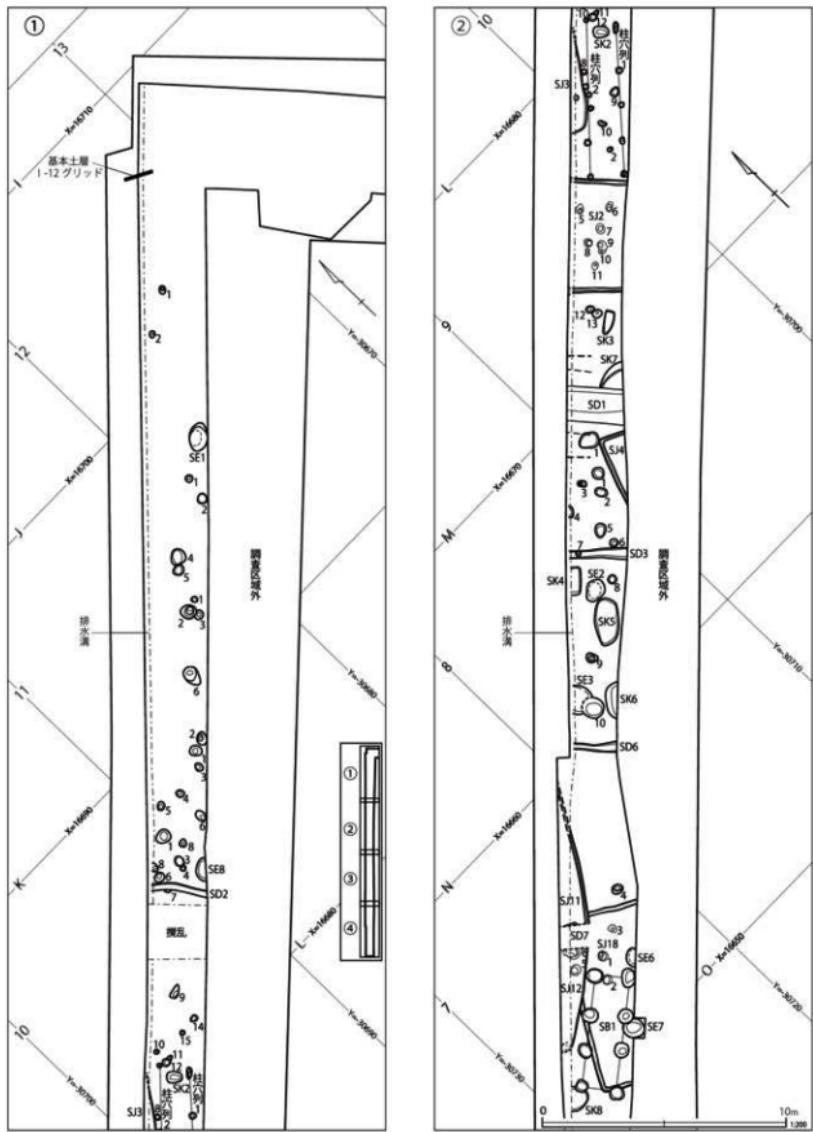
C区は、細長く幅の狭い調査区であることから、集落の全体像は掴めないが、古墳時代、飛鳥時代の集落と奈良時代、平安時代の集落構成に違いが認められる。

地形的には、C区の基本土層は北側のI-12グリッドと南側のR-3グリッドで観察した。その結果、地山の基盤となる第X-1層のソフトローム面は、北端側も南端側もほぼ同じレベルで確認でき、概ね、標高15.20m前後である。

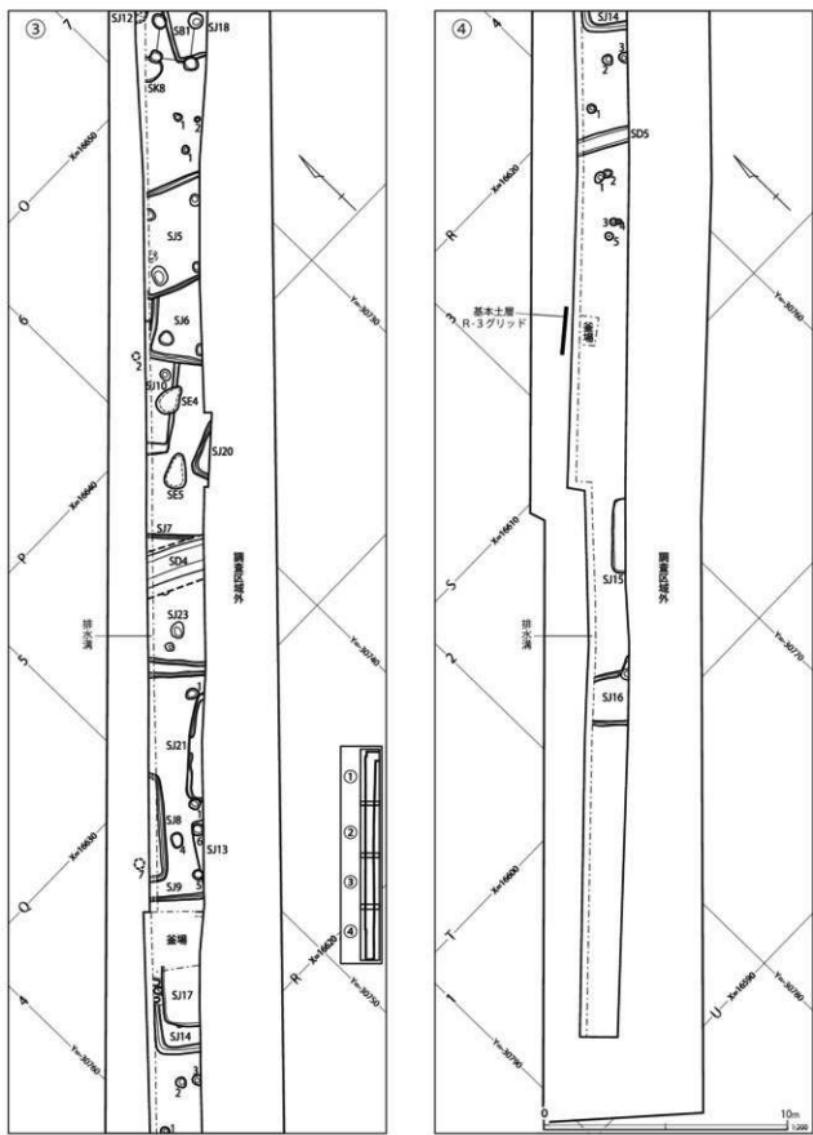
基本土層の第I-1層は表土である。III層は近世の洪水堆積土、IV層は中近世の洪水堆積層、V層は中世面、VI層は天仁元年(1108)の浅間山火山灰層、VII層は古代面、VIII層は古墳時代面、IX層は漸移層、X-1層はソフトローム、XI層はハードローム、XII層は黒色帶1、XIII層は黒色帶2、XIV層は立川ローム層を確認した。



第151図 北大竹遺跡第18次C区基本土層・全体図



第152図 北大竹遺跡第18次C区区割図（1）



第153図 北大竹道路第18次C区区割図（2）

## 2 古墳時代・飛鳥時代の遺構と遺物

### (1) 竪穴住居跡

C区において古墳時代・飛鳥時代の竪穴住居跡は18軒検出された。以下、検出グリッド、重複遺構、平面形、規模、覆土の状況、付帯施設、出土遺物について記す。

#### C区第2号竪穴住居跡（第154図）

C区の第2号竪穴住居跡は、L-9グリッド、調査区の北東部に位置する。

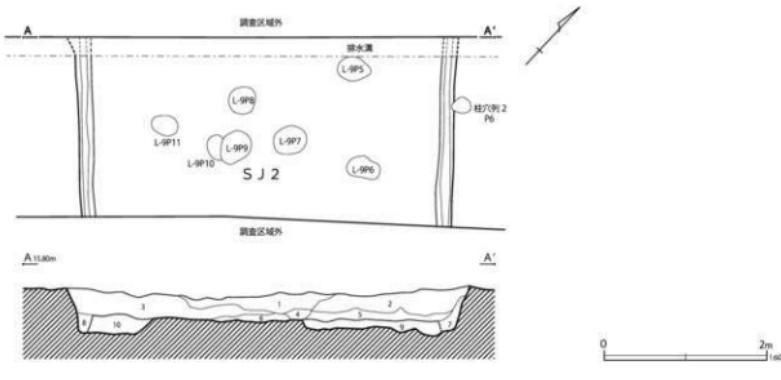
他の遺構との重複関係は、第2号柱穴列のP2に北東側の壁面が壊されている。また、グリッドピットL-9 P5~11の7基が本竪穴住居跡と重複している。竪穴住居跡の北壁と南壁は確認できたものの、調査区域外に延びていることから、全体の長さは不明である。平面形は不明であ

る。残存規模は長軸長4.60m、短軸長2.20m、深さ0.45mである。長軸方位はN-50°-Eを指す。

覆土は中央部に黒褐色土がレンズ状に堆積し、周囲にロームブロック・ローム粒子を多く含む暗褐色土や暗黃褐色土が堆積している。北東側の床面には炭化粒子を含む暗褐色土が薄く堆積し、床面中央部は地山を残し、ドーナツ状の掘方にロームブロックを多く含む黃褐色土が充填されている。

カマド、貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。壁溝は、北壁と南壁に検出され幅0.18m~0.20m、深さ0.20m前後である。

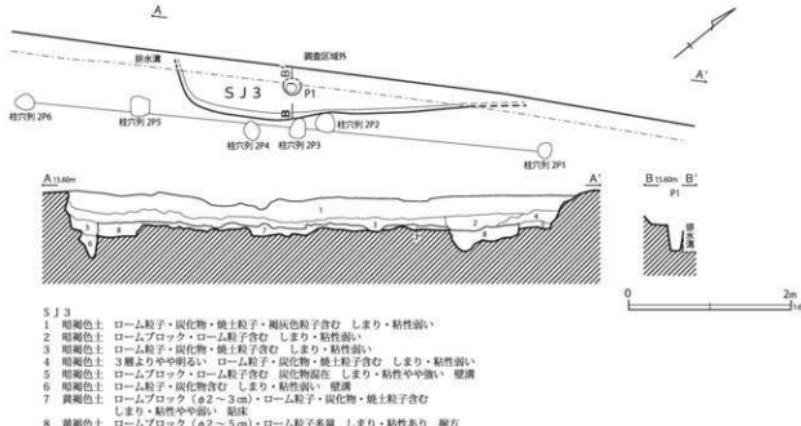
出土遺物は第154図1の推定口径15.0cm、浅身で、口縁部が短く体部との境に稜をもつ身模倣环である。時期は7世紀前半と推定される。



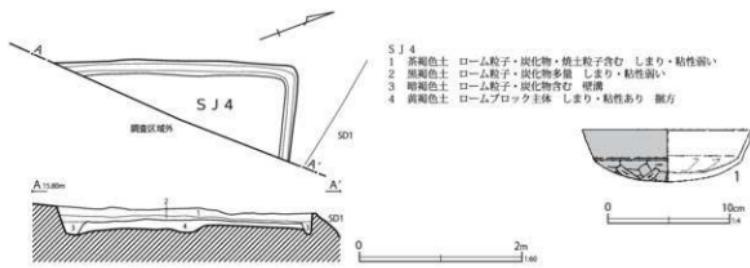
第154図 C区第2号竪穴住居跡・出土遺物

第77表 C区第2号竪穴住居跡出土遺物観察表（第154図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(15.0)	[2.5]	—	AH	10	普通	にぶい黄褐	身模倣环	



第155図 C区第3号竪穴住居跡



第156図 C区第4号竪穴住居跡・出土遺物

第78表 C区第4号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第156図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土器	壺	(14.0)	4.3	—	CGI	20	普通	明赤褐	蓋模倣 嵌入	

### C区第3号竪穴住居跡 (第155図)

C区の第3号竪穴住居跡は、K-10、L-9・10グリッド、調査区の北東部に位置する。

他の遺構との重複関係は、第2号柱穴列が東側に位置し、本竪穴住居跡内にP1とした同規模の柱穴が存在する。竪穴住居跡は東壁と南壁の一部を確認したのみで、竪穴住居跡の主体は調査区域外に延びている。このため、全体の規模や平面形は不明である。残存規模は長軸長4.00m、短軸長

0.70m、深さ0.40mである。長軸方位はN-38°-Eを指す。

覆土は全体に第1層の暗褐色土が堆積し、その下層に第3層の炭化粒子を含む暗褐色土が堆積していた。床面直上には貼床と考えられる第7層のロームブロック・ローム粒子を多く含む黄褐色土が充填されていた。

カマド、貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。南壁の断面では壁溝が確認され、幅0.20m、深さ

0.20mである。

出土遺物はなく、時期は不明である。

#### C区第4号竪穴住居跡（第156図）

C区の第4号竪穴住居跡は、M-8・9グリッド、調査区の北東部に位置する。

他の遺構との重複関係は、第1号溝跡が北東側に位置する。竪穴住居跡は北壁と西壁の一部を確認したのみで、竪穴住居跡の主体は調査区域外に延びている。このため、全体の規模や平面形は不明である。残存規模は長軸2.90m、短軸1.05m、深さ0.25mである。長軸方位はN-20°-Eを指す。

覆土は全体に第1層の茶褐色土が堆積し、その下層に第2層の炭化粒子を多く含む黒褐色土が堆積していた。床面は第4層の掘方埋土でロームブロックを主体とする黄褐色土が充填されていた。

カマド、貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。壁溝が確認され、幅0.14m～0.20m、深さ0.10～0.15mである。

出土遺物は第156図1の推定口徑14.0cm、体部に丸味をもつ赤彩が施された蓋模倣窓である。時期は6世紀末葉と推定される。

#### C区第5号竪穴住居跡（第157図）

C区の第5号竪穴住居跡は、O-6グリッド、調査区の中央部に位置する。

他の遺構との重複関係は、南西側に位置する第6号竪穴住居跡を壊している。竪穴住居跡の北壁と南壁から西壁コーナーは確認できたものの、東壁及び西壁は調査区域外のため確認できなかつた。平面形はほぼ方形である。規模は長軸長4.10m、残存短軸長2.50m、深さ0.35mである。主軸方位はN-65°-Wを指す。

覆土は全体に第2・4層の暗褐色土による自然堆積である。床面は地山のローム土で踏み固められている。

カマドは西壁辺やや南側に設けられているが、調査区域外に延びるため焚口部分のみ残存して

いる。残存規模は長さ0.60m、幅0.54m、深さ0.12mである。西壁の断面観察では、両袖は白灰色粘土で構築されている。カマド覆土は、上層に白灰色粘土ブロックと焼土粒子を多量に含む。下層には灰が堆積している。貯蔵穴は、カマドの南側、南西コーナー部分で検出された。規模は長軸長0.75m、短軸長0.55m、深さ0.40mである。柱穴は3基検出された。規模はP1が長径0.50m、深さ0.20m、P2が長径0.45m、深さ0.15m、P3が長径0.50m、深さ0.27mである。壁溝は北壁と南壁で検出され、幅0.17m～0.25m、深さ0.10m～0.15mである。

出土遺物はいずれも土師器で第158図1～16に図示した。1は黒色処理された身模倣窓で、内面に放射状暗文が施されている。4も黒色処理された身模倣窓である。2・3・6は口縁部が外反する蓋模倣窓、7は赤彩が施された比企型窓である。11はカマド左袖内に倒立した状態で出土した甕である。12は胴部がやや下膨れた甕である。貯蔵穴の直上から検出された。15はカマド付近から出土した大型甕である。時期は6世紀後半に位置付けられる。

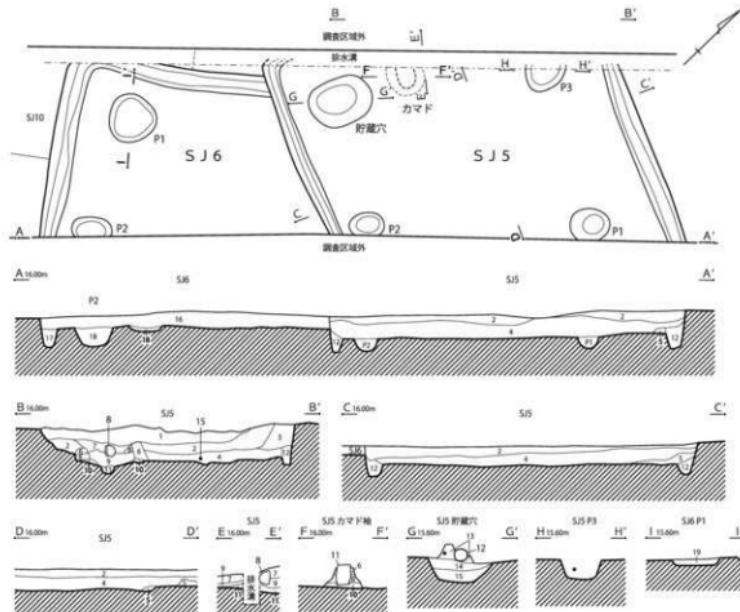
#### C区第6号竪穴住居跡（第157図）

C区の第6号竪穴住居跡は、O-6グリッド、調査区の中央部に位置する。

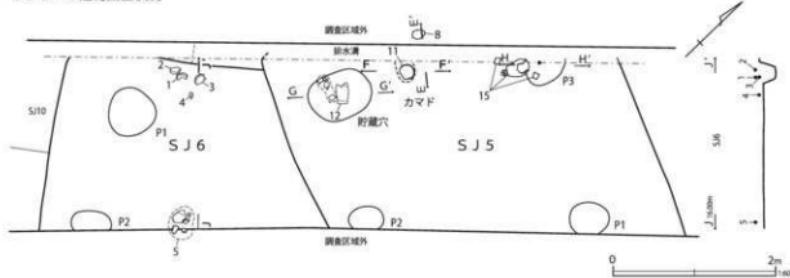
他の遺構との重複関係は、南西側に位置する第10号竪穴住居跡を壊し、北西側に位置する第5号竪穴住居跡に壊されている。竪穴住居跡の西壁と南壁の一部は確認できたものの、西壁の一部と北壁は第5号竪穴住居跡に壊され、東壁及び南壁は調査区域外のため確認できなかつた。平面形はほぼ方形である。残存規模は長軸長3.50m、短軸長2.00m、深さ0.20mである。長軸方位はN-53°-Eを指す。

覆土は全体に第16層の褐色土が堆積する。床面は地山のローム土で踏み固められている。

カマド、貯蔵穴は検出されなかつた。柱穴は

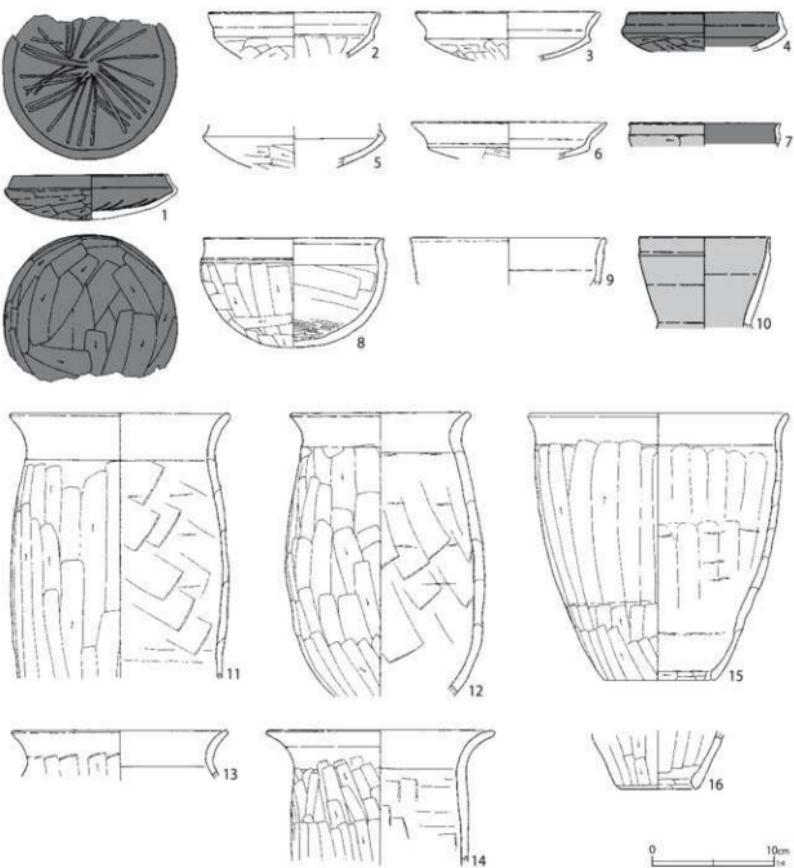


S J 5・6 遺物出土状況



S J 5			
1 南褐色土	ローム粒子・炭化物・焼土粒子含む しまり・粘性やや弱い	11 赤褐色土	焼土粒子含む しまり・粘性弱い
2 南褐色土	ロームブロック(2~3cm)・ローム粒子・炭化物・焼土粒子含む しまり・粘性あり	12 黄褐色土	ロームブロック・ローム粒子・炭化物含む しまり・粘性やや弱い、埋漬
3 細色土	ローム粒子・炭化物含む しまり・粘性やや弱い	13 黄色土	ローム粒子・炭化物含む しまり・粘性やや弱い
4 細色土	ローム粒子・炭化物・焼土粒子含む しまり・粘性やや弱い	14 暗褐色土	ローム粒子・炭化物含む しまり・粘性弱い
5 黄色土	ローム粒子・炭化物・焼土粒子含む しまり・粘性弱い	15 暗褐色土	ロームブロック・ローム粒子・炭化物含む しまり・粘性弱い
6 白灰色土	白灰色粘土主体 しまり・粘性強い	S J 5	
7 明褐色土	きめ細い・炭化物・焼土粒子やや多量 白色粘土ブロック含む しまり・粘性弱い	16 褐色土	ローム粒子・炭化物・焼土粒子含む しまり・粘性弱い
8 白灰色土	6層に近似 炭化物・焼土粒子含む しまり・粘性弱い	17 黄褐色土	ロームブロック・ローム粒子含む しまり・粘性やや弱い、埋漬
9 黑褐色土	炭化物主体 烧土粒子混入 灰解 しまり・粘性弱い	18 黄褐色土	ロームブロック・ローム粒子多量 しまり・やや弱い・粘性弱い
10 黑褐色土	炭化物・焼土粒子含む しまり・粘性やや弱い	19 明褐色土	ローム粒子・炭化物含む しまり・粘性弱い

第157図 C区第5・6号竪穴住居跡



第158図 C区第5号竪穴住居跡出土遺物

2基検出された。規模はP 1が長径0.60m、深さ0.10m、P 2が長径0.50m、深さ0.25mである。周溝は西壁と南壁で検出され、幅0.20m～0.30m、深さ0.15m～0.20mである。

出土遺物はいずれも土師器で第159図1～5に図示した。1・4は蓋模倣坏、2・3は有段口縁坏で3は黒色処理されている。5は胴部が球形状

に張る丸壺である。時期は6世紀後半に位置付けられる。

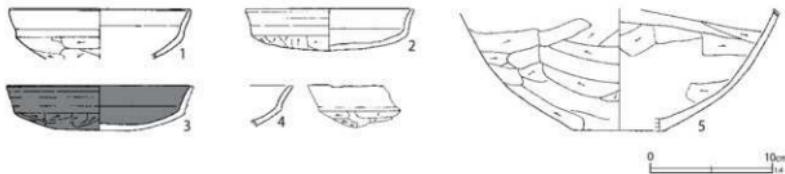
#### C区第7号竪穴住居跡(第160図)

C区の第7号竪穴住居跡は、P-5グリッド、調査区の中央部に位置する。

他の遺構との重複関係は、南北方向に走る第4号溝跡が本竪穴住居跡の北側を壞している。また、

第79表 C区第5号竪穴住居跡出土遺物観察表(第158図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	12.7	3.7	—	I	80	普通	明褐	P 3 No.1 身模破壊 放射状暗文 内外 面黒色処理	114-1
2	土師器	壺	(14.0)	[3.8]	—	AI	20	普通	橙	蓋模破壊	
3	土師器	壺	(15.0)	[4.0]	—	AII	20	普通	にぶい黄褐	蓋模破壊	
4	土師器	壺	(12.2)	[3.2]	—	AI	15	普通	にぶい黄褐	貯藏穴 身模破壊 内外面黒色処理	
5	土師器	壺	—	—	—	CGL	10	普通	明褐		
6	土師器	壺	(16.0)	[3.0]	—	AII	10	普通	明赤褐	蓋模破壊	
7	土師器	壺	(12.4)	[1.9]	—	III	5	良好	赤褐	b・c 比企型壺 外面赤彩 内面黒色処理	
8	土師器	鉢	14.7	9.0	—	DG	100	普通	暗褐	No.3	114-1
9	土師器	鉢	(15.8)	[3.9]	—	AGHI	5	普通	明赤褐	b・c	
10	土師器	壺	(10.7)	[7.6]	—	ACI	20	普通	赤褐	c 角閃石多量 赤彩	
11	土師器	甕	18.0	[21.8]	—	AG	80	普通	にぶい黄褐	No.2	114-1
12	土師器	甕	14.6	[23.4]	—	GI	80	普通	にぶい黄褐	No.1 脊部下端外面被熱 油煙付着	114-1
13	土師器	甕	(17.4)	[4.2]	—	AII	5	普通	にぶい褐		
14	土師器	甕	(18.4)	[11.2]	—	CHI	10	普通	暗褐	O-6 b 角閃石多量	
15	土師器	甕	(20.9)	22.0	9.1	ACGH	50	良好	にぶい黄褐	No.4	114-1
16	土師器	瓶	—	[4.8]	(6.0)	AG	5	普通	暗褐	b・c	



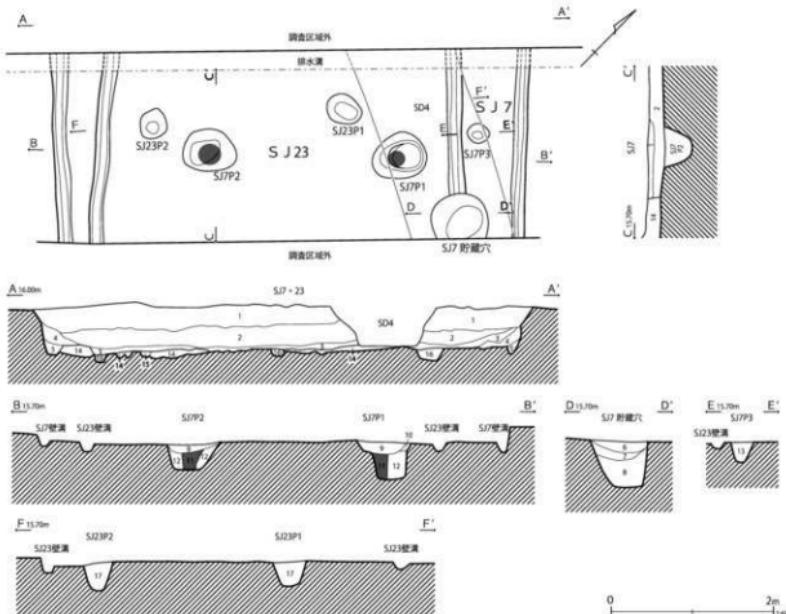
第159図 C区第6号竪穴住居跡出土遺物

第80表 C区第6号竪穴住居跡出土遺物観察表(第159図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(14.8)	[4.1]	—	CI	30	普通	橙	No.2 蓋模破壊	
2	土師器	壺	(13.8)	3.5	—	CDI	45	普通	橙	No.3 有段口縁壺	
3	土師器	壺	(15.0)	3.2	—	CI	55	普通	にぶい赤褐	No.1 有段口縁壺 内外面黒色処理	
4	土師器	壺	—	[3.4]	—	ACI	10	普通	にぶい褐	No.4 蓋模破壊	
5	土師器	甕	—	[10.1]	(7.5)	AI	10	普通	にぶい橙	No.5・6 体部一部被熱	

長軸方向を同じくする第23号竪穴住居跡を壊して構築されていて、第23号竪穴住居跡を拡張した可能性が考えられる。平面形は方形または、長方形と推定される。残存規模は長軸長5.80m、短軸長2.10m、深さ0.50mである。長軸方位はN-46°-Eを指す。東壁及び西壁は調査区域外のため確

認できなかった。覆土は全体に第1・2層の黒褐色土が堆積し、床面直上に炭化物・炭化粒子を多く含む第3層の黒褐色土が薄く堆積していた。竪穴住居跡床面は第23号竪穴住居跡の床面の一部のロームブロック・ローム粒子を主体とする黄褐色土を貼り込んでいる。



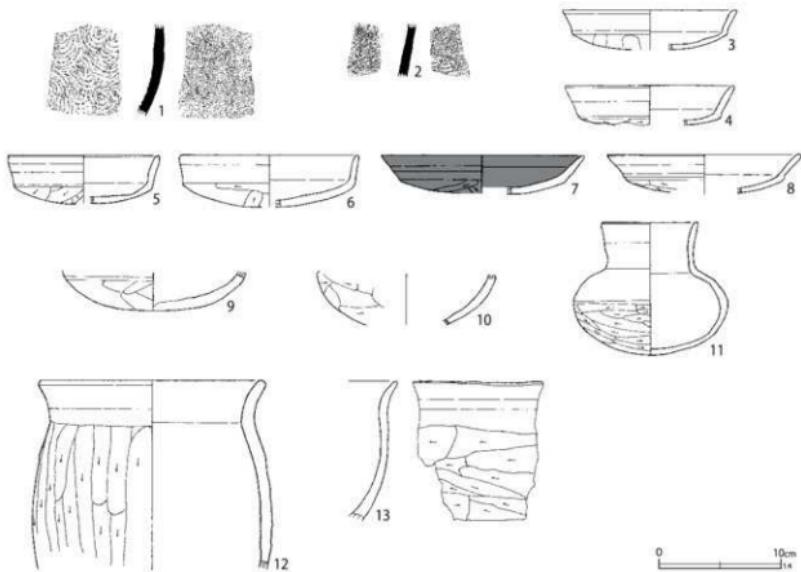
- S 7  
1 黒褐色土 ローム粒子・炭化物・焼土粒子含む しまり・粘性やや弱い  
2 黒褐色土 1層よりやや明るい ローム粒子・炭化物・焼土粒子含む しまり・粘性やや弱い  
3 黒褐色土 炭化物多量 固結床面に広がりあり  
4 黑褐色土 ローム粒子・炭化物・焼土粒子多量 しまり・粘性やや弱い  
5 黑褐色土 ロームブロック・ローム粒子・炭化物混在 しまり・粘性弱い 貼跡  
6 黑褐色土 烧土粒子・炭化物・炭褐色粘土粒子合存 しまり・粘性やや弱い  
7 黑褐色土 ローム粒子微量 炭化物含む しまり・粘性弱い  
8 黑褐色土 ローム粒子・炭化物・焼土粒子含む しまり・粘性弱い  
9 黑褐色土 ローム粒子・炭化物含む しまり・粘性弱い
- 10 黄褐色土 ロームブロック含む しまり・粘性やや弱い  
11 黑褐色土 ローム粒子・炭化物含む しまり・粘性弱い 膜痕  
12 帽模倣坏 ローム粒子や多量 炭化物混入 しまり・粘性やや弱い  
13 黑褐色土 炭化物やや多量 ローム粒子散在 しまり弱い  
14 黑褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量 しまり・粘性強い 貼跡  
15 黑褐色土 ローム粒子・炭化物含む しまり・粘性弱い 貼跡
- S 7-23  
16 帽模倣坏 ロームブロック・ローム粒子含む 炭化物混入  
17 黑褐色土 炭化物・焼土粒子含む しまり・粘性弱い

第160図 C区第7・23号竪穴住居跡

カマドは検出されなかった。貯蔵穴は、北東部分で検出された。平面形は円形で、底面はやや狭く平坦である。規模は径0.68m、深さ0.55mである。柱穴は3基検出された。規模はP1が長径0.68m、短径0.55m、深さ0.50m、P2が長径0.65m、短径0.50m、深さ0.30m、P3が長径0.27m、短径0.24m、深さ0.27mである。周溝は北壁と南壁に検出され幅0.15m~0.21m、深さ0.20m~0.30mである。

出土遺物は第161図1~13で、1・2は須恵器

甕の胸部破片で、1は胸部外面に細かな平行タタキ、内面は同心円文アテ具痕が明瞭に残る。3~6は蓋模倣坏、7・8は口縁部が大きく外反する有段口縁坏で、7は黒色処理が施されている。11は頸部が上方にやや開いて立ち上がる小型丸底壺である。12は縦方向にヘラケズリが施されたやや胴部に膨らみをもつ甕である。13は破片であるが、横方向にケズリが施され、口縁部が緩やかに外反して立ち上がる。胴部は底部に向かって傾斜する鉢型の瓶である。時期は6世紀後半と推定さ



第161図 C区第7号竪穴住居跡出土遺物

第81表 C区第7号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第161図)

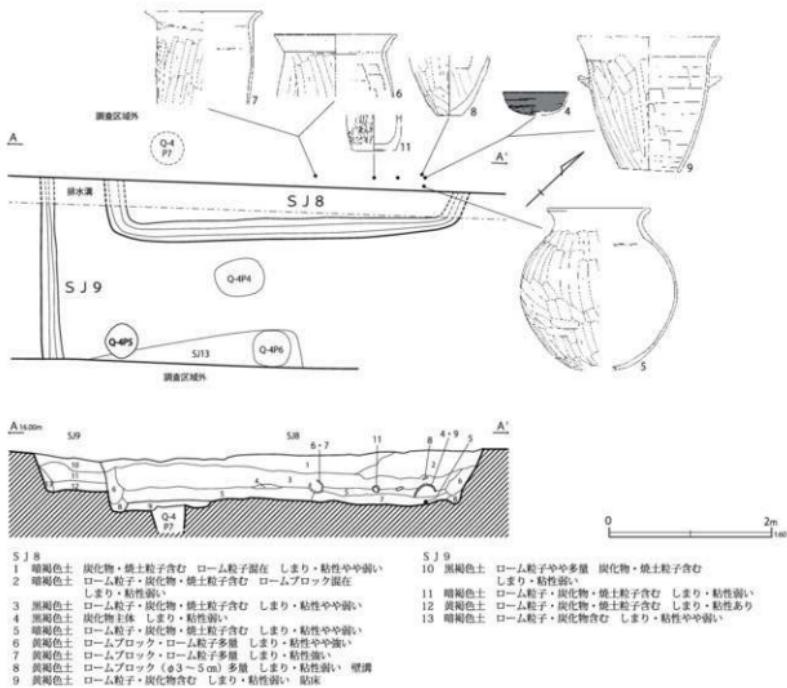
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	-	[7.5]	-	I	5	普通	褐灰	外面平叩き 内面同心円文	114-2
2	須恵器	甕	-	[4.4]	-	I	5	普通	灰黄褐	外面自然輪	114-2
3	土師器	壺	(14.1)	[3.3]	-	CI	15	普通	にぶい褐	蓋模倣壺	
4	土師器	壺	(13.6)	[3.3]	-	CI	10	普通	明赤褐	蓋模倣壺	
5	土師器	壺	(12.3)	[4.0]	-	CI	25	普通	明赤褐	蓋模倣壺	114-2
6	土師器	壺	(14.5)	[4.3]	-	CI	25	普通	灰黄褐	蓋模倣壺	114-2
7	土師器	壺	(16.4)	[3.2]	-	I	10	普通	灰褐	有段口縁壺 内外面黒色処理	
8	土師器	壺	(15.6)	[3.3]	-	CI	10	普通	にぶい褐	有段口縁壺	
9	土師器	甕	-	[3.3]	-	CI	10	普通	にぶい褐		
10	土師器	壺	-	[4.2]	-	CI	10	普通	にぶい赤褐		
11	土師器	壺	7.7	11.0	-	CI	85	普通	褐		114-2
12	土師器	甕	18.0	[15.6]	-	CD	20	普通	浅黄褐		
13	土師器	瓶	-	[11.5]	-	CHIK	5	普通	にぶい赤褐	貯藏穴	

れる。

#### C区第23号竪穴住居跡 (第160図)

C区の第23号竪穴住居跡は、P-5グリッド、

調査区の中央部に位置する。他の遺構との重複関係は、第7号竪穴住居跡に壊されている。平面形は方形か、長方形である。残存規模は長軸長



第162図 C区第8・9号竪穴住居跡

4.50m、短軸長2.28m、深さ0.58mである。長軸方位はN-46°-Eを指す。東壁及び西壁は調査区域外のため確認できなかった。覆土は第7号竪穴住居跡に壊されているため残存せず、壁溝部分のみ残存する。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。柱穴は2基検出された。規模はP1が長径0.45m、短径0.38m、深さ0.20m、P2が長径0.38m、短径0.32m、深さ0.40mである。壁溝は北壁と南壁に検出され、幅0.17m~0.20m、深さ0.05m~0.10mである。

出土遺物はなく、時期は、重複関係から第7号竪穴住居跡よりも古い。

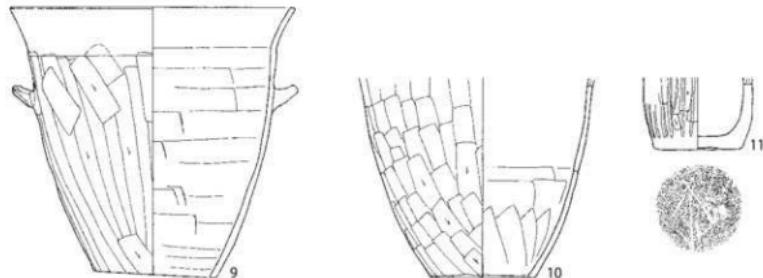
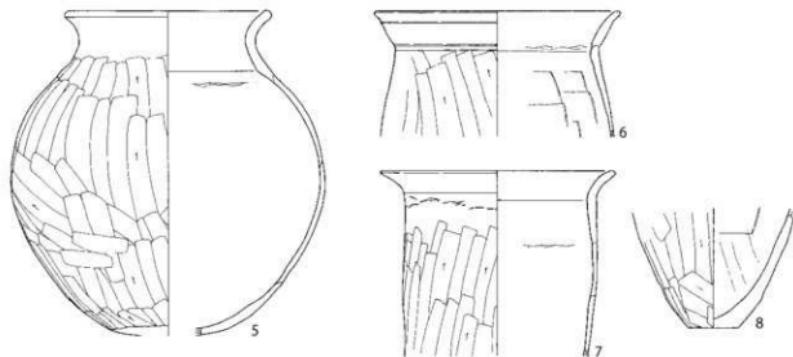
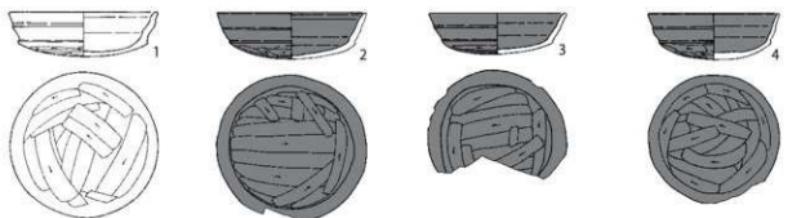
#### C区第8号竪穴住居跡 (第162図)

C区の第8号竪穴住居跡は、P-5、Q-4・5グリッド、調査区の中央部に位置する。

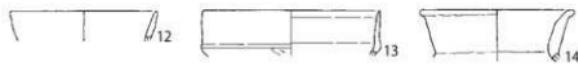
他の遺構との重複関係は、第9号竪穴住居跡を壊している。また、東壁及び北壁、南壁は調査区域外のため確認できなかった。平面形は不明である。残存規模は長軸長4.55m、短軸長0.70m、深さ0.55mである。長軸方位はN-44°-Eを指す。

覆土は全体に第1・2層の暗褐色土が堆積し、第3層の黒褐色土、第5層の暗褐色土が堆積していた。壁際には第6層のロームブロック・ローム粒子を多く含む黄褐色土が柱状に堆積し、壁溝を覆う第8層に続く。床面はローム土を基調とする

S J 8



S J 9



第163圖 C區第8・9號竖穴住居跡出土遺物

第82表 C区第8・9号竪穴住居跡出土遺物観察表（第163図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	12.0	3.7	—	EH	100	普通	明赤褐	SJ8 有段口縁壺	115-2
2	土師器	壺	12.2	3.8	—	HI	95	普通	黒	SJ8 有段口縁壺 内外面黑色処理	115-2
3	土師器	壺	11.3	3.4	—	CI	80	普通	黒	SJ8 有段口縁壺 内外面黑色処理	115-2
4	土師器	壺	10.7	3.8	—	HI	95	普通	橙	SJ8 No.6 有段口縁壺 内外面黑色処理	115-2
5	土師器	甕	(16.4)	26.9	—	AI	50	普通	浅黄褐	SJ8 No.4 黒度	115-1
6	土師器	甕	(20.0)	[10.3]	—	ACI	10	普通	にぶい黄褐	SJ8 No.1	
7	土師器	甕	19.0	[15.2]	—	AH	40	普通	明黄褐	SJ8 No.1	
8	土師器	甕	—	[9.9]	(4.0)	AGH	20	普通	褐	SJ8 No.3	
9	土師器	瓶	23.2	22.0	10.0	GHI	95	良好	浅黄褐	SJ8 No.6 突手付瓶 黒度	115-1
10	土師器	甕	—	[16.4]	8.4	AHI	40	普通	にぶい橙	SJ8	115-1
11	土師器	甕	—	[5.9]	7.0	AGHI	10	不良	黒褐	SJ8 No.2 木葉痕	115-2
12	土師器	壺	(12.0)	[2.5]	—	CI	5	普通	橙	SJ9	
13	土師器	壺	(14.4)	[3.7]	—	HI	5	普通	橙	SJ9 蓋模倣壺	
14	土師器	甕	(12.5)	[4.2]	—	GI	5	普通	橙	SJ9	

が、南側はローム粒子を含む貼床が確認された。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は東壁と南・北壁のコーナー部分で検出され、幅0.25m、深さ0.20mである。

出土遺物は第163図1~11、いずれも土師器で1~4はやや丸底で口径の小さな有段口縁壺、5は胴部球形で大型の丸甕、6・7は長甕、9・10は大型甕、11は底部外面に木葉痕の残る小型の甕である。時期は7世紀前半と推定される。

#### C区第9号竪穴住居跡（第162図）

C区の第9号竪穴住居跡は、Q-4グリッド、調査区の中央部に位置する。

他の造構との重複関係は、第8号竪穴住居跡に壊されている。南壁の一部を確認したが、東壁及び西壁は調査区域外のため確認できなかった。また、確認面では、北壁も確認できなかった。平面形は不明である。残存規模は長軸長2.23m、短軸長不明、深さ0.40mである。長軸方位はN-35°-Eを指す。

覆土は全体に第10~12層が堆積し、壁際には第13層が柱状に堆積する。

カマド、貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。壁溝は南壁で検出され、幅0.25m、深さ0.02mであ

る。出土遺物は第163図12~14、いずれも土師器で13は口縁部が上方に立ち上がる土師器蓋模倣壺である。時期は6世紀前半と推定される。

#### C区第10号竪穴住居跡（第164図）

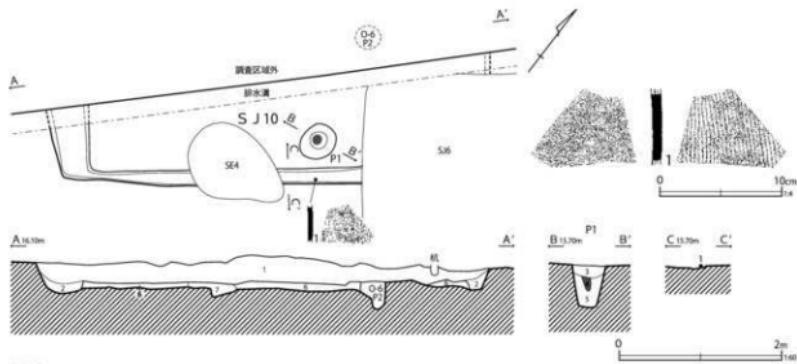
C区の第10号竪穴住居跡は、O-6、P-5・6グリッド、調査区の中央部に位置する。

他の造構との重複関係は、北側を第6号竪穴住居跡に壊され、東壁が第4号井戸跡に壊されている。また、南壁と西壁は調査区域外のため確認できなかった。平面形は方形または長方形と推定される。残存規模は長軸長5.55m、短軸長1.06m、深さ0.40mである。長軸方位はN-46°-Eを指す。

覆土は全体に第1層の暗褐色土が堆積し、床面は第6・7層のロームブロック・ローム粒子を主体とする黄褐色土を張り込んでいる貼床を確認した。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。柱穴は東壁寄り中央に1基検出された。規模は長径0.48m、短径0.40m、深さ0.44mである。壁溝は南壁と東壁に検出され、幅0.11m~0.53m、深さ0.02m~0.10mで、南壁側はかなり広く浅い。

出土遺物は第164図1の須恵器甕の胴部破片を



第164図 C区第10号竪穴住居跡・出土遺物

第83表 C区第10号竪穴住居跡出土遺物観察表(第164図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	貼土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	—	[6.3]	—	Gl	5	良好	灰	No.1 外面平行叩き 内面同心円文	

壁溝内から検出した。時期は6世紀後半と推定される。

#### C区第11号竪穴住居跡(第165図)

C区の第11号竪穴住居跡は、N-7グリッド、調査区の中央部に位置する。

他の構造との重複関係は、第12号竪穴住居跡、第18号竪穴住居跡を壊している。また、南壁は第7号溝によって壊されている。東壁から南壁の一部を検出したが、北壁から西壁、南壁に亘つて調査区域外のため確認できなかった。平面形は不明である。残存規模は長軸長6.95m、短軸長1.22m、深さ0.48mである。長軸方位はN-35°-Eを指す。

全体に第1層の暗褐色土及び第2層の黒褐色土が堆積し、床面直上に炭化物・炭化粒子を多く含む第7層の黒褐色土が薄く堆積していた。また、第5・6・8層は掘方であり、ロームブロック・ローム粒子を含んでいる。

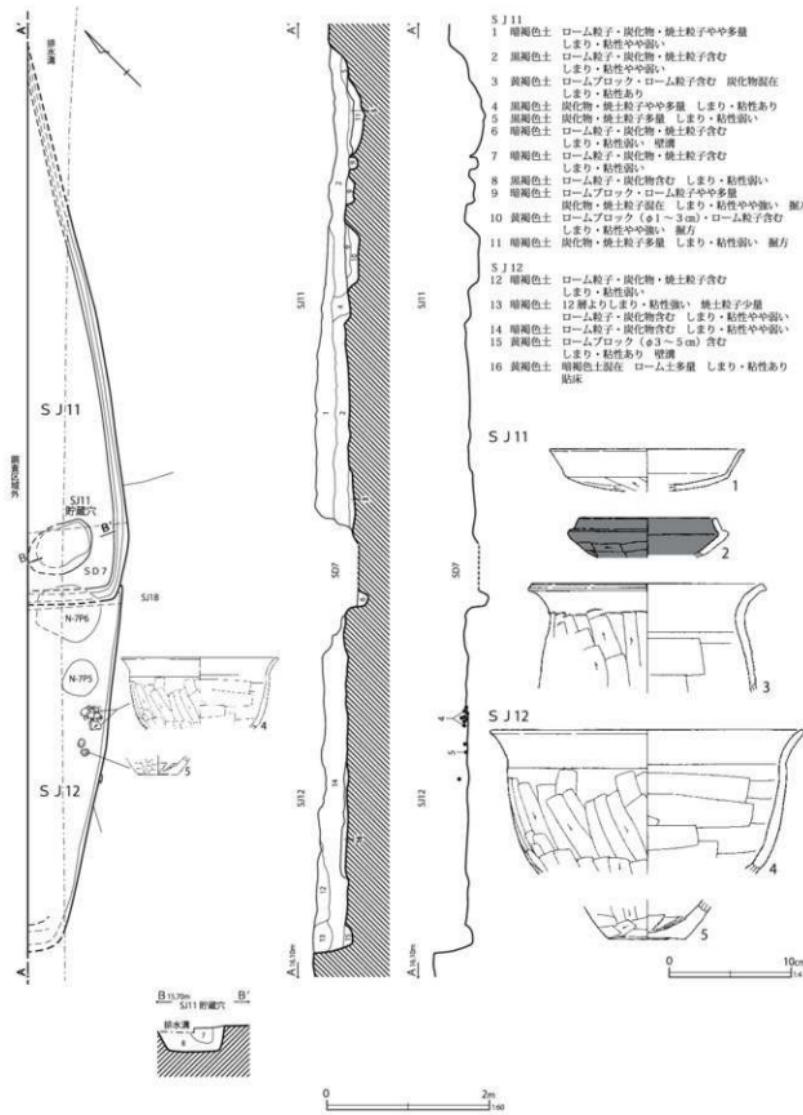
カマド、柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は、南東コーナー部分で検出された。規模は長軸長0.83m、短軸長0.60m、深さ0.30mである。壁溝は東壁と南壁に検出され、幅0.15m~0.18m、深さ0.01m~0.06mである。

出土遺物は第165図1~3で、いずれも土師器である。1は蓋模倣坏、2は推定口径11.2cmとやや小型の黒色処理された身模倣坏である。3の甕は、口唇部に面を持ちやや窪む作りである。時期は7世紀前半と推定される。

#### C区第12号竪穴住居跡(第165図)

C区の第12号竪穴住居跡は、N-7グリッド、調査区の中央部に位置する。

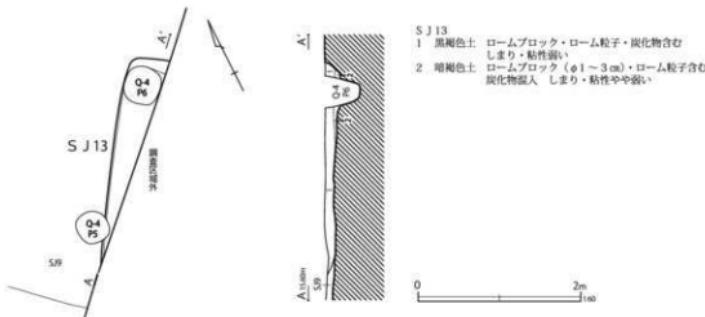
他の構造との重複関係は、第11号竪穴住居跡に壊され、第18号竪穴住居跡を壊している。東壁から南壁の一部を検出したが、北壁から西壁、南壁に亘つて調査区域外のため確認できなかった。平面形は不明である。残存規模は長軸長4.50m、短



第165図 C区第11・12号竪穴住居跡・出土遺物

第84表 C区第11・12号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第165図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(16.0)	[3.5]	—	AII	20	普通	黄橙	SJ11 貯藏穴 蓋模破	
2	土師器	壺	(11.2)	[2.9]	—	AII	20	普通	椎	SJ11 貯藏穴 身模破 内外面黑色處理	
3	土師器	甕	(19.0)	[9.0]	—	AG	10	普通	浅黄橙	SJ12No.9・SJ11・12	
4	土師器	鉢	(25.8)	[11.8]	—	CI	30	普通	黄橙	SJ12No.1・2	
5	土師器	甕	—	[3.2]	6.4	AH	10	普通	浅黄橙	No.9 底部未調整	



第166図 C区第13号竪穴住居跡

軸長1.07m、深さ0.38mである。長軸方位はN-51°-Eを指す。

全体に第12~14層の暗褐色土が堆積し、床面直上に第16層のロームブロック・ローム粒子を多量に含む貼床が確認された。

カマド、貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。壁溝は西壁の断面で確認できた。幅0.25m、深さ0.08mである。

出土遺物は第165図4・5で、いずれも土師器である。4は推定口径25.8cmの大型の鉢である。時期は6世紀後半と推定される。

#### C区第13号竪穴住居跡 (第166図)

C区の第13号竪穴住居跡は、Q-4・5グリッド、調査区の中央部に位置する。

他の遺構との重複関係は、第9号竪穴住居跡を壊し、グリッドピットに壊されている。北壁から西壁の一部を検出したが、北壁から東壁、南壁、西壁に亘って調査区域外のため確認できなかつた。平面形は不明である。残存規模は長軸長

2.50m、短軸長0.43m、深さ0.20mである。長軸方位はN-34°-Eを指す。

覆土は浅く全体に第1層の黒褐色土が堆積し、北壁際に第2層の三角堆積土が見られた。カマド、貯蔵穴、柱穴、壁溝は検出されなかつた。

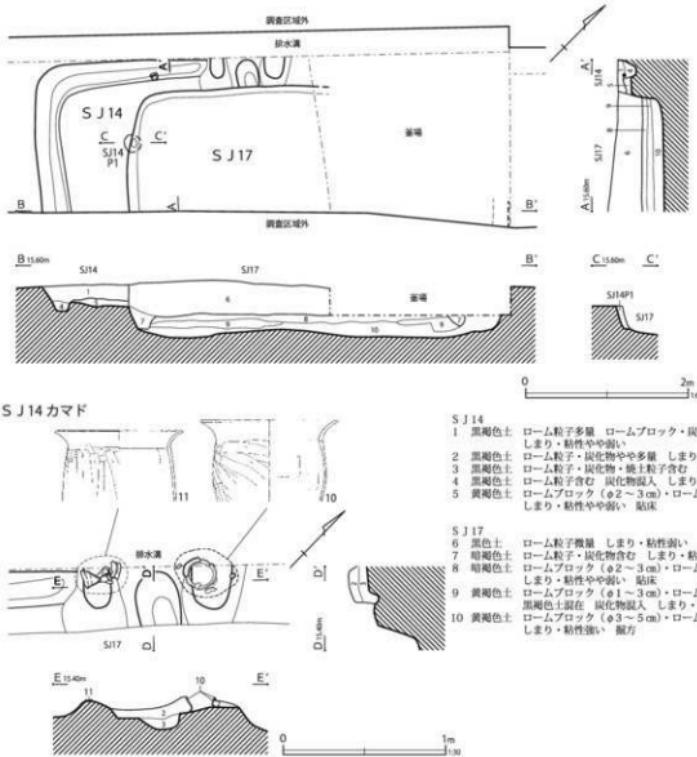
出土遺物はなく、時期は第9号竪穴住居跡より新しい。

#### C区第14号竪穴住居跡 (第167図)

C区の第14号竪穴住居跡は、Q-4グリッド、調査区の南西部に位置する。

他の遺構との重複関係は、第17号竪穴住居跡に壊され、調査時に設けた排水のための金場に壊されている。南壁からカマドのある西壁の一部を検出したが、北寄りの西壁から北壁、東壁、さらに南壁の一部は調査区域外のため確認できなかつた。平面形は方形と推測できる。残存規模は長軸長3.40m、短軸長1.78m、深さ0.25mである。主軸方位はN-53°-Eを指す。

覆土は第17号竪穴住居跡に壊されているため、

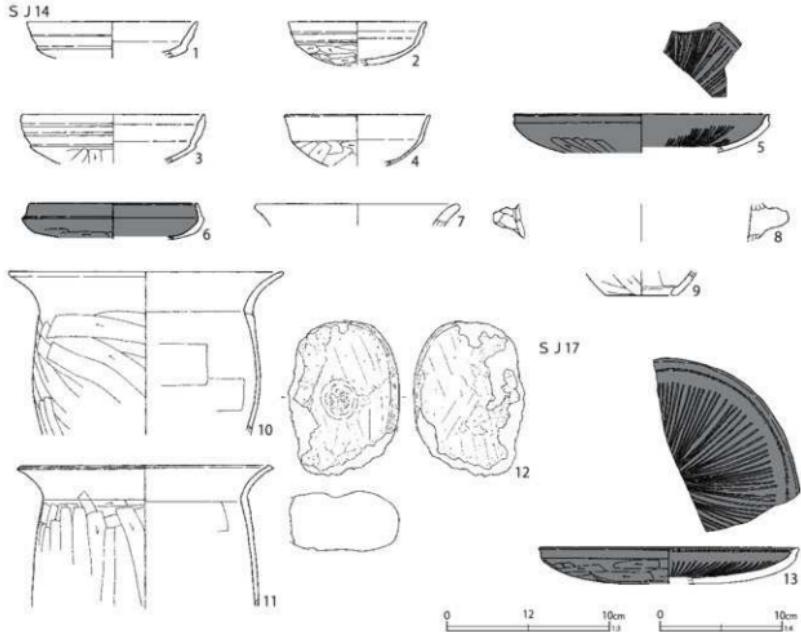


第167図 C区第14・17号竪穴住居跡

南壁側で検出され、第1層の黒褐色土が堆積し、床面は第2層のロームブロック・ローム粒子を多量に含む貼床が確認された。

カマドは、西壁中央に検出され、焚口側は第17号竪穴住居跡に壊され、煙道は調査区域外に延びる。両袖部分と焚口の一部は残存していた。カマドの規模は焚口幅0.40m、残存長0.48mである。青灰色粘土の両袖には土師器壺が逆位の状態で芯材として使われていた。貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。壁溝は南壁と西壁に検出され、幅0.22m~0.35m、深さ0.12m~0.19mである。

出土遺物は第168図1~12で、1~11は土師器である。1~3は有段口縁壺、4は蓋模倣壺、5は黒色処理された暗文皿、6は黒色処理された身模倣壺である。8・9は瓶、10はカマド右袖の芯材として使われていた壺である。口縁部が外傾に開き、胴部がやや膨らむ。胴部外面は斜めのヘラケズリが施されている。11はカマド左袖の芯材として使われていた壺である。10の形態とは異なり口唇部に面を持ちやや窪む作りで、胴部外面は縦方向のヘラケズリが施されている。時期は7世紀末から8世紀初頭と推定される。



第168図 C区第14・17号竪穴住居跡出土遺物

第85表 C区第14・17号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第168図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(13.8)	[2.0]	—	AEH	10	普通	にぶい黄褐	SJ14-a	
2	土師器	壺	(11.2)	[3.6]	—	HI	30	普通	概	SJ14-c	有段口縁环
3	土師器	壺	(15.0)	[3.0]	—	GI	10	普通	にぶい黄褐	SJ14-d	有段口縁环
4	土師器	壺	(11.8)	[4.2]	—	HI	20	普通	にぶい黄褐	SJ14-b-c	蓋横倣环
5	土師器	皿	(20.8)	[3.2]	—	ACI	10	普通	黒褐	SJ14-e	暗文皿 内外面黒色処理
6	土師器	壺	(13.7)	[3.0]	—	GHI	20	普通	明赤褐	SJ14-d	身模倣环 内外面黒色処理
7	土師器	甕	(16.7)	[1.8]	—	GI	5	普通	明赤褐	SJ14-f	マド
8	土師器	瓶	—	[3.1]	—	HI	5	普通	にぶい黄褐	SJ14	
9	土師器	瓶	—	[2.0]	(6.0)	AG	5	普通	にぶい黄褐	SJ14-c	
10	土師器	甕	12.4	[13.5]	—	ACI	15	普通	にぶい褐	C-Q-4 SJ14-b-Na.1	
11	土師器	甕	(20.3)	[11.7]	—	AHH	20	普通	にぶい黄褐	SJ14-c-Na.2	
12	石製品	凹石	長さ [9.6] 幅 [6.9] 厚さ 3.9 重さ 380.3					SJ14-b			
13	土師器	皿	(21.2)	[3.0]	—	AI	30	良好	黒褐	SJ17 放射状暗文 黒色処理	116-1

C区第17号竪穴住居跡 (第167図)

C区の第17号竪穴住居跡は、Q-4グリッド、

調査区の南西部に位置する。

他の遺構との重複関係は、第14号竪穴住居跡を

壊し、北側は調査時に設けた排水のための釜場に壊されている。南壁から西壁の一部が検出されたが、北寄りの西壁から北壁、東壁、さらに南壁の一部は調査区域外のため確認できなかった。平面形は方形と推測できる。残存規模は長軸長4.70m、短軸長1.54m、深さ0.71mである。長軸方位はN-46°-Eを指す。

覆土は全体に第6層の黒色土が堆積し、床面は第8層のロームブロック・ローム粒子を多量に含む暗褐色土による貼床が確認され、さらに、北側と南側には第10層の掘方埋土の上に黄褐色土による貼床が検出された。カマド、貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。壁溝は南壁と西壁に検出され、幅0.25m、深さ0.20mである。

出土遺物は第168図13の黒色処理された土師器・暗文皿である。時期は7世紀末と推定される。

#### C区第18号竪穴住居跡（第169図）

C区の第18号竪穴住居跡は、N-O-7グリッド、調査区の中央部に位置する。

他の遺構との重複関係は、西壁から北壁側を第

11・12号竪穴住居跡に壊されている。また、本竪穴住居跡の中央から西側を第1号掘立柱建物、第6・7号井戸跡に壊されている。北壁から東壁、南壁に亘って調査区域外のため確認できなかつた。平面形は長方形と推測される。残存規模は長軸長7.25m、短軸長2.30m、深さ0.05mである。長軸方位はN-32°-Eを指す。

壁溝のみ検出され、確認面の地山ローム土が床面である。壁溝は、幅0.14m～0.22m、深さ0.03m～0.09mである。出土遺物は検出されなかつた。

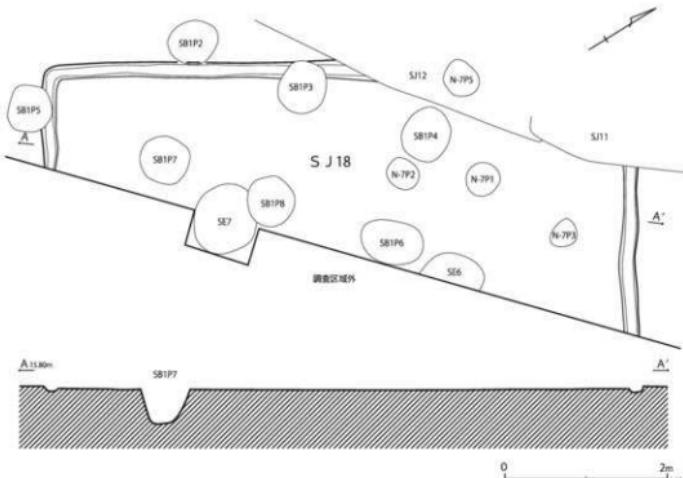
#### C区第20号竪穴住居跡（第170図）

C区の第20号竪穴住居跡は、P-6グリッド、調査区の中央部に位置する。

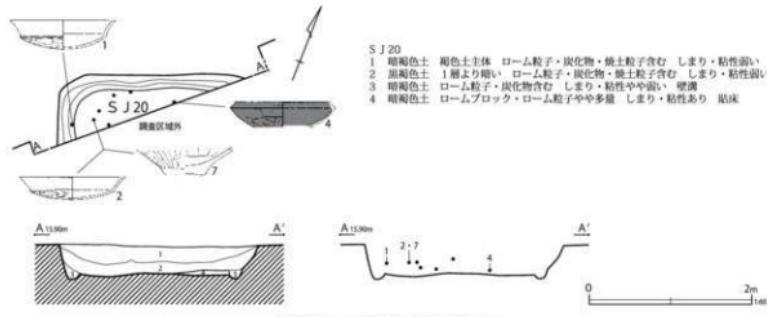
他の遺構との重複関係はなく、南壁と西壁の一部を確認した。残存規模は長軸長2.20m、短軸長0.74m、深さ0.40mである。長軸方位はN70°-Eを指す。

出土遺物は第171図1～7の土師器である。

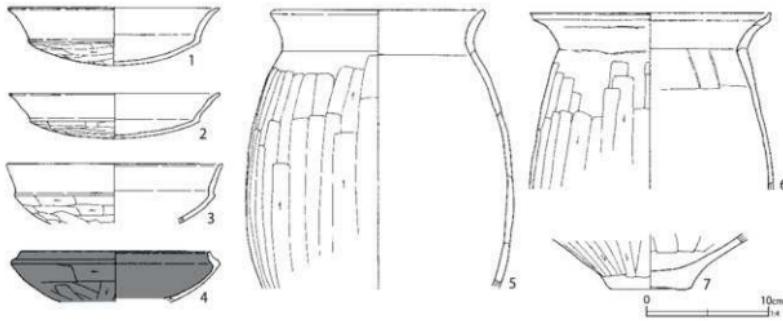
1・2は口径17.2cmと推定口径17.4cmの口縁部逆



第169図 C区第18号竪穴住居跡



第170図 C区第20号竪穴住居跡



第171図 C区第20号竪穴住居跡出土遺物

第86表 C区第20号竪穴住居跡出土遺物観察表（第171図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	17.2	4.7	—	AI	100	良好	にぶい褐	SK 9 No.1 盖模倣壺	116-2
2	土師器	壺	(17.4)	3.7	—	AI	50	普通	暗褐	SK 9 No.2 盖模倣壺	116-2
3	土師器	壺	(17.6)	[4.9]	—	AI	20	普通	にぶい褐	蓋模倣壺	
4	土師器	壺	(15.5)	[3.2]	—	HI	20	普通	黒褐	No.6 内外面黒色処理 身模倣壺	116-2
5	土師器	甕	17.1	[23.0]	—	GH	60	良好	にぶい褐		116-2
6	土師器	甕	19.6	[14.6]	—	GH	50	普通	褐		116-2
7	土師器	甕	—	[4.6]	—	ACHI	10	普通	にぶい橙	SK 9 No.2	116-2

「ハ」の字に大きく開く蓋模倣壺、3は推定口径17.6cmの口縁部直線的に開く蓋模倣壺、4は推定口径15.5cmの黒色処理を施された身模倣壺である。

いずれも口径が大きく体部に丸味をもつ。5～7は甕である。

時期は6世紀中葉と推定される。

### C区第21号竪穴住居跡（第172図）

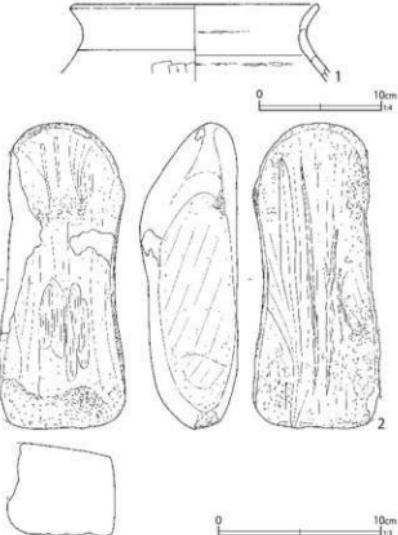
C区の第21号竪穴住居跡は、P・Q-5グリッド、調査区の中央部に位置する。

他の遺構との重複関係はなく、南壁から西壁、北壁の一部を確認し、竪穴住居跡の主体は東側調査区域外に延びている。このため、全体の規模や平面形は不明である。残存規模は長軸長4.45m、短軸長0.57m、深さ0.15mである。長軸方位はN-48°-Eを指す。

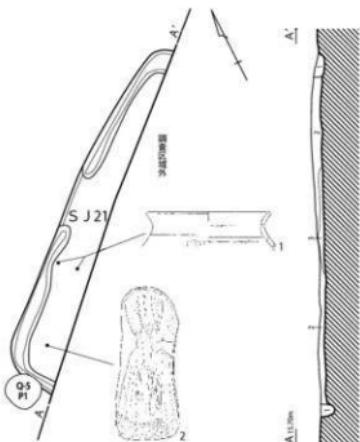
覆土はほとんどなく掘方埋土の第2層黒褐色土と第3層のロームブロック・ローム粒子が多く含む掘方が確認された。

カマド、貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。周溝は南壁から西壁、北壁で確認され、幅0.12m～0.20m、深さ0.06m～0.12mである。

出土遺物は第173図1 土器器の丸甕、2は砥石である。時期は6世紀後半と推定される。



第173図 C区第21号竪穴住居跡出土遺物



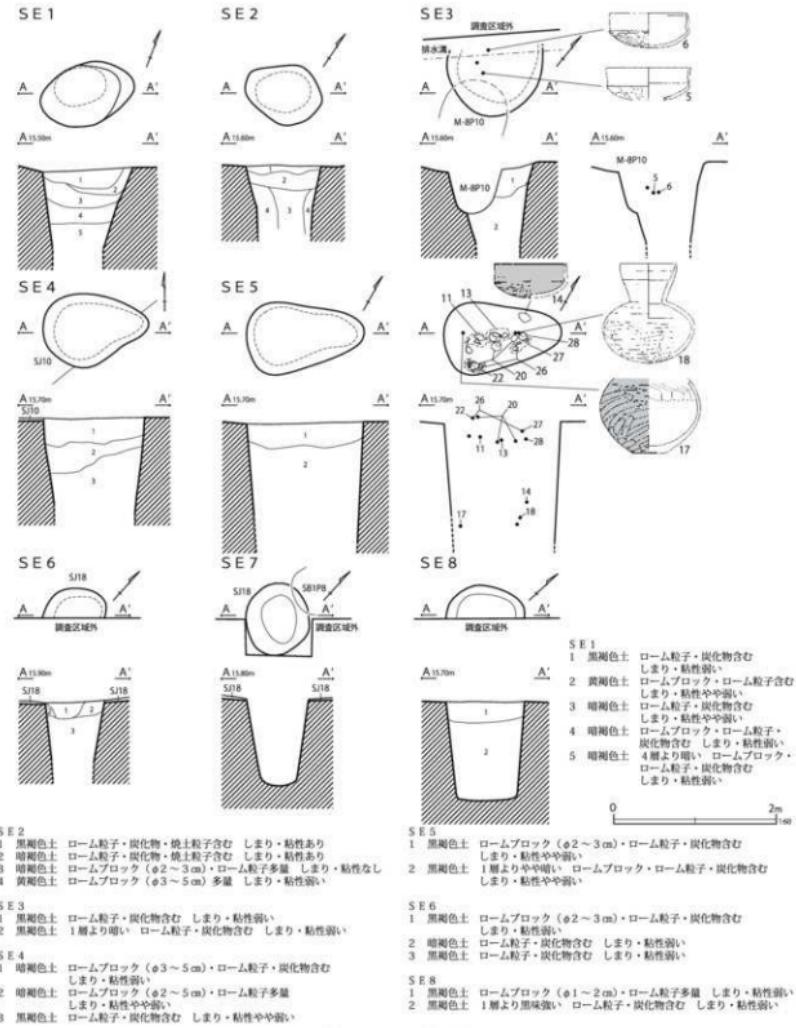
第172図 C区第21号竪穴住居跡

第87表 C区第21号竪穴住居跡出土遺物観察表（第173図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土器器	甕	(20.0)	[6.4]	—	AGH	普通	10	明赤褐	SJ13No.1・2	
2	石製品	砥石	長さ18.9	幅[7.9]	厚さ[6.1]	重さ1192.9				SJ13No.3 砂岩 置紙 使用面3面	

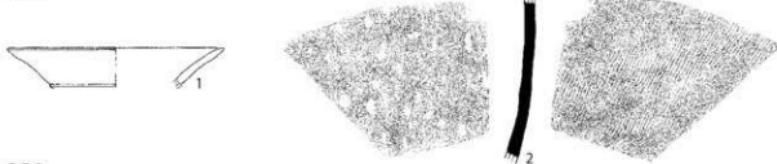
## (2) 井戸跡

C区において古墳時代・飛鳥時代の井戸跡は8基検出された。第89表に平面形や規模を示した。

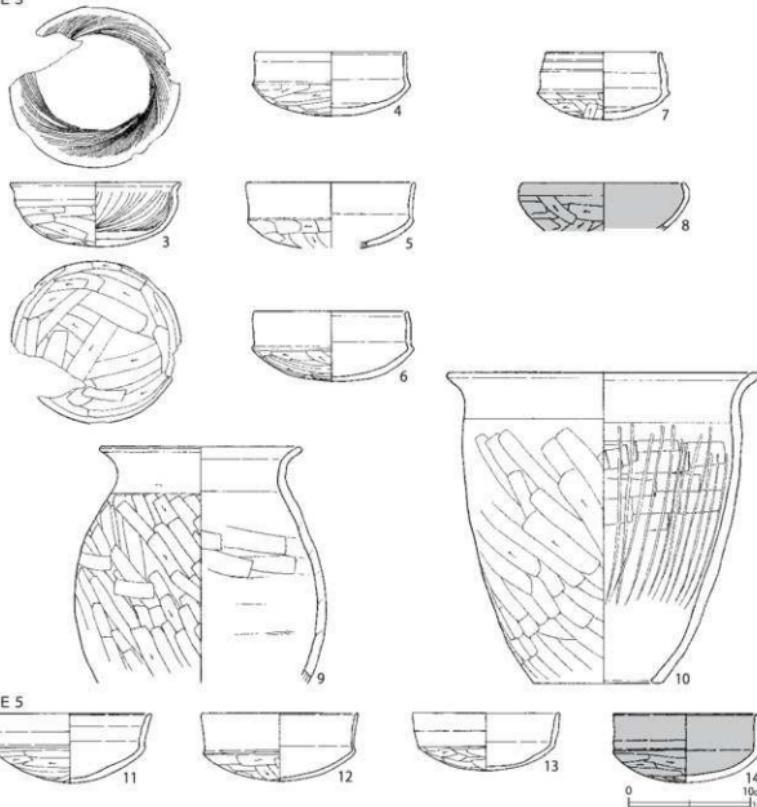


第174回 C区井戸跡

SE 2



SE 3



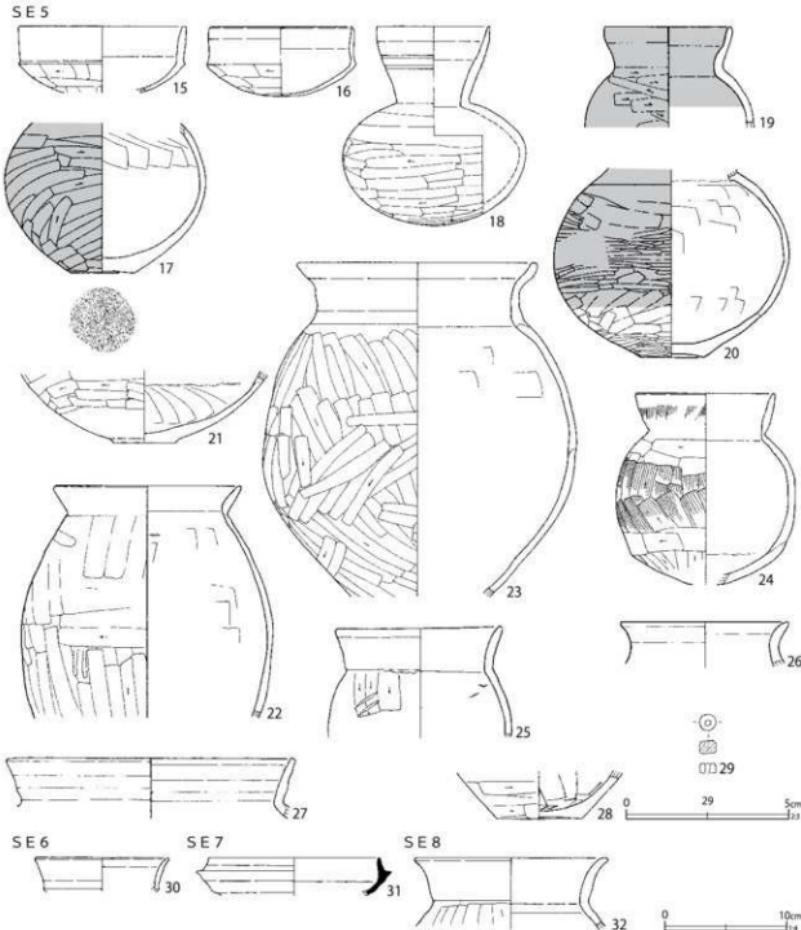
第175図 C区井戸跡出土遺物（1）

## C区第2号井戸跡（第174図）

調査区の中央部で検出した。南側4m付近に第3号井戸跡を検出した。平面形は不整形である。

## C区第3号井戸跡（第174図）

調査区の中央部で検出した。西側は調査区域外に延びる。北側4m付近に第2号井戸跡を検出し



第176図 C区井戸跡出土遺物（2）

た。グリッドピットM-8 P10に壊されている。平面形は円形である。出土遺物は第175図3~10で、いずれも土器器である。3は内面に放射状の暗文が施された壊である。4~6は口径12.3cm~13.6cmの口縁部が上方に直線的に立ち上がる蓋模壊、7は推定口径9.3cmとやや小型で、口縁部

上半に段をもつ身模壊である。8は体部が内湾気味に立ち上がる丸底壊である。この他、9は胴部に膨らみをもつ壊、10は大型壊である。時期は6世紀前半である。

#### C区第4号井戸跡（第174図）

調査区の中央部で検出した。第10号竪穴住居跡

第88表 C区井戸跡出土遺物観察表 (第175・176図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高杯	(17.5)	[3.3]	—	AHI	5	良好	赤褐色	SE 2 小鉢型環	
2	須恵器	甕	—	[13.8]	—	EI	5	良好	紫灰	SE 2 外面平行叩き後力キ目 内面無文 当て具	
3	土師器	壺	13.9	5.3	—	HII	90	良好	赤褐色	SE 3 放射状暗文	117-1
4	土師器	壺	12.3	5.3	—	AHI	80	良好	赤褐色	SE 3 盖模倣环	117-1
5	土師器	壺	(13.6)	[5.4]	—	AHI	30	普通	橙	SE 3 №3 盖模倣环	
6	土師器	壺	12.6	5.8	—	AHI	90	良好	橙	SE 3 №1 盖模倣环	117-1
7	土師器	壺	(9.3)	5.6	—	AI	40	良好	赤褐色	SE 3 身模倣环	117-1
8	土師器	壺	(13.3)	[4.0]	—	AI	20	普通	赤褐色	SE 3 内外面赤彩	
9	土師器	甕	16.2	[19.5]	—	AI	60	普通	にぶい黄褐色	SE 3 №2・3	117-1
10	土師器	甕	(25.4)	25.5	(10.5)	GI	70	普通	にぶい黄褐色	SE 3 №3	117-1
11	土師器	壺	13.4	5.7	—	AHI	90	良好	赤褐色	SE 5 №5 盖模倣环	117-2
12	土師器	壺	12.7	5.6	—	AHI	80	良好	橙	SE 5 盖模倣环	117-2
13	土師器	壺	12.2	4.8	—	HII	100	良好	橙	SE 5 №6 盖模倣环	117-2
14	土師器	壺	12.0	5.7	—	HII	100	良好	赤褐色	SE 5 №10 盖模倣环 内外面赤彩	117-2
15	土師器	壺	13.7	[5.5]	—	ACI	40	普通	明赤褐色	SE 5 盖模倣环	
16	土師器	壺	(11.7)	5.7	—	AI	40	普通	赤褐色	SE 5 盖模倣环	
17	土師器	甕	—	[12.3]	—	AHI	50	良好	赤褐色	SE 5 №13 内外面赤彩 木葉痕	117-3
18	土師器	甕	9.2	16.4	—	AHI	95	良好	橙	SE 5 №11	117-2
19	土師器	甕	10.2	[8.3]	—	HII	30	普通	にぶい橙	SE 5 最下層 内外面赤彩	117-4
20	土師器	甕	—	[15.5]	5.3	IK	40	良好	明赤褐色	SE 5 №1・3・8 外面赤彩	117-3
21	土師器	甕	—	[6.0]	5.0	AHI	20	良好	赤褐色	SE 5 №12 輪積痕	117-3
22	土師器	甕	(15.0)	[19.0]	—	AEHI	30	普通	にぶい橙	SE 5 №2	117-5
23	土師器	甕	19.4	[27.5]	—	AHI	50	普通	にぶい黄褐色	SE 5 最下層 丸甕	117-5
24	土師器	甕	11.3	[15.8]	—	AHI	90	普通	褐色	SE 5 最下層	117-5
25	土師器	甕	13.4	[9.1]	—	HIK	20	普通	褐色	SE 5 煤多量	117-4
26	土師器	甕	(13.6)	[3.7]	—	CI	10	普通	浅黃褐色	SE 5 №2・7	117-4
27	土師器	甕	(23.2)	[5.0]	—	ACI	15	普通	にぶい橙	SE 5 №7 輪積痕	117-4
28	土師器	甕	—	[4.0]	7.0	AI	10	普通	黑褐色	SE 5 №9	117-3
29	石製品	白玉	長0.5 短0.5 孔径0.2 厚0.4 重0.2 残存100						SE 5 滑石 小D 2 c II		
30	土師器	壺	(11.0)	[3.8]	—	AI	5	普通	赤褐色	SE 6 盖模倣环	
31	須恵器	壺	(14.0)	[3.1]	—	IK	15	良好	青灰	SE 7 外面自然釉	
32	土師器	甕	(15.8)	[5.8]	—	ABG	10	不良	にぶい黄褐色	K-10 P 5 甕母片岩多量	

第89表 C区井戸跡一覧表

遺構名	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複遺構	遺構名	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複遺構
1	J-12	橢円形	上:1.18 F:0.65	上:0.75 F:0.45	[0.95]		5	P-5・6	不整形	上:1.45 F:1.25	上:0.80 F:0.55	[1.50]	
2	M-8	不整形	上:0.95 F:0.65	上:0.72 F:0.50	[1.05]		6	N-7	円形	上:(0.87) F:(0.55)	—	[0.70]	SJ18
3	M-8	円形	上:1.20 F:0.98	—	[1.00]	M-8 P10	7	N-7	円形	上:0.90 F:0.55	上:0.78 F:0.45	[1.10]	SJ18 SJ19P8
4	O-P-6	不整形	上:1.30 F:1.00	上:0.90 F:0.65	[1.00]	SJ10	8	K-10・11	円形	上:(0.95) F:(0.70)	—	[1.27]	

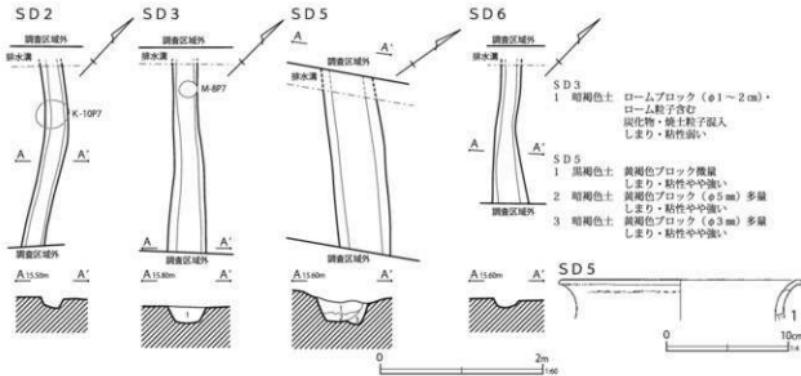
を壞している。南側1.8m付近に類似する第5号

井戸跡を検出した。

平面形は不整形である。

#### C区第5号井戸跡 (第174図)

調査区の中央部で検出した。北側1.8m付近に類似する第4号井戸跡を検出した。平面形は不整



第177図 C区溝跡・出土遺物

第90表 C区第5号溝跡出土遺物観察表(第177図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(19.6)	[3.4]	—	AII	5	普通	橙		

第91表 C区溝跡一覧表

No	グリッド	方位	方位	長さ(m)	幅(m)		深さ(m)		重複遺構
					最大	最小	最大	最小	
2	K-10	N-40° -W	—	2.25	0.27	—	0.10	—	K-10P 7
3	M-8	N-45° -W	—	2.30	0.47	0.30	0.20	—	M-8 P 7
5	R-3・4	N-55° -W	—	1.90	0.65	—	0.25	—	
6	M-N-8	N-50° -W	—	1.70	0.43	0.24	0.10	—	

形で、底面に向かってやや狭くなる。井戸跡の上層及び中層から遺物がまとまって出土し、井戸の魔絶後に一括投棄された可能性が考えられる。

出土遺物は第175・176図11~29で、29は白玉、他は土師器である。11~16は口縁部が上方に立ち上がる蓋模倣壺、17~20は小型壺である。17~20は赤彩が施され、底部や上げ底気味である。22は口縁部が短く外反し、胴部に張をもつ甕、23は口縁部が「コ」の字状に立ち上がり、胴部が球形の甕である。24は小型甕で胴部外面に粗い刷毛目調整が見られる。時期はC区の中で最も古い段階の6世紀前半である。

#### C区第6号井戸跡(第174図)

調査区の中央部で検出した。平面形は円形で、

底面に向かって狭くなる。出土遺物は第176図30の土師器壺の破片である。

#### C区第7号井戸跡(第174図)

調査区の中央部で検出した。平面形は円形で、底面に向かってやや狭くなる。出土遺物は第176図31の須恵器壺の破片である。時期は6世紀末と推定される。

#### C区第8号井戸跡(第174図)

調査区の北側部分で検出した。東側は調査区域外に延びる。平面形は円形で、底面に向かってやや狭くなる。出土遺物は第176図32の土師器甕の口縁部破片である。

#### (3) 溝跡

C区において古墳時代・飛鳥時代に位置づけ

られる溝跡は、4条検出された。第91表に検出グリッド、主軸方位、規模を示した。

#### C区第2号溝跡（第177図）

調査区の北側部分で検出した。北西から南東方向に走り、両側はいずれも調査区域外に延びる。

グリッドピットK-10P 7に壊されている。

周開にはピットが多く、近接して北側に第8号井戸跡が位置する。

#### C区第3号溝跡（第177図）

調査区の中央部で検出した。北西から南東方向に走り、両側はいずれも調査区域外に延びる。グリッドピットM-8 P 7に壊されている。

周開にはピットが多く、近接して南側に第2号井戸跡や第4・5号土壙が位置する。

#### C区第5号溝跡（第177図）

調査区の南側部分で検出した。北西から南東方向に走り、両側はいずれも調査区域外に延びる。重複する遺構は存在しない。

周開にはピットが多く位置する。出土遺物は、覆土中から第177図1に図示した土師器甕の破片である。

#### C区第6号溝跡（第177図）

調査区の中央部で検出した。北西から南東方向に走り、両側はいずれも調査区域外に延びる。重複する遺構は存在しない。

周開には近接して北側に第3号井戸跡や第6号土壙が位置する。

本溝跡は第3号溝跡と対峙していることから、短穴住居跡の壁溝と考えていたが、ここでは、溝跡とした。

第92表 C区土壙一覧表

遺構名	グリッド	平面形	長軸方位	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	遺構名	グリッド	平面形	長軸方位	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
欠番													
1							6	M-N-8	橢円形	N-41° -E	1.45	0.50	0.40
2	K-L-10	橢円形	N-45° -W	0.64	0.46	0.16	7	M-9	不明	N-45° -E	(1.23)	(0.90)	0.42
3	L-9	橢円形	N-60° -E	1.00	0.40	0.06	8	N-O-7	円形	N-45° -E	1.00	(0.70)	0.25
4	M-8	方形	N-46° -E	1.15	(0.40)	0.35	9			欠番			
5	M-8	橢円形	N-47° -E	1.94	1.00	0.25	10			欠番			

#### (4) 土壙

C区において古墳時代・飛鳥時代の土壙は7基検出された。第92表に検出グリッド、平面形、主軸方位、規模を示した。

#### C区第2号土壙（第178図）

調査区の北側部分で検出した。第1号柱穴列と第2号柱穴列の中間に位置する。

#### C区第3号土壙（第178図）

調査区の中央部で検出した。北側に第2号竪穴住居跡、南側に第7号土壙が位置する。

#### C区第4号土壙（第178図）

調査区の中央部で検出した。西側は調査区域外に延びる。北側に第3号溝跡、東側に第2号井戸跡、第5号土壙が位置する。

#### C区第5号土壙（第178図）

調査区の中央部で検出した。北側に第4号土壙、第2号井戸跡が位置し、南側に第3号井戸跡、第6号土壙が位置する。

#### C区第6号土壙（第178図）

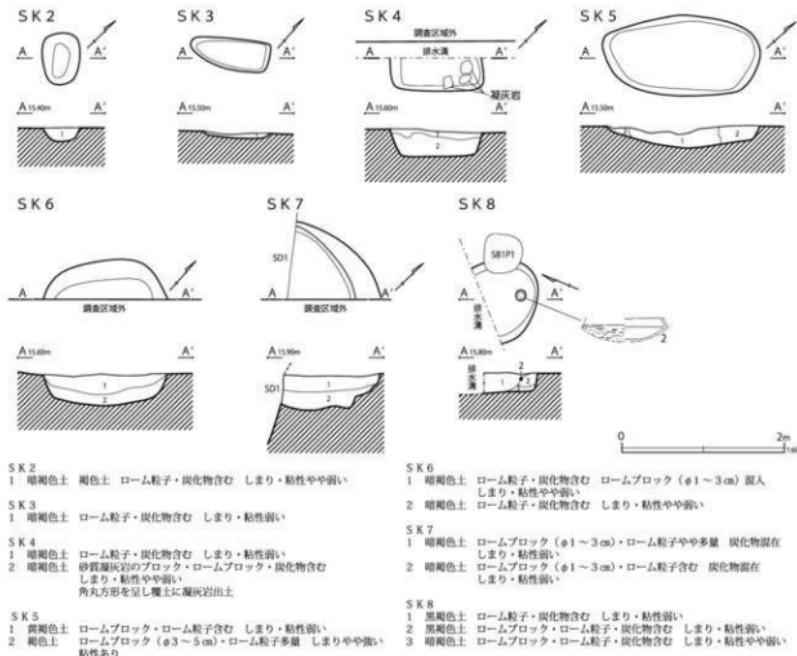
調査区の中央部で検出した。東側は調査区域外に延びる。北側に第5号土壙、西側に第3号井戸跡が位置する。

#### C区第7号土壙（第178図）

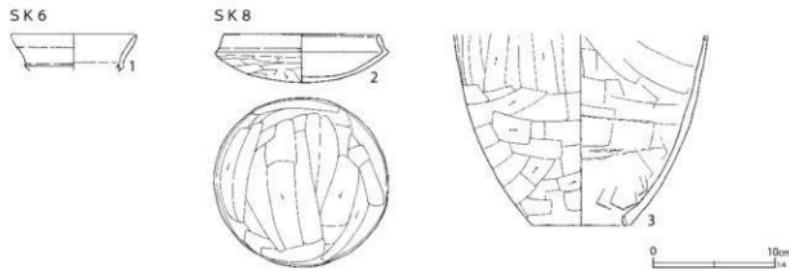
調査区の中央部で検出した。東側は調査区域外に延びる。南側は第1号溝跡に壊されている。北側に第3号土壙が位置する。

#### C区第8号土壙（第178図）

調査区の中央部で検出した。西側は調査区域外に延びる。第1号掘立柱建物跡の柱穴に壊されている。東側に第18号竪穴住居跡が位置する。



第178図 C区土壤



第179図 C区第6・8号土塘出土物

第93表 C区土壤出土物観察表 (第179図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(10.2)	[3.1]	—	CH	5	普通	にぶい黄褐	SK 6 盖模倣壺	
2	土師器	壺	12.6	4.0	—	AH	100	良好	にぶい褐	SK 8 No 1 身模倣壺 重ね焼き痕あり	
3	土師器	瓶	—	[15.7]	8.0	AGI	20	普通	にぶい褐	SK 8	

### 3 奈良時代・平安時代の遺構と遺物

#### (1) 竪穴住居跡

C区において奈良時代・平安時代の竪穴住居跡は2軒検出された。以下、検出グリッド、重複遺構、平面形、規模、覆土の状況、付帯施設、出土遺物について記す。

C区第15号竪穴住居跡（第180図）

C区の第15号竪穴住居跡は、S-2グリッド、調査区の南端部に位置する。

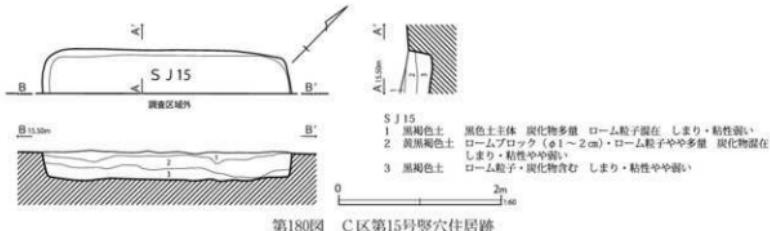
他の遺構との重複関係ではなく、竪穴住居跡の西壁と北西コーナー部及び南西コーナー部壁は確認できたものの、北壁、東壁、南壁は調査区

域外のため確認できなかった。平面形は不明である。残存規模は長軸長3.06m、短軸長0.52m、深さ0.33mである。長軸方位はN-45°-Eを指す。

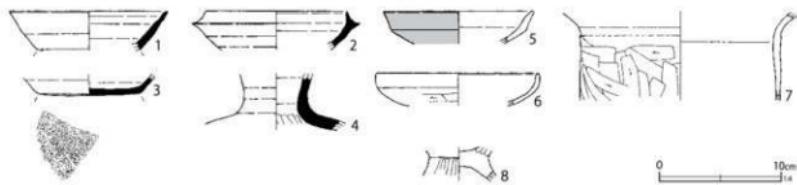
覆土は、第1層が黒褐色土、第2層がロームブロックの多い黄褐色土、第3層が黒褐色土で、第2層が厚く堆積している点で古墳時代の竪穴住居跡の覆土とは異なっていた。

カマド、貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。また、壁溝は設けられていない。

出土遺物は第181図1・3が須恵器壺である。底部回転ヘラケズリを施す。胎土に片岩粒を含む



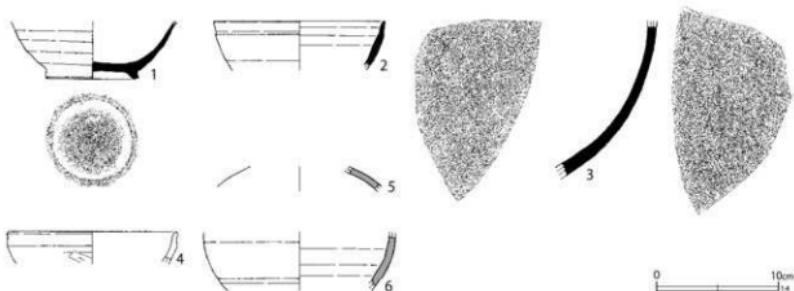
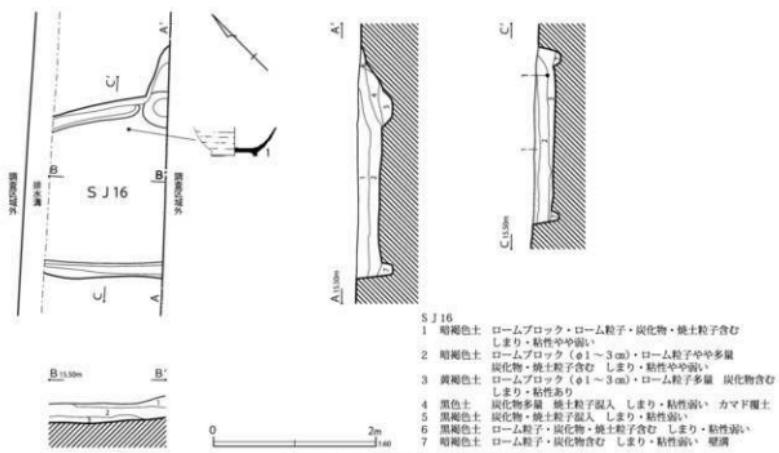
第180図 C区第15号竪穴住居跡



第181図 C区第15号竪穴住居跡出土遺物

第94表 C区第15号竪穴住居跡出土遺物観察表（第181図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(13.0)	[3.3]	(8.5)	G	10	普通	灰白	末野窯産 底部回転ヘラケズリ 3と同一か	
2	須恵器	壺	(11.7)	[3.2]	-	IK	5	良好	灰	自然釉	
3	須恵器	壺	-	[1.8]	(8.5)	G	10	普通	灰白	末野窯産 1と同一か 底部回転ヘラケズリ	
4	須恵器	壺	-	[4.7]	-	I	5	良好	浅黄褐		
5	土師器	壺	(12.3)	[2.7]	-	CIK	10	普通	赤褐	b 盖模様壺 外面赤彩	
6	土師器	壺	(13.3)	[2.7]	-	ACEI	5	普通	にぶい黄褐	a 北武藏型壺	
7	土師器	甕	-	[7.1]	-	ACI	20	普通	にぶい黄褐		
8	土師器	台付甕	-	[2.8]	-	GI	5	普通	明赤褐		



第95表 C区第16号竪穴住居跡出土遺物観察表(第183図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	団版
1	須恵器	高台付壺	-	[4.7]	7.7	EIK	70	普通	灰	No.1 末野窯産	
2	須恵器	壺	(14.0)	-	I	5	普通	灰	a 末野窯産 外面自然釉		
3	須恵器	甕	-	[13.1]	-	I	5	普通	灰	c 南北会窯産 外面平行叩き 内面無文当て具	
4	土師器	壺	(13.8)	[2.7]	-	AI	5	普通	明褐	a・b	
5	灰釉陶器	甕	-	[2.0]	-	K	5	良好	灰白	b 内面から破面に付着物 6と同一か	
6	灰釉陶器	甕	-	[4.7]	-	K	5	良好	灰白	b 5と同一か	

ことから末野窯産である。6が北武藏型の土師器壺である。口縁部が上方に立ち上がり、体部丸底

で器高がやや浅い。推定口径13.3cmとやや大振りである。時期は8世紀前半と推定される。2・

4・5は本竪穴住居跡から出土したが、混入品であると考えられる。

#### C区第16号竪穴住居跡（第182図）

C区の第16号竪穴住居跡は、S-2グリッド、調査区の南端部に位置する。

他の遺構との重複関係はなく、竪穴住居跡の北壁と南壁は確認できたものの、東壁、西壁は調査区域外のため確認できなかった。平面形は方形である。残存規模は長軸長2.21m、短軸長1.46m、深さ0.30mである。主軸方位はN-45°-Eを指す。

覆土は、第1・2層が暗褐色土、第3層が黄褐色土で、いずれの覆土もロームブロックを多く含む点で古墳時代の竪穴住居跡の覆土とは異なっていた。

カマドは北壁に設けられ、カマド西側半分が検出された。東側は調査区域外に延びている。カマドの規模は残存する焚口幅0.29m、煙道部長さ1.10mである。カマド袖は残存していなかった。壁溝は北壁及び南壁で検出され、規模は幅0.15m～0.23m、深さ0.09m～0.12mである。貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。

出土遺物は第183図1～6で、1は末野窯産の須恵器高台付壺、2は末野窯産の須恵器壺、3は白色針状物質を胎土に含むことから、南比企窯産の須恵器甕である。4は土師器壺、5・6は灰釉陶器の長頸瓶である。時期は9世紀前半である。

#### (2) 挖立柱建物跡

C区において奈良時代・平安時代の掘立柱建物跡は1棟検出された。以下、検出グリッド、重複遺構、規模、覆土の状況、出土遺物について記す。

#### C区第1号掘立柱建物跡（第184図）

C区の第1号掘立柱建物跡は、N-O-7グリッド、調査区の中央部に位置する。また、南側約50mの位置に本建物跡と同時期と考えられる竪穴住居跡が2軒存在している。

他の遺構との重複関係は、第18号竪穴住居跡、

第7号井戸跡、第8号土壙を壞している。また、柱列は西側の調査区域外に延びていると考えられる。建物形態は三間×三間以上の総柱建物跡と推測される。規模は桁行4.69m、残存する梁行1.44mである。南北棟の建物跡で主軸方位はN-51°-Eを指す。

柱穴は8基検出した。P1～P4の柱間は1.50m、P1とP5の柱間は1.40mである。8基の柱穴の内、P4、P6～8で柱痕を確認した。各柱穴の規模は、P1が最大径0.49m、深さ0.37m。P2が最大径0.63m、深さ0.37m。P3が最大径0.65m、深さ0.32m。P4が最大径0.67m、深さ0.31m。P5が最大径0.55m、深さ0.24m。P6が最大径0.80m、深さ0.59m。P7が最大径0.62m、深さ0.40m。P8が最大径0.63m、深さ0.31mである。

出土遺物は第185図1の須恵器壺である。底部回転ヘラケゼリを施す。胎土に片岩粒を含むことから末野窯産である。5は「く」の字状口縁甕である。時期は8世紀前半と推定される。2～4は本竪穴住居跡から出土したが、混入品であると考えられる。

#### (3) 柱穴列

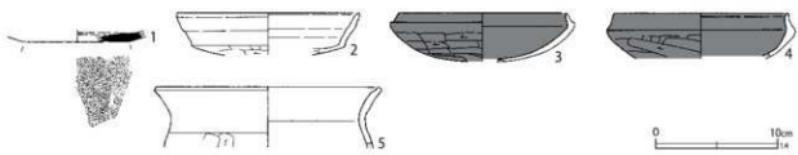
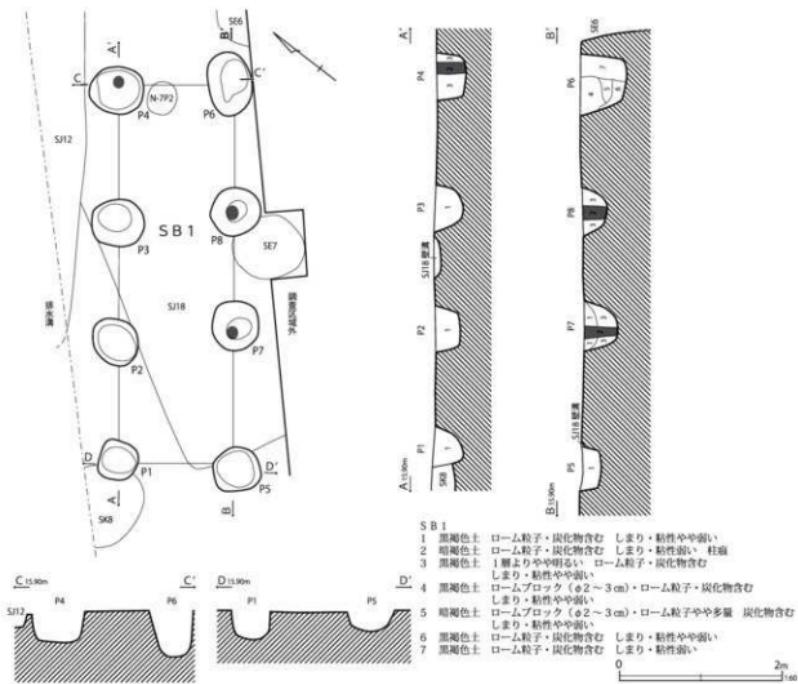
C区において奈良時代・平安時代の柱穴列は2条検出された。以下、検出グリッド、重複遺構、規模、覆土の状況、出土遺物について記す。

#### C区第1号柱穴列（第186図）

C区の第1号柱穴列は、L-9・10グリッド、調査区の中央部や南側に位置する。本柱穴列は第1号柱穴列と第2号柱穴列の2条からなる。両柱穴列はほぼ並行していて、柱穴列の間隔は1.30mである。

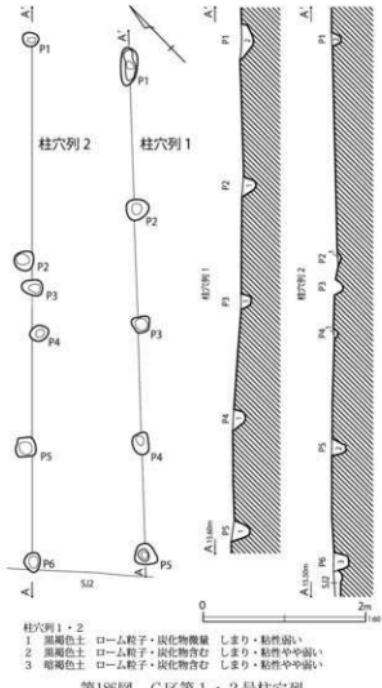
他の遺構との重複関係はみられない。北側及び南側には、直線的な並びは認められないが、同規模のピットが検出されている。規模は全長6.15m、主軸方位はN-41°-Eを指す。

柱穴は5基検出された。P1～5の柱間は全



第185図 C区第1号掘立柱建物跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	—	[1.0]	(8.0)	I	10	良好	灰	末野窯産 底部回転ヘラケズリ 内面暗紫灰	
2	土師器	壺	(15.0)	[3.5]	—	CHI	20	良好	橙	蓋破缺	
3	土師器	壺	(13.8)	[4.0]	—	ACI	30	普通	橙	身模破缺 内外面黒色処理	
4	土師器	壺	(14.2)	[3.7]	—	I	20	普通	黒褐	身模破缺 内外面黒色処理	
5	土師器	甌	(18.3)	[5.0]	—	AHI	5	普通	浅黄橙		



第186図 C区第1・2号柱穴列

長6.15m、P1とP2の柱間は1.80m、P2とP3の柱間は1.45m、P3とP4の柱間は1.45m、P4とP5の柱間は1.45mである。各柱穴の規模は、P1が最大径0.47m、深さ0.15m。P2が最大径0.27m、深さ0.16m。P3が最大径0.23m、深さ0.14m。P4が最大径0.27m、深さ0.17m。P5が最大径0.30m、深さ0.32mである。出土遺物は検出されなかった。

#### C区第2号柱穴列(第186図)

C区の第2号柱穴列は、K-10、L-9・10グリッド、調査区の中央部や南側に位置する。本柱穴列は第1号柱穴列の西側に並行して検出された。第1号柱穴列との間隔は1.30mである。

他の遺構との重複関係はみられない。北側及び南側には、直線的な並びは認められないが、

同規模のピットが検出されている。規模は全長6.60m、主軸方位はN-44°-Eを指す。

柱穴は6基検出されたが柱間間隔は不規則である。P1～6の柱間は全長6.50m、P1とP2の柱間は2.70m、P2とP3の柱間は0.35m、P3とP4の柱間は0.55m、P4とP5の柱間は1.45m、P5とP6の柱間は1.45mである。各柱穴の規模は、P1が最大径0.19m、深さ0.08m。P2が最大径0.24m、深さ0.05m。P3が最大径0.26m、深さ0.18m。P4が最大径0.24m、深さ0.10m。P5が最大径0.27m、深さ0.15m、P6が最大径0.24m、深さ0.16mである。出土遺物は検出されなかった。

#### (4) 溝跡

C区において奈良時代・平安時代に位置づけられる溝跡は3条検出された。第97表に検出グリッド、主軸方位、規模を示した。

#### C区第1号溝跡(第187図)

調査区の中央部で検出した。北西から南東方向に走り、両側はいずれも調査区域外に延びる。第7号土壙を壊している。覆土の第1層にB軽石が含まれていることから、この段階には機能を停止していたと考えられる。

#### C区第4号溝跡(第187図)

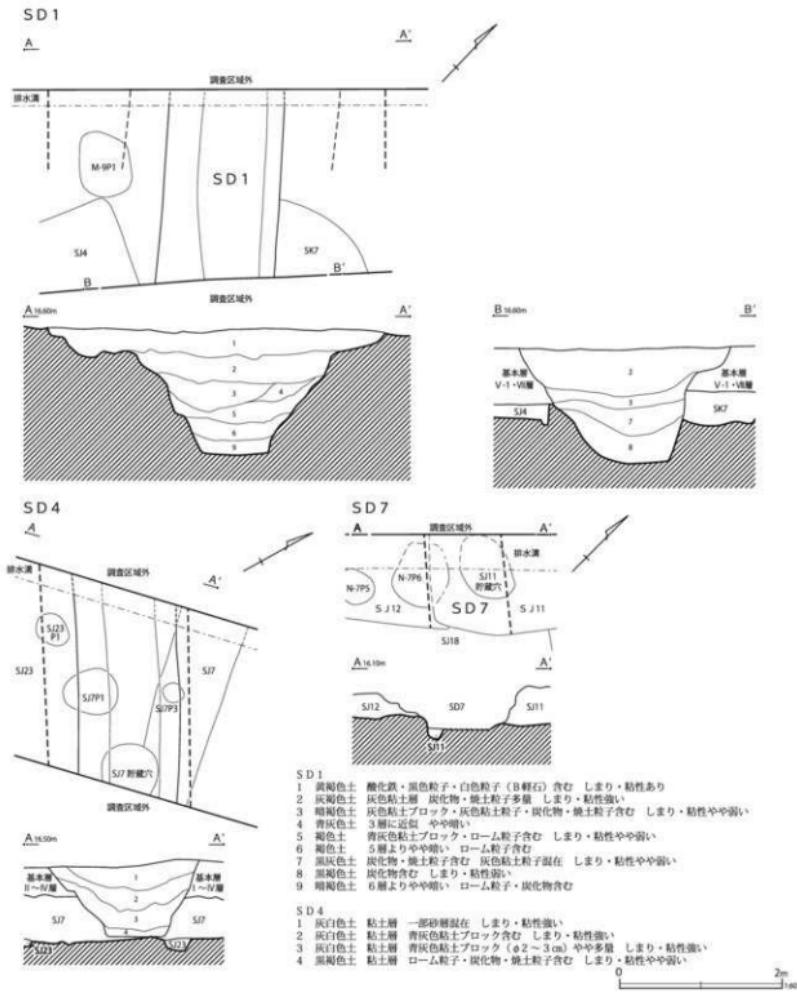
調査区の中央部で検出した。北西から南東方向に走り、両側は調査区域外に延びる。第7号竪穴住居跡を壊している。覆土の第1～3層は中近世の洪水堆積土による灰白色土とみられる。

#### C区第7号溝跡(第187図)

調査区の中央部で検出した。北西から南東方向に走り、両側は調査区域外に延びる。第11・12号竪穴住居跡を壊している。

#### (5) ピット・グリッド検出面出土遺物

C区においてグリッドピットは、77基検出された。分布状況は第152・153図に示した。第98表に検出グリッド、規模を示した。遺物は図示できるものがない。グリッド検出面及び調査区域内から

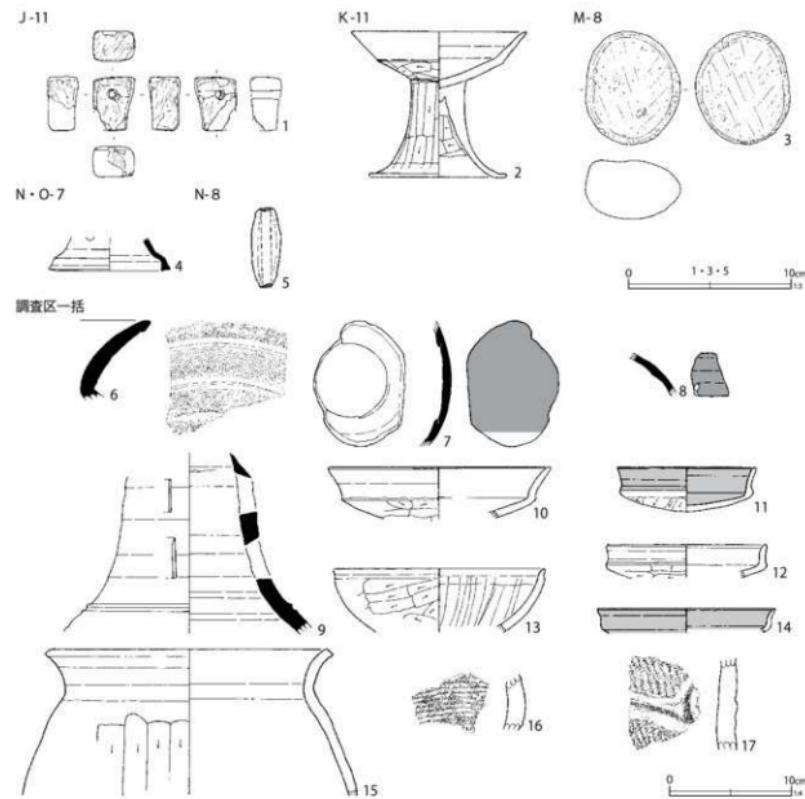


第187図 C区第1・4・7号溝跡

第97表 C区溝跡一覧表

No	グリッド	方位	走行方位	長さ(m)	幅(m)		深さ(m)		重複遺構			
					最大	最小	最大	最小				
1	L-9 M-8・9	N-40° -W	-	2.15	4.15	2.55	1.50	1.40	SJ 4	SK 7	M-9 P 1	
4	P-5	N-60° -W	-	2.15	1.85	-	0.85	-	SJ 7	SJ23		
7	N-7	N-50° -W	-	(1.25)	1.70	-	0.50	-	SJ11	SJ12	SJ18	N-7 P 6

出土した主な遺物は、第188図に図示した。4は湖西窯産の須恵器瓶の脚部である。9は北関東系の脚付き長頸瓶の脚部である。16・17は縄文土器の破片である。



第188図 C区グリッド・調査区一括出土遺物

第98表 C区ピット計測表

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
I-12	P 1	35	26	20	J-12	P 1	30	30	8	K-10	P 7	42	35	42
	P 2	28	22	12		P 2	42	37	12	P 8	32	(18)	41	
J-11	P 1	26	23	5	K-10	P 1	62	53	40	P 9	58	30	46	
	P 2	65	57	70		P 2				P 10	22	18	20	
	P 3	39	[35]	60		P 3	44	36	6	P 11	(18)	17	17	
	P 4	70	60	6		P 4	25	26	4	P 12	35	32	33	
	P 5	43	43	7		P 5				P 13				
	P 6	86	60	83		P 6	44	38	27	P 14	31	25	4	

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
K-10	P15	21	20	12	L-10	P1			欠番	N-7	P4	47	37	30
K-11	P1	52	41	37		P2			欠番		P5	45	40	20
	P2	55	42	65		P3			欠番		P6	80	65	32
	P3	37	29	45		P4			欠番	O-6	P1	33	29	50
	P4	33	30	17		P5			欠番		P2	[30]	[30]	35
	P5	37	27	41		P6			欠番	O-7	P1	35	30	34
	P6	49	33	25		P7			欠番		P2	22	20	23
	P7			欠番		P8	24	21	4	P-5	P1	54	42	22
	P8	34	29	17		P9	41	33	12	Q-4	P1			欠番
L-9	P1			欠番		P10	35	20	20		P2	43	40	40
	P2	24	19	13	M-8	P1	50	48	22		P3	40	[35]	20
	P3			欠番		P2	50	35	15		P4	59	45	15
	P4			欠番		P3	35	25	50		P5	42	40	13
	P5	42	30	18		P4	45	(12)	20		P6	45	43	43
	P6	42	26	18		P5	58	45	9		P7	[40]	[40]	[33]
	P7	40	34	33		P6	35	32	50	Q-5	P1	45	43	21
	P8	47	33	23		P7	25	20	30	R-3	P1	47	35	36
	P9	45	36	2		P8	35	35	75		P2	[38]	33	48
	P10	31	(17)	7		P9	48	37	67		P3	[29]	28	12
	P11	34	25	9		P10	[90]	83	75		P4	24	20	12
	P12	33	30	18	M-9	P1	80	63	17		P5	31	31	25
	P13	40	35	30	N-7	P1	42	38	20	R-4	P1	37	36	34
	P14			欠番		P2	43	40	70		P3	37	30	28
	P15			欠番										

第399表 C区グリッド出土遺物観察表(第188図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
1	石製品	砥石		長さ3.3	幅2.6	厚さ1.9	重さ21.8			J-11 流紋岩 堤砥 使用面6面		
2	土師器	高环	(14.3)	12.0	(11.0)	ACHI	70	普通	概	K-11No.1		
3	石製品	磨石		長さ7.0	幅5.9	厚さ3.8	重さ70.3			M-8 P 6 軽石か		
4	須恵器	高环	-	[2.7]	(10.0)	I	5	良好	灰	N-O-7 湖西窯産 円型三方透かし孔径0.7		
5	土製品	土鍤		長さ4.9	幅1.8		GI	100	普通	黒褐	N-8	
6	須恵器	甕	-	[6.6]	-	I	5	普通	灰			
7	須恵器	フラスコ瓶	-	[10.2]	-	K	5	良好	褐灰	湖西窯産 自然釉		
8	須恵器	フラスコ瓶	-	[3.5]	-	K	5	良好	褐灰	湖西窯産 自然釉		
9	須恵器	脚付壺	-	[14.7]	-	EI	10	普通	褐灰	北関東系 三段三方透かし		
10	土師器	环	(11.2)	3.7	-	DIL	50	普通	にぶい赤褐	蓋模倣环		
11	土師器	环	(11.2)	3.7	-	DIL	50	普通	にぶい赤褐	環 内外面赤彩		
12	土師器	环	(13.0)	[2.8]	-	CI	5	普通	にぶい黄褐	表採		
13	土師器	环	(17.1)	[5.3]	-	CI	20	普通	概	暗文环		
14	土師器	环	(14.3)	[2.1]	-	I	5	普通	にぶい黄褐	比企型环 内外面赤彩		
15	土師器	甕	(22.4)	[12.0]	-	CG	5	普通	にぶい黄褐			
16	縄文土器		-	[4.7]	-	CI	5	普通	にぶい黄褐			
17	縄文土器		-	[7.7]	-	ACI	5	普通	にぶい黄褐			

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	きたおたけいせき							
書名	北大竹遺跡							
副書名	行田富士見工業団地拡張地区産業団地整備事業埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第477集							
編著者名	渡邊理伊知 赤熊 浩一							
編集機関	公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1 TEL 0493-39-3955							
発行年月日	西暦2022(令和4)年3月23日							
所 収 遺 跡	所在地	コード		北緯 °'."'	東経 °'."'	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
北大竹遺跡 (第18次)	埼玉県行田市 大字若小玉字 積1900-1他	11206	48	36°08'48"	139°29'37"	20190105~ 20201031	5.280	工業団地 用地開発
所 収 遺 跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
北大竹遺跡 (第18次)	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡 57軒	須恵器	45点を数える子持勾玉や石製模造品、白玉、残存率の高い甕を始めとした須恵器や大型高环など大量の土師器類、單鳳環頭大刀柄頭、海獸葡萄鏡、大量の铁鏡や铁製模造品、瑪瑙や琥珀、碧玉製の玉類などの遺物が出土している。			
		飛鳥時代	井戸跡 32基 溝跡 12条 土壤 21基 遺物集中 3箇所	土師器 石製品 子持勾玉 石製模造品 白玉 玉類 金属製品				
		奈良時代 ・ 平安時代	竪穴住居跡 14軒 掘立柱建物跡 2棟 柱穴跡 2条 井戸跡 6基 溝跡 9条 土壤 5基 鍛冶関連遺構 1基 旧河川跡 1条	須恵器 土師器 石製品 金属製品 瓦				
<p><b>要 約</b></p> <p>北大竹遺跡は、埼玉県行田市藤原町・若小玉に所在する。現在はほぼ平坦な地形で加須低地に属するが、北に流れる利根川による河川堆積と関東造盆地運動によって形成された埋没地となっている。</p> <p>本事業に伴う発掘調査によつて、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての祭祀関連とみられる遺物が集中した地点が、3箇所確認された。遅くとも6世紀中頃から祭祀行為が開始された可能性があるが、6世紀後半にピークを迎える。主に甕を中心とした須恵器と、大量的土師器や鉄製品とともに、多数の子持勾玉を用いる点が大きな特徴といえる。なお、これらとともに単鳳環頭大刀が出土している点も特徴として挙げられる。</p> <p>7世紀代にも継続して祭祀行為が執り行われている。遺物量がやや減少する点や土器類の器種組成に変化がみられるが、子持勾玉と須恵器甕を用いる点は、一貫している。このことから、本遺跡で執り行われた祭祀は子持勾玉と須恵器甕が重視されていたことがうかがえる。</p> <p>周辺に展開する若小玉古墳群において前方後円墳が造営される時期と重なり、7世紀代に八幡山古墳や地藏塚古墳が造営される頃まで、継続することから、若小玉古墳群との関連性が想定される。埼玉古墳群の将軍山古墳や鐵砲山古墳に副葬された遺物と類似した遺物が出土していることから、埼玉古墳群との関連性も想定される。</p> <p>また、これらの遺物と同じ古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡が検出された。</p>								

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第477集

## 北大竹遺跡

行田富士見工業団地拡張地区産業団地整備事業

埋蔵文化財発掘調査

(第1分冊)

令和4年3月11日 発刷

令和4年3月23日 発行

発行／公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

0493（39）3955

<https://www.saimaibun.or.jp>

印刷／朝日印刷工業株式会社